

札幌市文化財調査報告書

XIV

1977

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 XIV

S 267, 268遺跡

1977・3

札幌市教育委員会

例 言

1. 本書は、札幌市白石区大谷地の「札幌新道」、[「高速自動車国道北海道縦貫道函館旭川線新設事業（縦貫自動車道）」地域内に所在する、S 267・268遺跡の発掘調査報告書である。遺跡は、札幌市白石区大谷地670番地他に所在する。
2. 調査期間は、第1次調査昭和50年6月20日より10月30日まで延べ133日間、第2次調査昭和51年9月17日より11月20日まで延べ65日間と、2ケ年にわたり行われた。調査対象面積は27,000㎡であり実質発掘総面積24,000㎡である。
3. 調査は、札幌教育委員会が主体者となり、現場の仕事は、札幌市教育委員会文化財調査員加藤邦雄、同羽賀憲二を担当者とし上野秀一、内山真澄、高橋和樹の協力を得て遂行した。
4. 本書の編集は、羽賀が担当した。執筆は、加藤、羽賀、内山の3名がそれぞれ分担し、各文末には執筆者名を明記し文責を明らかとした。
5. 発掘調査には、下記の人々が従事した。
昭和50年度：笠井衛二、河村添次郎、長谷川克浩、藤井則明、山下芳教、市瀬知子、伊藤加代子、酒井洋子、土田亜佐子、横地桂子、
昭和51年度：大滝信芳、右衛門佐時雄、池田和子、酒井洋子、高杉順子、横地桂子（以上順不同、敬称略）
両年を通して、北海道大学、北海道工業大学の学生諸君の協力を得た。
6. 整理作業について下記の人々の協力があった。
昭和50年度、小尾栄子（トレース）、市瀬知子・横地桂子（遺物実測、拓本、原稿浄書）
昭和51年度、酒井洋子（トレース）、池田和子・高杉順子・横地桂子（遺物実測・拓本・原稿浄書）
写真撮影及び処理等は羽賀憲二、内山真澄による（以上順不同、敬称略）。

7. 発掘調査・整理作業においては、下記の機関、人々より協力と助言を賜った。

北海道教育庁振興部文化課

札幌商科大学・札幌市文化財保護審議会委員

大場利夫教授

北海道開拓記念館 野村崇氏

札幌大学 木村英明講師

北海道大学歯学部 大泰司紀文講師

北海道大学大学院生 西本豊弘氏

8. 石器、石製品の石質の肉眼鑑定は、北海道開拓記念館赤松守雄氏に御願いした。

9. 発掘期間中、整理、報告書出版に至るまで、「北海道開発局札幌開発建設部札幌新道建設事務所」、「日本道路公団札幌建設局」、「札幌市建設局用地部札幌新道課」、「国際地所開発株式会社北海道支店」には、御協力と御理解を賜った、記して感謝の意を表する。

目 次

I	発掘調査に至る経過	13
II	遺跡の位置と環境	14
III	第1次調査	
第1章	発掘調査の方法と遺跡の層序	19
第1節	発掘調査の方法	19
第2節	遺跡の層序	19
第2章	遺構及び遺構内出土の遺物	23
第1節	竪穴住居址	23
第2節	竪穴住居址状遺構	51
第3節	Tピット	57
第3章	発掘区出土の遺物	114
第1節	土 器	114
第2節	石 器	128
IV	第2次調査	
第1章	発掘調査の方法と遺跡の層序	149
第1節	発掘調査の方法	149
第2節	遺跡の層序	149
第2章	遺構及び遺構内出土の遺物について	153
第1節	ピ ッ ト	153
第2節	Tピット	156
第3章	発掘区出土の遺物	169
第1節	土 器	169
第2節	石 器	182
V	まとめ	
第1章	竪穴住居址	192
第2章	札幌 S267, 268遺跡の土壌群	206
第3章	土器群について	228
結語		234

挿図目次

巻首図版	11	第29図	遺構実測図(第18～20号 Tピット)	94	
第1図	遺跡付近地形図	15	第30図	遺構実測図(第21～23号 Tピット)	95
第2図	遺跡発掘区配置及び遺構関連図	21	第31図	遺構実測図(第24～26号 Tピット)	96
第3図	第1号竪穴住居址	24	第32図	遺構実測図(第27～29号 Tピット)	97
第4図	第2号竪穴住居址	25	第33図	遺構実測図(第30～32号 Tピット)	98
第5図	第1号竪穴住居址出土土器拓影(1)	29	第34図	遺構実測図(第33, 34号 Tピット)	99
第6図	第1号竪穴住居址出土土器拓影(2)	30	第35図	遺構実測図(第35～38号 Tピット)	100
第7図	第2号竪穴住居址出土土器拓影	33	第36図	遺構実測図(第39～41号 Tピット)	101
第8図	第1号竪穴住居址出土石器実測図(1)	34	第37図	遺構実測図(第42～44号 Tピット)	102
第9図	第1号竪穴住居址出土石器実測図(2)	36	第38図	遺構実測図(第45号 Tピット)	103
第10図	第2号竪穴住居址出土石器実測図(1)	37	第39図	遺構実測図(第46～48号 Tピット)	104
第11図	第2号竪穴住居址出土石器実測図(2)	39	第40図	Tピット内出土土器拓影	107
第12図	第2号竪穴住居址出土石器実測図(3)	40	第41図	Tピット内出土土器拓影	110
第13図	第2号竪穴住居址出土石器実測図(4)	41	第42図	Tピット内出土石器実測図	112
第14図	第2号竪穴住居址出土石器実測図(5)	42	第43図	Tピット内出土石器実測図	113
第15図	第1号竪穴住居址出土石錐状石器実測図	44	第44図	発掘区出土第Ⅰ群土器拓影	115
第16図	第2号竪穴住居址出土石錐状石器実測図	46	第45図	発掘区出土第Ⅰ群土器拓影	117
第17図	第1号竪穴住居址出土石錐状石器関連石 核実測図	48	第46図	発掘区出土第Ⅱ群土器実測図	119
第18図	第1号(上段)・第2号(下段)竪穴住居址 出土黒耀石剥片実測図	49	第47図	発掘区出土第Ⅱ群土器拓影	121
第19図	第1号竪穴住居址状遺構	52	第48図	発掘区出土第Ⅱ群土器拓影	123
第20図	第1号竪穴住居址状遺構出土土器拓影	53	第49図	発掘区出土第Ⅱ群土器拓影	124
第21図	第1号竪穴住居址状遺構出土石器実測図	55	第50図	発掘区出土第Ⅱ群土器底部実測図	126
第22図	遺構実測図(第1, 2号 Tピット)	87	第51図	発掘区出土第Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ群土器拓影	127
第23図	遺構実測図(第3, 4号 Tピット)	88	第52図	発掘区出土石器実測図	129
第24図	遺構実測図(第5～7号 Tピット)	89	第53図	発掘区出土石器実測図	130
第25図	遺構実測図(第8, 9号 Tピット)	90	第54図	発掘区出土石器実測図	133
第26図	遺構実測図(第10, 11号 Tピット)	91	第55図	発掘区出土石器実測図	134
第27図	遺構実測図(第12～14号 Tピット)	92	第56図	発掘区出土石器実測図	136
第28図	遺構実測図(第15～17号 Tピット)	93	第57図	発掘区出土石器実測図	137
			第58図	発掘区出土石器実測図	138
			第59図	発掘区出土石器実測図	139

第60図	発掘区出土石器実測図……………	140	第79図	遺構及び発掘区出土石器実測図……………	183
第61図	発掘区出土石器実測図……………	141	第80図	発掘区出土石器実測図……………	184
第62図	発掘区出土石器実測図……………	143	第81図	発掘区出土石器実測図……………	186
第63図	発掘区出土石錐状石器実測図及びT77遺 跡出土石錐状石器実測図……………	144	第82図	発掘区出土石器実測図……………	187
第64図	発掘区出土黒耀石剥片実測図……………	146	第83図	発掘区出土石器実測図……………	188
第65図	セクション図……………	150	第84図	発掘区出土石器実測図……………	189
第66図	発掘区配置及び遺構関連図……………	151	第85図	発掘区出土石器実測図……………	190
第67図	遺構実測図(第1号, 第2号ピット)…	153	第86図	第1号竪穴住居址出土土器分布図……………	193
第68図	遺構内出土土器拓影……………	154	第87図	第2号竪穴住居址出土土器分布図……………	195
第69図	遺構実測図(第101~103号Tピット)…	164	第88図	第1号竪穴住居址出土石器, 剥片分布図197	
第70図	遺構実測図(第104~106号Tピット)…	165	第89図	第2号竪穴住居址出土石器, 剥片分布図199	
第71図	遺構実測図(第107~109号Tピット)…	166	第90図	竪穴住居址石器群石器組成比較百分率 累積グラフ……………	203
第72図	遺構実測図(第110~112号Tピット)…	167	第91図	Tピット埋没状況模式図……………	208
第73図	発掘区出土土器実測図……………	170	第92図	第13号Tピット埋没状況図……………	210
第74図	発掘区出土第I群土器拓影……………	172	第93図	S267, 268遺跡Tピット形態分類……………	214
第75図	発掘区出土第I群土器拓影……………	175	第94図	S153遺跡Tピット形態分類……………	215
第76図	発掘区出土第II群土器拓影……………	177	第95図	Tピット城底面規模, 長軸方向及び模式図	217
第77図	発掘区出土第III, IV群土器拓影……………	179	第96図	S267, 268遺跡Tピット配列見取図……………	221
第78図	発掘区出土第IV, V群土器拓影……………	181	第97図	S153遺跡Tピット配列見取図……………	223

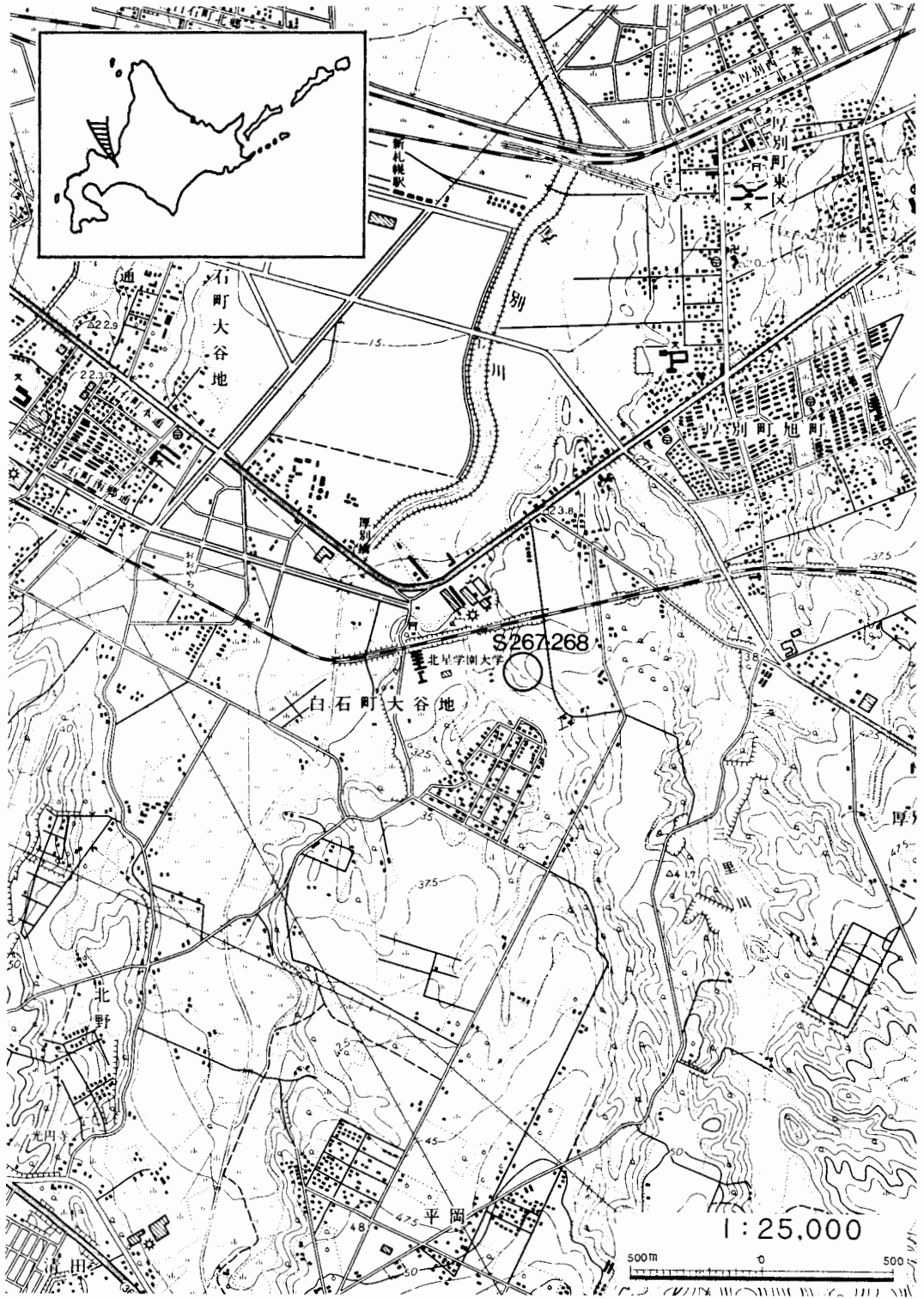
挿表目次

第1表	第2号竪穴住居址柱穴一覧表	28
第2表	Tピット概要一覧(第1次調査)	58
第3表	Tピット概要一覧(第2次調査)	157
第4表	S 267・268遺跡(第1次調査)Tピット一覧表	238
第5表	S 267・268遺跡(第2次調査)Tピット一覧表	242
第6表	S 153遺跡Tピット一覧表	244
第7表	S 267・268遺跡出土石器類計測表	248

図版目次

- 図版1 遺跡付近の空中写真(1:12,500 昭和48) D 第37号Tピット
- 図版2 A 遺跡遠景(北より) 図版12 A 第40号Tピット
B 遺跡全景(南東より) B 第41号Tピット
- 図版3 A 発掘状況 C 第45号Tピット
B 竪穴住居址発掘状況 D 第48号Tピット
- 図版4 A 第1号竪穴住居址(西より) 図版13 A 第7号Tピット長軸断面
B 第1号竪穴住居址, 焼土, ピット2断面 B 第46号Tピット短軸断面
- 図版5 A 第2号竪穴住居址(東より) 図版14 A 第13号Tピット埋没状態(再調査直前)
B 第2号竪穴住居址, 鎌玉, 石斧出土状況(北壁) B S269遺跡, 第2号Tピット・オーバーハング部分
- 図版6 A 第34号Tピット 図版15 A 第1号竪穴住居址出土土器
B 第4号Tピット B 第1号竪穴住居址出土土器
- 図版7 A 第11号Tピット 図版16 A 第2号竪穴住居址出土土器
B 第13号Tピット B 第2号竪穴住居址出土土器
C 第14号Tピット 図版17 A 第1号竪穴住居址状遺構出土土器
D 第17号Tピット B Tピット内出土土器(1)
- 図版8 A 第18号Tピット 図版18 A Tピット内出土土器(2)
B 第19号Tピット B Tピット内出土土器(3)
- 図版9 A 第22号Tピット 図版19 A Tピット内出土土器(4)
B 第23号Tピット B 発掘区出土復元土器
C 第24号Tピット 図版20 発掘区出土復元土器
D 第25号Tピット 図版21 A 発掘区出土土器(第I群土器)
B 発掘区出土土器(第I群土器)
- 図版10 A 第26号Tピット 図版22 A 発掘区出土土器(第I群土器)
B 第29号Tピット B 発掘区出土土器(第II群土器)
C 第31号Tピット 図版23 A 発掘区出土土器(第II群土器)
D 第32号Tピット B 発掘区出土土器(第II群土器)
- 図版11 A 第33号Tピット 図版24 A 発掘区出土土器(第II群土器)
B 第35号Tピット B 発掘区出土土器(第III, IV, V群土器)
C 第36号Tピット 図版25 第1号竪穴住居址出土石器
図版26 第2号竪穴住居址出土石器(1)
図版27 第2号竪穴住居址出土石器(2)
図版28 第1号竪穴住居址(上段), 第2号竪穴住居

- 址(下段), 出土石錐
- 図版29 A 第1号竪穴住居址出土・石錐関連石核
B 石皿(1, 第2号竪穴住居址,
2, 第19号Tピット)
- 図版30 A 第1号竪穴住居址出土剝片
B 第2号竪穴住居址出土剝片
C 発掘区出土剝片
- 図版31 Tピット, 第1号竪穴住居址状遺構出土石器
- 図版32 発掘区出土石器
- 図版33 発掘区出土石器
- 図版34 A 発掘区出土石錐
B T77遺跡発掘区出土石錐
C S267・268遺跡出土石錐刃部拡大
(×6.3)
- 図版35 S267・268遺跡出土石錐刃部拡大
(×12.6)
- 図版36 発掘区出土石器
- 図版37 発掘区出土石器
- 図版38 発掘区出土石器
- 図版39 A 発掘区出土石器
B 発掘区出土石器
- 図版40 A 遺跡遠景(北西より)
B 遺跡全景(東より)
- 図版41 A 遺跡全景(南東より)
B 第1号ピット
C 第2号ピット
- 図版42 A 第101号Tピット
B 第105号Tピット
- 図版43 A 第106号Tピット
B 第109号Tピット
C 第108号Tピット
D 第103号Tピット
- 図版44 A 第102号Tピット
B 第112号Tピット
C 第104号Tピット
D 第111号Tピット
- 図版45 A Tピット内出土土器
B Tピット内出土土器(上段, 1号, 下
段, 2号)
- 図版46 発掘区出土復元土器
- 図版47 A 発掘区出土復元土器
B 発掘区出土土器(第I群土器)
- 図版48 A 発掘区出土土器(第I群土器)
B 発掘区出土土器(第II群土器)
- 図版49 A 発掘区出土土器(第III, IV群土器)
B 発掘区出土土器(第IV, V群土器)
- 図版50 遺構及び発掘区出土石器
- 図版51 発掘区出土石器
- 図版52 発掘区出土石器
- 図版53 発掘区出土石器
- 図版54 A 発掘区出土石器
B 発掘区出土石器



本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1
地形図を複製したものである。(承認番号) 昭51道複第629号

I 発掘調査に至る経過

本書に報告する遺跡は、高速自動車国道北海道縦貫自動車道（縦貫道）および札幌新道建設予定地内に存在するものである。北海道内の同一路線内に存在する遺跡の発掘としては、古く昭和45年に実施した柏木川遺跡（柏木川—北海道文化財保護協会—昭和46年）、平和1遺跡、同2遺跡、植苗1遺跡、同2遺跡（北海道縦貫自動車道（苫小牧市植苗～千歳市平和）埋蔵文化財包蔵地群発掘調査報告書—北海道教育委員会—昭和51年）などがある。このように縦貫道建設予定地内に存在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、その工事起因者である日本道路公団は、発掘調査の実施に関する限り非常に前向きな姿勢をもって取り組んでいることが窺える。

札幌市内を通過する縦貫道の建設にあたっては、日本道路公団札幌建設局から、その予定地内に係る埋蔵文化財の包蔵地の存在について札幌市教育委員会に照会があったのは、昭和49年のことであった。教育委員会は、昭和48、49年の両年度にわたって、市内全域の埋蔵文化財包蔵地の所在確認調査を実施しており、当該路線予定地内には、S 267、S 268の登録番号を有する周知の包蔵地が存在することから、この結果に基づき道路公団と協議をすることとした。ただ当該遺跡の存在する地域が、札幌開発建設部の計画する札幌新道との併行区間であることから、教育委員会、道路公団札幌建設局に札幌開発建設部札幌新道建設事務所を加えた三者による数次にわたる協議の結果、諸般の事情から遺跡の現状保存は極めて困難であり、発掘調査を実施することもやむなしとの結論を得た。

この合意に基づき教育委員会は、同年秋、当該遺跡の発掘調査を、教育委員会の経費負担により実施し、当初2地点と考えられていた遺跡は、本来的には同一遺跡として捉えることが妥当であり、その発掘対象面積は、27,000㎡とすること等の所見に基づき、発掘調査実施についての具体的な協議を進めることとした。その後数回にわたる三者協議を経て、発掘調査は昭和50年春から着手すること、調査費用の決定等々の細目についても合意に達した。

昭和50年5月発掘調査実施に関する業務委託契約の締結を完了し、6月15日から発掘調査に着手した。しかし、調査着手の時点では、当該路線の用地買収が完了しておらず、発掘調査対象面積27,000㎡のうち、発掘調査承諾書を入手できたのは23,000㎡についてのみであり、残余の4,000㎡に関しては、当時の土地所有者からの発掘承諾を得られず、昭和50年度の発掘調査の進捗に合わせて協議することとした。しかし、昭和50年秋に至っても、この4,000㎡に関しては、発掘承諾を得ることができず、この部分については、昭和51年度に改めて発掘調査を実施することとした。

昭和51年、札幌市建設局用地部札幌新道課が窓口となって用地買収の交渉を進めた結果、9月に用地買収が完了し、9月17日より発掘調査に着手した。

（加藤邦雄）

Ⅱ 遺跡の位置と環境

S 267, S 268遺跡は、札幌市中の東方に位置し、国道12号線を江別方向に進行し、国道沿いにある大谷地神社の裏手約300m程の所にある（第1図）。

本遺跡をのせる台地は、江別より札幌東部にかけて一段高い丘陵地で、石狩低地帯の東側に位置する、一般に野幌丘陵と称されているものである。

野幌丘陵は、札幌側に於いては厚別川、野津幌川、三里川等によって分断され、さらにいくつかの沢によって小支谷を多く形成している。

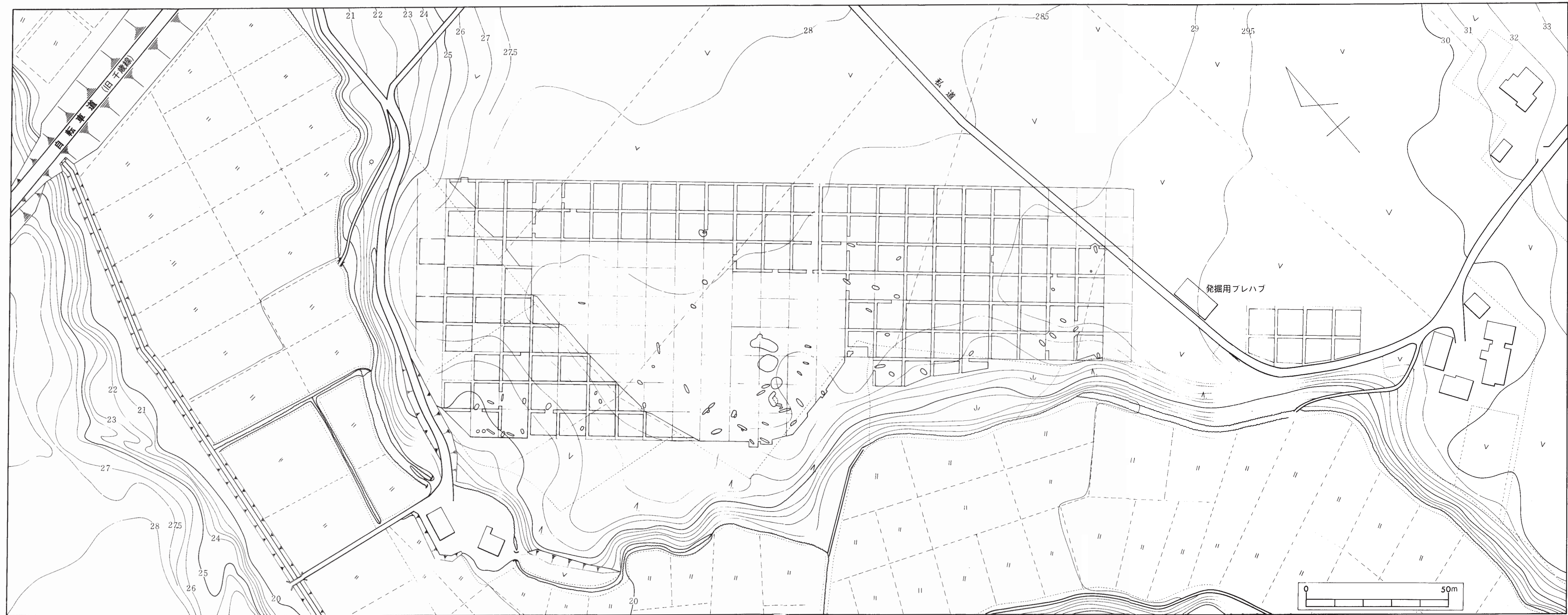
本遺跡は、厚別川と野津幌川にはさまれる丘陵上にある。この丘陵は、豊平区清田付近に端を發し、白石区大谷地の大谷地神社付近にまで延々4kmにおよぶ沢に分断され、遺跡はこの沢の右岸の南向段丘上に位置する。

遺跡をのせる台地上の標高は、28m内外であり、沢の面との比高は約10m内外ある。

遺跡の面は、ほぼ平坦であるが沢に面する南西部ではゆるやかに沢に向って傾斜し、さらに一段低い平坦な面を有している。

本遺跡の南面にある沢に関連する段丘上に存在する遺跡は、先年来より行われている札幌市教育委員会による埋蔵文化財の分布調査の結果よりみると、白石区側においては、本遺跡（S 267・S 268）をはじめとしてS 262, S 263, S 265, S 266, S 269, S 408, S 409の8遺跡の分布がみられ、さらに豊平区側においては、T 264, T 275, T 276, T 277の4遺跡と合計12遺跡の存在が知られている。

これらの遺跡の概要は、2・3の遺跡を除いてその規模、内容は解っていないのであるが、特にS 263, S 262, S 262, S 265, 本遺跡（S 268, S 267), S 269の各遺跡は、100m前後の間隔を有しながら沢の南面の台地沿いに連続して存在し、相互に何らかの関係を有していた事がうかがえる。立地、出土遺物、遺構、土地の利用等の差よりセツルメントパターン等沢との関連を考えるうえにおいても有意な資料を数多く秘めているといえよう。（羽賀憲二）



第1図 遺跡付近地形図

Ⅲ 第 1 次 調 査

第1章 発掘調査の方法と遺跡の層序

第1節 発掘調査の方法

本遺跡の発掘調査は、北海道自動車縦貫道及び並行して敷設される札幌新道の予定地域内に存在し、その現状保存が不可能と判断された遺跡を含む地域一帯を発掘調査の対象とした（第2図）。

遺跡は、Ⅱの項でも述べた様に野幌丘陵上に不変的にみられる小支谷の一つの比較的大規模な沢の南面する段丘の側縁部一帯に広がっている。道路敷設の予定は、遺跡の存在する段丘の側縁部を90mの幅で通り、そこに分布する遺跡の範囲をほとんど含んだものであった。

為に、道路敷設予定地内の遺跡発掘調査の対象面積は、道路予定幅90m、遺跡の推定面積より、道路幅に沿って約300mの長さを対象とした。

道路予定によれば、道路は直線のみならず部分的にやや曲線となるため、発掘区域（グリット）設定においては、道路中心線を基線として使用せず、直線部分の道路境界線を基線として発掘区（グリット）を設定した。

発掘調査の対象区域は、90mの幅に対して長さは330mである。さらにこれを一辺10m×10mのグリットに分割し、発掘調査の最小単位とした。

グリットの名称は、長軸方向（北西—南東）に、Ⅰ区～XXXⅢ区、短軸方向（北東—南西）にA区～I区とした。

発掘調査に際しては、10m×10mの各グリットの北東、南東側にセクション観察等のため1m幅のあぜ道を残し9m×9mの範囲を全面的に表土を剝土するといった方法を基準とした。

発掘調査対象面積は、約27,000㎡であり、当初の計画にはなかった一部未買収地域約4,000㎡、沢、谷等の発掘調査不能地域を除いて、昭和50年度の発掘総面積は21,000㎡であった。

尚、未買収地約4,000㎡については、次年度の継続調査とする事になった。

第2節 遺跡の層序

本遺跡にみられる、遺物を含んだ表土層の状態は、野幌丘陵の札幌側の各遺跡の状況と同様に、黒色を呈する腐植土が未発達で非常に薄く、為に開拓時より行われている耕作によって、基盤とする黄褐色のローム層の上面にまでおよぶ攪乱がなされている。プライマリーな状態は、沢に近い表土が厚く堆積している部分に若干残されていたにすぎない。

特に、表土下のローム層、火山灰層については、記録していないが、同地域の他遺跡さらには本遺跡にて検出された深い遺構等の壁面の観察よりおおまかな層序は理解される。

表土層下には、30cmの厚さをもつ軟質のローム層があり、その下層は、比較的硬いローム層が1m程の厚さで堆積している。さらに下層に至っては、火山灰質砂礫層がみられ、白色、黒色、褐色等を呈する各層が1～3cmの厚さでしま状にみられる。この火山灰質砂礫層は、札幌市白石神社遺

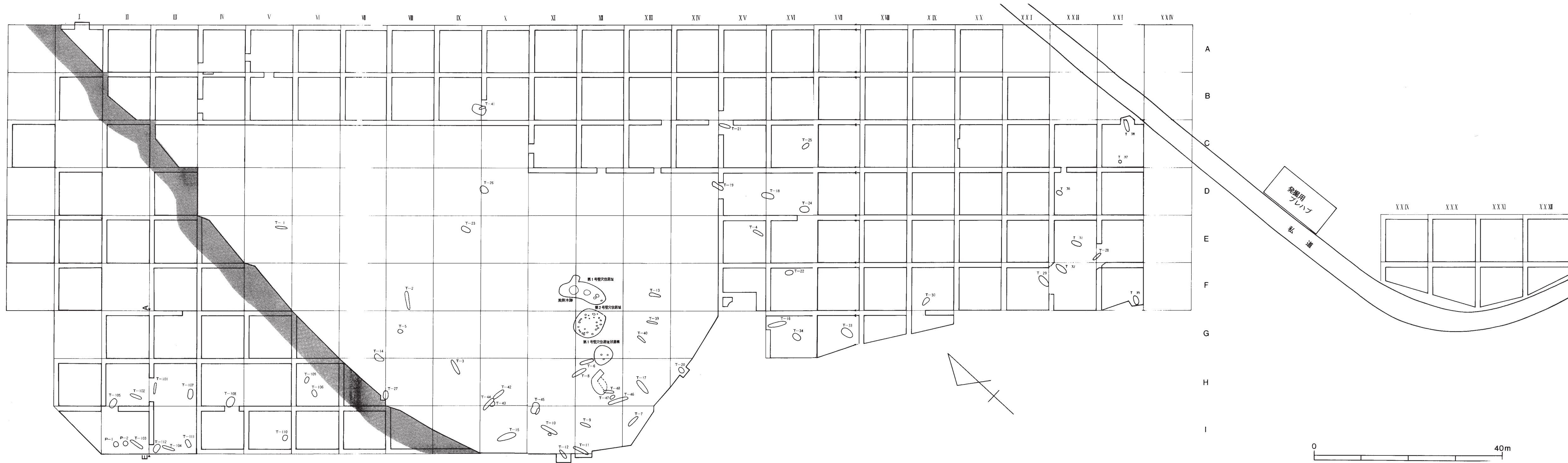
跡の基盤ローム下にみられたいわゆる厚別砂礫層と同様のものと考えられた。

遺物の包蔵は、表土（黒色腐植土）中に最も多くみられ、その下層の軟質ローム層中にも若干含まれている。

遺構の大部分のものは、表土（黒色腐植土）の剥いだ段階で軟質ローム層の上面にてそのプランが確認されたが、若干の遺構については、軟質ローム層上面では確認されず、さらに下層の硬いローム層上面にいたって検出されたものもある。

表土下にある軟質のローム層は、いわゆる漸移層と考えられるものであろう。また遺跡では、壁の立ちあがり、床面等が明確でないが、遺物は含まれているといった、遺構の可能性も考えられる浅いピット状のものが数個検出されている。これらを遺構かどうか判定するにはその覆土層の状況は決め手とはならず、漸移層中にも遺物が含まれている事より考え、今回はこれらの浅い不定形の皿状ピットは、遺構として取り扱わなかった。

（羽賀憲二）



第2図 遺跡発掘区配置及び遺構関連図

第2章 遺構および遺構内出土の遺物

本遺跡からは、2軒の竪穴住居址と一個の竪穴住居址状遺構、従来Tピットと呼称されている溝状のピットが48個、検出されている。

第1節 竪穴住居址

第1号竪穴住居址 (第3図)(図版4)

Ⅶ-F区に位置し、遺構は表土を剥ぎローム面を露出した時点で、そのプランが確認された。遺構確認面での標高は、28.400m程度である。

規模は、長径5.1m、短径4.4mあり、長軸の方向は、N-17°-Wである。

プランは、長軸方向の一方がすばまった卵形ないしは変形五角形を呈している。

床面の状態は、ほぼ平坦でかたく踏みかためられた様にしまっている。

壁は、直立に近く東側にて50cm、西側にて45cm、南側にて25cm、北側にて50cmを数える。状態は、床面と同様に非常にかたく、明確な立ちあがり認められる。

床面の中央部には、焼土の集積が2ヶ所みられ、炉址としての可能性が指摘された(焼土4、焼土5)。

床面の長軸には、3個のピットが並んで検出されている(Pit-1、Pit-2、Pit-3)。

Pit-1の性格は、不明であるが、Pit-2は焼土5に隣接して掘り込まれ、中には灰がつまっていた。さらに床面と同じ「黄褐色粘質土」がその上面に意識的に貼り込まれ、本竪穴住居址を使用中に、灰をすてるために掘られ、埋められたものと解された。Pit-3は、北側の壁に接してあり、直径1.2m、深さ30cmの規模を有している。用途としては、貯蔵の為のピットかとも考えられる。

床面全体を被った第V層の上面には、比較的多くの焼土の集積がみられる(焼土3)。これらは、本竪穴住居址が廃棄された後のものである。

覆土の層序については、以下の堆積を示めている。

第I層；黒褐色土、I'層；木の根等による攪乱。

第II層；黄褐色土で若干の炭化物を含んでいる。

第III層；黄色粘質土。

第IV層；やわらかな褐色粘質土。

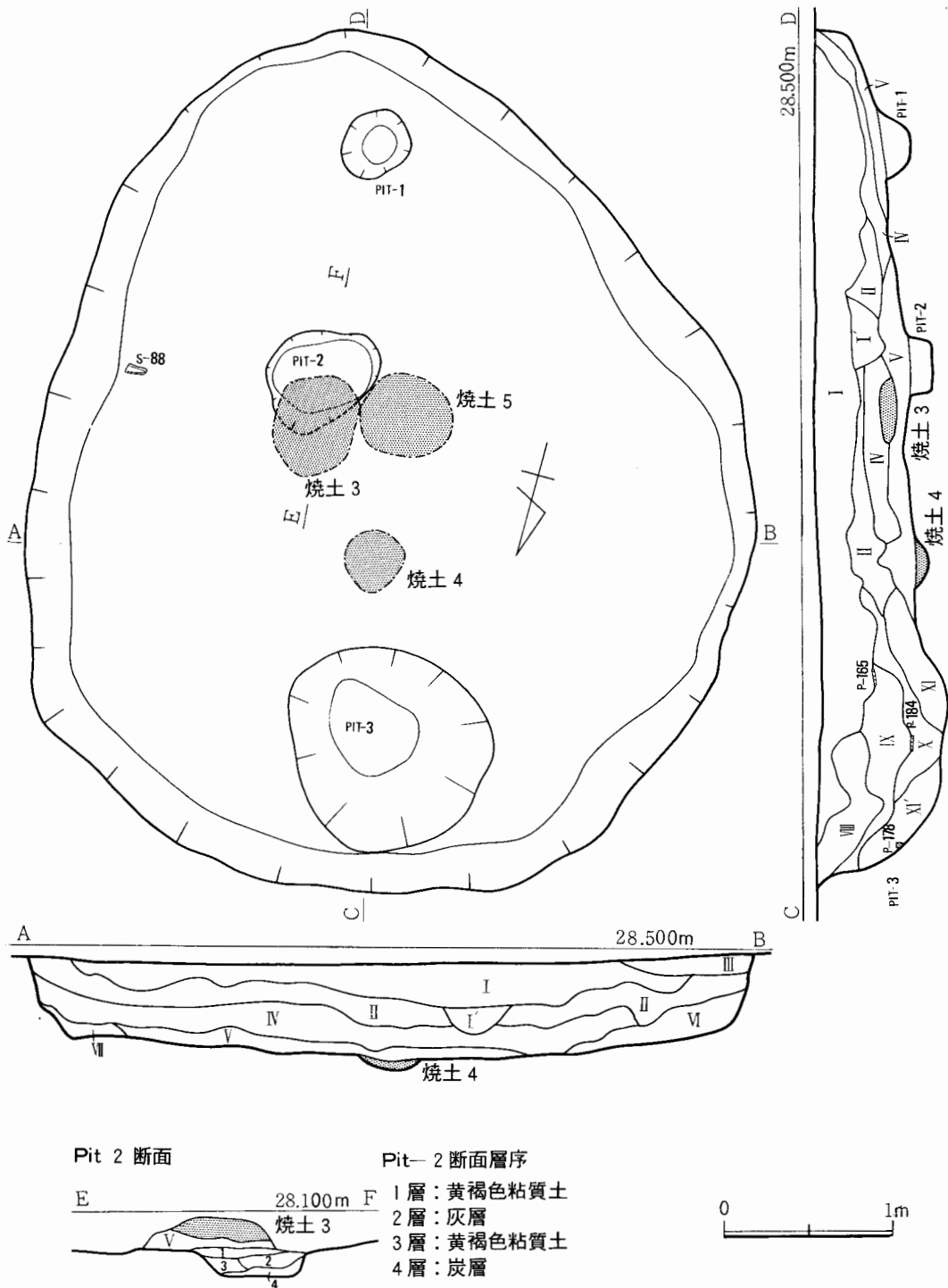
第V層；かたい褐色粘質土。

第VI層；茶褐色土。

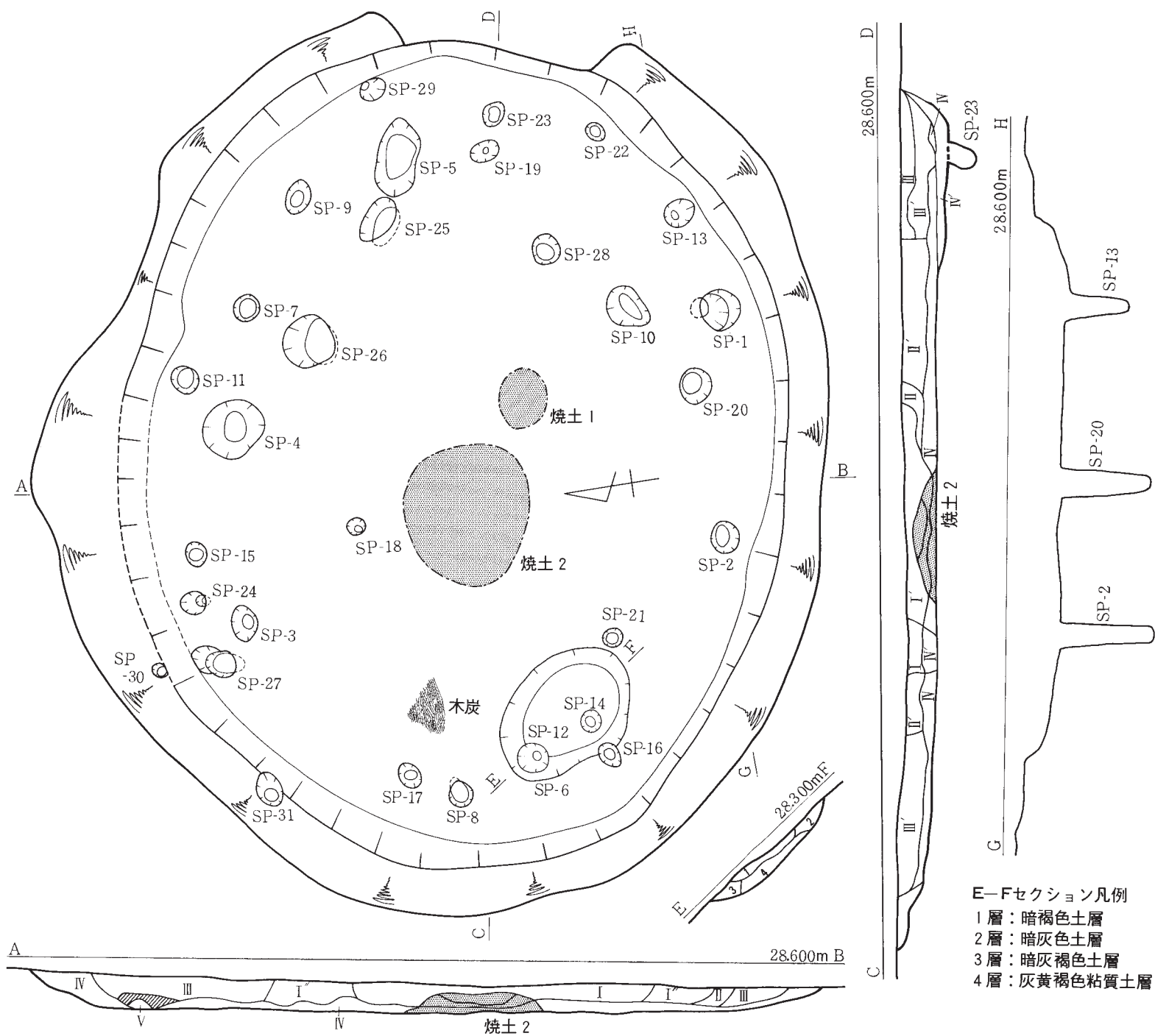
第VII層；かたい黄色砂質土。

第VIII層；黄褐色土。

第IX層；やわらかな黄褐色粘質土。



第3図 第1号豎穴住居址



E-Fセクション凡例

- 1層：暗褐色土層
- 2層：暗灰色土層
- 3層：暗灰褐色土層
- 4層：灰黄褐色粘質土層

第4図 第2号竪穴住居址

第Ⅹ層；黄褐色粘質土。

第Ⅺ層；やわらかな炭まじりの黄褐色粘質土。

第2号竪穴住居址（第4図）（図版5）

Ⅺ—G区に位置し、第1号竪穴住居址の北西部に隣接して存在している。

遺構確認面での標高は、28.400m前後である。

規模は、長径6.3m、短径5.6mを数え、長軸方向は、N—85°—Wである。

プランは、ほぼ楕円形を呈し、壁の周囲は、30～50cm程のテラス状の脹り出し部を有している。

床面の状態は、ほぼ平坦であり、踏みかためられた様にかたくしまっている。

壁は、土質の関係で軟弱であるが、2段になり、まずなだらかな落ち込みがあり、さらに直立に近くなり床面へ接している。床面よりの壁の高さは、20cm内外である。

床面の中央部には、焼土の集積が2ヶ所認められ、炉址としての可能性が考えられた。

また床面の壁際に沿って、30個の柱穴と考えられる直径20cm前後、深さ30～50cmの小ピットがめぐっている。

これらの小ピットは、床面を清掃した段階で、その輪郭は、床面がかたいのに比較して、小ピットの部分だけが非常にやわらかであり、容易にその存在が確認された。

床面の南西部には、長径1.2m、短径80cm、深さ16cmの楕円形の浅い掘り込みがある（SP—6）。使用目的等は、明らかにされてはいない。

本竪穴住居址より出土した石斧の未成品があるが、第1号竪穴住居址より出土した石斧の未成品と接合する事が解った（第13図55）。

また出土した土器は、両住居址ともに同一型式に属する事が解っている。これらの点より見ても、本竪穴住居址と第1号竪穴住居址は、同一時期に営まれたことが判明したが、そのプラン、構造等非常に差がある点が留意される。また石器の器種、数量、組成等も差が存在する事等も指摘される。

覆土の層序は、以下の堆積を示めす。

第Ⅰ層；やわらかく、細かい黄褐色の粘土粒を含む茶褐色土、Ⅰ'層；暗褐色土。

第Ⅱ層；暗褐色土、Ⅱ'層；第Ⅱ層より明るい色を呈し、若干しまっている暗褐色土。Ⅱ''層；茶褐色土層。

第Ⅲ層；褐色粘質土、Ⅲ'層；褐色粘質土。

第Ⅳ層；暗黄褐色粘質土、Ⅳ'層；暗褐色粘質土。

竪穴住居址出土土器

2軒の竪穴住居址からは、比較的多数の土器が得られている。しかし完形で得られたものは無く、すべて破片で得られたものである。

さらに覆土層中より得られたものが大部分であり、床面にくい込む様な状態で発見されたものも若干だが存在する。覆土中より得られた土器は、明らかに混入したと思われるわずかな例を除いて、

第1表 第2号竪穴住居址柱穴一覧表

柱 穴	規模cm	深さcm	内容物	柱 穴	規模cm	深さcm	内容物
SP-1	28×30	55.2	茶褐色土 (含炭化粒)	SP-17	16×18	36.4	茶褐色土 (含炭化粒)
2	20×22	61.2	〃	18	11×12	29.9	〃
3	20×26	22.3	〃	19	12×20	26.5	〃
4	42×44	19.3	〃	20	23×26	67.8	〃
5	28×57	15.1	〃	21	13×14	23.6	〃
7	19×19	44.7	〃	22	11×13	21.0	〃
8	16×19	40.6	〃	23	14×20	18.8	〃
9	18×25	45.7	〃	24	18×18	25.8	〃
10	26×34	32.1	〃	25	20×36	21.5	〃
11	18×19	52.8	〃	26	38×38	22.8	〃
12	20×22	17.1	〃	27	19×22	43.8	〃
13	18×24	47.1	〃	28	20×21	47.7	〃
14	14×16	22.2	〃	29	16×19	9.4	〃
15	15×18	36.0	〃	30	10×11	18.2	〃
16	14×19	55.1	〃	31	18×25	15.4	〃

床面にくい込んだ状態で発見されたものと全く同一の型式に属すると考えられる土器である。

第1号、第2号竪穴住居址ともに、大多数を示める土器は、口縁部に円形刺突文がめぐりわゆる「トコロ6類土器」と総称されるグループの物である。

以下、覆土層中、及び床面より得られた土器について、各竪穴住居址別に分けて、一括して説明を加えて行く。

第1号竪穴住居址出土土器 (第5図, 第6図)(図版15)

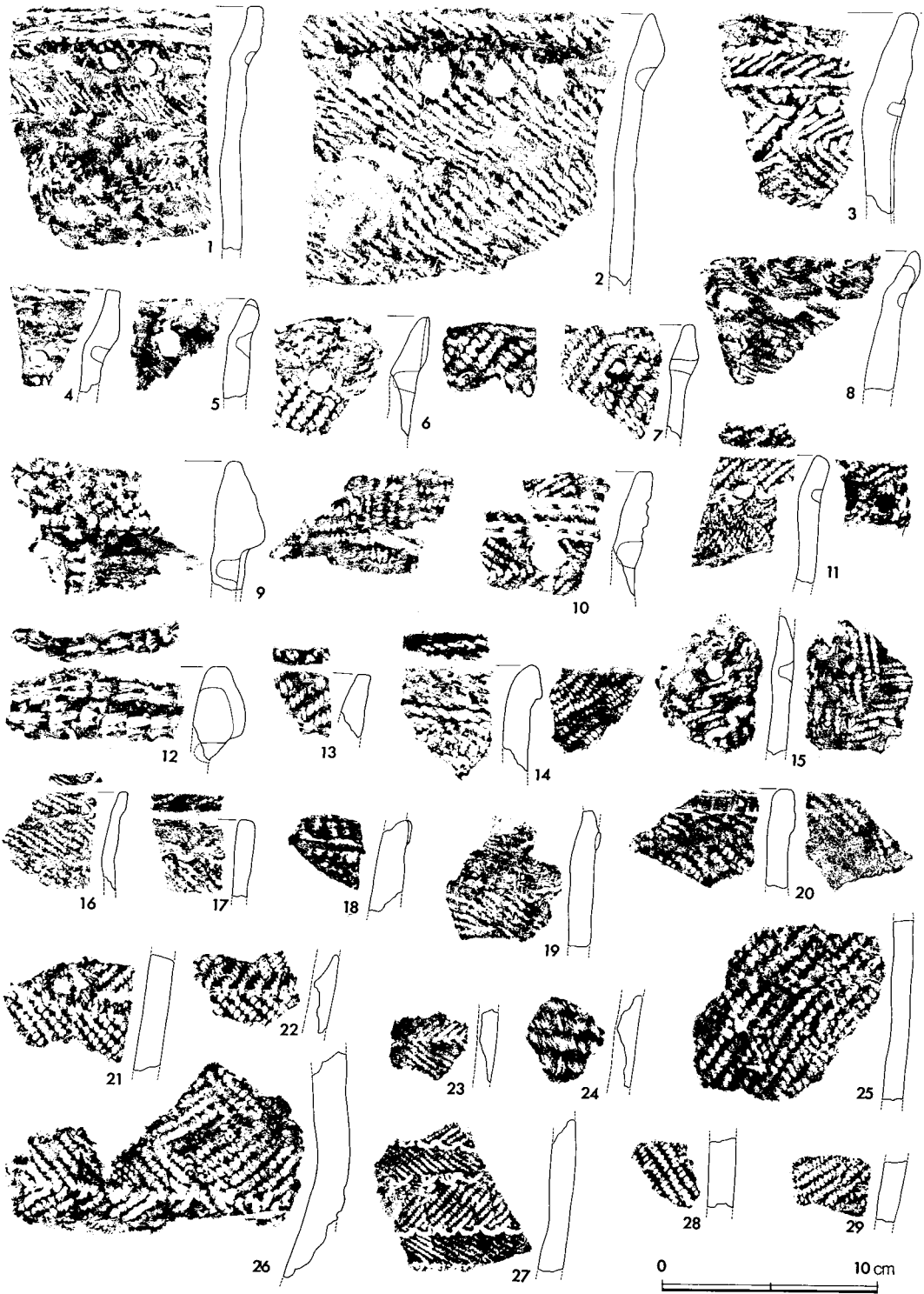
口縁部に円形刺突文が1～2cm間隔に付けられ、比較的厚手の縄文土器のグループが大多数を示めている。

口唇直下に連続刺突文が2段、その下に円形刺突文が口頸部をめぐり。地文として単節斜行縄文が施文される(1)。

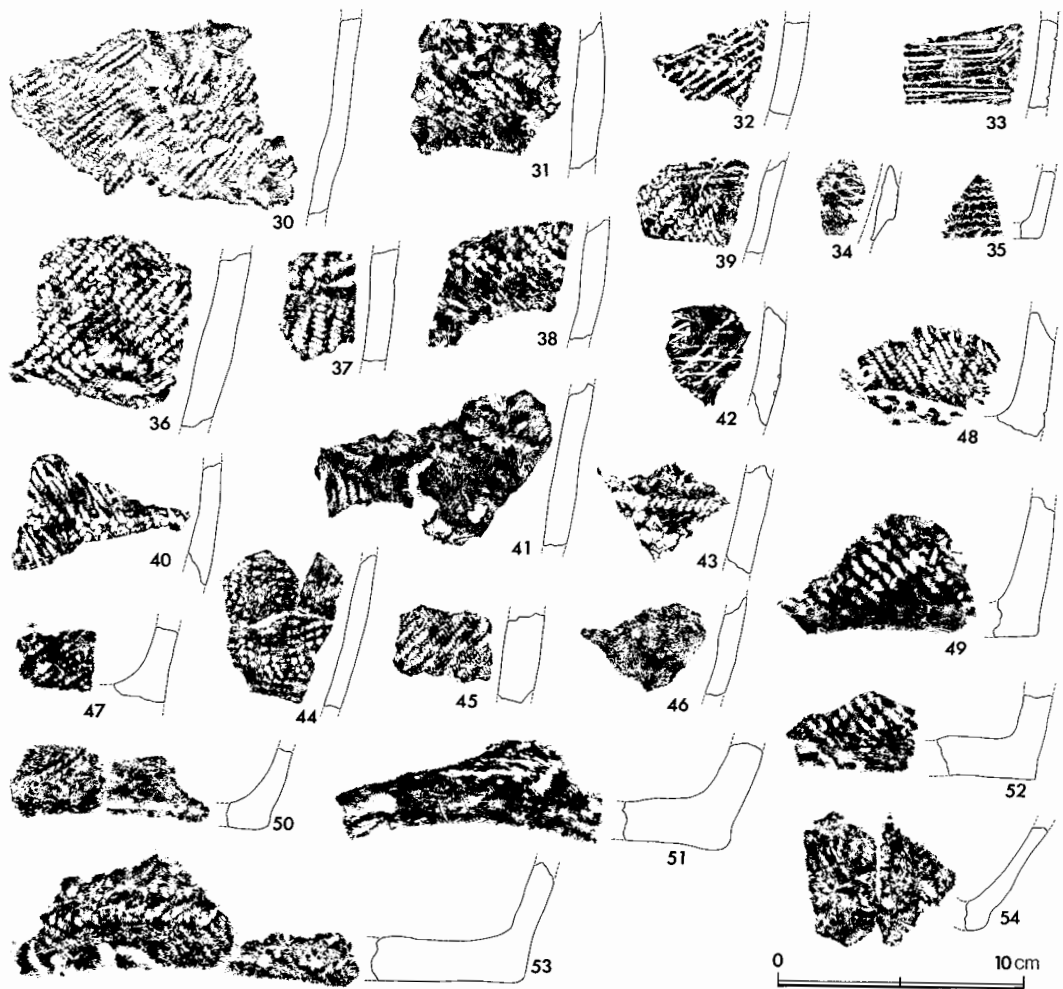
口唇が若干肥厚し、小突起がある。肥厚帯上には燃糸圧痕が2段、肥厚帯下に直径1.0cmの円形刺突文が比較の間隔をおいて施文され、口頸部より胴部にかけて貼付帯が付けられ、この貼付帯上に連続刺突文が付けられる。地文として単節羽状縄文が施文される(3)。

口唇が若干肥厚し、口頸部に直径1.0cm前後の円形刺突文がめぐり、地文として単節の斜行縄文が施文される(4～8, 11～15)。

6, 11, 15は、内面にも斜行縄文が施文され、11は、口唇上にも縄文がみられる。



第5图 第1号竖穴住居址出土土器拓影(1)



第6図 第1号竪穴住居址出土土器拓影(2)

口縁が肥厚し、小突起が存在する。さらに肥厚帯に附属して口頸部にかけ貼付帯が付けられ、連続刺突文が、肥厚帯上、貼付帯上に施文され、口頸部に付けられる円形刺突文が特徴となるもので内面にも斜行縄文が施文される(9)。

口唇上に小突起を有し、口縁に半截竹管状工具の内面を使用した、連続刺突文が1段付けられ、その下位に円形刺突文がめぐる。地文として、単節の羽状縄文が施文される(10)。

口縁が肥厚し、小突起を有している。肥厚帯上には、へら状工具による連続刺突文が2段、さらに口唇上にも施文される、肥厚帯直下に円形刺突文が付けられる(12)。

次に口縁部に円形刺突文は欠いているが、円形刺突文が特徴となる土器群と同一のグループに属するであろうと考えられる土器がある。

口縁部が若干肥厚し、撚糸圧痕文が口唇上、口縁に数段施文され、内面にも縄文が施文されるも

のがある(14)。

口縁が肥厚し、口唇上にも無節の斜行縄文が施文されるもの、内面にも縄文がみられる(13)。

口縁部が若干肥厚し、単節の斜行縄文のみが地文として施文されており、口唇上にも縄文が施文される(16, 17)。

幅広の粘土帯が貼付され、貼付帯上にへら状工具による連続刺突文が施文され、地文の単節斜行縄文がみられる(18)。

粘土帯が貼付され、貼付帯上にも地文の単節斜行縄文がみられる(19)。

口縁部が若干肥厚し、肥厚帯上にへら状工具による連続刺突文が一段みられ、口唇上には、半截竹管状工具の内面を使用した連続刺突文がみられ、地文としての単節斜行縄文がみられる、内面にも同様の縄文が施文されるもの(20)等がみられる。

以下は、胴部の破片である。

右下りの単節斜行縄文が地文として施文されるもの(28, 31, 43)

左下りの単節斜行縄文が地文として施文されるもの(25, 29, 30, 37, 39, 45)

単節の羽状縄文が地文として施文されるもの(21~23, 26, 27, 32, 36, 38, 40, 44)

無節の斜行縄文が地文として施文されるもの(24)

底部の破片については、平底のものが主であり、混入と考えられる尖底のものが1点(54)のみ存在している。

底部の形状としては、底面が外側に張り出すもの(50, 51)と胴部より底面に直すぐに下り「く」の字」状となるもの(47~49, 52, 53)の2種類に分類される。

土器の胎土には、若干の砂粒及び、小石までを混入しているものが多くみられる。また若干の植物質繊維を胎土に混入したと考えられる痕跡を有するものもみられる(1, 3, 5~9, 15, 22~24, 29, 31, 36, 48, 49, 52, 53)。

焼成は、比較的良好である。

色調は、黄褐色(1, 4, 13, 16, 20~25, 30, 32, 36, 38, 40, 42)

茶褐色(5, 6, 8, 10, 11, 14, 15, 19, 28, 29, 31, 45, 47, 48~54)

黒褐色(2, 3, 7, 9, 12, 17, 18, 27, 33~35, 37, 39, 41, 43, 46)を呈している。

器厚は、1.0~1.2cm程度である。

混入と考えられる「貝殻文を特徴とする平底土器」の破片も存在している。

貝殻腹縁による圧痕文と横位の沈線文が組み合わされたもの(33)、貝殻腹縁による圧痕文が横位に数段施文される平底の底部(35)、貝殻腹縁を縦位に連続して押し付け、一見縄文の様にみえる波状貝殻腹縁文を有するもの(44)等がみられる。

胎土には、すべて若干の砂粒を含み、焼成は非常に良好である。

色調は、全て赤褐色を呈し、器厚は、0.8cm内外である。

第2号竪穴住居址出土土器 (第7図)(図版16)

第1号竪穴住居址に比較して出土量は、少ないが、少なくとも2型式の土器が混在していると考えられる。

第1号竪穴住居址と同様で、円形刺突文が口縁をめぐるといった特徴を有している土器のグループが主体をなしている。

口縁が若干外反し、口縁部に直径1.0 cmの円形刺突文が3 cm間隔に付けられる。地文として左下りの単節斜行縄文が施文され、内面にも同一の原体を使用した縄文がみられるもの(1)。

口縁、口唇上に竹管文が施文され、地文として単節斜行縄文がみられる(3)。

口唇上にも地文と同じ縄文がみられる(4)。

口縁が若干肥厚し、その下位に円形刺突がなされ、地文としての単節斜行縄文が施文される(5, 8)。

口縁が若干肥厚し、肥厚帯上にへら状工具による2段の連続刺突文が施文される。肥厚帯下に円形刺突文がめぐり、地文として単節斜行縄文が施文され、口唇上にも同様の縄文がみられる(7)。

次に貼付帯及び半截竹管状工具による沈線文が特徴となる土器のグループがある。

口縁部が肥厚し、幅広の貼付帯が付けられ肥厚帯上及び貼付帯上にへら状工具を使用するきざみ目が並列して付けられる(2, 14)。

貼付帯が十文字に付けられ、その交点に円形刺突文が施こされる(8, 11)。8は、内面にも縄文がみられる。

貼付帯が横位に付けられ、地文としての単節斜行縄文が貼付帯上にまで施文される(9, 10, 12, 13)。10は、内面にも同様の縄文が施文された例である。

半截竹管状工具の内面による、沈線文を有するもので地文としての単節の羽状縄文がみられるもの(17)等がみられる。

以下は、胴部及び底部の破片である。そのほとんどのものは、胎土、焼成等より見て、円形刺突文が特徴となる土器グループのものであろうと推定される。

右下りの単節斜行縄文が地文として施文されるもの(21)。

左下りの単節斜行縄文が地文として施文されるもの(22, 23, 30, 31)。

単節の羽状縄文が施文されるもの(15, 16, 18~20, 24~29, 32, 33)。

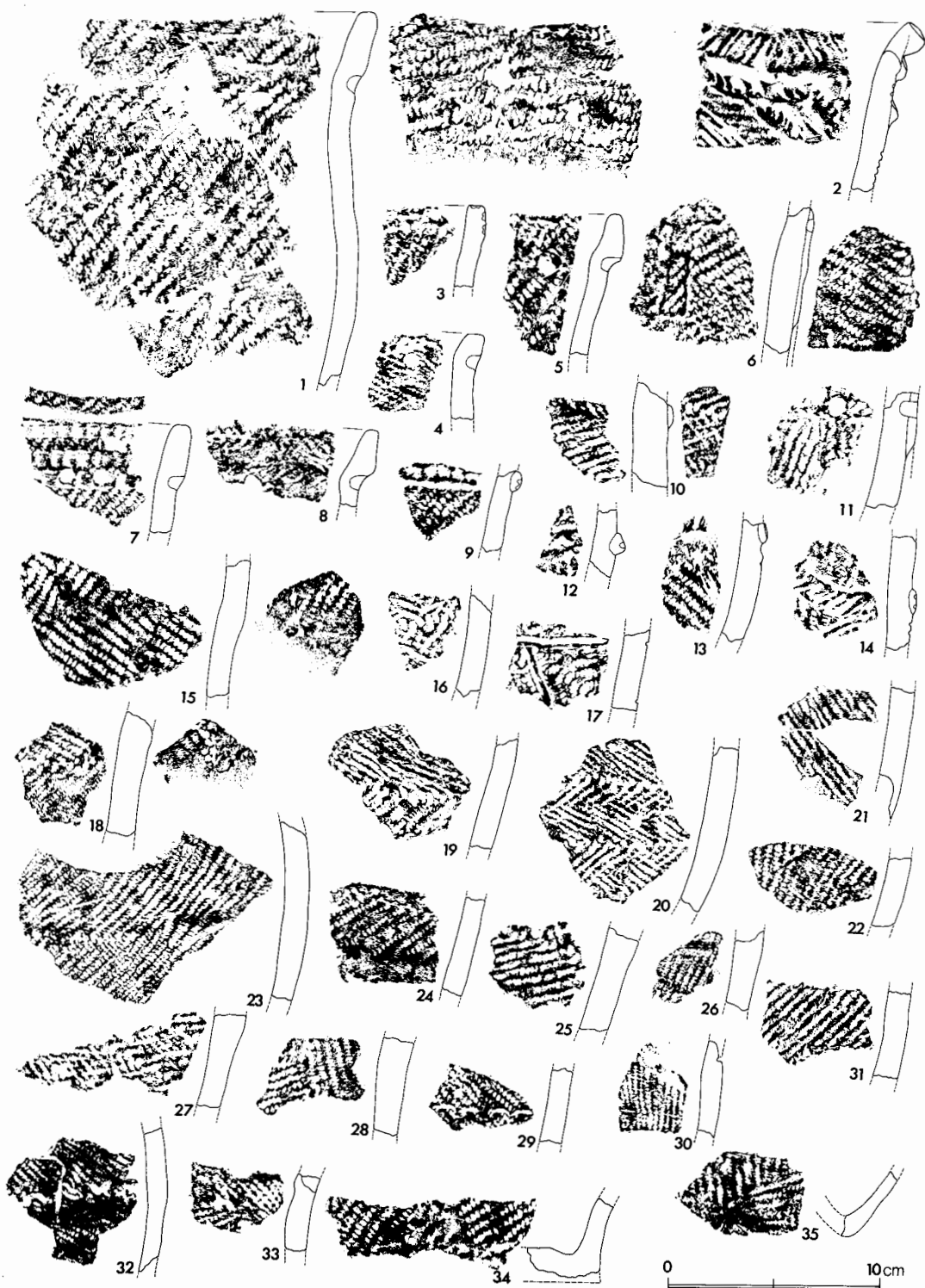
器面には単節の羽状縄文、さらに内面にも縄文が施文されるもの(15)もある。

底部破片については、明らかに混入と考えられる尖底土器のもの(35)を含めて、2点より出土していない。

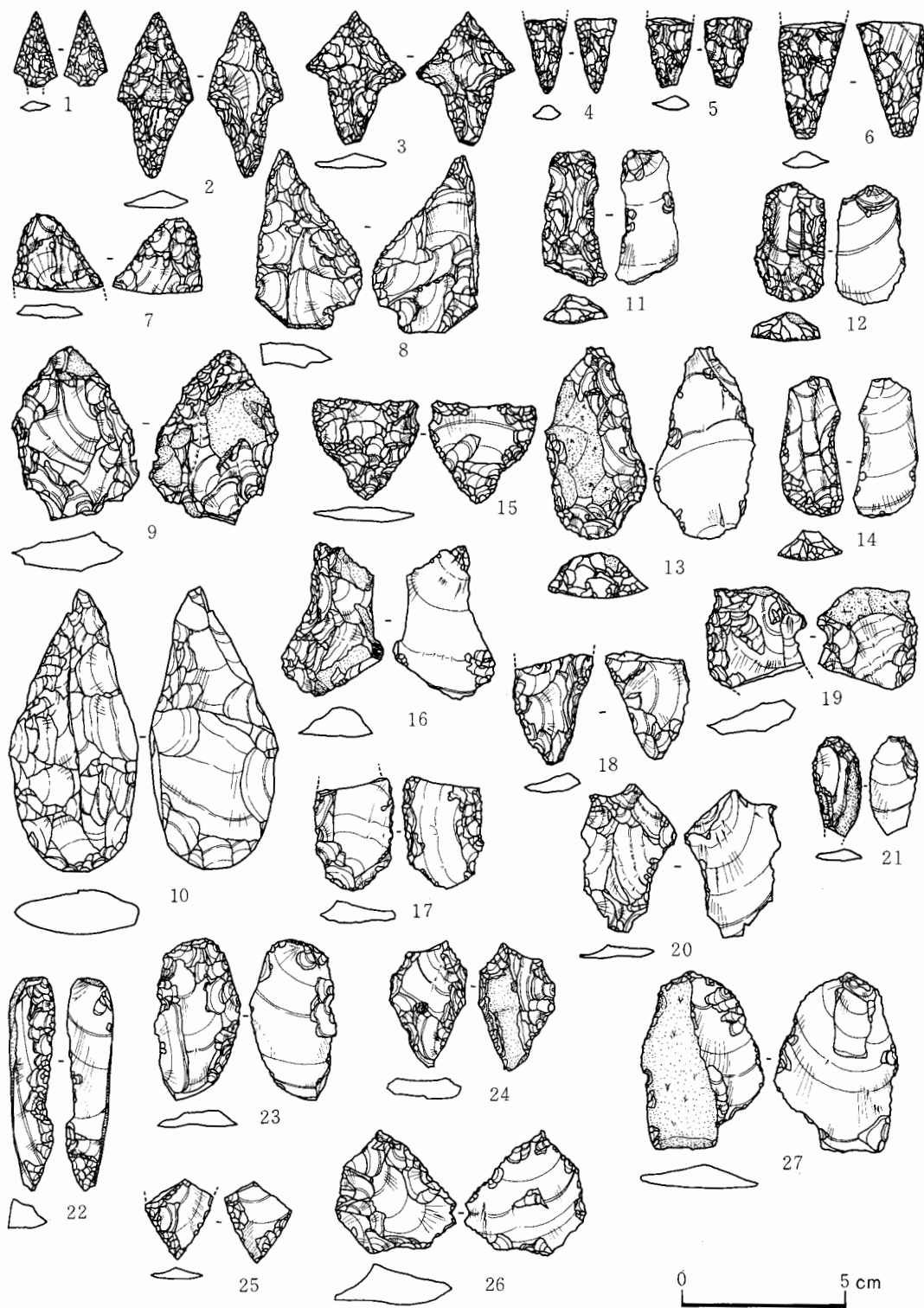
34は、左下りの単節斜行縄文を地文として底面より胴部へと至る部位が若干くびれをみせる。底面は、欠損している。

土器の胎土中には、すべて砂粒及び小石を含み、繊維を混入しているものもみられる(1, 3~5, 15, 18, 21, 23, 26~29, 32, 34)。

焼成は、比較的良好であり、色調は、黄褐色(1, 2, 19, 20, 22, 23, 25, 29, 34)



第7图 第2号竖穴住居址出土土器拓影



第8图 第1号竖穴住居址出土石器实测图(1)

茶褐色（3～5，8，9，16，24，31，35）

褐色（12～15，17，21，26，33）

黒褐色（6，7，10，11，18，27，28，30，32）等を呈する。

器厚は、1.0～1.2cm内外である。

竪穴住居址内出土石器

第1号竪穴住居址及び第2号竪穴住居址からは、きわめて多数の石器が得られている。その器種も豊富であり、単一時期のセットとしてとらえることが可能である。

第1号竪穴住居址出土石器（第8図，第9図）（図版25）

総数で70余点の石器が得られている。

石鏃（1），1点より得られてはいない。有茎であり，入念に両面加工がなされている。左右は，対称形である（1）。

石銛先（2～6）完形品は，2点得られている。両者ともに入念に両面加工がなされ，太い柄部を有している。2は，かえしの幅より尖頭部の長さの方が長く，3は，尖頭部の長さより，かえしの部分の幅の方が長い。

4～6は，石銛先の柄部の破片である。

全例，素材は黒耀石を使用している。

ナイフ状石器（7～10），両面加工が入念になされる比較的薄手の尖頭器状を呈する石器である。

7は，下部を欠損しており，8は，剝片を素材に加工したものである。9は，木の葉状の形状を呈し，表面・背面ともに素材の原石面を若干残している。10は，硅岩を素材に両面加工を施こした大形の両面体石器である。

搔器（11～14），縦長剝片を素材に下方に背の高い加工を施こしたものである。

いわゆるエンド・スクレパーと称される石器である。11は，左右両側縁にも背の高い面を有する様加工がなされており，12も同様である。一部に素材の原石面を残している。

13は，かなり厚手の縦長剝片を素材に左右両側縁及びバルブ方向より，背の高い加工がなされている。表面には素材の原石面が大きく残されている。

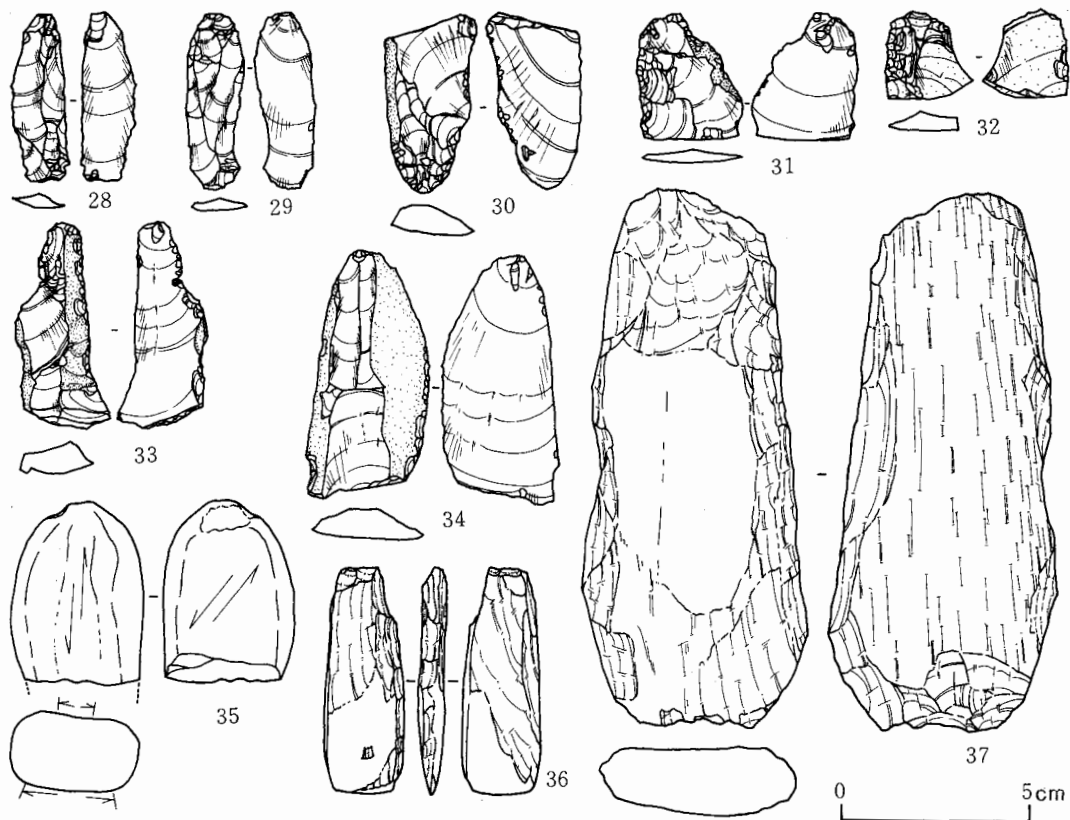
14は，下方にのみ背の高い面をもつ様加工がなされている。

全例，黒耀石を素材としている。

削器（15～34），いずれも剝片を素材として簡単な2次加工を加えたもので，加工の施こされる部分，素材の剝片の利用方法等よりいくつかのグループに細分される。

a類，左右両側縁のエッジに2次加工がなされ，背面にも若干の加工がなされるものがある。また一面のみ入念に加工がなされるものも含めた（16，17，19，20，30）。

b類，左右どちらかの側縁のエッジに加工がなされるもので，刃部が直線的なものと湾曲しているものの2種がある（21～23，27～34）。



第9図 第1号竪穴住居址出土石器実測図(2)

c類、左右両側縁のエッジに2次加工がなされ、背面にも若干の加工を行い、尖頭部を作り出しているものもある(15, 18, 24~26)。

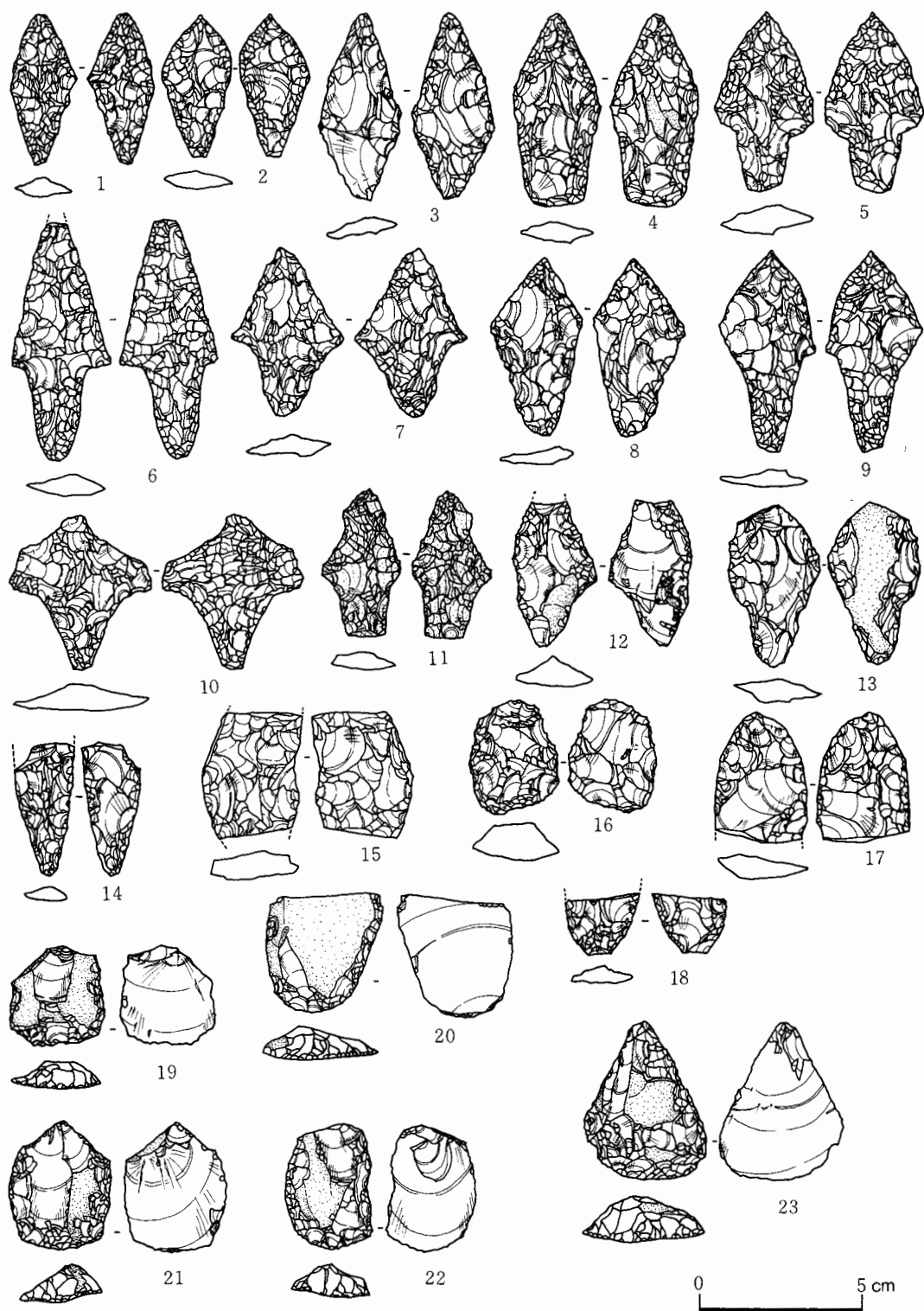
石斧(36, 第13図55)、小形の、のみ形石斧が1点と、大形の未成品が2点得られている。

36は狭長で刃部の幅が狭く薄手である。大きく素材面を残している部分もみられるが、刃部は入念に研磨されている。刃部の断面は、両刃に近い。

37は、比較的大形の石斧の未成品である。床面に接して検出されたもので、左右の両側縁部、頭部、刃部には、大小の敲打痕と剝離痕があり、これによって整形の途中であったことが推察される。

さらにもう一個の石斧の未成品があるが、半分程欠損した状態で床面より得られている。後に遺物整理作業の段階で、第2号竪穴住居址より得られた石斧の未成品と接合することが解った。大きな剝離面、敲打による整形痕がみとめられ、整形の途中に2ツに折れ、廃棄されたと考えられる(第13図55の下)。

砥石(35)、凝灰岩の円礫をそのまま使用しており、2面に擦痕(研磨痕)がみられる(35)。



第10图 第2号竖穴住居址出土石器实测图(1)

第2号竪穴住居址出土石器 (第10, 11, 12, 13, 14図) (図版26, 27)

覆土層中及び床面より、約90点に及ぶ石器が得られており、器種も豊富である。

石銚先 (1~14)、未成品と考えられるものを含めて、14点と非常に大量に出土している。

全例、黒耀石製で入念に両面加工がなされ、明確なかえしと太い柄部を有している。

形状のみをみても、いくつかに細分される。

a類、比較的小形であり、かえしの幅は狭くない。全長4.5cm内外のものである(1, 2)。

b類、中型で、かえしの幅が広い。かえしの幅と尖頭部の長さの比率が1:2の範中に含まれるものである(3~6)。

c類、中型で、かえしの幅が非常に広く、尖頭部の長さが極端に短いもので、その比率が2:1~1:1の範中に含まれるものである(7~10)。

12, 13は、未成品であり、14は、柄部の破片である。

ナイフ状石器 (15~18)、入念に両面加工が施こされた、比較的薄手の両面体石器で、切る、削る等の目的で使用されたと考えられる石器である。

15は、両端を欠損しているが、入念な両面加工が施こされている。背面には、部分的に第1次剝離面が残されている、珪岩製である。

16は、背面が平らに近く剝離され、背の高い面をもつ様加工がなされている。ナイフ状石器というより、ラウンド・スクレパーとしての機能がより強く考えられる。

17は、比較的薄手で、入念に両面加工がなされている。下部を欠損している。

18は、両面加工石器の基部破片である。

掻器 (19~23)、比較的厚手の縦剥ぎの剥片を素材として、下方に背の高い面をもつ様加工の施こされるものである。いわゆるエンド・スクレパーと称される石器群である。

19は、バルブ面を背面に残す厚手の剥片を素材に下方に背の高い面をもつ様加工がなされている。バルブ面には、細かな擦痕が観察される。

20は、バルブ方向を刃部として、背の高い面をもつ様加工がなされる。表面には素材の原石面を大きく残している。

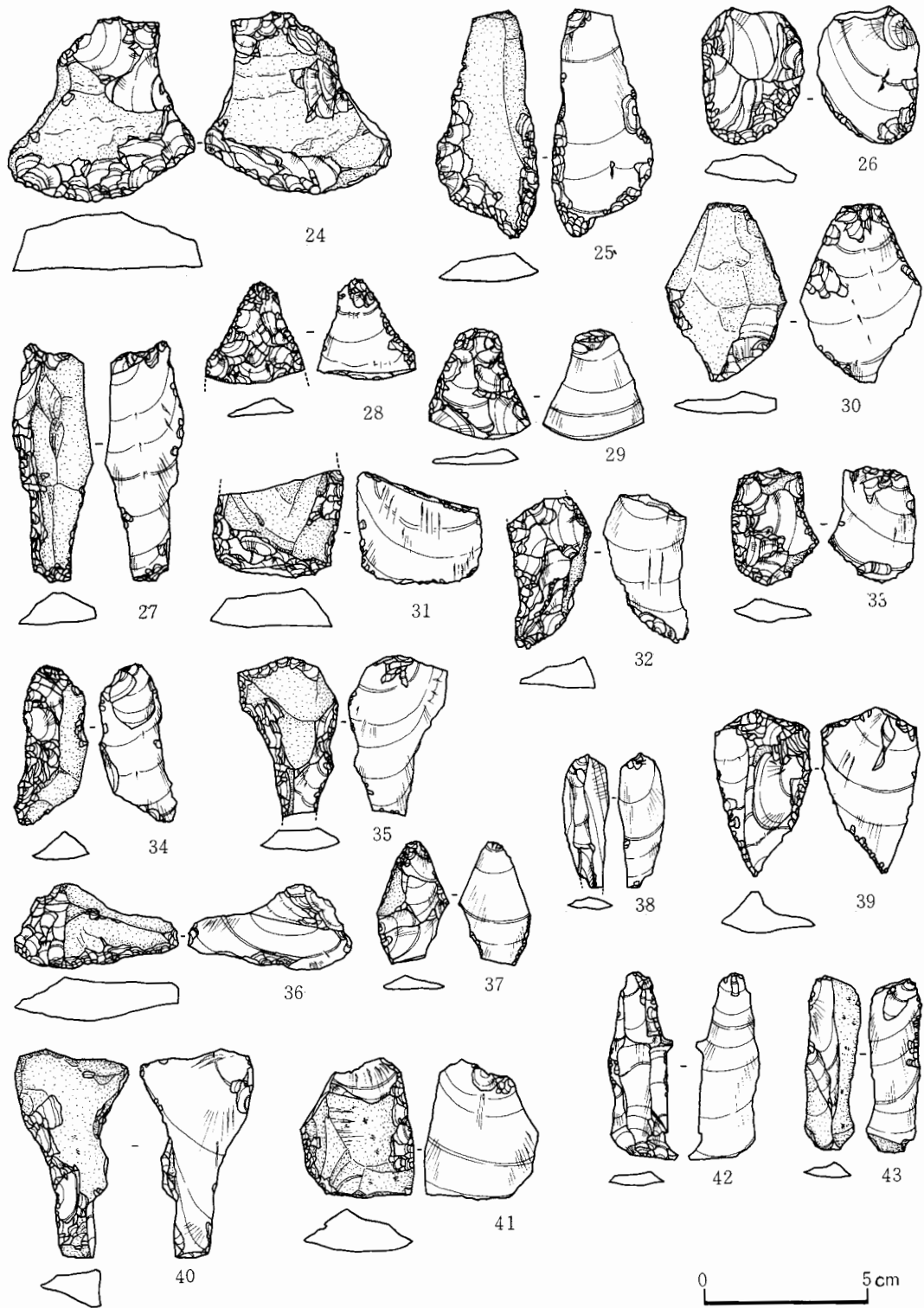
21は、厚手の縦剥ぎの剥片を素材として、バルブ下方及び、左右両側縁のエッジより加工がなされ、特にバルブ下方が背の高い面をなす様加工が施こされる。表面には、第1次剝離面、素材の原石面を一部残している。背面には、不規則な擦痕が若干認められる。

22は、バルブ下方、及び左右両側縁のエッジに加工がなされ、バルブ下方のみ背の高い加工が施こされている。バルブ面は、擦られ磨滅している。

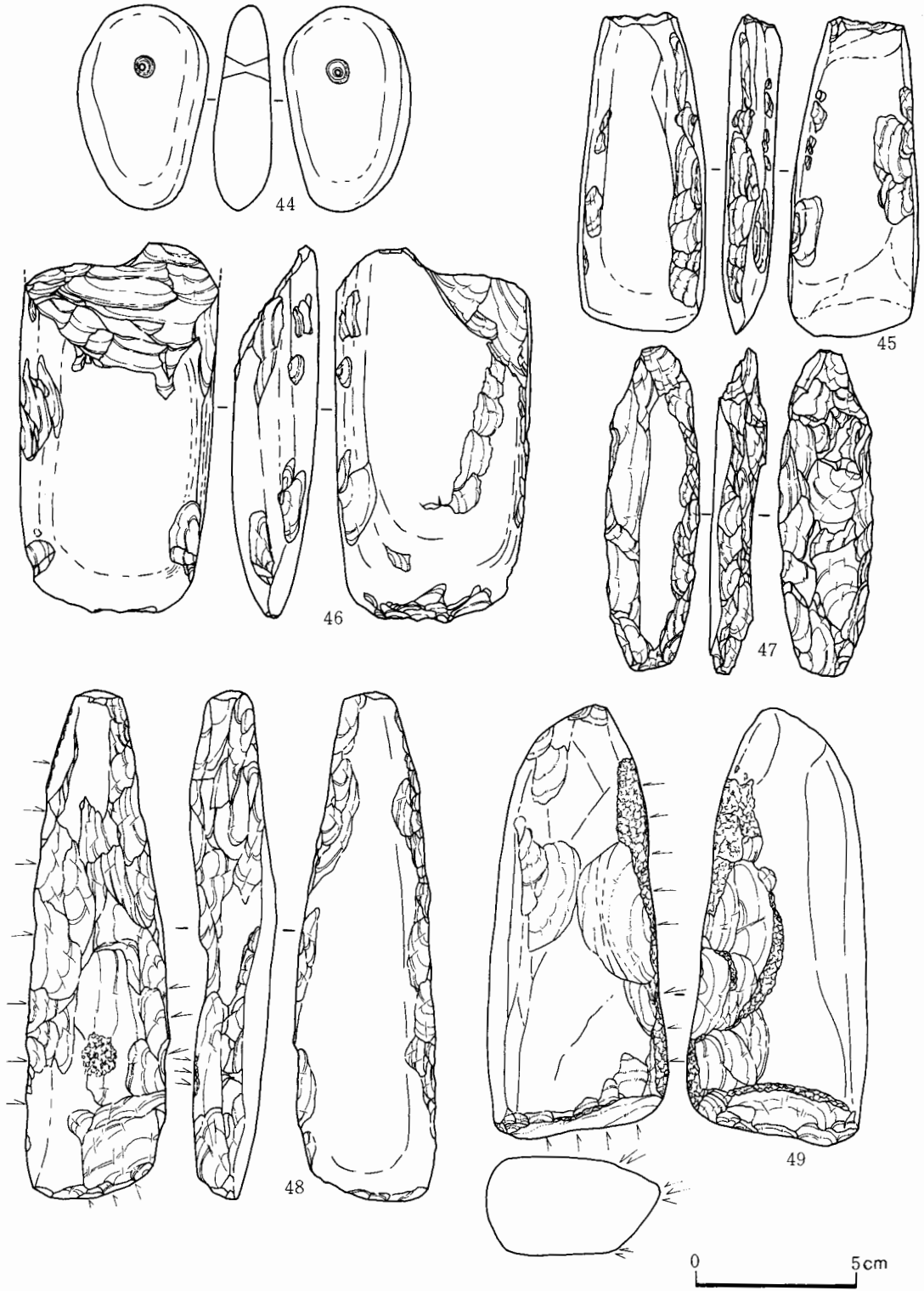
23は、湾曲した厚手の縦剥ぎの剥片を素材に、バルブ下方及び右側縁のエッジに加工が施こされ、特にバルブ下方に背の高い加工が集中してなされる。バルブ面には、不規則な擦痕が認められる。

削器 (24~43)、全例、黒耀石を素材に、縦長剥片を取り、これを素材として簡単な2次加工が施こされたものである。刃部の作り出された部分、剥片の利用方法等によりいくつかに細分される。

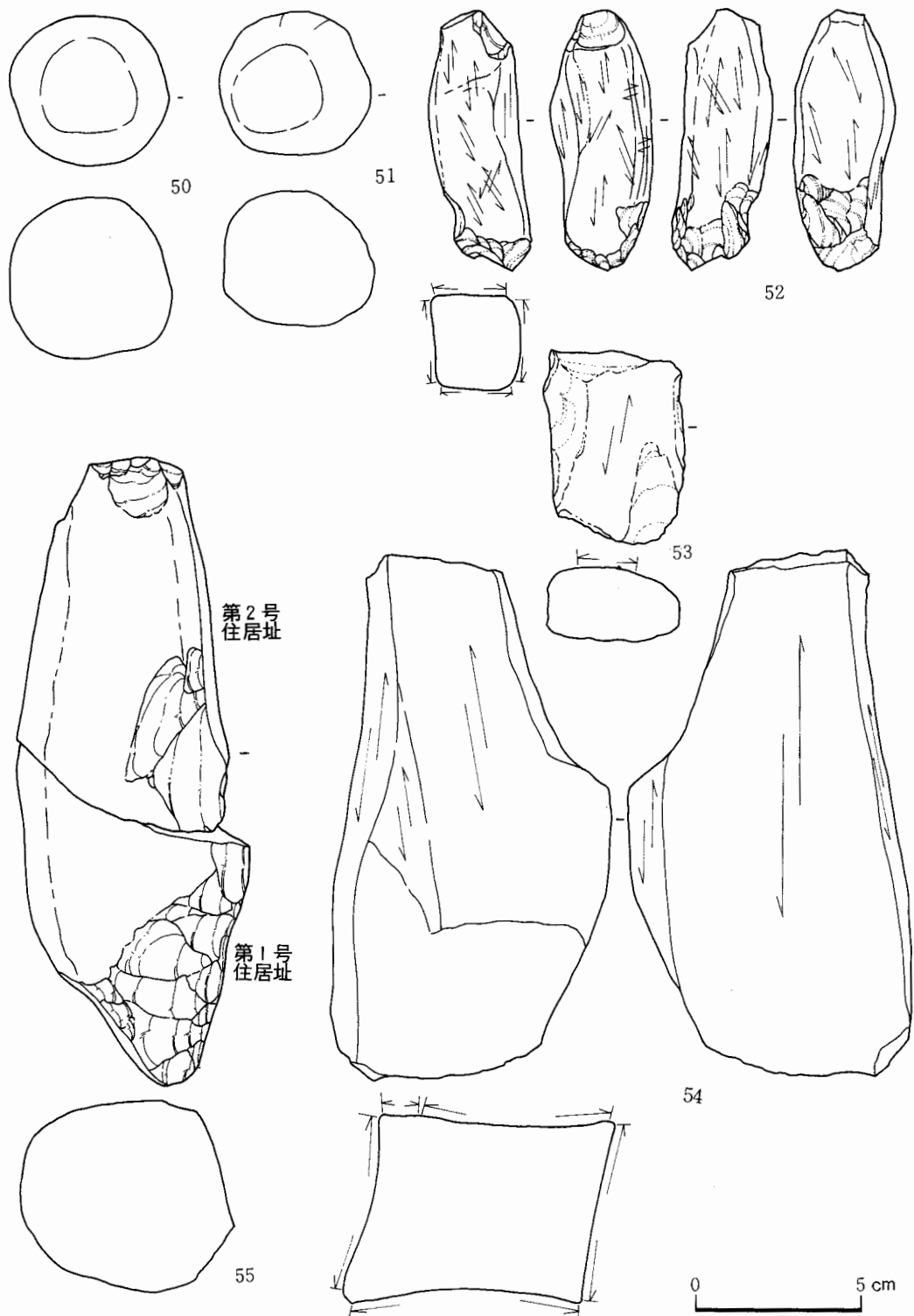
a類、左右両側縁のエッジに2次加工がなされ、背面にも若干の加工のなされるものもある。ま



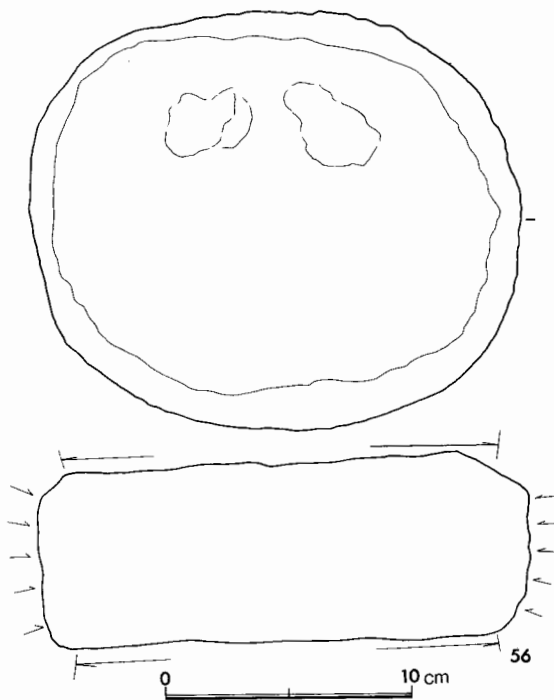
第11图 第2号竖穴住居址出土石器实测图(2)



第12图 第2号竖穴住居址出土石器实测图(3)



第13图 第2号竖穴住居址出土石器实测图(4)



第14図 第2号竪穴住居址出土石器実測図(5)

た表面のみ入念に加工の施こされるものも含めた(24, 26, 29, 31~33, 36, 41)。

b類, 左右どちらか一方の側縁のエッジに加工を施こしたもので, 刃部の形状が直線的なもの, 湾曲するものがある(27, 30, 34, 35, 37~40, 42, 43)。

c類, 左右両側縁より加工がなされ, さらに背面にも若干の加工を施こし, 尖頭部を作り出すもの(25, 28)等もみられる。

錘玉(44), 黒色片岩を使用し, 全面を入念に研磨している。形は, やや扁平な楕円であり, 上半部に両面より円錐形に穿孔され, 貫通している。重量63.4gの大型の錘玉である(44)。

石斧(45~49, 55), 未成品, すでに破損し石器製作の際に使用したと考えられる「たたき石」としての痕跡を有するものを含め, 6点得られている。

45, 46は, 局部的に素材面を残し, 全面を入念に研磨している。両者とも両刃であり, 46は頭部を欠損している。

55の上は, 第1号竪穴住居址の床面より出土したものと接合した石斧の未成品である。

48, 49は, 石斧として使用中に刃部を欠損し, その後, 石器の製作用具, すなわち「たたき石」として再使用されたと考えられる。研磨痕の上に, 敲打による敲打痕がみられる。

砥石(52~54), 砂岩, 凝灰岩と2種の石が用いられている。

52は, 柱状を呈する凝灰岩の4面すべてに研磨痕の残されるものである。

53, 54は, 砂岩を使用, 54は, 4面に研磨痕があり, 53は, 一面のみ研磨痕がみられる。

すべて研磨した面は, 研磨する方向と直交する断面が, 両側縁より内が若干くぼむという特徴がみられる。

敲打器(50, 51), 緑色片岩の球状を呈する自然礫である。点々と敲打痕の様なつぶれ現象がみられ, 石器製作のための敲打器かとも考えられた。大きさは, 直径4.5cm内外で重量は150g前後である。

石皿(56), 安山岩であり, 全体の形状は, 小判形を呈する。周囲は, 敲打により整形されており, 使用されたとと思われる面は, 表・裏2面であり, 小さな敲打の痕跡であるつぶれ現象, あるいは虫食い現象が無数にみられる。長径20cm, 短径17cm, 厚さ7.5cmあり, 重量は3.5kgと大型である。

竪穴住居址内出土石錐状石器

2軒の竪穴住居址から総計50個に及ぶメノー製及び頁岩製の小形の特異な形態を有する石錐が出土している。石質は、メノー・頁岩・硅岩等に限って使用され、黒耀石は全く使用されていない。

形状も、粗製の石核より剥離された剥片の形をそのまま使用する傾向がみられ、メノー等の石の性質（打撃を加えると節理面により柱状の剥片が生産される）を最大限に利用したことが解される。

素材の使用方法等より以下の2種に分類される。

a類、比較的薄手の縦長剥片を素材とするもの。

b類、石の性質を最大限に利用した、柱状の剥片を素材とするもの。

第1号竪穴住居址出土石錐状石器（第15図）(図版28)

本竪穴住居址からは、他器種の石器類に比較して、25点と非常に多数の「石錐」が得られている。

a類（1, 5, 6, 8, 10, 13, 14, 16, 18, 19）

1, 左右両側よりの第一次剥離痕を残こした、縦剥ぎの剥片を素材に、バルブ下方に細かな剥離加工を施こし刃部を作り出したもので、刃部の断面は円形に近くエッジは磨滅している。

5, 縦位に数面の剥離面を残す縦長剥片を素材に、バルブ下方に細かな剥離加工がなされ尖った刃部を作り出している。刃部の断面は台形に近く、エッジは磨滅している。

6, 縦長の菱形に近い剥片の一端を、そのまま刃部としたもので若干の加工が施こされている。刃部の断面は円形となり、エッジは磨滅している。

8, 表面に3面の剥離面を残す縦長剥片を素材とし、バルブ部分を刃部として作り出している。刃部の断面は、円形でありエッジは磨滅している。

10, 表面に3面の剥離面と若干の原石面を残した、縦剥ぎの剥片を素材に、バルブ部分の厚味を刃部に利用、細かな剥離加工を施こし刃部としている。刃部の断面は、円形に近くエッジは磨滅している。

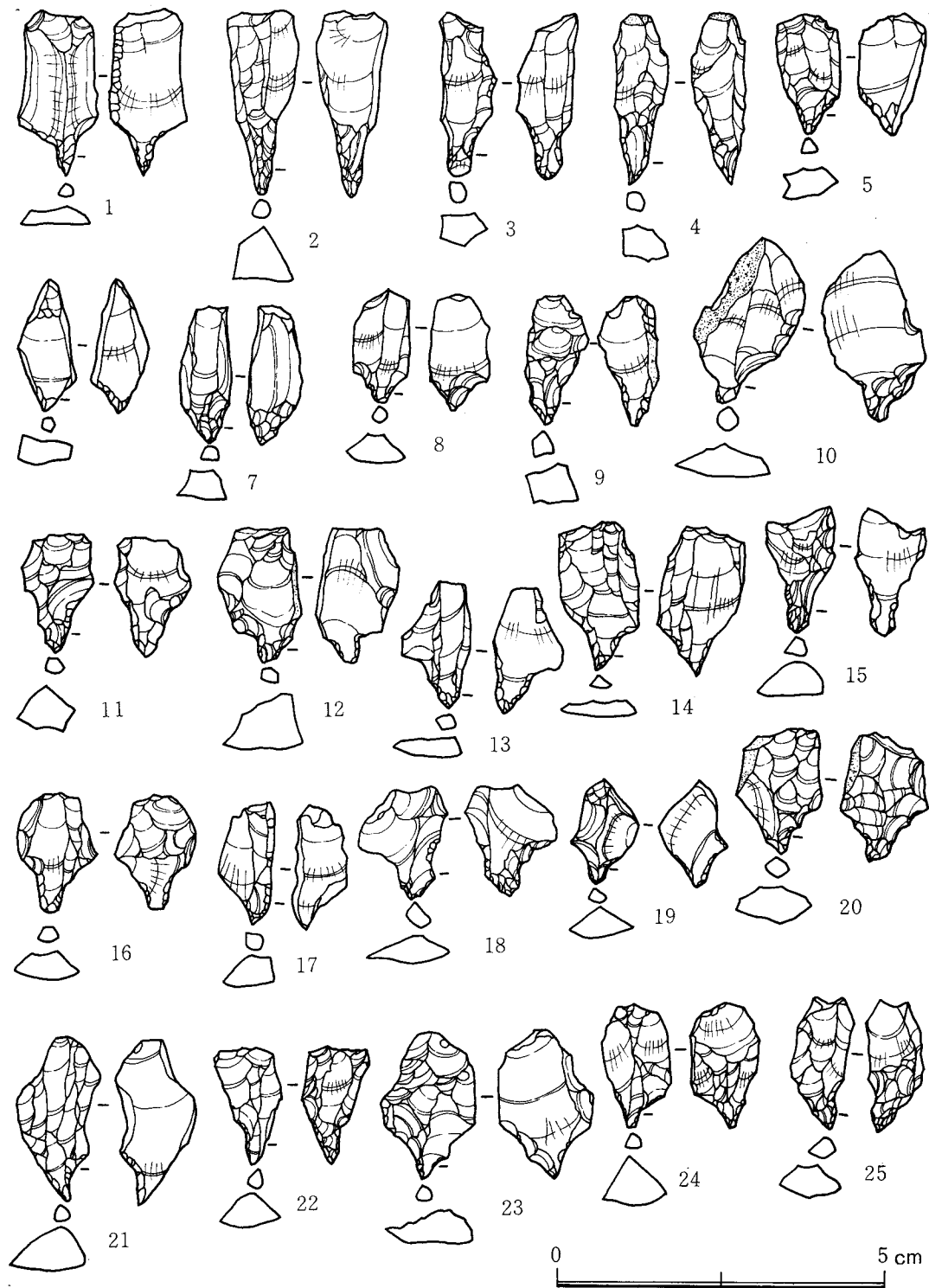
13, 縦長剥片を素材に、先端部を作り出す様側縁部を折り取って整形し、細かな剥離加工を施こし刃部としたものである。刃部の断面は、方形に近く、エッジは磨滅し、やや丸味を帯びる。

14, 素面に4面の縦位の剥離面を残した縦長剥片を素材に側縁の一部を折り取り先端部をもつように整形し、さらに細かな剥離加工を集中し刃部を作り出している。刃部の断面は、三角形を呈すがエッジは磨滅し丸味を帯びる。

16, 表面には縦位の剥離面が数面残され、背面は、左右両側縁よりの剥離により先端部をもつ様整形される。さらにこの部分に細かな剥離加工を行い刃部としている。刃部の断面は、台形に近くエッジは磨滅し丸味を帯びる。先端部は、一部を欠損している。

18, 幅広の剥片を素材とし、尖った部分をそのまま先端部とし、若干の剥離加工を行い刃部としている。

19, 幅広の剥片を素材に、剥片の形をそのまま利用し、一端の尖った部分を先端部として、若干の剥離加工を施こし刃部としている。刃部の断面は、三角形を呈し、エッジは磨滅により丸味を



第15图 第1号竖穴住居址出土石锥状石器实测图

帯びる。

b類（2～4，7，9，11，12，15，17，20～25）

2，縦剥ぎの柱状の剥片を使用，バルブ下方に横から細かな剥離加工を集中させ刃部を作り出している。刃部の断面は，円形に近くかなりの磨滅痕がみられる。

3，柱状の縦剥ぎの剥片を素材に一端に横位の細かな剥離加工が施こされ，刃部を作り出している。刃部の断面は楕円形に近い，磨滅痕がエッジにみられる。

4，部厚い縦長の柱状剥片を素材に，一端に入念な細部剥離加工が施こされ先端部を作り出し，刃部としている。刃部の断面は，方形に近く，エッジは磨滅し丸味を帯びる。

7，横剥ぎの幅広剥片を折って整形し，一端に若干の加工を施こし先端部としたものである。刃部の断面は台形に近く，エッジは磨滅し丸味を帯びている。

9，柱状を呈する様に整形された縦長剥片の一端に細かな剥離加工が集中してなされ，刃部としている。刃部の断面は方形に近く，エッジは磨滅し，丸味を帯びている。

11，縦剥ぎの剥片のバルブ下方の側縁部を2次加工により加工し，尖頭端を作り出し刃部としている。刃部の断面は円形に近く，エッジは磨滅している。

12，縦剥ぎのかなり厚味のある剥片を素材に，バルブ部分に加工を施こし先端部を作り出している。さらに細かな剥離加工を施こし刃部としている。刃部の断面は方形に近く，エッジは磨滅し，丸味を帯びている。

15，断面が「かまぼこ形」の厚手の縦剥ぎ剥片を素材とし，表面は，左右両側縁よりの剥離が全面をおおい，一端に先端部を作り出している。さらにこの部分に細かな剥離加工を集中させ刃部としている。刃部の断面は「かまぼこ形」となり，エッジは磨滅して丸味を帯びている。

17，厚手の縦長剥片の一端を折り取り，先端部を作り，さらにこの部分に細かな剥離加工が施こされ刃部としている。刃部の断面は方形に近く，エッジは磨滅し丸味を帯びている。

20，厚手の剥片の全面を第2次加工により剥離整形し，先端部を作り出す。この部分にさらに細かな剥離加工を施こし刃部としている。刃部の断面は菱形に近く，エッジは磨滅により丸味を帯びている。

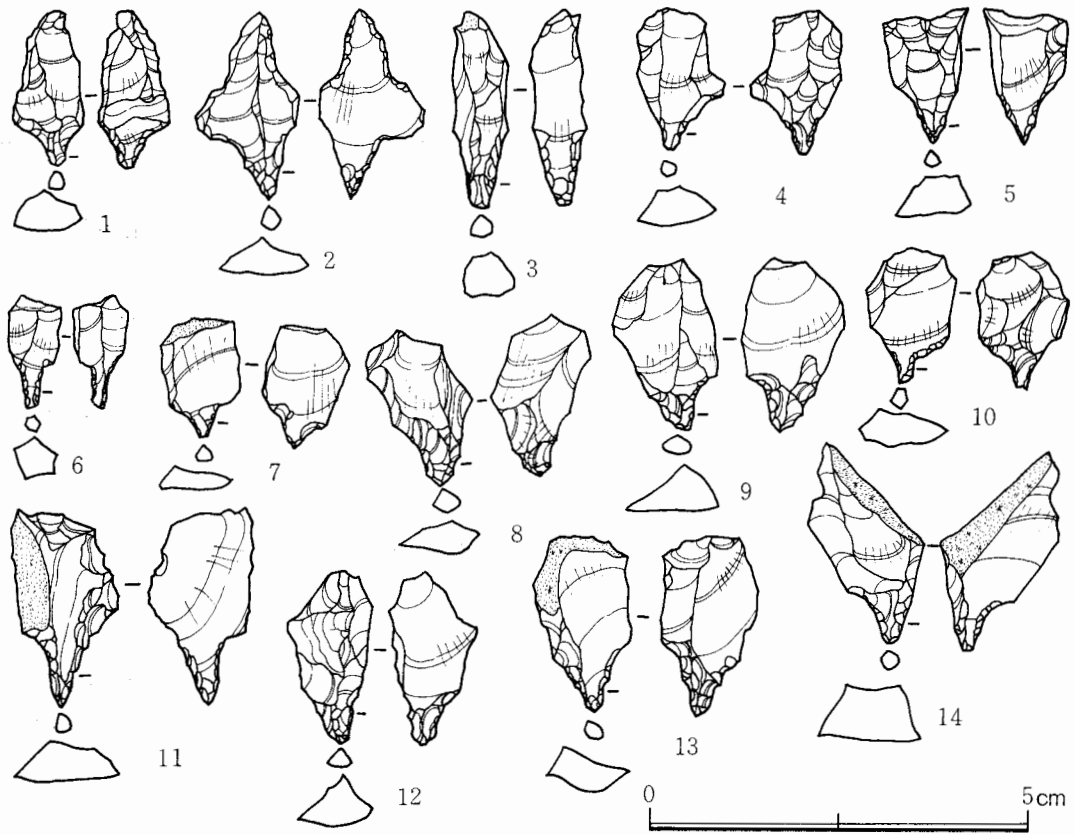
21，表面に十面近い剥離を残こした厚手の縦長剥片を使用，この剥片の形状をそのまま利用し，尖った部分に細かな剥離加工を集中して行い刃部としている。刃部の断面は円形に近く，エッジは磨滅している。

22，比較的厚手の縦長剥片を使用，先端部をもつ様加工が施こされ，さらに細かな剥離加工をし刃部としている。刃部の断面は，三角形に近くエッジは磨滅し丸味を帯びる。

23，比較的厚手の剥片に，剥離を加え先端部を作り出し，刃部としている。刃部の断面は，三角形形状を呈する。

24，縦長剥片に2次加工を施こし，バルブ下方に先端部を作り出している。さらにこの部分に細かな剥離加工がなされ，刃部としている。刃部の断面は，三角形状でありエッジは磨滅している。

25，厚手の縦長剥片に2次加工が施こされ，先端部をバルブ下方に作り出している。この部分にさらに細かな剥離を集中させ，刃部としている。刃部の断面は，菱形に近くエッジは磨滅し丸味を



第16図 第2号竪穴住居址出土石錐状石器実測図

帯びている。

第2号竪穴住居址出土石錐状石器 (第16図) (図版28)

本竪穴住居址からは、14点におよぶ石錐状石器が出土している。

a類 (2, 7, 10, 11)

2, 縦長剥片を素材に、2次加工を施こし両端に剥離を集中させ尖端部を作り出す。バルブ下方の尖端部に細かな剥離加工を施こし刃部としている。刃部の断面は楕円形に近く、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

7, 幅広の剥片を折り取って整形し、尖端部を作り出し、さらに細かな剥離加工を集中させ刃部としている。刃部の断面は三角形を呈し、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

10, 縦長剥片を素材に2次加工を施こし、尖端部を作り出し、さらに細かな剥離加工を施こし刃部としている。刃部の断面は方形に近く、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

11, 横剥ぎの幅広剥片を素材に、剥片の形状をそのまま利用し、尖った部分に細かな剥離加工を集中させ刃部としている。刃部の断面は、方形に近くエッジは磨滅し丸味を帯びる。

b類 (1, 3~6, 8, 9, 12~14)

1, 比較的厚手の縦長剥片を素材に, 刃部下方からの剥離によって先端部いわゆる刃部を作り出しており, 他の物と若干製作技法がちがう石器である。刃部の断面は台形に近く, エッジは磨滅している。剥離方向がまちまちではあるが, 剥離された面の剥離痕はほとんど同じ大きさを呈している。

3, 柱状の縦長剥片を素材に, バルブ下方に横から数度にわたる剥離加工を施し, 先端部を作り出している。さらにこの部分に細かい剥離加工がなされ刃部となる。刃部の断面は多角形となり, エッジは磨滅により丸味を帯びている。

4, 厚手の縦長剥片を素材とし, 側縁を折り取って整形し先端部を作り出し, さらに細かな剥離加工を施し刃部としている。刃部の断面は円形に近く, エッジはひどく磨滅している。

5, 厚手の縦長剥片に2次加工を施し先端部を作り出し, さらに細かな剥離加工を行い刃部としている。刃部の断面は三角形に近く, エッジは磨滅し丸味を帯びている。

6, 柱状の縦剥ぎ剥片の一端に2次加工を施し刃部としたもので, 刃部の断面は多角形を呈し, エッジは磨滅し丸味を帯びる。

8, 厚手の剥片の形状をそのまま利用し, 尖った部分に細かい剥離を集中して行い刃部としたもので, 刃部の断面は菱形に近く, エッジは磨滅により丸味を帯びる。

9, 厚手の剥片のバルブ下方に2次加工を集中して行い, 刃部としたもので, 刃部の断面は楕円形を呈し, エッジは磨滅がいちじるしい。

12, 断面が三角状を呈する縦剥ぎの剥片を素材に剥片の形状をそのまま利用し, 尖った部分に細かな剥離加工を集中して行い刃部としている。刃部の断面は三角形を呈し, エッジは磨滅し丸味を帯びている。

13, 比較的厚手の縦剥ぎ剥片を素材に2次加工を施しバルブ方向に先端部をもつ様整形がなされる。さらに細かな剥離を集中して行い刃部としている。刃部の断面は円形に近く, エッジは磨滅している。

14, 厚手の剥片の形状をそのまま利用し, 尖った部分に細かな剥離を集中して行い, 刃部としたものである。刃部の断面は円形に近く, エッジはかなり磨滅している。

第1号 竪穴住居址出土石錐状石器関連石核 (第17図)(図版29)

全例メノ-製であり, 偏平な自然石を分割し, 石核としている。

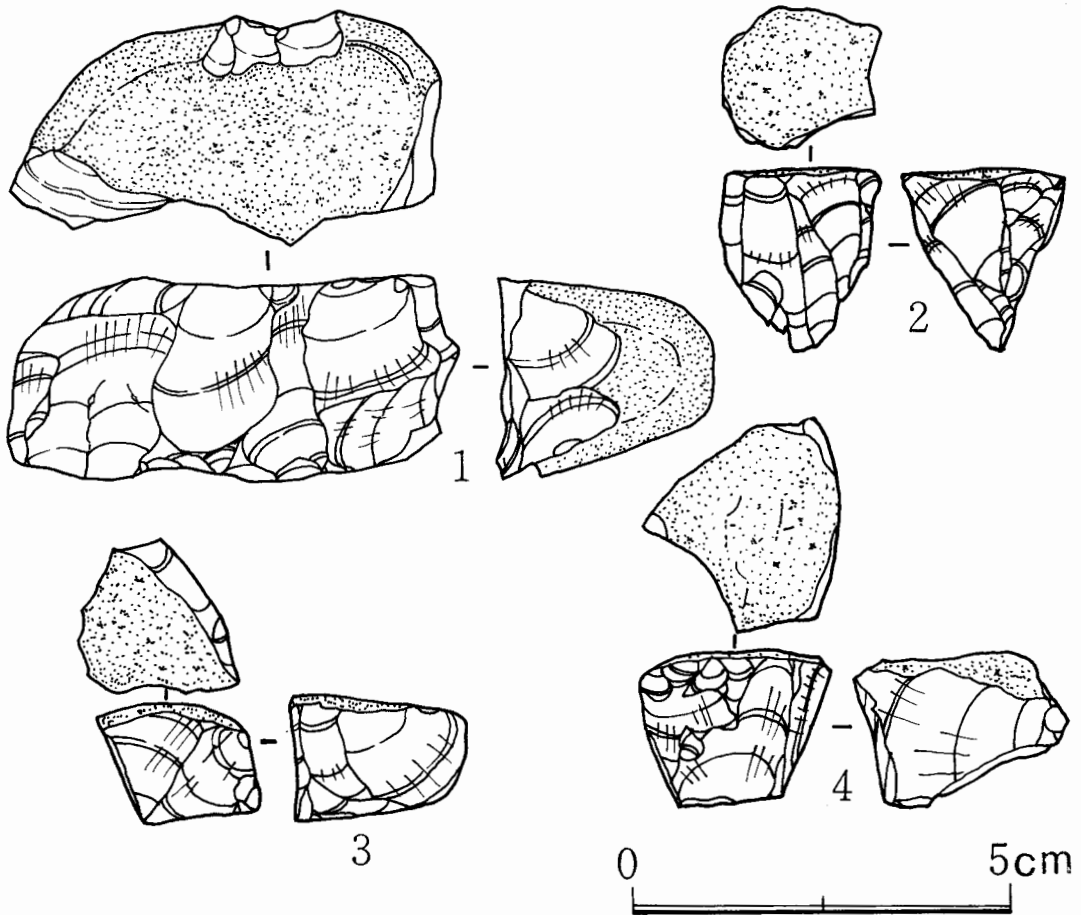
先の石錐状石器の項で若干述べて来たが, 同一の形を呈する剥片を生産するため, 石の材質を非常にうまく利用していることが感じられる。特にメノ-の場合打撃を加えると貝殻状裂痕とともに, 石の節理面により柱状の剥片が生産されるといった特徴である。

打面の調整などは, 一切なされず原石面をそのまま打面としたものが大部分である。

打面と剥離面の角度は, 90°に近いものと, 60°のもの2種のものがみられる。

1, 比較的大型の石核で, 上下の2方向より交互に剥離した痕跡が4面程みられる。最終剥離面の幅は, 長さ2.5cm幅, 1.5cm内外である。打面と剥離面の角度は直角に近い。

2, 原石面を打面として円錐形を呈する石核である。やはり逆方向よりの剥離面がいくつかみら



第17図 第1号竪穴住居址出土石錐状石器関連石核実測図

れる。比較的小型の縦長剥片を生産したと思われる。

打面と剥離面の角度は、 60° 内外である。

3、いくつかの方向から剥片が取られている石核で比較的小型の縦長剥片が生産されたと思われる丸味を帯びている。

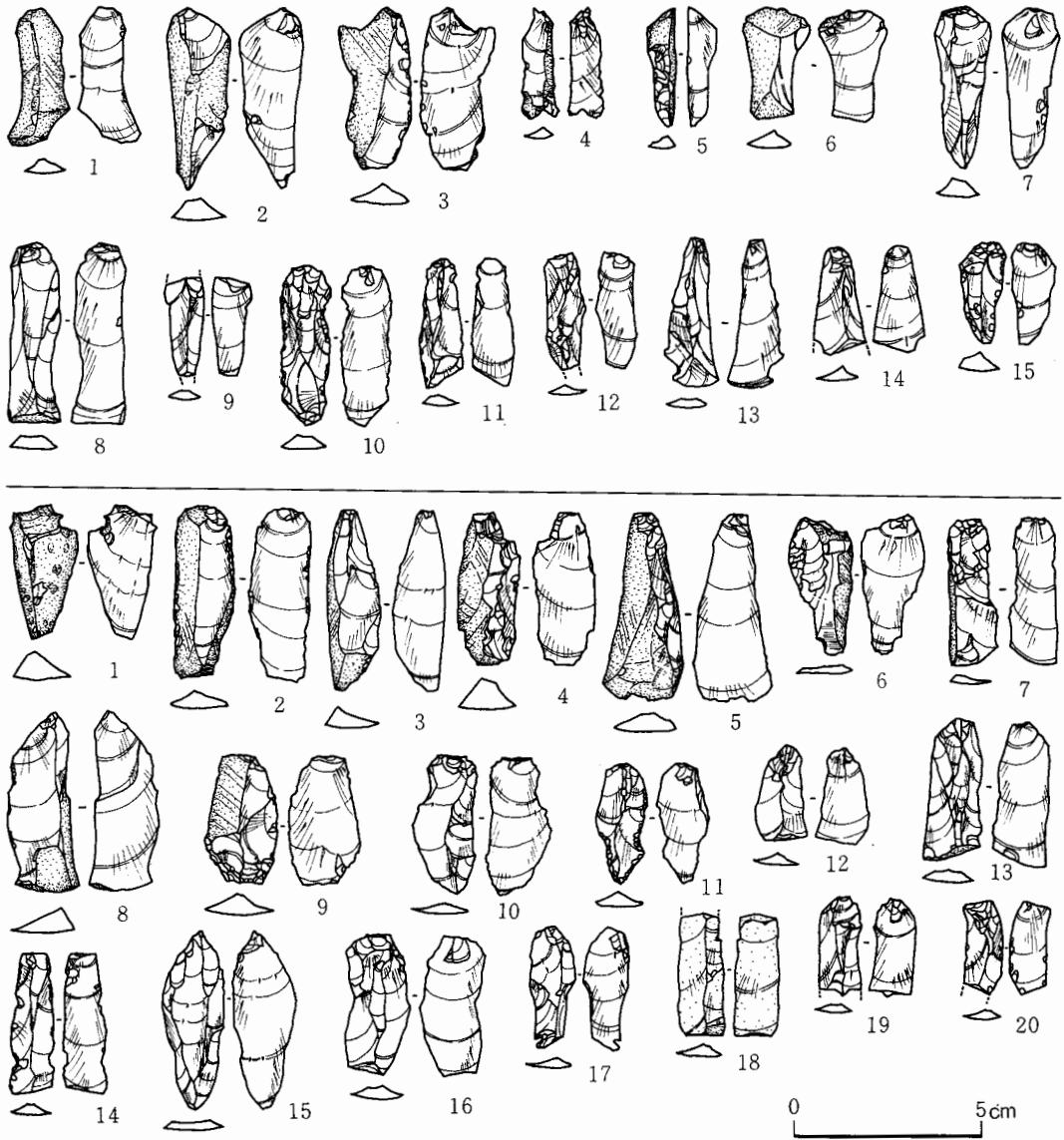
打面と剥離面の角度は、ほぼ直角に近い。

4、打面と剥離面の角度を一定に保つため調整がなされている石核である。下方向からの剥離が一面みとめられ、また横方向からの剥離がなされた痕跡を有するものである。

剥離面と打面の角度は、直角に近い。

竪穴住居址出土石刃様剥片について

縄文時代中期の円形刺突文を有する土器群すなわち「トコロ6類土器」には、石刃様の縦長剥片が多量に出土する事が知られている。石核等の存在より、先土器時代一般にみられる石刃技法に類



第18図 第1号(上段)・第2号(下段)竪穴住居址出土黒耀石剥片実測図

する技法が「トコロ6類土器」の時期に用いられた事は、ほぼ明白な事実である。

第1号、第2号竪穴住居址からは非常に多くの剥片が得られ、特に縦長剥片の数量の示める数も多い。

剥片に残された、剥離面の分類により、これらの剥片の剥離前の位置の再現が可能である。

第1号竪穴住居址出土縦長剥片 (第18図)(図版30A)

a類, 自然面が一面に残されている剥片で, 原石より最初に剥離されたと考えられるものである (1, 2)。

b類, 自然面が主剥離面と同一方向の, あるいは逆方向の剥離面によって切られている剥片で, a類の剥片が剥離された後にその隣から剥離されたと考えられるものである (3, 4)。

c類, 自然面が主剥離面と直交する剥離面によって切られる剥片 (5, 6)。

d類, 主剥離面と同一方向, あるいは逆方向の剥離面が一面に残される剥片 (7~9, 11~15)。

e類, 主剥離面と直交する剥離面が主剥離面と同一方向, あるいは逆方向の剥離面によって切られる剥片 (10)。

第2号竪穴住居址出土縦長剥片 (第18図)(図版30B)

a類, 自然面が一面に残されている剥片で, 原石より最初に剥離されたと考えられるものである (1)。

b類, 自然面が主剥離面と同一方向, あるいは逆方向の剥離面によって切られるもので, a類の剥片が取られた後にその隣より剥離されたと考えられるものである (2, 3, 8)。

c類, 自然面が主剥離面と直交する剥離面によって切られた剥片 (4~7, 9)。

d類, 主剥離面と同一方向, あるいは逆方向の剥離面が一面に残される剥片 (10~16, 18~20)。

e類, 主剥離面と直交する剥離面が, 主剥離面と同一方向あるいは, 逆方向の剥離面によって切られる剥片 (17)。

(羽賀憲二)

第2節 竪穴住居址状遺構

本遺跡からは、住居址状を呈するプラン、規模を有する遺構と考えられるものが一基検出されている。

この遺構状の掘り込みは、軟弱でややよごれのあるローム面に行われている為、明確なプラン、壁及び床面が確認されたものではない。

しかし、出土した遺跡は、一程のレベルよりまとまって出土しており、さらに土器、石器群とも1つのセットとして考えられるものであった。

上記の理由より、住居址に類したなんらかの遺構であろうとの結論に達し、住居址状遺構として、竪穴住居址と区別して以下報告する。

第1号竪穴住居址状遺構（第19図）

XII-G, H区に位置し、ローム層上面にてそのプランが確認された。

規模は、直径4m内外ある。プランは隅丸方形に近い。西壁及び南西壁は、きわめて新しい時期に掘られた攪乱穴により、明確とはなっていない。

さらに基盤のロームは、非常に軟弱で若干のよごれもある為、壁面及び床面の検出は明確とはいえない部分も多く存在する。

壁は、2段構造となり、まずゆるやかに傾斜し、ある部分より急角度に落ち込み床面へと接する。

床面は、軟弱ながらも平坦となり、東隅には木炭の集積が認められ、さらに3個の浅い柱穴状小ピットがある。

遺物は、ほとんどが覆土中からであり、調査時に床面と考えたレベルより出土したものである。数は、比較的多い。

覆土の層序の堆積は、以下の通りである。

第I層：粘着に富む暗茶褐色土

第II層：黒色土、II'層：暗褐色土、II''層：暗褐色土

第III層：黒褐色土、III'層：若干明るい黒褐色土

第IV層：暗黄褐色土

第V層：淡黄褐色土

第VI層：黄茶褐色土

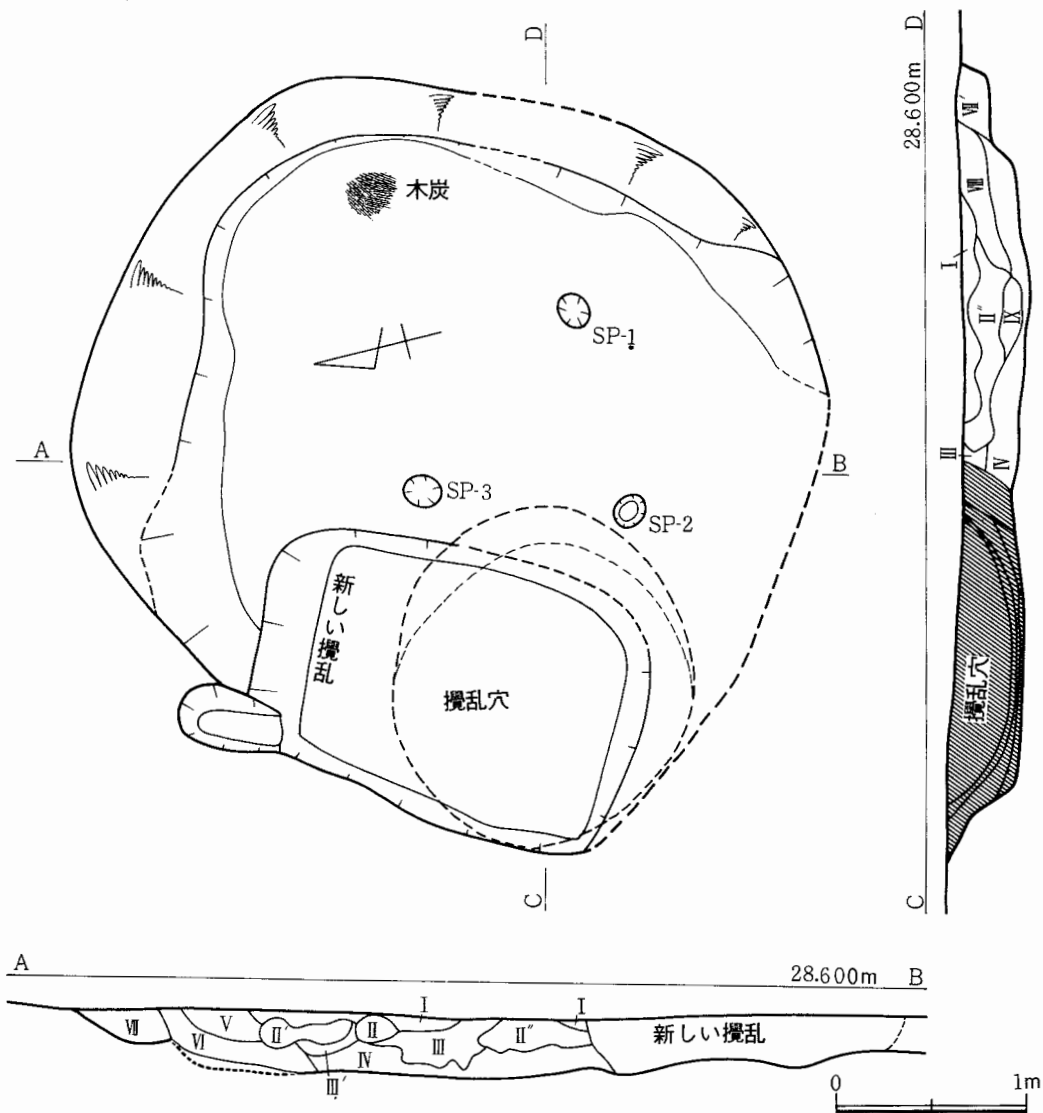
第VII層：黄茶褐色粘質土、VII'層：黄褐色土

第VIII層：黒色土

第IX層：暗灰褐色粘質土

第1号竪穴住居址状遺構出土の土器（第20図）（図版17A）

1, 2片の貝殻文土器を除き、全て比較厚手の縄文時代中期に属するであろう土器群である。



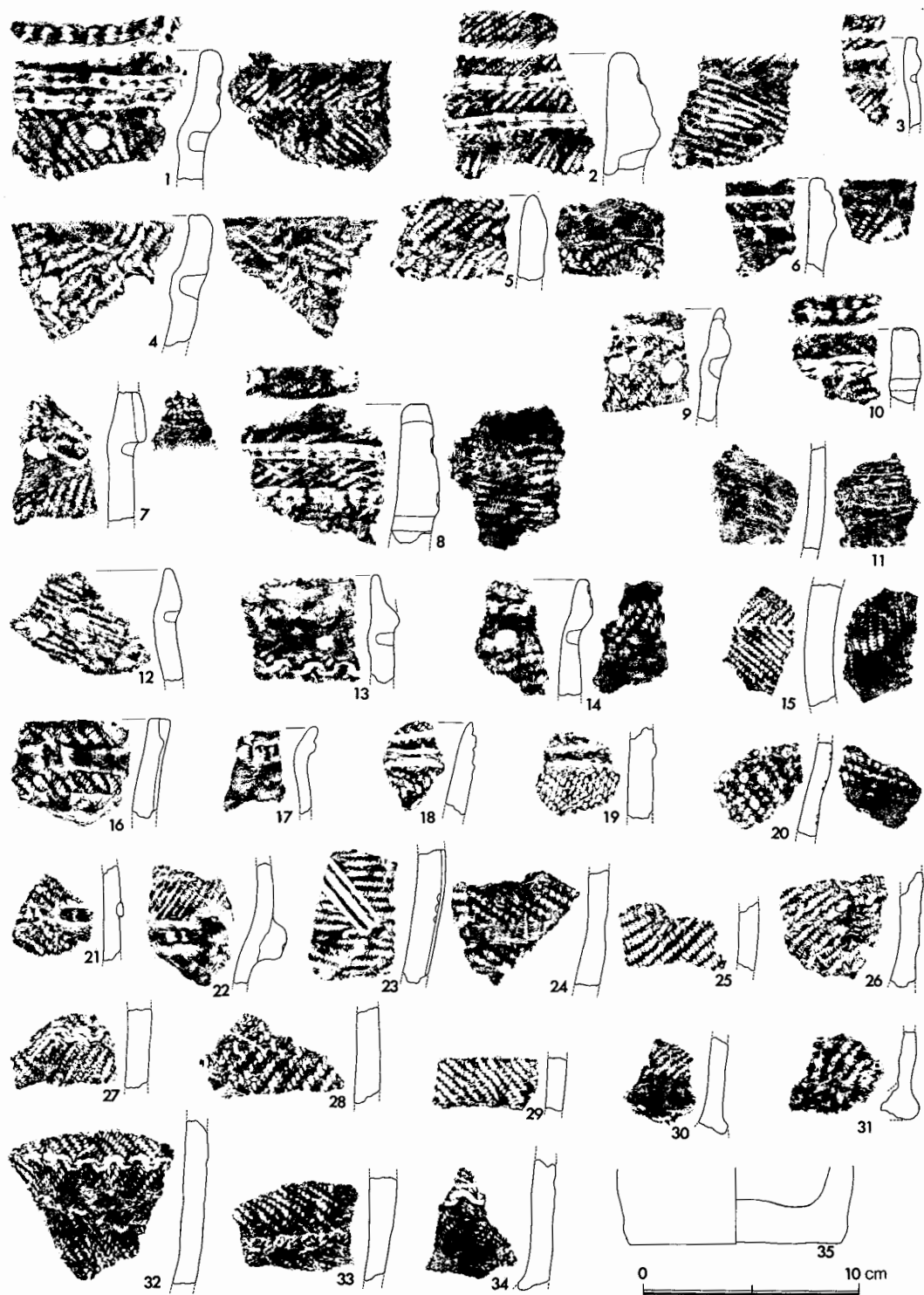
第19図 第1号竪穴住居址状遺構

1～10, 12～14は、口縁部に肥厚帯を有し口縁部に、直径1cm前後の円形刺突文がめぐる。この特徴より、後述する第Ⅱ群土器a類とした、いわゆる「トコロ6類土器」の仲間と考えられるものである。

1は、口縁に小突起を有し、半截竹管状工具の内面による連続刺突文が、口唇上に一段、肥厚帯上に2段めぐる。

2は、へら状工具による、連続刺突文が、肥厚帯上に2段めぐり、口唇上には縄文が施文されたものである。

3は、口唇上に縄文が施文され、肥厚帯上に一段の連続刺突文がめぐっている。



第20图 第1号竖穴住居址状遺構出土土器拓影

6は、肥厚帯上に連続刺突文が2段めぐる。

7は、肥厚帯下より口頸部にかけ粘土帯の貼付がある例である。

8は、口縁が肥厚し小突起が存在する。小突起の直上から直径3mm程の棒状工具による刺突痕がみられる。肥厚帯上に2段の連続刺突文がめぐる。

9, 10, 14は、口唇上、肥厚帯に1～2段の連続刺突文がみられる例である。

4, 12, 13は、連続刺突文を欠いているものである。

さらに、内面にも縄文の施文されるものが多くみられる(1, 2, 4～8, 14)。

16は、口唇より折り返しによる肥厚帯を有し、縦位及び横位にめぐる貼付帯があり、さらにこの上に縄文が施される。後述する第Ⅱ群土器b類としたものである。

17, 21は、横位にめぐる貼付帯上にきざみ目を有したものである。

18は、貼付帯が横位にめぐり、貼付帯の上下に連続刺突文が各一段めぐり、貼付帯上には縄文が施文される。

19は、複節斜行縄文が地文として施文され、貼付帯が横位にめぐり、その上下に連続刺突文が各一段づつめぐる。

22は、貼付帯とその一部に瘤状の粘土塊が貼付され、これらの上には、半截竹管状工具の先端を使用する連続刺突文が施文される。

23は、半截竹管状工具による沈線文と貼付帯を有し、貼付帯上には半截竹管状工具の内面を使用する連続刺突文が施文される。

24は、胴部の破片であるが幅広のへら状工具による沈線状の連続刺突文がみられる。

以下は、胴部及び底部の破片である。

右下りの単節斜行縄文の施文されたもの(29, 32, 34)

左下りの単節斜行縄文が施文されるもの(25～28)でいずれも「あやくり文」がある。

31, 35は、底部である。31は、底面が外側にやや脹り出しをみせ、35は、脹り出しがないものである。

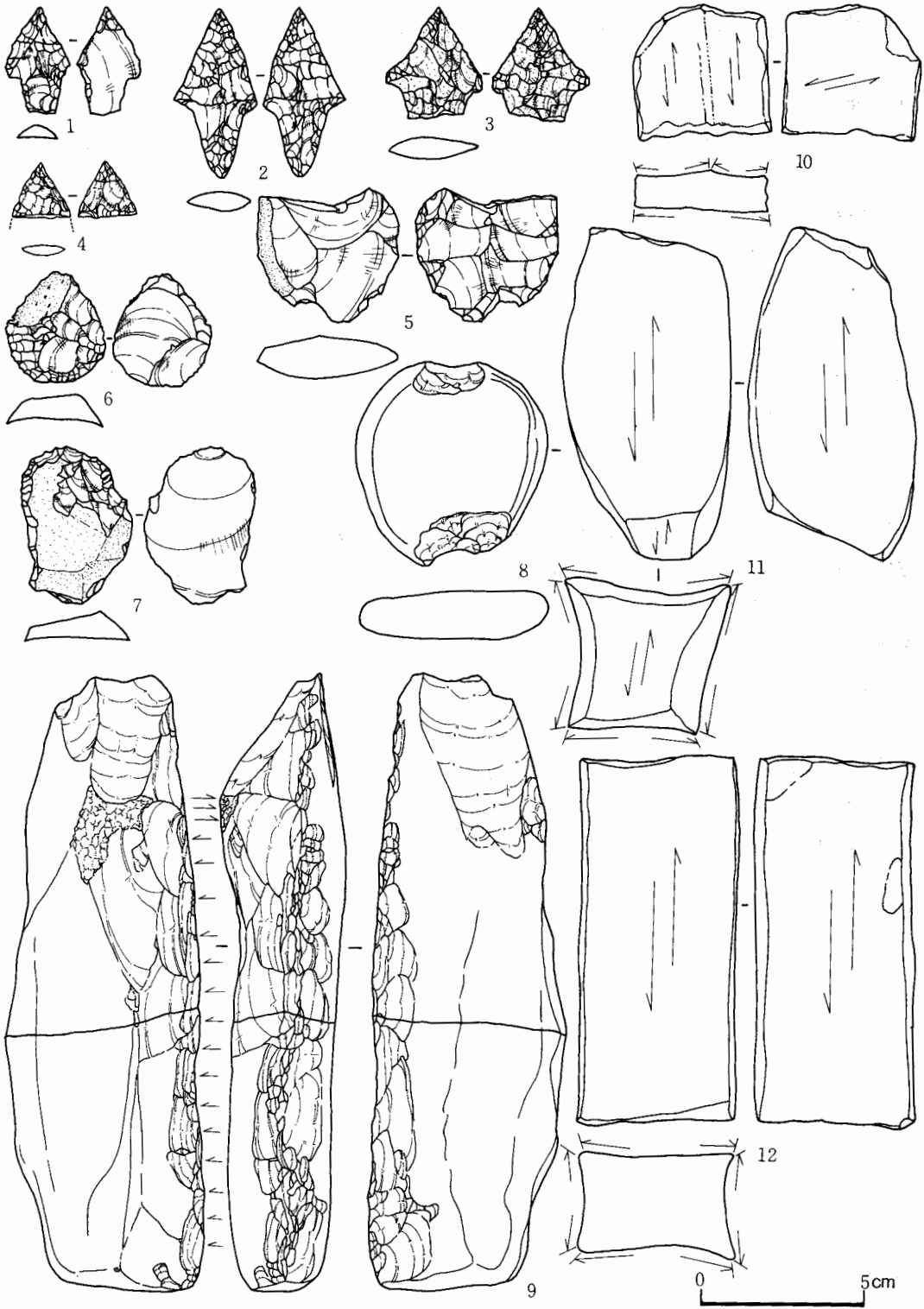
焼成は、全例比較的良好であり、胎土中には、砂粒を多く含み小石を含んでいるものもみられる。また若干の繊維を混入した痕跡を有するものもみられる(1, 4, 7～9, 12, 14)

色調は、黒褐色(1, 2, 4, 7～10, 15, 16, 18)褐色(3, 5, 6, 9, 12, 14, 17)を呈するものの他は全て黄褐色となる。

器厚は、比較的部厚く1.2～1.5cm内外となる。

さらに、貝殻条痕文を有する土器片が1点得られている。器面は横位の貝殻条痕文が施文され、内面にも同様の条痕文が残されている(11)、後述する第Ⅰ群土器の仲間である。

焼成は非常に良好で硬い。胎土中にはごく少量の火山灰粒と石英を含み、色調は茶褐色、器厚は、0.8cm内外である。



第21图 第1号竖穴住居址状遺構出土石器実測図

第1号竪穴住居址状遺構出土の石器 (第21図)(図版31)

総数は、12点であるが、その器種は比較的まとまりをもって出土している。

石銛先 (1～4)

1, 横剥ぎの幅広剥片を素材に、背面には第1次剥離面を大きく残したもので太い柄部が作り出されている。

2, 左右対称形に整えられ、入念な両面加工が施こされている。太い柄部が作り出されている。

3, 柄部の一部を欠損している。左右は非対称形となり、入念な両面加工が施こされている。焼けた痕跡を有し、全面がクモリガラス状を呈する。

4は、尖頭部の破片である。

石核 (5) 扁平な石核で、左右両側縁より3面の縦長剥片が剥離された面を残している。打面と剥離面の角度は30°内外となる。

搔器 (6) 比較的厚味のある剥片のバルブ面に背の高い面をもつ様加工された石器で、エンド・スクレイパーと称されるものである。

削器 (7) 縦長剥片の一侧縁部に簡単な加工を施こしたものである。

石錘 (8) 扁平で楕円形の河原石の長軸両端に打ち欠きがあり、綱、紐等をかける部分を作り出したものである。重量は、90 g ある。

石斧未成品 (9) かなりはなれた発掘区 (Ⅺ-D) より得られたものと接合されたものである。一部縁部に細い敲打のくりかえしによる剥離が集中してみられ、若干の研磨痕が残されるものである。

砥石 (10～12) いずれも砂岩であり。10は、表に2面、背に一面の研磨面がある。11は、片面の、12は、4面の研磨面がみられる、11、12ともに研磨された方向に直交する断面は、中央部にて内側に湾曲し、周囲がやや高くなるといった特徴がみられる。

(羽賀 憲二)

第3節 Tピット

1. 開墾部の規模は、遺構確認面の計測値である。
2. 堀底部の規模は、長軸最大値×短軸の平均的な数値である。
3. 長軸の方向は、磁北を基準としている。
4. 遺物の○印は、出土遺物の有無を表している。
5. セクション図中に斜線で示されるのは黒色土層の堆積である。

第2表 Tピット概要一覧 (第1次調査)

ピット 番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
1	264×68	255×13	146	N-37°-W	○	第 22 図
<p>層位</p> <p>第Ⅰ層：黒色土層a 第Ⅱ層：灰茶褐色土層 (多量の粘土粒を含む) 第Ⅱ層：灰茶褐色土層 (第Ⅱ層より粘土粒を多く含む) 第Ⅲ層：暗黄褐色粘質土層 第Ⅲ層：暗黄褐色粘質土層 (第Ⅲ層よりやわらかい) 第Ⅲ層：暗黄褐色粘質土層 (第Ⅲ層に近い粘土ブロック) 第Ⅲ層：暗黄褐色粘質土層 (やわらかく、粘質に富む) 第Ⅲ層：暗黄褐色粘質土層 (かたくしまっている) 第Ⅲ層：暗黄褐色粘質土層 第Ⅳ層：黄褐色粘質土層 第Ⅴ層：黒色土層b 第Ⅵ層：黄褐色砂質土層</p> <p>第Ⅵ層：黄褐色砂質土層 (第Ⅵ層よりやわらかい) 第Ⅶ層：暗黄褐色砂質土層 第Ⅶ層：暗黄褐色砂質土層 (全体に第Ⅶ層より暗い) 第Ⅷ層：黒色土層c 第Ⅷ層：黒色土層d (若干の粘土粒を含む) 第Ⅸ層：黄褐色粘質土層 第Ⅹ層：黄褐色粘質土層 第Ⅺ層：黄褐色粘質土層 第Ⅻ層：黄褐色粘質土層</p> <p>A層：暗黄褐色粘土層 B層：黄褐色粘土層 C層：黄褐色火山灰層 D層：暗黄褐色火山灰層</p> <p>概要 堀口部及び堀底部の平面形は共に溝状を呈しており、長軸断面は両端の下方部が壁面の崩落によって非対称な袋状に広がって見られ、短軸断面は溝状を呈するが、黄褐色火山灰のC層の部位では、やや広がっており、これは壁面の崩落によって生じたものと考えられる。</p> <p>埋土は、最上層部に黒色土が流れこんで見られ、中、下部では褐色土、火山灰、砂質土がくりかえし崩落堆積した状態を観測することができ、底面近くでは、壁面の崩落によって堆積したと考えられる薄い層をはさんで腐植質の黒色土が2～4層に分かれて水平堆積している。</p>						

ピット 番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
2	(364×82)	400×14	147	N-34°-E		第 22 図

概要 堀口部及び堀底部の平面形は共に溝状を呈しており、長軸断面は下方部が袋状に広がって見られ、短軸断面は溝状を示している。

本号は、東側部を大きく掘り込み、長軸断面の埋土を観察する予定であったが、土堀内埋土が瞬時に崩落したため土壌の観測は出来なかった。しかし、この崩落によって西側の壁面が明瞭に出現した。

ピット 番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
3	352×72	367×22	120	N-17°-E	○	第 23 図

- 層位**
- | | |
|---------------------|-------------------|
| 第Ⅰ層：黒色土層 a | 第Ⅸ層：黄色粘質土層（茶色が強い） |
| 第Ⅰ層：黒褐色土層 | 第Ⅹ層：黒色土層 c |
| 第Ⅱ層：黒褐色土層（黄褐色粘質土混入） | 第Ⅺ層：青色砂を含む黄色砂質土層 |
| 第Ⅲ層：褐色土層（黒褐色土混入） | 第Ⅻ層：褐色砂質土層 |
| 第Ⅲ層：褐色土層（比較的やわらかい） | 第Ⅼ層：黄褐色土層 |
| 第Ⅳ層：褐色土層（比較的かたい） | 第Ⅽ層：褐色砂質土層 |
| 第Ⅴ層：黒褐色土層 | 第Ⅾ層：黄色粘質土層 |
| （褐色粘質土を多く含む） | 第Ⅿ層：褐色粘質土層 |
| 第Ⅵ層：褐色粘質土層 | （黄褐色土ブロック混入） |
| 第Ⅶ層：黒色土層 b | |
| 第Ⅷ層：黄褐色土層（比較的かたい） | K 層：攪乱 |
| 第Ⅷ層：黄褐色土層 | A 層：暗黄褐色土層（地山） |
| （茶色が強く、やわらかい） | B 層：青色砂質土層 |
| 第Ⅸ層：黄色粘質土層 | C 層：灰色砂層 |

概要 堀口部及び堀底部の平面形は共にやや幅広の溝状を呈し、長軸断面は下方部が壁の崩落などによって袋状に深くえぐられている。短軸断面は溝状を呈するが、壁面の崩落などによっていびつな形となっている。

埋土は、最上層に黒色土の堆積が見られ、堀底面では腐植質の黒色土層 c が水平堆積しているが、長軸南側の黒色土下では、袋状にえぐり込まれた部位より中央部に向かって壁面の崩落堆積によって生じたと思われる黄褐色土が認められる。中・下位では褐色土、

砂質土がくりかえし崩落堆積したことが観測される。又、長軸断面の堆積状態を見るならば、二等辺三角形に近い状態で堆積しており、この三角形の斜面では再び黒色土が薄く堆積していることが認められた。

ピット番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
4	220×90	200×38	128	N-18°-W		第 23 図 図版 6 B

層位 第Ⅰ層：黒色土層a
 第Ⅱ層：褐色土層
 第Ⅱ層：褐色土層（黄褐色土を混入）
 第Ⅲ層：黄褐色土層
 第Ⅳ層：茶褐色土層
 第Ⅴ層：茶褐色土層（やわらかい）
 第Ⅵ層：褐色土層（黒褐色土を混入）
 第Ⅶ層：褐色土層
 第Ⅷ層：黄色砂質土層
 第Ⅸ層：黒色土層 b

概要 堀口部平面形は、ややいびつな長楕円形、堀底部平面形は幅広い溝状を呈し、4個の小ピットが認められた。長軸断面は上方部で摺鉢状に広がって見られるが中、下位ではやや幅広い溝状である。

埋土は、黒色土、褐色土がくりかえし流れ込んだ状態が観測された。上部は黒色土、下部は褐色土が主体であり、堀底面直上には黒色の腐植土が水平に堆積している。

ピット番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
5	(150)×(140)	87×33	132	N-18°-W		第 24 図

層位 第Ⅰ層：暗黒褐色土層
 第Ⅱ層：黒褐色土層（やや明るい）
 第Ⅱ層：黒褐色土層（やや暗い）
 第Ⅲ層：暗褐色土層（やや暗い）
 第Ⅲ層：暗褐色土層（やや明るい）
 第Ⅳ層：黒色土層 a
 第Ⅴ層：暗茶褐色土層
 第Ⅵ層：黒色土層 b
 第Ⅶ層：暗黄褐色粘土層
 第Ⅷ層：黒色土層 c
 （バンド状に入っている）
 第Ⅸ層：黄褐色粘質土層
 第Ⅹ層：黒色土層 d
 （やわらかで有機質を多く含む）
 S P：灰茶褐色砂質土層

概要 堀口部北側～東側では攪乱によって一部不明瞭であるが長楕円形を呈するものと思われる。堀底部平面形は、やや不整な隅丸長方形であり、中央部に小ピット1個を配している。長軸断面は若干ではあるが、袋状を示し、短軸断面は上方が摺鉢状に広がり、中、下位はやや湾曲しており、底面は平坦である。

埋土は、壙底面には腐植質の黒色土が水平に堆積しており、その後に褐色土がくりかえし堆積したものである。又、中層位の褐色土中には黒色土がバンド状に2層認められている。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
6	303×61	266×10	102	N-66°-W	○	第 24 図

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a 第Ⅳ層：褐色土層（やわらかい）
 第Ⅱ層：暗褐色土層 第Ⅴ層：黒色土層 b
 第Ⅲ層：褐色土層（かたくて粘質有り） 第Ⅵ層：黒色土層 c

概要 壙口部及び壙底部の平面形は共に溝状を呈するが、壙口部周縁は不整な落ち込みとなっている。長軸断面はほぼ垂直な立ち上りを示し、短軸断面は上方部が摺鉢状に広がるが、中、下位では、溝状の断面形と言える。

埋土は、最上層部に黒色土が流れ込んで見られるが、中、下部では褐色土がくりかえし堆積した状態が観測される。底面近くでは、第Ⅳ層を間層として黒色土が2層認められた。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
7	274×59	300×17	136	N-89°-E	○	第 24 図 図版13A

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a (ロームブロック点在) 第Ⅸ層：黄灰色シルト層
 第Ⅱ層：暗褐色土層 第Ⅹ層：暗黄灰色砂層 (火山灰少ない)
 第Ⅲ層：暗褐色土層 第Ⅺ層：黒色土層 c
 (第Ⅱ層より明るくやわらかい) 第Ⅻ層：暗灰茶色砂質土層
 第Ⅳ層：暗黄褐色土層 第Ⅼ層：暗黄色砂質土層
 第Ⅳ層：暗黄褐色土層 (ややかたく明るい) 第Ⅽ層：暗褐色土層 (青灰色砂を混入)
 第Ⅴ層：黒色土層 b (炭化物の含有多い) 第Ⅾ層：黄褐色砂質土層
 第Ⅵ層：暗黄褐色土層 (多量の青灰白砂を含む)
 (第Ⅳ層より明るく粒子が均一) 第Ⅿ層：暗黒褐色砂質土層
 第Ⅵ層：暗黄褐色土層 第ⅰ層：暗褐色土層 (第Ⅱ層より暗い)
 (第Ⅵ層よりやや明るい) 第ⅱ層：暗黄灰色砂層
 第Ⅶ層：黄褐色土層
 第ⅲ層：青灰色砂層 (火山灰含む) A層：褐色ローム層

B層：緑黄灰褐色砂層（火山灰含む）

D層：青灰褐色砂層（火山灰含む）

C層：緑黄褐色砂層（火山灰含む）

E層：青灰色砂層（火山灰含む）

概要

壙口部及び壙底部の平面形は共に溝状を呈している。長軸断面は、両端が若干袋状となっており、短軸断面は南側中位に崩落によって生じたと思われる段差が認められるが、ほぼ溝状を呈するものと言えよう。

埋土は、最上層部に黒色土が流れ込んで見られ、中下層位では褐色土、砂質土がくりかえし崩落堆積したことがうかがえ、長軸断面で見えるならば、この中下層位の堆積はほぼ三角形に近い状態で堆積しており、この斜面には炭化物を多量に含む黒色土層bが認められる。壙底面では、A、B層によって形成される壁面部より崩落したと思われる砂質土が見られ、その上面には、腐植質の黒色土層cが水平堆積していた。このような堆積は溝状を呈するピットの長軸断面を観察するなかで一般的な特徴としてとらえられる。

ピット番号	開壙部 (cm)	壙底部 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
8	330×81	294×14	140	N-76°-W	○	第25図

- 層位**
- 第Ⅰ層：黒色土層 a
 - 第Ⅱ層：黒褐色土層
 - 第Ⅱ層：暗褐色土層
 - 第Ⅱ層：黒褐色土層
(黒色土をブロック状に混入)
 - 第Ⅱ層：暗黄褐色粘質土層
(地山が少し薄よごれた感じ)
 - 第Ⅲ層：黒褐色土層 (黒色土混入)
 - 第Ⅳ層：褐色土層 (粘質強く、かたい)
 - 第Ⅴ層：黒色土層 b
 - 第Ⅴ層：黒色土層 c
 - 第Ⅵ層：褐色土層 (砂質が強い)
 - 第Ⅶ層：褐色砂層
 - 第Ⅷ層：暗褐色土層 (粘質土)
 - 第Ⅸ層：青灰色砂層
 - 第Ⅹ層：黄褐色粘土ブロック
 - 第Ⅺ層：青灰色砂層

概要

壙口部及び壙底部の平面形は共に溝状を示し、長軸断面の両端が若干袋状に広がり、底面は湾曲している。短軸断面は上方部がやや広がって見られるが、溝状を呈すると言えよう。

埋土は最上層部に黒色土層aの流れ込みが見られ、中、下層位では壁面を形成していたと考えられる黒褐色及び褐色土がくりかえし崩落堆積しており、この間層的な部位に黒色土層bがバンド状に見られる。又、長軸両端では断面に沿ってブロック状の崩落状態が観察される。壙底面では湾曲した底面に沿って腐植質の黒色土層cが堆積している。

ピット 番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
9	218×68	158×15	114	N-20°-W		第 25 図

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a (暗くよごれた部分が多い)
 第Ⅱ層：黒色土層 b 第Ⅵ層：暗黄褐色粘質土層
 第Ⅲ層：黒灰褐色土層 第Ⅶ層：黄褐色土層
 第Ⅳ層：暗灰褐色粘質土層 第Ⅷ層：黄褐色土層 (やわらかい)
 第Ⅴ層：暗褐色土層 第Ⅸ層：黒色土層 c
 第Ⅴ層：暗褐色土層

概要 堀口部及び堀底部の平面形は共に溝状を呈するやや小形のピットである。長軸断面は南端部がやや袋状に広がっており、短軸断面でみるならば最上部がやや広がる溝状の断面である。

埋土は土層最下層に腐植質の黒色土層 c が見られ、最上層部は黒色土層 a・b が流れ込んでおり、この間の層は硬くしまった褐色土が堆積している。

ピット 番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
10	366×89	295×23	127	N-16°-W	○	第 26 図 図版 6 C

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a (若干の粘土粒を含む) 第Ⅶ層：黒色土層 e (有機質層)
 第Ⅰ層：黒色土層 b 第Ⅶ層：黒色土層 f (有機質層)
 第Ⅱ層：黒色土層 c (所々に粘土粒を含む) 第Ⅷ層：黒褐色土層
 第Ⅱ層：黒色土層 d 第Ⅷ層：黒褐色土層
 (粘土粒の含有が第Ⅱ層より多い) 第Ⅷ層：黒褐色土層
 第Ⅲ層：暗褐色土層 (地山に近い土層) 第Ⅸ層：茶褐色土層
 第Ⅲ層：暗褐色土層 第Ⅹ層：黄褐色砂質土層
 第Ⅳ層：黄褐色粘質土層 第Ⅹ層：黄褐色砂質土層
 第Ⅴ層：暗黄褐色粘質土層 第Ⅺ層：青灰色砂質土層
 (若干黒色土を混入) 第Ⅺ層：青灰色砂質土層
 第Ⅵ層：黄褐色粘質土層
 第Ⅵ層：明黄褐色粘質土層 (やわらかい) K層：攪乱

概要 堀口部及び堀底部の平面形は共にやや幅広の溝状を呈し、堀口部では、北部と南部にそれぞれ、浅い皿状の小型ピットが附属して検出されている。しかし、このような小型

のピットが、いわゆるTピットに附属する例は見られず、又確実に人為的な掘り込みとして捉えるに足る確証もない。断面形は、長軸両端部では、ほぼ垂直に立ち上っており、短軸断面は、上方部がやや広がって見られ、中層位では壁面がややいびつではあるが、溝状を呈するものと言えよう。

埋土は、上層部に黒色土層 a, b, c, d の流れ込みが見られ、中層位では褐色土がくりかえし崩落堆積したことがうかがえる。

下層位では、中、下位の壁面を形成していたと考えられる砂質土と腐植質の黒色土層 e, f がサンドイッチ状になっており、この黒色土層 e は長軸断面の層位で三角形の斜面に堆積して見られる黒色土層と同様のものと考えられる。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
11	352×88	376×40	105	N-14°-W	○	第 26 図 図版 7 A

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a
第Ⅱ層：暗褐色土層
第Ⅲ層：褐色土層
第Ⅳ層：黄色砂質土層
第Ⅴ層：褐色粘質土層
第Ⅵ層：黄褐色砂質土層
第Ⅶ層：黄色砂質土層
第Ⅷ層：黒色土層 b
第Ⅸ層：褐色粘質土層
第Ⅹ層：黒色土層 c

概要 壙口部及び壙底部の平面形は共にやや幅広の溝状を呈しており、長軸断面は両端部が袋状に広がり、壙口部に比べその壙底部が長大になっている。短軸断面は上部位が若干広くなっており、ズングリとした溝状に近い断面形と言えよう。

埋土は、最上層に黒色土層 a が流れ込んでおり、最下の壙底部では黒色土層 b, c が褐色土層をサンドイッチ状にはさんで堆積し、中層位では壁面を形成する褐色のローム層がくりかえし崩落堆積した状態がうかがえる。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
12	230×63	223×13	144	N-9°-E	○	第 27 図

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a
第Ⅱ層：茶褐色土層
第Ⅲ層：褐色土層
第Ⅳ層：黄褐色土層
第Ⅴ層：褐色粘質土層（やわらかい）
第Ⅵ層：灰褐色砂質土層（やわらかい）
第Ⅶ層：黄褐色砂質土層（やわらかい）
第Ⅷ層：黒色土層 b（炭化物を含む）
第Ⅹ層：灰褐色砂質土層

概要 本号の壙口部及び壙底部平面形は非常に細い溝状を呈しており、長軸断面は南端部が袋状にオーバーハングしており、短軸断面は上方部がやや摺鉢状に広がっているが中下部は非常に細い溝状である。

埋土は壙底部近くに炭化物を含んだ腐植質の黒色土層bが水平堆積し、最上層部では黒色土層aが流れ込んでいる。この二枚の黒色土にはさまれる中位の層は、四壁を形成する褐色ローム層がくりかえし崩落堆積したようなやわらかい褐色土である。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
13	227×54	216×12	133	N-33°-W	○	第 27 図 図版 7 B

層位 第Ⅰ層：暗褐色土層
 第Ⅱ層：黒色土層 a
 第Ⅲ層：褐色土層 (かたい)
 第Ⅳ層：褐色土層 (やわらかい)
 第Ⅴ層：茶褐色土層
 第Ⅵ層：褐色砂質土層
 第Ⅶ層：灰褐色砂質土層
 第Ⅷ層：黒色土層 b
 第Ⅸ層：灰褐色砂質土層

概要 壙口部及び壙底部の平面形は溝状を呈するが、北西側の壙口部では、やや円形に広がっている。長軸断面は南東壁が大きくえぐられたようにオーバーハングし、北西壁はかろうくオーバーハングする袋状である。短軸断面は上方部が若干広がっているが、中、下方部は細い溝状となっている。

埋土は壙底面近くに腐植質の黒色土層bが水平堆積し、上層部では黒色土層aが流れ込んでおり、この間の層位は褐色土がくりかえし堆積している。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
14	189×105	136×38	123	N-10°-W	○	第 27 図 図版 7 C

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a (粘土粒をやや多く含む)
 第Ⅱ層：黒色土層 b
 第Ⅲ層：黒色土層 c
 第Ⅳ層：黒色土層 d
 第Ⅴ層：黒色土層 e
 第Ⅵ層：暗褐色粘質土層
 第Ⅶ層：褐色粘質土層
 第Ⅷ層：黒色土層 f
 第Ⅸ層：暗褐色粘質土層 (やや砂を含む)
 第Ⅹ層：褐色粘質土層
 第Ⅺ層：褐色砂質土層
 第Ⅻ層：黒色土層 g
 第Ⅼ層：暗褐色土層 (やわらかい)
 第Ⅽ層：褐色粘質土層 (かたい)
 第Ⅾ層：黒褐色土層

第Ⅳ層：青灰色砂層

C層：褐色粘土層

A層：灰褐色粘質土層

D層：褐色砂質含み粘質土層

B層：暗褐色粘質土層

E層：青灰色砂層

概要 堀口部平面形はややいびつな不整長楕円形、堀底部平面形は南側部がやや狭くなり、若干オーバーハングして立ち上がっているが、隅丸の長方形を呈するものと言えよう。

断面は上方部がやや広がっているが、中、下部では垂直に立ち上がっており、短軸の断面は幅広の溝状に近く、堀底面中央部には径8cm、深さ20cmを測る小柱穴状のピットが認められた。

埋土は堀底面と下位に腐植質の黒色土層がバンド状に水平堆積しており、中、上層部では黒色土がかなり厚く堆積している。中、下位で見られる細かな層は、壁面を形成していたものが崩落堆積して埋ったものと考えられる。

ピット番号	開堀部 (cm)	堀底部 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
15	414×135	422×20	139	N-64°-W	○	第28図

層位 第Ⅰ層：黒色土層a
 第Ⅱ層：黒褐色土層
 第Ⅲ層：暗褐色土層
 第Ⅳ層：黄褐色土層（かたい）
 第Ⅴ層：黄褐色土層（やわらかい）

第Ⅵ層：黒褐色土層
 （黄褐色砂層に黒色土混入）
 第Ⅶ層：黄褐色砂層
 第Ⅷ層：暗褐色土層（粘質が強い）
 第Ⅸ層：黒色土層b

概要 堀口部の外縁はいびつな形となっており、くりかえし崩落が起きていたことが考えられる大形のプランである。平面形態は、上方部はやや幅広な溝状、堀底部は溝状を呈している。断面形は長軸両端が袋状に広がっており、短軸で見ると上方部がやや広がり、南側の中位で段差が認められるが、溝状に近い形状を示すものと言えよう。

埋土は堀底面に腐植質の黒色土bが水平堆積し、中、下位では壁面などを形成していた層がくりかえし崩落堆積したことがうかがえる。

最上層部では黒色土層aが流れ込んでいた。

ピット番号	開堀部 (cm)	堀底部 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
16	396×75	407×27	134	N-54°-W		第28図

層位 第Ⅰ層：黒色土層a
 第Ⅱ層：褐色土層

第Ⅲ層：明褐色土層

第Ⅳ層：明褐色砂質土層

第Ⅴ層：明褐色粘質土層

第Ⅵ層：暗褐色土層

第Ⅶ層：褐色砂質土層

第Ⅷ層：黄褐色火山灰質土層

第Ⅸ層：灰褐色砂層

第Ⅹ層：茶褐色砂質土層

第Ⅺ層：白色火山灰質土層

第Ⅻ層：あらい灰褐色砂層

第Ⅼ層：あらい黒褐色砂層

第Ⅻ層：黄褐色火山灰質土層

第Ⅻ層：黒色土層 b

第Ⅻ層：暗褐色火山灰質砂層

A層：ローム層（黄褐色土）

B層：黄色火山灰層

C層：白色火山灰層

D層：灰褐色火山灰質砂層

E層：灰色火山灰層

F層：灰褐色火山灰質砂層

G層：青灰褐色砂層

概要 平面形態は、壙口部及び壙底部が共に溝状を呈する非常に細長いプランを呈し、断面形は長軸両端が袋状に広がっており、短軸では溝状である。

埋土は壙底面に腐植質の黒色土層 b が水平堆積し、その後に壁を形成する褐色土、火山灰、砂質層などがくりかえし崩落堆積した細かなブロック状に分かれる層位が見られた。

ピット番号	開壙部 (cm)	壙底部 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
17	(355)×84	354×28	121	N-10°-E	○	第 28 図 図版 7 D

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a

第Ⅱ層：黒褐色土層

第Ⅲ層：暗褐色土層

第Ⅳ層：褐色土層（やわらかい）

第Ⅴ層：褐色土層（かたい）

第Ⅵ層：黄褐色砂層

第Ⅶ層：黒色土層 b

第Ⅷ層：黒褐色砂層

概要 壙口部、壙底部の平面形態は共に溝状を呈し、やや幅広で大型のグループに入るプランである。断面の形状は長軸北端部が若干オーバーハングしており、壁上方部でやや広がっているが、中、下位層ではほぼ垂直に近い立ち上りを示している。

埋土は、下位層で腐植質の黒色土層 b が水平堆積して見られ、中、上層部では褐色土がくりかえし堆積している。又、最上層には黒色土層 a の流れ込みが認められた。

ピット 番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
18	263×103	238×35	120	N-32°-W		第 29 図 図版 8 A
<p>層位 第Ⅰ層：黒色土層 a 第Ⅴ層：茶褐色土層（ローム粒混入） 第Ⅱ層：黒褐色土層 第Ⅵ層：褐色土層（非常にやわらかい） 第Ⅲ層：褐色土層（ローム粒混入） 第Ⅶ層：黄褐色土層（非常にやわらかい） 第Ⅳ層：黒色土層 b（ローム粒混入） 第Ⅷ層：黒色土層 c</p> <p>概要 壙口部の平面形は隅丸の長方形に近い不整な長楕円形状であり、壙底部の平面形は略略長方形とも言える幅広の溝状を呈するプランである。断面は長軸両端部がやや袋状となっており、他の壁は垂直に近い状態で立ち上がっている。</p> <p>埋土は壙底面に腐植質の黒色土層 c が水平堆積しており、中、下位では壁を形成していたと考えられる褐色土の崩落を見ることが出来る。</p> <p>本号では黒色土層 b が下位近くまで厚く流れ込んでおり、他のピットではあまり例のない堆積状態といえる。</p>						
ピット 番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
19	262×70	228×18	117	N-12°-W	○	第 29 図 図版 8 B
<p>層位 第Ⅰ層：黒色土層 a 第Ⅵ層：黄褐色火山灰層 第Ⅱ層：黒色土層 b 第Ⅶ層：暗褐色土層（火山灰をやや含む） 第Ⅲ層：暗褐色土層 第Ⅷ層：褐色土層（第Ⅴ層とほぼ同じ） 第Ⅳ層：褐色土層（かたい） 第Ⅸ層：黒色土層 c 第Ⅴ層：褐色土層（やわらかい）</p> <p>概要 壙口部及び壙底部は共に長軸両端の四隅が角ばった溝状を呈するプランである。断面形は長軸の両端が若干袋状にオーバーハングしており、短軸で見ると上方部がやや広がる溝状である。</p> <p>埋土は壙底部に腐植質の黒色土層 c が水平堆積し、中、下位では褐色土がくりかえし崩落堆積している。上層では黒色土層 a・b の流れ込みが認められた。</p>						

ピット 番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
20	164×100	94×41	120	N-18°-E		第 29 図 図版 8 C
<p>層位 第Ⅰ層：黒色土層 a 第Ⅱ層：黒色土層 b 第Ⅲ層：黒色土層 c 第Ⅳ層：黒褐色土層 第Ⅴ層：暗黄褐色土層 第Ⅵ層：茶褐色土層</p> <p>第Ⅶ層：茶褐色土層（黒褐色土が混入） 第Ⅷ層：暗茶褐色砂質土層 第Ⅸ層：青灰色砂質土層 第Ⅹ層：黒色土層 d</p> <p>S P：灰茶褐色砂層</p> <p>概要 平面形は堀口部では長楕円形、堀底部では隅丸な長方形を呈するプランである。 長軸方向の断面形は摺鉢状になっており、短軸断面では下部が幅広の溝状であるが中、上部では摺鉢状を呈している。 堀底面中央には径10cm、深さ22cmの小ピットが1個配されている。 埋土は、堀底部に黒色土層 d が水平堆積し、最上層部では黒色土層 a・b・c の流れ込みが認められる。上方部の壁沿と中位に見られる褐色土は構築時に壁を形成していたものが崩落堆積したものと考えられる。短軸断面で見られるように中、上方部が摺鉢状に広がって見られるのは、壁部の崩落がくりかえされたものと思われる。したがって、構築時では堀底部と同じ程度の溝状に近い掘り込みであったものと思われる。</p>						
ピット 番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
21	244×80	178×11	107	N-30°-W		第 30 図 図版 8 D
<p>層位 第Ⅰ層：暗茶褐色土層 第Ⅱ層：黒色土層 a 第Ⅲ層：焼土塊を含む暗茶褐色土層 第Ⅳ層：暗黄褐色土層 (黒褐色土の小塊が多量に点在)</p> <p>第Ⅴ層：黄褐色土層 第Ⅵ層：暗黄褐色土層 第Ⅶ層：黒色土層 b (炭化物を多く含み、やわらかい) 第Ⅷ層：淡黄茶褐色土層</p> <p>概要 堀口部及び堀底部は共に溝状を呈しており、特に堀底部近くでは非常に細くなっている。断面は上方部が摺鉢状に広がっているが中、下位では四壁とも垂直に立ち上がる溝状と言えよう。 埋土は、堀底面に腐植質の黒色土層 b が水平に堆積しており、上層部では黒色土の流</p>						

れ込みが見られ、中層位では褐色土がくりかえし堆積している。

ピット 番 号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
22	(180)×127	184×18	171	N-58°-W		第 30 図 図版 9 A

- 層位** 第Ⅰ層：暗褐色土層
 第Ⅱ層：黒色土層 a
 第Ⅲ層：黒褐色土層
 第Ⅳ層：褐色土層 (かたい)
 第Ⅴ層：褐色土層 (やわらかい)
 第Ⅵ層：黒色土層 b
 第Ⅶ層：褐色土層 (白色火山灰混入)
 第Ⅷ層：褐色土層 (青灰色火山灰混入)
 第Ⅸ層：黒色土層 c
 第Ⅹ層：茶褐色土層 (火山灰を含む)

概要 堀口部の平面形は不整な長楕円形、中位より下方では溝状を呈するプランである。
 断面形は最上部では皿状の広がりを持つ溝状と言える。
 埋土は最下部と中位に腐植質の黒色土が 2 層水平堆積している。最上部では黒色土の流れ込みが見られる。

ピット 番 号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
23	179×116	124×35	126	N-6°-W		第 30 図 図版 9 B

- 層位** 第Ⅰ層：暗黒褐色土層
 (粘土粒の小ブロック有り)
 第Ⅱ層：黒色土層 a
 第Ⅲ層：黒褐色土層
 第Ⅳ層：暗茶褐色土層
 第Ⅴ層：茶褐色土層
 第Ⅵ層：茶褐色土層
 (第Ⅴ層よりやや明るい)
 第Ⅶ層：暗褐色土層
 第Ⅷ層：暗褐色土層
 (第Ⅶ層よりやや明るい)
 第Ⅷ層：暗褐色土層
 第Ⅸ層：暗褐色粘質土層
 第Ⅹ層：黄褐色粘質土層
 (砂を含み、かたくしまっている)
 第Ⅺ層：黄褐色粘質土層 (やわらかい)
 第Ⅻ層：黄褐色粘質土層
 (第Ⅻ層よりしまっていて明るい)
 第Ⅼ層：黒色土層 b
 SP-1：黒褐色土層
 SP-2：暗茶褐色土層
 A 層：黄褐色ローム層
 B 層：黄灰色砂 (火山灰) を間層に持つ

C層：青灰色砂層

概要 塙口部の平面形は不整な長楕円形，塙底部の平面形は若干いびつな隅丸長方形を呈するプランである。

長軸断面は下方部が左右非対称に大きくオーバーハングする。

埋土は塙底面に薄く腐植質の黒色土層bが見られ，最上層に黒色土層aが流れ込んでいる。

本号は他のピットに比べ崩落堆積の激しい例である。下方の壁を形成するB,C層は土壌の性質もあつてか，特に崩落の激しい部分である。短軸のセクションで見ると，下位では砂質の強い層がブロック状で堆積し，上，中位ではA層と同質の褐色土がくりかえし崩落堆積した過程がうかがえる。

ピット番号	開 塙 部 (cm)	塙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
24	159×92	193×18	161	N-46°-W		第 31 図 図版 9 C

<p>層位 第Ⅰ層：黒色土層 a</p> <p>第Ⅱ層：黒色土層 b</p> <p>第Ⅲ層：黒色土層 c</p> <p>第Ⅳ層：黒色土層 d</p> <p>第Ⅴ層：暗茶褐色土層</p> <p>第Ⅵ層：黄褐色ローム層 (かたい)</p> <p>第Ⅶ層：黒色土層 e</p> <p>第Ⅷ層：暗黄褐色土層 (黒色土ブロックを混入)</p> <p>第Ⅸ層：暗黄茶褐色土層</p> <p>第Ⅹ層：暗茶褐色土層 (粘性に富み、やわらかい)</p> <p>第Ⅺ層：黒色土層 f</p> <p>第Ⅻ層：明茶褐色土層</p> <p>第Ⅼ層：黄茶褐色砂質土層</p> <p>第Ⅽ層：暗茶褐色土層 (褐色砂質土混入)</p>	<p>第Ⅻ層：黄青褐色砂質土層</p> <p>第Ⅾ層：黄色砂質土層</p> <p>第Ⅿ層：褐色土層</p> <p>第ⅰ層：青灰色砂層</p> <p>第ⅱ層：褐色砂質土層</p> <p>第ⅲ層：黒色土層 g</p> <p>A層：二次攪乱</p> <p>B層：黄褐色ローム層</p> <p>C層：青褐色土層</p> <p>D層：黄褐色粘質土層</p> <p>E層：青灰色砂+褐色火山灰層</p> <p>F層：明褐色火山灰層</p> <p>G層：黄褐色火山灰層</p> <p>H層：黄灰白色火山灰層</p> <p>I層：青灰色砂層</p>
--	--

概要 塙口部の平面形は不整な長楕円形，塙底部の平面形は溝状を呈するプランである。

断面は長軸両端が袋状に広がっており，短軸で見ると，上方部が広がっているが溝状と言えよう。

埋土は最下層と下位に腐植質の黒色土が水平堆積し，上方部では黒色土層a, b, c, d,

e の流れ込みが見られる。他の層は壁面部を形成していた層が崩落堆積したものと考え
る。

ピット 番号	開 墾 部 (cm)	墾 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
25	171×96	207×18	180	N-80°-W		第 31 図 図版 9 D

層位 第Ⅰ層：茶褐色土層
第Ⅱ層：黒色土層 a
第Ⅲ層：暗褐色土層
第Ⅳ層：暗褐色土層（黒色ブロック混入）
第Ⅴ層：褐色土層（かたい）
第Ⅵ層：褐色土層（やわらかい）
第Ⅶ層：黒色土層 b
第Ⅷ層：褐色土層
（褐色粘土ブロックに火山灰混入）
第Ⅸ層：褐色火山灰砂層
第Ⅹ層：乳白色火山灰砂層
第Ⅺ層：黒色土層 c

概要 墾口部平面形は不整な長楕円形、墾底部平面形は溝状を呈するプランである。
断面形態を長軸方向で見るならば、両端部が大きくオーバーハングする袋状であり、
短軸方面で見るならば、上方部が若干広くなる溝状である。
埋土は墾底部と中位に腐植質の黒色土が水平に堆積しており、上層では黒色土層 a の
流れ込みが見られる。

ピット 番号	開 墾 部 (cm)	墾 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
26	191×120	142×50	135	N-25°-W		第 32 図 図版 10 A

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a
第Ⅱ層：黒色土層 b
第Ⅲ層：黒色土層 c
第Ⅳ層：黒色土層 d
第Ⅴ層：黒色土層 e
第Ⅵ層：明茶褐色土層
第Ⅶ層：暗褐色粘質土層
第Ⅷ層：暗褐色粘質土層
（第Ⅵ層より明るい）
第Ⅸ層：黒色土層 f
第Ⅹ層：黄褐色粘質土層
第Ⅺ層：褐色粘質土層
第Ⅻ層：褐色粘質土層
第Ⅼ層：黄褐色砂質土層
（D、E層が崩れ堆積した層）
第Ⅽ層：黒色土層 g
（有機質層で、非常に薄い）
第Ⅾ層：黄褐色砂質土層
（壁に張りついて堆積している）
（有機質層で、非常に薄い）
（小ブロックが集合して堆積）
（第Ⅵ層よりやや粘性有り）

S P : 灰褐色 (シルト質) 土層

B 層 : 褐色粘土層

K 層 : 攪乱

C 層 : 黄褐色粘土層

D 層 : 黄褐色 (砂質) 粘土層

E 層 : 青灰色砂層

A 層 : 暗褐色粘土層

概要 平面形態は、壙口部が長楕円形、壙底部では南側がややいびつな形となっているが隅丸の長方形と言えよう。

断面形態は、長軸方向で見ると南壁側がいびつな形で大きくオーバーハングしており、短軸セクションでは中位が狭く下方で若干広がり、上部では摺鉢状に広がっている。

壙底面中央では径 9 cm、深さ 20 cm の小ピットが配されていた。

埋土は、壁を形成していたと考えられる土壌が中位まで崩落堆積し、上部では黒色土層 a, b, c, d, e が流れ込んでいる。又、壙底面近くと、中位には腐色質の黒色土層 f, g が非常に薄くではあるが認められている。

長軸南壁に見られるオーバーハングの部位は D, E 層の崩落によって生じ、この崩落層はⅢ, Ⅳ層を形成したものと思われる。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
27	(162)×105	122×30	137	N-55°-E		第 32 図

層位 第Ⅰ層 : 暗茶褐色土層 (地山ブロック混入) 第Ⅷ層 : 暗黄褐色土層 (やわらかい)
 第Ⅱ層 : 暗茶褐色土層 第Ⅸ層 : 黄色砂質土層
 (第Ⅰ層よりかたい) (地山ブロックが若干混入)
 第Ⅲ層 : 黒色土層 a 第Ⅹ層 : 黒色土層 b
 第Ⅳ層 : 暗黄褐色土層 第Ⅺ層 : 青灰色砂質土層
 第Ⅴ層 : 暗茶褐色土層 第Ⅻ層 : 黒色土層 c
 第Ⅵ層 : 暗黄褐色土層 (粘質に富む)
 第Ⅶ層 : 黄褐色土層 (粘性やや有り) K 層 : 攪乱

概要 壙口部の平面形態は北東～東部では攪乱を受けているが、ややいびつな長楕円形、壙底部の平面形は長方形を呈するといえよ。断面は中、下位では垂直に近い角度で立ち上がっているが、上部では摺鉢状に近い形態である。又、壙底面中央には小ピットが 1 個配されている。

埋土は壙底部に第Ⅺ層をサンドイッチ状にはさんで腐植質の黒色土層 b, c の 2 層が水平堆積し、上部より中位にかけて黒色土層 a の堆積が認められた。又、中、下位では壁部を形成するローム層と性状の類似する褐色土が堆積している。

ピット 番号	開 墾 部 (cm)	墾 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
28	223×58	275×20	115	N-82°-W		第 32 図
<p>層位 第Ⅰ層：黒色土層 a 第Ⅱ層：黒色土層 b 第Ⅲ層：黄褐色土層 第Ⅳ層：暗褐色土層 第Ⅴ層：暗褐色土層 (砂粒混入)</p> <p>第Ⅵ層：黒色土層 c 第Ⅶ層：黒色土層 d 第Ⅷ層：暗褐色砂質土層 第Ⅷ層：暗褐色砂質土層 第Ⅸ層：黄褐色砂層 (軽石粒を含む)</p> <p>概要 開口部及び墾底部の平面形は共に溝状を呈するプランである。長軸断面では両端が大きくオーバーハングする袋状、短軸断面では上方部がやや広がる溝状を示していた。埋土は下位の位置に腐色質の黒色土層 c, d の 2 層が水平堆積しており、最上層では黒色土層 a, b 層の流れ込みが認められた。</p>						
ピット 番号	開 墾 部 (cm)	墾 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
29	(246)×(139)	(198)×(46)	180	N-10°-E		第 32 図 図版 10B
<p>層位 第Ⅰ層：明茶褐色土層 (赤茶褐色ロームのブロック有り) 第Ⅱ層：黒色土層 a 第Ⅲ層：暗黄茶褐色土層 第Ⅳ層：淡黄茶褐色土層 (炭化物を多量に含み、粘性有り) 第Ⅴ層：暗黄褐色土層 第Ⅵ層：暗黄褐色火山灰砂混りローム質土層 第Ⅶ層：淡黄褐色ローム混り火山灰砂層 第Ⅷ層：黄褐色ローム質土層 第Ⅸ層：暗赤茶褐色ローム質土層 第Ⅹ層：赤茶褐色火山灰砂混りローム質土層 第Ⅺ層：淡青褐色シルト混り火山灰砂層 第Ⅻ層：暗灰茶褐色粘質土層 (部分的に炭化物の含有が多い) 第Ⅼ層：淡青褐色シルト混り火山灰砂層</p> <p>第Ⅽ層：黒色土層 b 第Ⅾ層：赤茶褐色ローム質土層 (黒色土点在) 第Ⅿ層：暗青褐色シルト混り火山灰砂層 第ⅰ層：暗青茶褐色火山灰砂層 第ⅱ層：暗黄青褐色火山灰砂層 第ⅱ層：暗黄灰茶褐色火山灰砂層 第ⅲ層：暗灰茶褐色火山灰砂質土層 A 層：ローム層 B 層：火山灰砂層 C 層：シルト層</p>						

D層：火山灰砂層（シルト混入）

概要 塋口部の平面形態は長楕円形、塋底部の平面形態は幅広の溝状を呈するプランと言えよう。断面形態は壁部の崩落などによっていびつな形に変形しており、最上部では湾曲して広がり、中位では一度狭くなるが再びオーバーハングする袋状となり、さらに下位では少しづつ狭くなっている。長軸の断面で見ると左右対称に近い形で壁面の変形がなされている。

本号のピット内埋土は他のピットに見られる塋底部の黒色土層が認められていない。中層より下位の層、つまりⅦ～ⅩⅩ層は、壁部を形成するB、C、D層の火山灰砂の激しい崩落堆積が黒色土の流入以前の短期間に生じたものと思われる。他のピットでは塋底部近くで認められる腐植質の黒色土の堆積は、本号では中位に認められる炭化物を多量に含んだ第Ⅳ層の黒色土層と考えられる。中位より上層の堆積は他のピットと同様な姿で認められる。

ピット番号	開 塋 部 (cm)	塋 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
30	197×94	190×40	155	N-81°-E		第 32 図

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a
 第Ⅱ層：暗黄茶褐色土層
 第Ⅲ層：暗黄灰褐色土層
 第Ⅳ層：暗黄褐色シルト質土層
 第Ⅴ層：暗黄白色シルト質土層
 第Ⅵ層：暗黄褐色シルト質砂層
 第Ⅶ層：暗黄褐色砂層
 第Ⅷ層：暗灰褐色土層
 （明黄白色シルト塊を含む）
 第Ⅸ層：黒色土層 b（炭化物含有多い）

概要 塋口部の平面形態は不整な長楕円形に近く塋底部平面は幅広の溝状に近い形態を呈している。断面は下方に比べ上方が少しづつ広がる溝状に近い形を示している。

埋土は塋底面に炭化物を多く含んだ黒色土層 b が薄く認められ最上層に黒色土層 a の流入が見られる。中・下位では壁部を形成する褐色土ロームに類似の層がくりかえし堆積する一般的な状態である。

ピット番号	開 塋 部 (cm)	塋 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
31	209×87	217×35	172	N-21°-W	○	第 33 図 図版 10C

層位 第Ⅰ層：暗茶褐色土層
 第Ⅱ層：黒色土層 a
 第Ⅲ層：暗黄茶褐色土層（黒色土点在）
 第Ⅳ層：暗黄褐色土層
 第Ⅴ層：黄褐色粘質土層
 第Ⅵ層：黄褐色土層

第Ⅶ層：黄褐色土層

(第Ⅵ層よりやや明るい)

第Ⅷ層：黄白色シルトと青褐色火山灰砂との互層

第Ⅸ層：暗青褐色砂層

第Ⅹ層：黒色土層b (草性繊維含む)

第Ⅺ層：暗青褐色火山灰砂層

第Ⅻ層：黄白色シルトのブロック

概要

壙口部の平面形は長楕円形に近く、壙底部の平面形は幅広の溝状を呈するプランである。断面の形態は、長軸両端がオーバーハングする袋状を示し、短軸では東壁側中位で段差があり、下位では幅広の溝状と言えよう。

埋土は壙底部に炭化物を多量に含む腐植質の黒色土層bが水平堆積し、中、下位では壁面を形成していたと考えられる褐色土がくりかえし堆積しており、上層では黒色土層aがブロック状に見られる。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
32	264×114	256×40	176	N-5°-W		第 33 図 図版 10D

層位

第Ⅰ層：茶褐色土層

(黒色土ブロック点在)

第Ⅱ層：暗茶褐色土層

(かたく、粘性有り)

第Ⅲ層：暗黄褐色土層

第Ⅳ層：黒色土層a

第Ⅴ層：暗黄褐色土層

(第Ⅲ層より明るい)

第Ⅵ層：黄褐色土層

第Ⅶ層：黄灰褐色土層

第Ⅷ層：黄白色シルトと青褐色火山灰砂との互層

第Ⅸ層：暗青褐色火山灰砂層

第Ⅹ層：黒色土層b (草性繊維含む)

第Ⅺ層：暗青褐色火山灰層

第Ⅻ層：青褐色火山灰砂ブロック

概要

壙口部の平面形はいびつな長楕円形に近く壙底部の平面形は幅広の溝状を呈するプランである。断面は長軸両端が袋状にオーバーハングしており、短軸断面は下位に比べ上方部が広がっているが、幅広の溝状に近い形と言えよう。

埋土は、壙底面近くに黒色土層bが水平堆積し、上方部に黒色土層aがブロック状に見られる。第30、31号ピットと同一形態の遺構である。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
33	225×170	160×35	183	E-13°-W	○	第 34 図 図版 11A

層位

第Ⅰ層：茶褐色土層

第Ⅱ層：黒色土層a

第Ⅲ層：暗黒褐色土層

第Ⅳ層：黒褐色土層

- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 第Ⅴ層：黄褐色土層 | 第Ⅺ層：青灰火山灰層 |
| 第Ⅵ層：褐色土層 | 第Ⅻ層：乳灰色火山灰層 |
| 第Ⅶ層：青灰色火山灰層
(黄褐色ブロック混入) | 第Ⅼ層：褐色土層 (青灰色火山灰混入) |
| 第Ⅷ層：暗褐色土層 | 第Ⅽ層：青灰色火山灰層
(乳灰色火山灰混入) |
| 第Ⅸ層：黒色土層b | 第Ⅾ層：黒色土層c |
| 第Ⅹ層：褐色土層 | 第Ⅿ層：黒色土層d |

概要 壙口部の平面形態は楕円形、壙底部の平面はやや幅広の構状を呈するプランである。断面を短軸セクションより見るならば壙底より壙口部に向って広がる。逆三角形に近い形状と言えよう。

埋土は、壙底部に2層、中位に1層の腐植質の黒色土が見られ、上層部では黒色土層aがブロック状に堆積している。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
34	194×129	107×32	152	N-5°-E		第 34 図 図版 6 A

- 層位** 第Ⅰ層：淡黄褐色シルト層 (やわらかい) 第Ⅵ層：黒色土層 (炭化物混入)
 第Ⅱ層：淡黄褐色シルト層
 第Ⅲ層：暗茶褐色シルト質土層 SP-1：黄褐色シルト質土層
 第Ⅳ層：黄褐色シルト層
 第Ⅴ層：暗褐色シルト質土層 K層：攪乱

概要 壙口部の平面形は隅丸長方形にやや近い、不整楕円形、壙底部の平面形は北西隅と南西隅に壁面に沿った浅い溝状の落ち込みが見られる長方形のプランを呈している。

長軸断面形は急角度で立ち上る摺鉢状の断面形であり、短軸では摺鉢状の断面に加えてさらに一段の掘り込みが行なわれている。

壙底面中央には径12cm、深さ20cmの小ピット1個が配されている。この小ピットをセクションより観察するならば、第Ⅲ層の暗黒褐色土が充填しており、壙底部に見られる二段目の掘り込みは、小ピットに棒抗などを立て再び埋め戻したものであろうか。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
35	185×115	126×37	149	N-25°-E		第 35 図 図版 11 B

- 層位** 第Ⅰ層：暗黄茶褐色土層 (黒色土、ロームなど点在)

第Ⅱ層：茶褐色土層
 第Ⅲ層：黒色土層 a
 第Ⅳ層：暗茶褐色土層
 第Ⅴ層：暗黄褐色土層
 第Ⅵ層：暗青褐色火山灰砂と黄白色シルト K層：攪乱
 第Ⅶ層：黒色土層 b (炭化物を多量に含む)
 第Ⅷ層：暗灰茶褐色火山灰砂混りの層
 が混合した層

概要 塋口部の平面形はやや不整の長楕円形、塋底部の平面は不整な隅丸長方形を呈するプランである。断面は塋底部に比べ塋口部が広がっており細めの摺鉢状とも言えようか。本号は塋底面が隅丸長方形のものに多く見られる小ピットの配置がない。埋土は塋底部に炭化物を多量に含む黒色土層 b が水平に堆積し上層部では黒色土層 a が大きなブロック状に見られる。

ピット番号	開 塋 部 (cm)	塋 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
36	144×95	100×30	108	N-13°-W		第 35 図 図版 11 C

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a
 第Ⅱ層：黒色土層 b
 第Ⅲ層：暗黄茶褐色土層
 第Ⅳ層：暗黄褐色土層
 第Ⅴ層：暗黄褐色土層
 第Ⅵ層：暗黄白色シルト層
 (青褐色土火山灰層を含む)
 第Ⅶ層：黒色土層 c
 (炭化物、火山灰砂質土が混入)

概要 塋口部はいびつな楕円形、塋底部はいびつな隅丸方形の平面形態を呈するプランである。長軸の断面は上部が若干広がっているがほぼ垂直に近い角度で立ちあがり、短軸断面はやや細めの逆三角形に近い状態を示している。塋底中央部では3個の小ピットが配されている。埋土は塋底面に炭化物を多量に含んだ黒色土層 c が水平堆積しており、塋口部では黒色土層 a, b の流れ込みが認められる。中、下位では褐色土がくりかえし堆積している。

ピット番号	開 塋 部 (cm)	塋 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
37	71×56	48×25	91	N-50°-E		第 35 図 図版 11 D

概要 塋口部及び塋底部の平面形態は共に小形の楕円形を呈するプランであり、断面は太い柱穴状である。本号のような形態を取るピットは本遺跡では他に例がない。

ピット 番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
38	254×97	245×16	163	N-30°-E		第 35 図
<p>層位 第Ⅰ層：暗黄茶褐色土層 第Ⅱ層：黒色土層 第Ⅲ層：暗茶褐色土層 第Ⅳ層：淡茶褐色土層 第Ⅴ層：黄褐色土層 第Ⅵ層：暗黄褐色土層 第Ⅶ層：暗黄褐色土層 (第Ⅵ層より明るい) 第Ⅷ層：暗黄褐色土層 (第Ⅵ層と第Ⅶ層の中間明度) 第Ⅸ層：淡青褐色火山灰砂混りローム質土層 第Ⅹ層：黄茶褐色ローム質土層 第Ⅺ層：暗赤茶褐色火山灰砂ローム質土層</p> <p>第Ⅻ層：暗黄茶褐色ローム質土層 第Ⅼ層：黒色炭化物層 a 第Ⅽ層：暗青褐色火山灰砂層 第Ⅾ層：暗黄青褐色シルト混り火山灰砂層 第Ⅿ層：黒色炭化物層 b 第ⅰ層：暗青褐色シルト混り火山灰砂層 第ⅱ層：黒色炭化物層 c 第ⅲ層：暗黄青褐色火山灰砂層 第ⅳ層：暗灰褐色粘質土層 (炭化物を若干含む) 第ⅴ層：黄青褐色火山灰砂層 第ⅵ層：黒色炭化物層 d 第ⅶ層：暗青白色火山灰層</p> <p>概要 堀口部及び堀底部の平面形は共に溝状を呈するプランである。長軸方向の断面は南端部ではほぼ垂直に立ち上り、北端部ではオーバーハングし袋状となっている。短軸方向で見ると上方部がやや広がっているが溝状を示すものと言えよう。</p> <p>埋土は下位に腐植質の黒色炭化物層 a・b・c・d の 4 層が火山灰層をサンドイッチ状にはさんで水平堆積している。</p> <p>下位に見られる火山灰層は中位の壁部を形成していたものが崩落堆積したものであろう。上、中位では褐色土がくりかえし崩落堆積しており、上層部では黒色土層がブロック状に見られる。</p>						
ピット 番号	開 堀 部 (cm)	堀 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
39	238×(70)	189×12	137	N-33°-W	○	第 36 図
<p>層位 第Ⅰ層：暗褐色土層 第Ⅱ層：暗褐色土層 (第Ⅰ層より明るくかたい) 第Ⅲ層：暗黄褐色粘質土層 第Ⅳ層：黒色土層 a 第Ⅴ層：黒色土層 b</p>						

第Ⅵ層：暗茶褐色土層
 第Ⅶ層：暗褐色土層
 (第Ⅰ層に比べてやわらかい)
 第Ⅷ層：黄褐色粘質土層
 第Ⅸ層：黄褐色粘質土層
 (火山灰粒を含む)
 第Ⅹ層：黄褐色粘質土層 (やや暗い)
 第Ⅺ層：黄褐色粘質土層 (白っぽい)
 第Ⅻ層：青灰色砂層

第Ⅼ層：青灰色砂層
 (火山灰をやや多く含む)
 第Ⅽ層：黒色土層c
 K層：攪乱
 A層：黄褐色粘質土層
 B層：青灰色火山灰質砂層

概要 塙口部及び塙底部の平面形は共に溝状を呈し、断面は中、下位では垂直に立ち上り、上方部がやや広がる溝状を呈するプランである。

埋土は塙底部に腐植質の黒色土層cが水平に堆積し、上部では黒色土層a・bの流れ込みが見られる。下位では青灰色の砂層、中位では褐色土がくりかえし堆積している。

ピット番号	開 塙 部 (cm)	塙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
40	(238)×70	(210)×(11)	113	N-4°-W	○	第 36 図 図版 12 A

概要 塙口部及び塙底部の平面形態は共に溝状を呈し、断面形は長軸南端部が若干袋状にオーバーハングしており、短軸断面では上方部が若干広がって見られるがほぼ溝状を示すプランである。本号の東側は浅い攪乱が入っているため塙口面に高低差がある。

ピット番号	開 塙 部 (cm)	塙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
41	136×56	110×30	110	N-65°-W		第 36 図 図版 12 B

層位 第Ⅰ層：黒色土層a
 第Ⅱ層：暗褐色土層
 第Ⅲ層：暗黄褐色粘質土層
 第Ⅳ層：暗黄褐色粘質土層
 (第Ⅲ層よりやわらかい)
 第Ⅴ層：暗灰色土層
 第Ⅵ層：黄褐色粘質土層
 (第Ⅳ層よりやや白っぽい)
 第Ⅶ層：黒色土層b

第Ⅷ層：黄褐色砂質土層
 第Ⅸ層：黒色土層c
 第Ⅹ層：暗青灰砂質土層

現代の構築物
 1層：灰茶褐色土層 (炭と灰が混合)
 2層：暗茶褐色土層
 (炭と灰と焼土が混合)
 3層：暗茶褐色土層 (炭と灰が混合)

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 4層：暗茶色土層（炭と灰が混合） | 8層：暗茶褐色土層 |
| 5層：炭層（若干の灰が混入） | （若干の炭と灰を混入） |
| 6層：暗茶褐色土層（炭と灰が混合） | 9層：炭層（暗茶褐色土を混入） |
| 7層：暗灰褐色土層 | 10層：炭層 |
| （若干の炭と灰を混入） | 11層：灰層 |

概要 本号は現代の構築物と重複し、上部を削失している。

壙口部及び壙底部の平面形はややいびつな隅丸長方形を呈し、断面は長軸東端部が若干オーバーハグする袋状となっている。

短軸断面で見ると、中層位が若干オーバーハグしているが幅広の溝状を示すものといえよう。壙底面中央に小ピットが1個配される。

埋土は腐植質の黒色土が底部と中位に2層見られ、上部では黒色土層 a が流れ込んでいる。中、下位では壁を形成する褐色土と青灰色の砂層がくりかえし崩落堆積している。現代の遺構は、壙底面に多量の炭層を持ち2基重複して見られた。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
42	(288)×77	(360)×9	114	N-83°-W	○	第 37 図

- 層位** 第Ⅰ層：黒色土層a
 第Ⅱ層：黒色土層b
 第Ⅲ層：暗褐色土層
 第Ⅳ層：黄褐色土層（かたい）
 第Ⅴ層：黄褐色土層（やわらかい）
 第Ⅵ層：黒色土層 c（砂を若干含む）
 K層：攪乱

概要 壙口部及び壙底部の平面形は共に溝状を呈し、長軸断面は両端部が大きくオーバーハグする袋状、短軸断面は壙口部近くが皿状に広がっているが中、下位では溝状のプランである。

本号は東側部で第44号と重複しているが、新旧関係については不明である。

埋土は壙底部に腐植質の黒色土層 c が水平に堆積し、中位では褐色土、上層部では黒色土層 a、b の流れ込みが見られる。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
43	(150)×(130)	(78)×(52)	122	N-74°-E		第 37 図

- 層位** 第Ⅰ層：黒色土層a
 第Ⅱ層：黒色土層b
 第Ⅲ層：黒色土層c
 第Ⅳ層：暗灰褐色土層

(地山ロームや黒土の細粒点在) 第Ⅻ層：黄褐色土層
 第Ⅴ層：暗灰黒褐色土層 (火山灰砂の含有多い)
 第Ⅵ層：黄灰褐色土層 (暗黒褐色土が混入) 第Ⅼ層：黒色土層 b (木炭を若干含む)
 第Ⅶ層：暗黄灰褐色土層 第Ⅽ層：黒色土層 c (炭化物の混入多い)
 (地山ロームと暗黒褐色土が混合) 第Ⅳ層：明黄褐色土層 (やわらかい)
 第Ⅷ層：暗黄灰褐色土層 (やわらかい)
 第Ⅸ層：黄灰褐色土層 第44号
 (地山ロームの含有多い) A層：黒色土層
 第Ⅹ層：暗黄灰色土層 (火山灰砂の混入やや多い)
 第Ⅺ層：暗黄褐色土層 B層：暗赤茶褐色土層
 (地山ロームが汚れた感じ) (火山灰砂の混入多い)

概要 本号は北側部で溝状を呈する第44号と重複しており、新旧関係は本号が新しく構築されている。

壕口部及び壕底部の平面形態は共に隅丸の長方形を呈するプランと思われる。

断面形をセクションで見ると垂直に近い角度で立ち上がっている。

埋土は壕底部に腐植質の黒色土層 d, e が水平に近い状態で堆積しており、中位の層は壁を形成していたと考えられる褐色土の崩落したものであろう。上部では黒色土層 a, b, c の流れ込みが認められる。

セクションの底面北側に見られる A, B 層は第44号ピットの壕底部の層位である。

ピット番号	開 壕 部 (cm)	壕 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
44	(320)×56	(351)×15	153	E-W		第 37 図

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a 第Ⅷ層：黄褐色土層
 第Ⅱ層：黒色土層 b (火山灰砂の含有多い)
 第Ⅲ層：黒色土層 c 第Ⅸ層：暗黄赤褐色土層
 第Ⅳ層：暗黄色土層 第Ⅹ層：黒色土層 d (若干の火山灰砂混入)
 (やわらかく若干粘性有り) 第Ⅺ層：暗茶褐色土層
 第Ⅴ層：暗黄色土層 (若干の火山灰砂混入)
 (ややかたく粘性有り) 第Ⅻ層：暗茶褐色土層
 第Ⅵ層：暗黄灰褐色土層 (火山灰砂の含有多い)
 (粘性がありしまつてかたい) 第Ⅼ層：黒色土層 e
 第Ⅶ層：暗黄褐色土層 (やや粘性有り) (火山灰砂の混入やや多い)

概要 本号は第42号、第43号と重複し、更に、トレンチによって切断されている。第42号と

の新旧関係は不明であるが、第43号との関係は本号が古く構築されている。又、このように3基の遺構が重複して見られる例はあまりない。

壙口部及び壙底部の平面形は共に溝状を呈し、長軸断面は両端部がオーバーハングし袋状になっており、短軸断面は上方部がやや広がる溝状のプランである。

埋土は、壙底部と中位に腐植質の黒色土層が2層入っており、上部では黒色土層 a, b, c の流れ込みが見られる。中, 下位では褐色土が堆積している。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
45	140×90	100×35	127	N-56°-E	○	第 38 図 図版12C

層位 第Ⅰ層：黒褐色土層
(ややかたく、粘性有り)
第Ⅱ層：暗褐色土層
(ローム、黒色土の細粒点在)
第Ⅲ層：暗茶褐色土層
第Ⅳ層：黒色土層 a (ロームの細粒点在)
第Ⅴ層：暗黄褐色土層
(ややかたく、粘性有り)
第Ⅵ層：黄褐色シルト層 a
第Ⅶ層：黒色土層 b
第Ⅷ層：黄褐色シルト層 b
第Ⅸ層：黒色土層 c
第Ⅹ層：黄褐色シルト層 c
第Ⅺ層：黒色土層 d
第Ⅻ層：暗黄灰褐色シルト質土層

概要 壙口部及び壙底部の平面形は共にいびつな隅丸長方形を呈し、断面は長軸両端部が若干オーバーハングする袋状、短軸断面では上方部が皿状に広がり、中位では若干いびつになっているが溝状のプランと言えましょう。

壙底面中央には径10cm、深さ36cmの小ピット1個が配されている。

本号は第5, 6号ピットと重複しており、その新旧関係は第5号よりも新しく構築されている。第6号との関係は不明である。

埋土は、下位で腐植質の黒色土層と黄褐色シルト層が交互に堆積し、中位では黒色土層 a がかなり厚く見られる。

ピット番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
46	393×30	398×17	143	N-56°-W	○	第 39 図 図版13B

層位 第Ⅰ層：黒色土層 a
第Ⅱ層：黒色土層 b
第Ⅲ層：暗褐色土層 (かたくしまっている)
第Ⅳ層：暗褐色土層
(第Ⅲ層よりやわらかく、明るい)
第Ⅴ層：黒色土層 c

第Ⅵ層：暗褐色土層 (第Ⅳ層よりやわらかい)	第Ⅻ層：茶褐色土層 (非常にやわらかい)
第Ⅶ層：黒色土層d	第Ⅼ層：黄褐色土層 (ロームのかたまり)
第Ⅷ層：黒色土層e	第Ⅽ層：黄褐色砂層
第Ⅸ層：黄褐色土層 (やわらかい)	第Ⅾ層：青灰砂層
第Ⅹ層：黒色土層f	F T：暗茶褐色土層 (風倒木痕)
第Ⅺ層：黒色土層g (青灰色砂を多量に含む)	K層：攪乱
第Ⅻ層：暗黄褐色土層 (壁が崩落したもの)	A層：黄褐色ローム層
第Ⅼ層：黒色土層h (土器が点在している)	B層：灰褐色砂層
第Ⅽ層：黒色土層i	

概要 本号を含め第47, 48号の3基は、いわゆる風倒木痕と重複している。この風倒木痕7は更に、風倒木痕4、現代の構築物へと重複関係を持ちながら続いている。又、風倒木痕4はセクションより見るならば2つの風倒木痕の重複するものと考えられる。

本号は遺構の確認が行なわれた時点において長軸中央より2分割し、更に短軸に対しては50cm間隔に細分割するグリッドを組み、壙口面を切り2 m程の深さまで掘り抜き、そのつどエレベーション、セクションを取り図上復元を行った。平面図において本号を囲む実線はその発掘範囲である。

壙口部及び壙底部の平面形態は共に溝状を呈する非常に長いプランである。長軸方向の断面は両端が若干袋状にオーバーハングし、下部の壁近くでやや湾曲している。短軸断面で見ると上方部がやや広がっているが溝状を呈するものと言えよう。

本号の埋没状態は腐植質の黒色土と壁を形成していたと思われる褐色土、灰褐色砂が交互に堆積、崩落をくりかえしていたことがうかがえる。黒色土と褐色土、灰褐色砂が何層にも分かれて入っており上部近くまでくりかえされたものと考えられる。この堆積は長軸中央ほど厚く両端に行くに従って薄くなる、三角形に近い状態である。この後に上部を埋めている層が流れ込んでいる。短軸断面で見ると、中位より底部の間に腐植質の黒色土が5枚あり上層部では黒色土層 a, b の流れ込みがある。本号のように長軸を取るセクションにおいて層堆積が三角形 (山形) を呈しその斜辺と壙底に腐植質の黒色土が認められるのは、この種のいわゆる Tピットにおける堆積の一般的特徴である。

ピット 番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
47	100×40	95×32	(100)	N-80°-E		第 39 図

層位	第Ⅰ層：暗黄褐色土層 (ロームがブロック状に堆積)	第Ⅱ層：黒色土層 a	第Ⅲ層：暗黄褐色土層 (黒色土を含む)	第Ⅳ層：黄褐色土層	第Ⅴ層：暗黄褐色土層	第Ⅵ層：暗黄褐色土層 (暗い)	第Ⅶ層：茶褐色土層 (黒色土, 地山ブロック混入)	第Ⅷ層：黒褐色砂質土層	第Ⅷ層：黒褐色砂質土層	第Ⅸ層：黒褐色砂質土層	第Ⅹ層：黄褐色砂質土層	第Ⅺ層：黄灰色砂層	第Ⅻ層：暗褐色砂質土層	第Ⅼ層：黒褐色砂質土層	K層：攪乱	風倒木 (FT) 7	1層：黄褐色土層 (黒色土ブロック混入)	2層：暗黄褐色土層	3層：灰白色火山灰層	4層：黄茶褐色砂質土層 (火山灰を含む)	5層：暗黄褐色土層 (ロームがブロック状に堆積)	6層：明黄褐色土層	7層：黄褐色土層 (粘質に富む)
-----------	------------------------------	------------	---------------------	-----------	------------	-----------------	------------------------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-----------	-------------	-------------	-------	------------	----------------------	-----------	------------	----------------------	-----------------------------	-----------	------------------

概要 本号は第46号の調査中、側壁の一部を削失することによってその存在が確認され、風倒木痕7の覆土を除去した段階で遺構の平面確認がなされた。

壙口部及び壙底部の平面形は共に隅丸長方形を呈し、壁の立ち上りは四周とも垂直に近い角度である。

壙底面中央部には径10cm、深さ30cmの小ピット1個が配されている。

埋土は壙底部に腐植質の黒色土層 b が水平に堆積し、上部では攪乱層の下位に黒色土層 a の流れ込みが認められた。

ピット 番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
48	212×38	186×11	147	N-33°-W	○	第 39 図 図版 12D

層位	第Ⅰ層：黒色土層 a (地山ブロック混入)	第Ⅱ層：黒色土層 b	第Ⅲ層：黄褐色土層 (粘質に富む)	第Ⅳ層：明黄褐色土層	(黒色土ブロック混入)	第Ⅴ層：黄褐色土層 (粘質に富む)	第Ⅵ層：黒色土層 c	第Ⅶ層：黄褐色土層 (赤味がかったり)
-----------	-----------------------	------------	-------------------	------------	-------------	-------------------	------------	---------------------

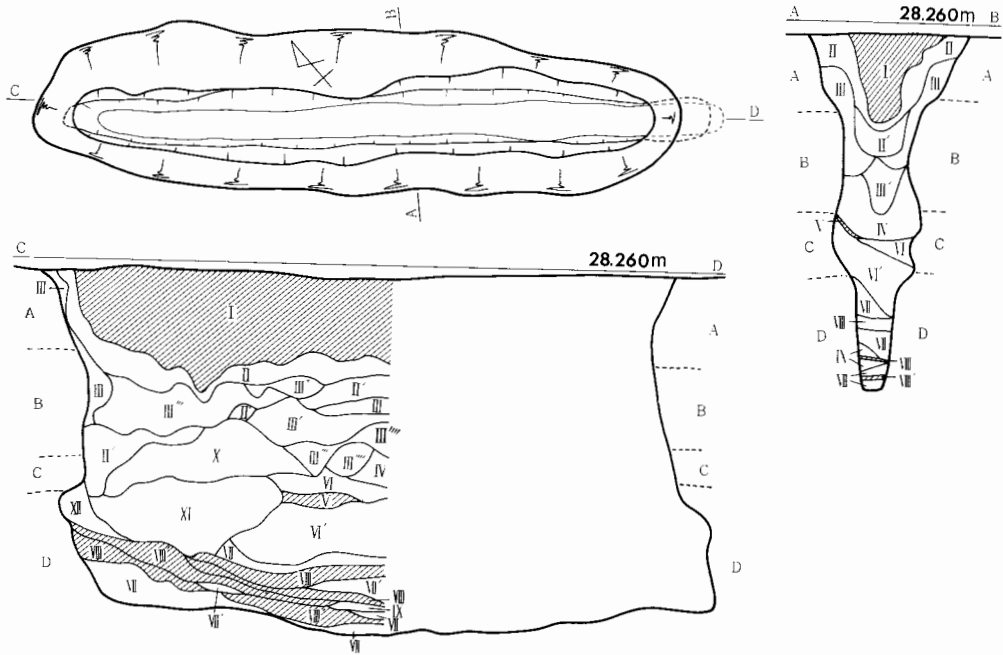
第Ⅷ層：暗黄褐色土層	9層：茶褐色土層 (8層より暗い)
第Ⅸ層：黄褐色土層	10層：茶褐色土層 (8層より黄色土ブロックが多い)
第Ⅹ層：暗黄褐色土層 (第Ⅷ層より暗い)	11層：褐色土層 (黒褐色，茶褐色ブロック混入)
第Ⅺ層：黄褐色土層 (第Ⅹ層よりやや明るい)	12層：暗茶褐色土層 (13層よりやわらかい)
第Ⅻ層：暗黒褐色土層	13層：暗茶褐色土層
第Ⅼ層：黒褐色砂質土層 (灰色がかっている)	14層：茶褐色土層
FT：風倒木痕	15層：黄褐色砂質土層
K層：攪乱	16層：黒褐色土層
風倒木 (FT) 4	17層：黒褐色土層 (木の根の攪乱)
1層：灰黄色土層	18層：茶褐色土層 (黄茶褐色砂質土ブロックを含む)
2層：灰褐色土層	19層：暗茶褐色土層 (ぼろぼろともろい)
3層：黄色土層 (乾くと白っぽくなる)	20層：黄茶褐色砂質土層
4層：茶褐色土層	21層：暗茶褐色土層 (19層より粘性有り)
5層：茶褐色土層 (4層より赤みがかっている)	22層：茶褐色土層 (18層よりもろい)
6層：茶褐色土層 (4層より黒っぽい)	23層：暗茶褐色土層 (粘性に富み，しまってたかい)
7層：暗茶褐色土層 (黒く汚れている)	24層：暗茶褐色層 (地山ブロック混在)
8層：茶褐色土層 (10層よりかたい)	25層：暗茶褐色土層

概要 平面の形態は、壙口部及び壙底部が共に溝状を呈し、短軸の断面形は溝状のプランである。

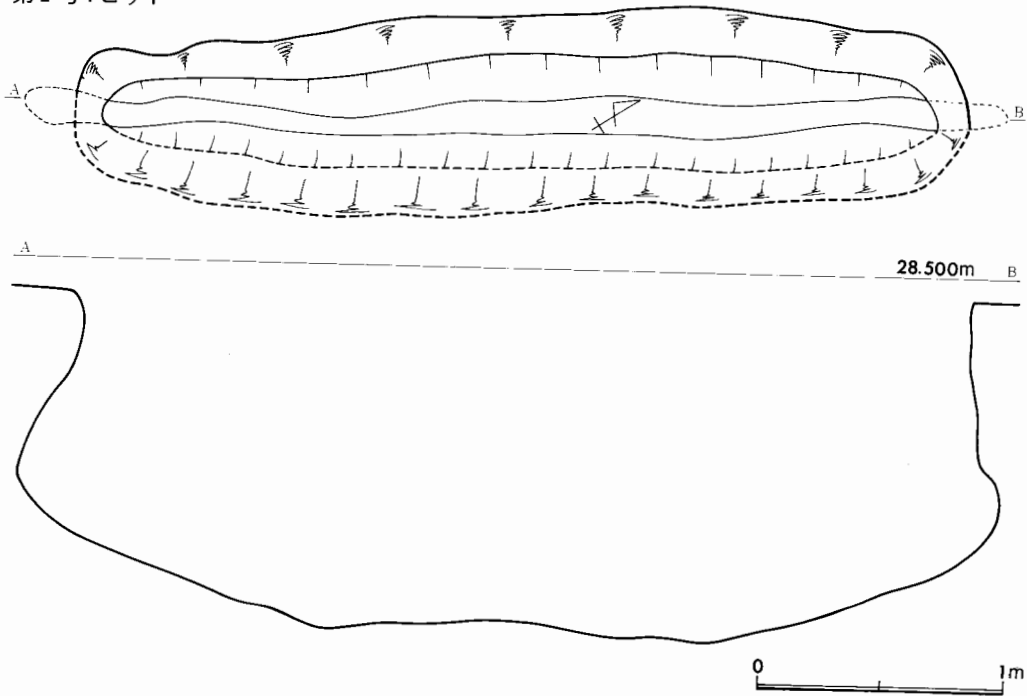
埋土は腐植質の黒色土が壙底部に3層、中位に1層見られ、上部では黒色土層 a, b が流れこんでいる。又、中・下位では壁部を形成していたと考えられる褐色土がくりかえし崩落堆積していた。

(内山 真澄)

第1号Tピット

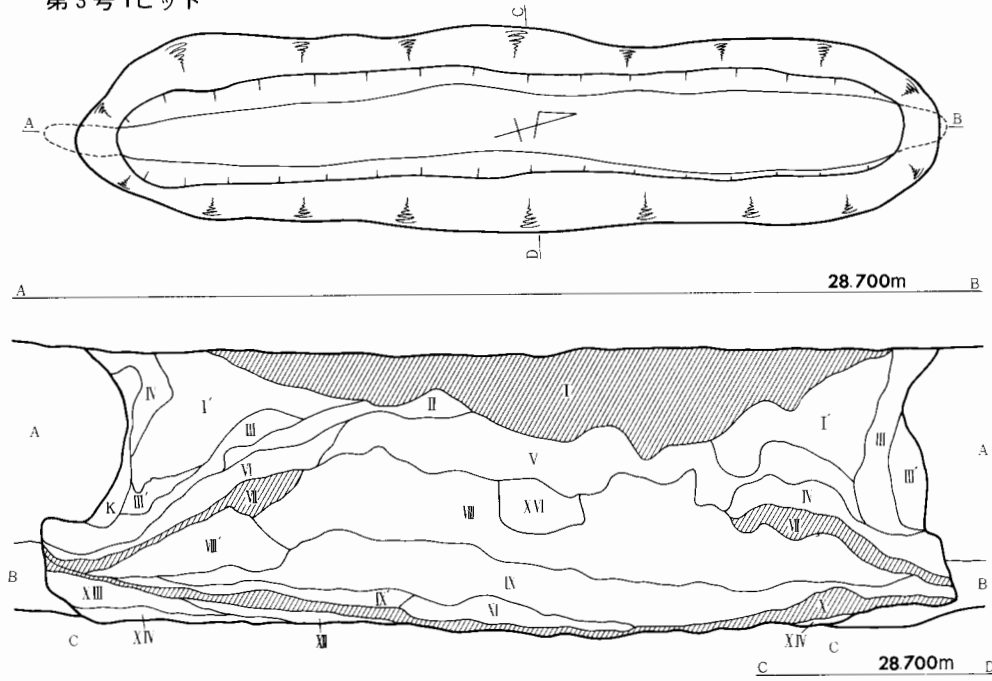


第2号Tピット

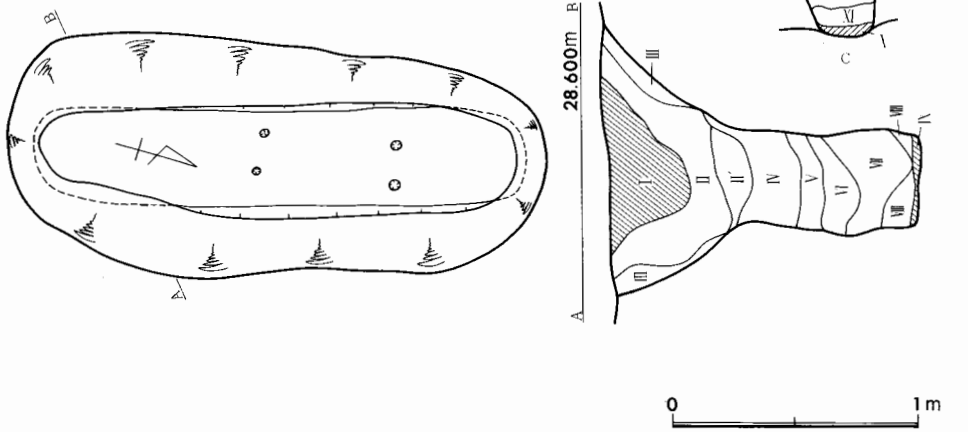


第22図 遺構実測図

第3号Tピット

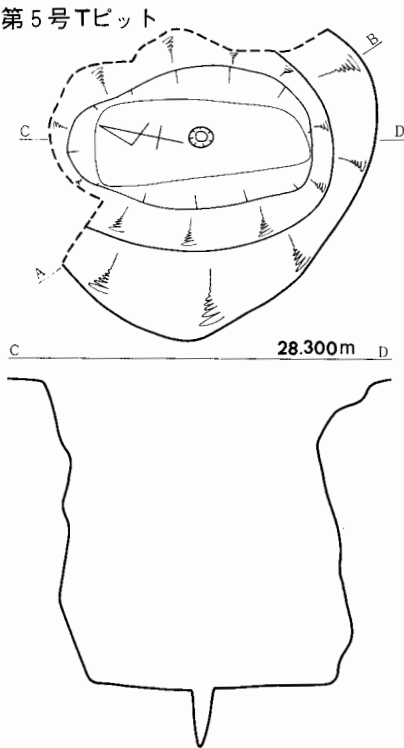


第4号Tピット

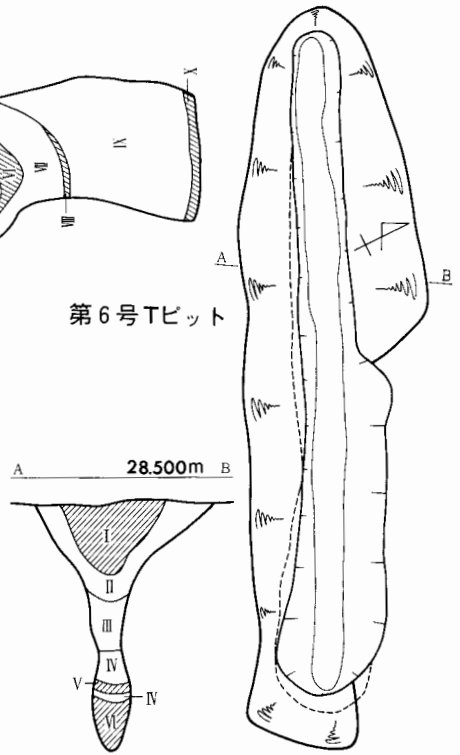


第23図 遺構実測図

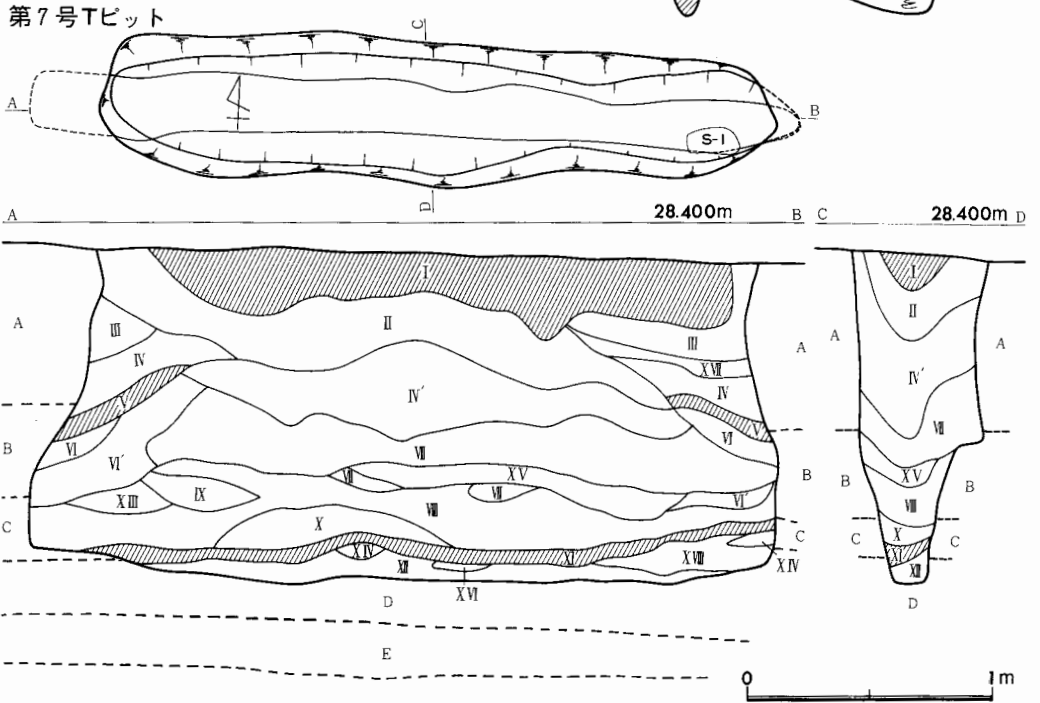
第5号Tビット



第6号Tビット

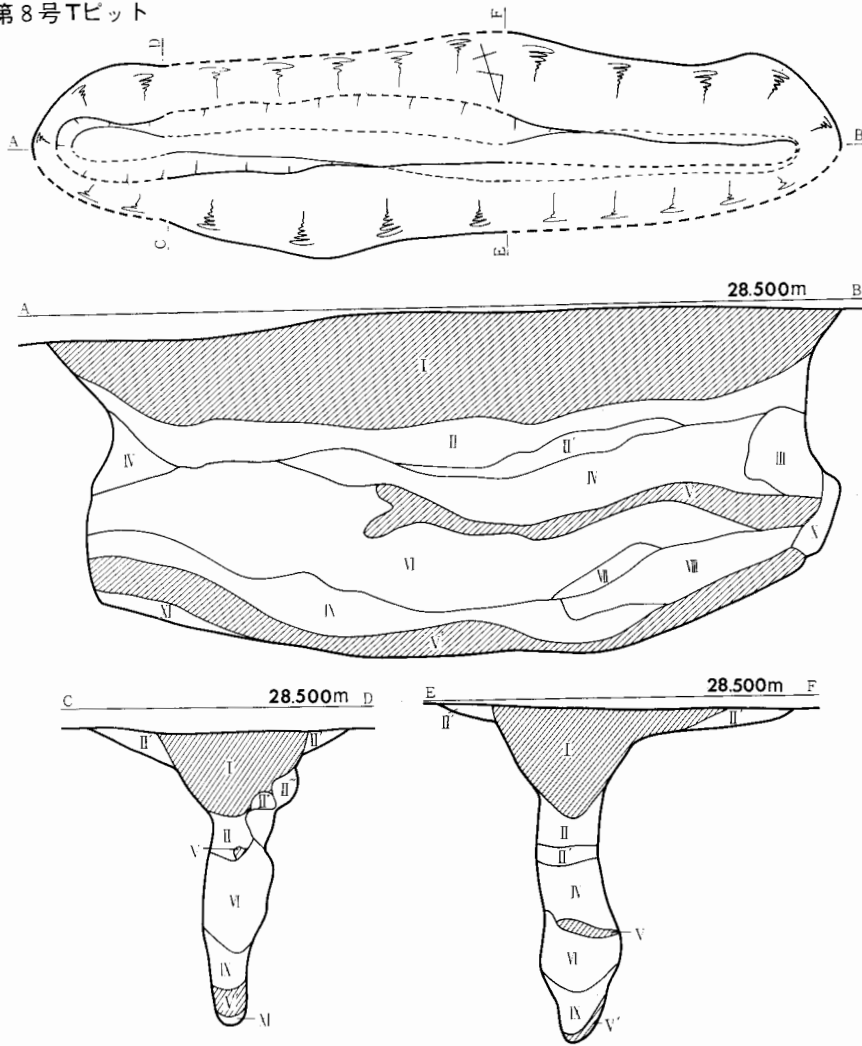


第7号Tビット

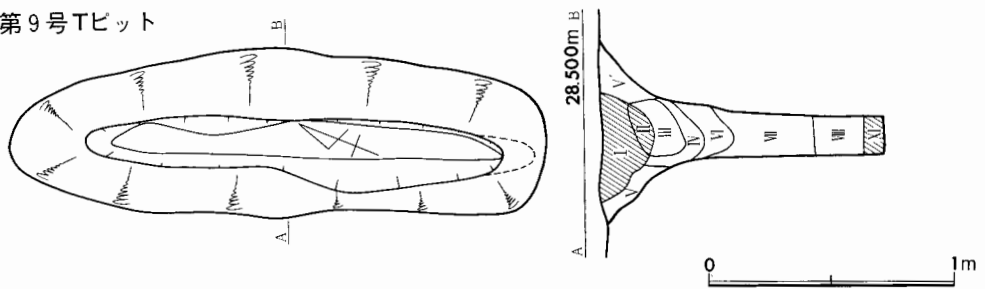


第24図 遺構実測図

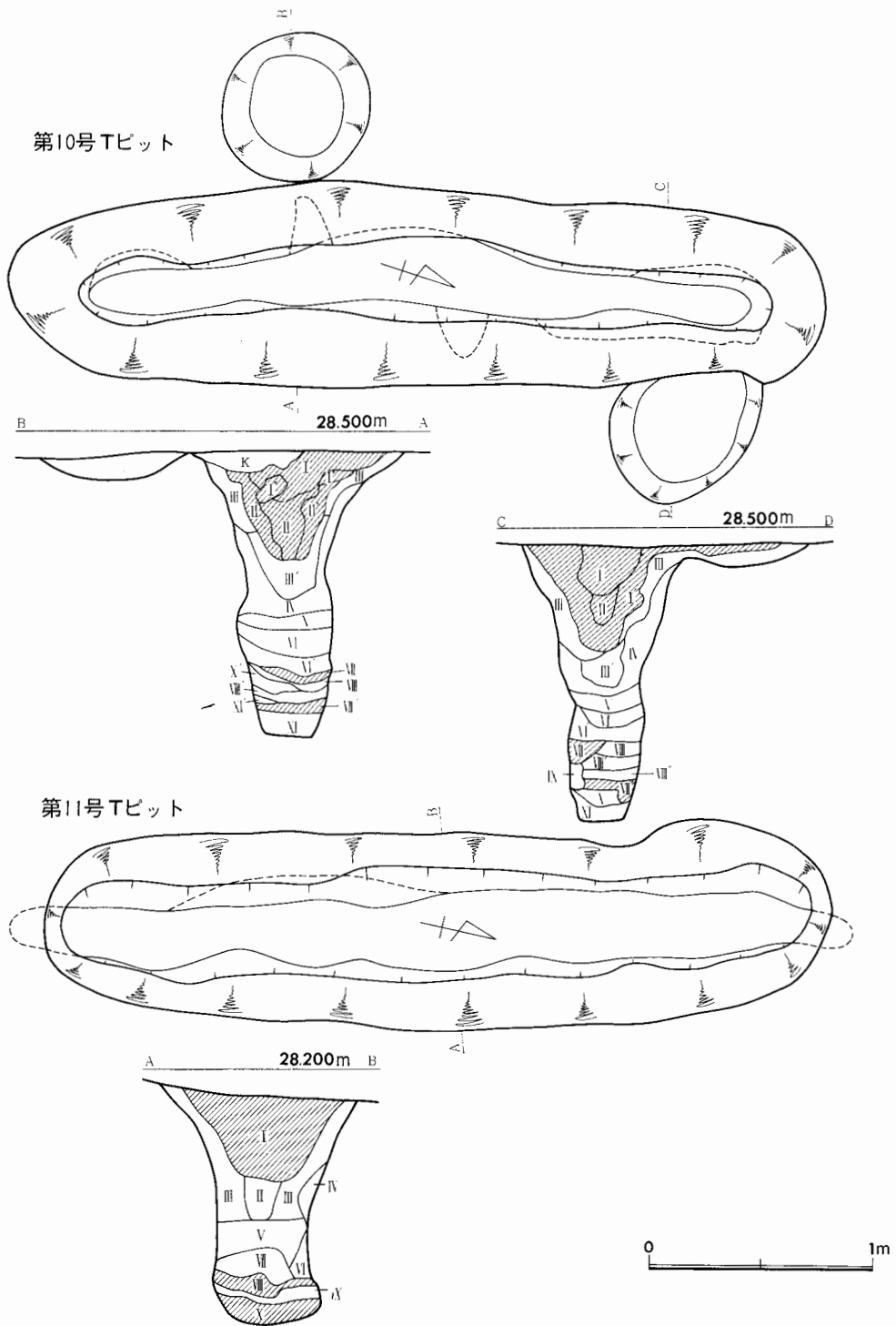
第8号Tビット



第9号Tビット

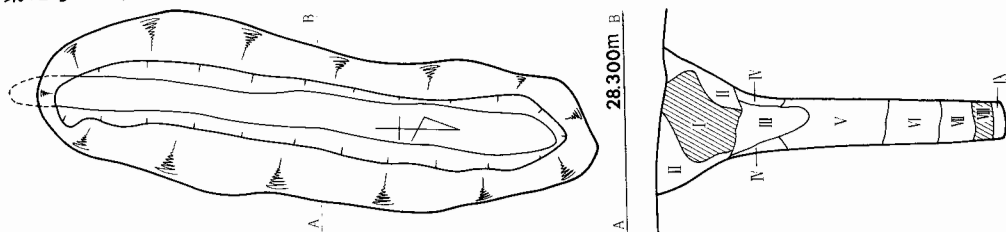


第25図 遺構実測図

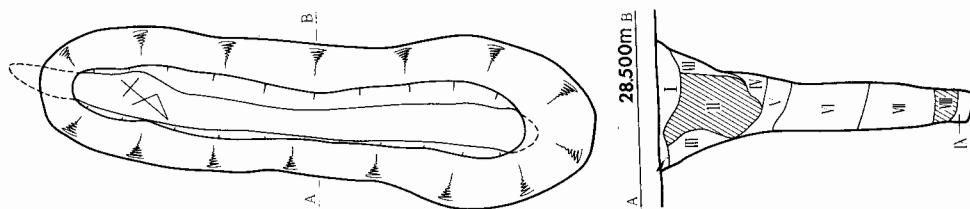


第26図 遺構実測図

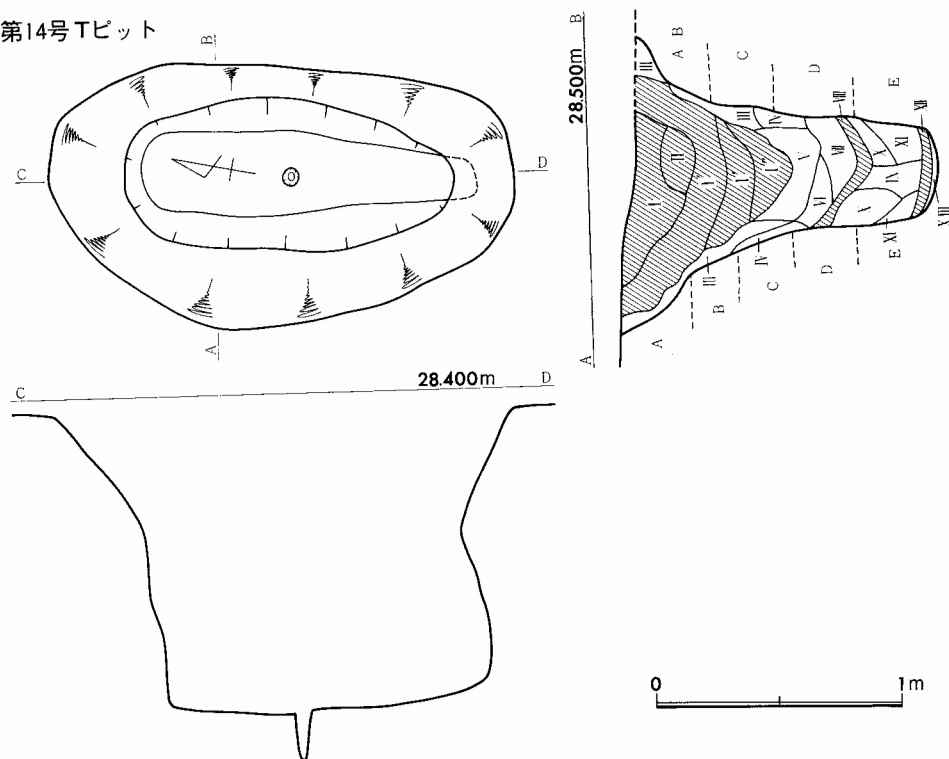
第12号Tピット



第13号Tピット

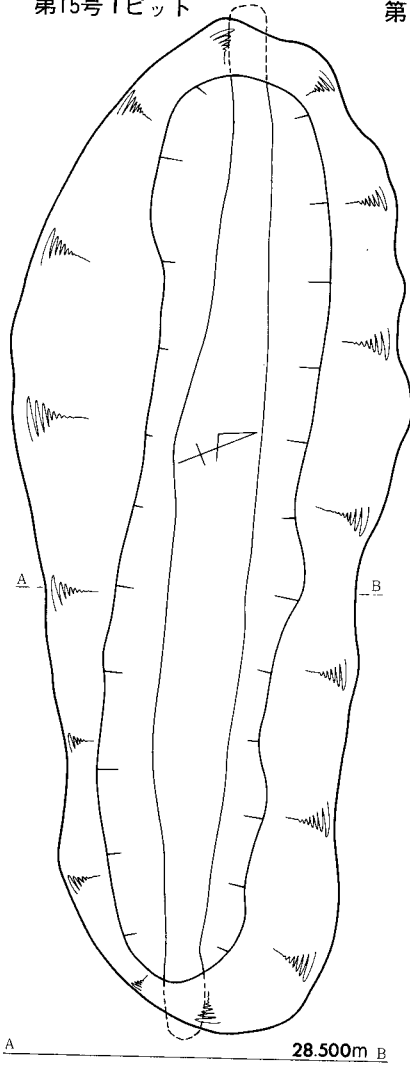


第14号Tピット

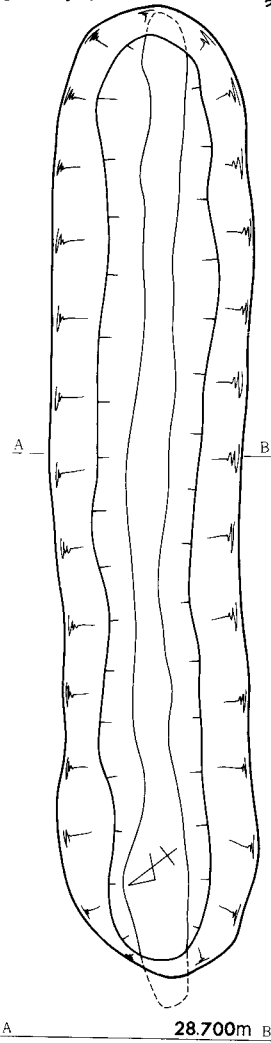


第27図 遺構実測図

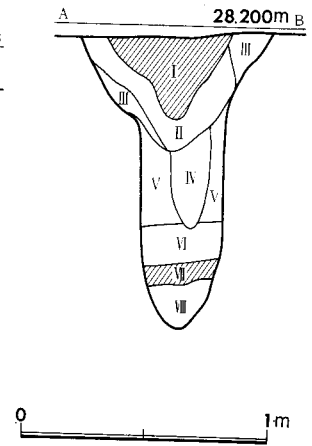
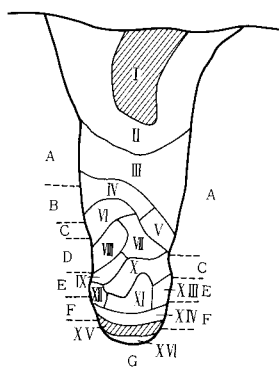
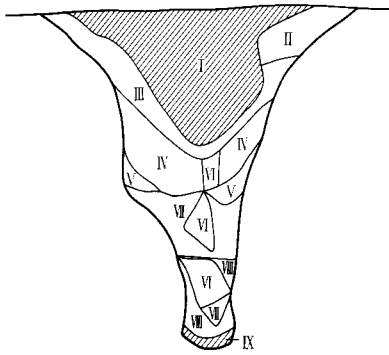
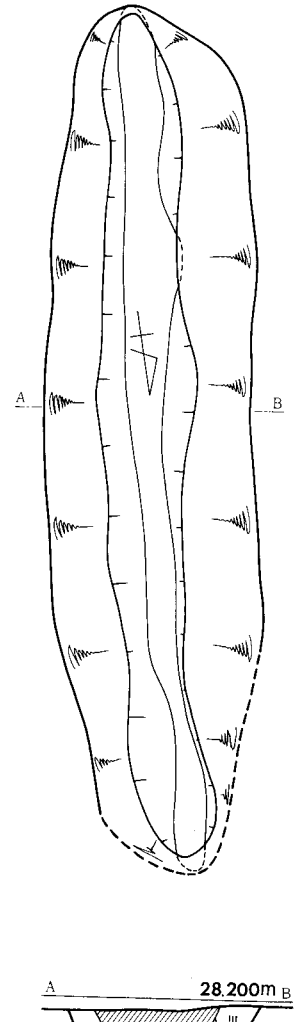
第15号Tピット



第16号Tピット

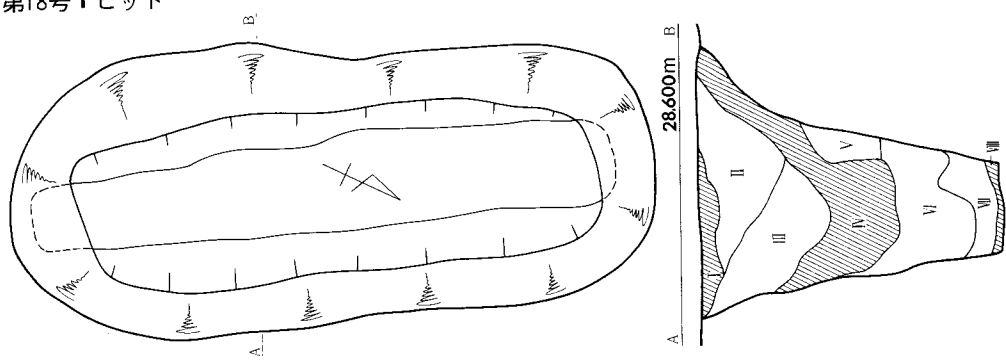


第17号Tピット

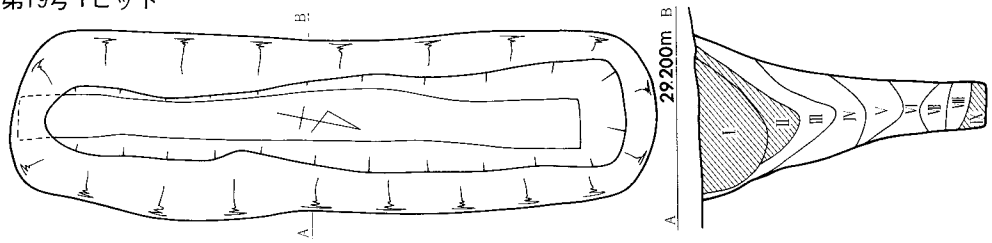


第28図 遺構実測図

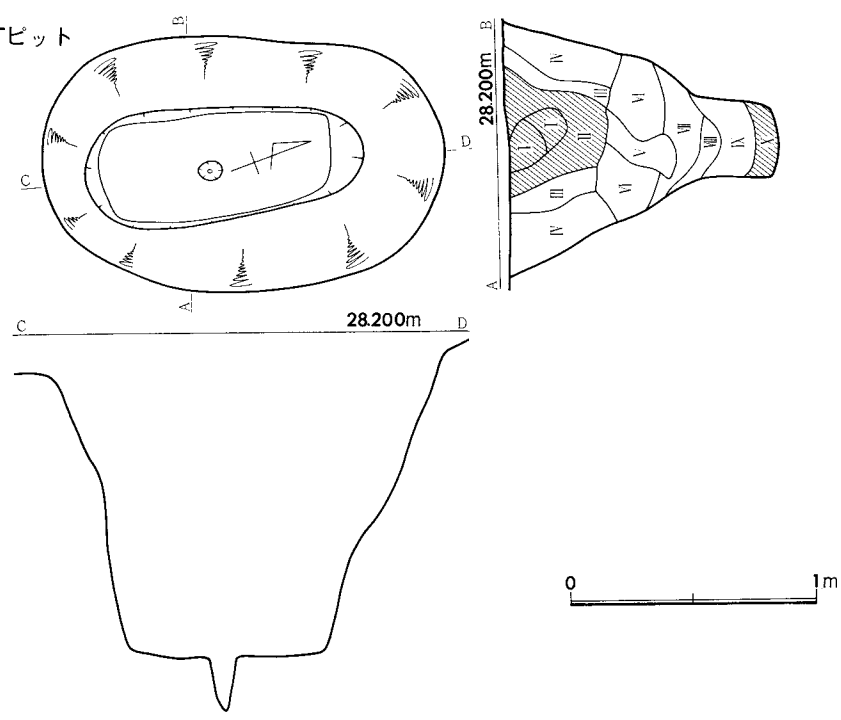
第18号Tビット



第19号Tビット

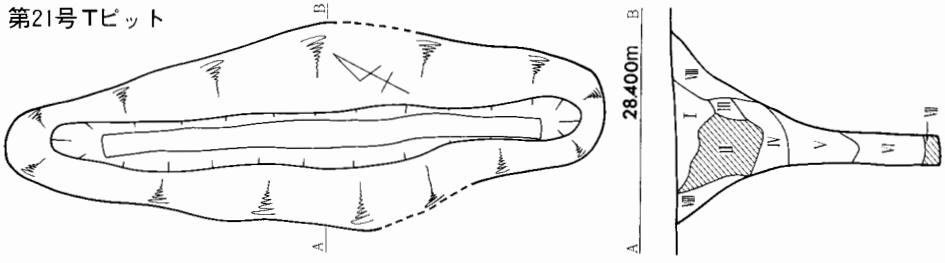


第20号Tビット

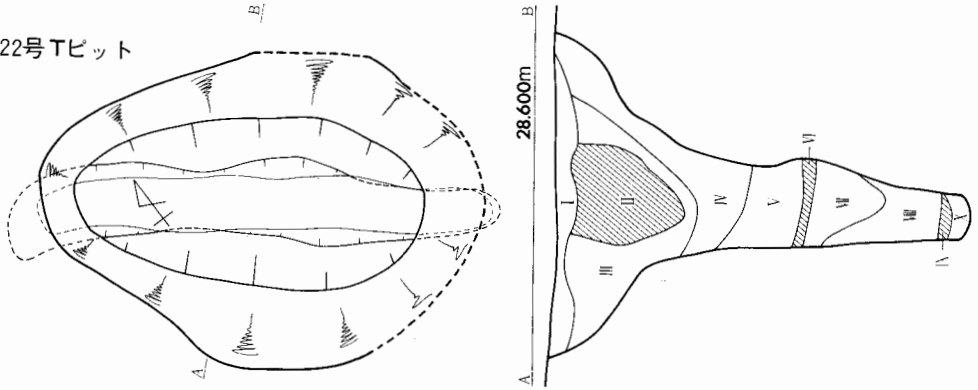


第29図 遺構実測図

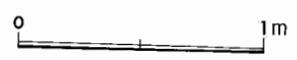
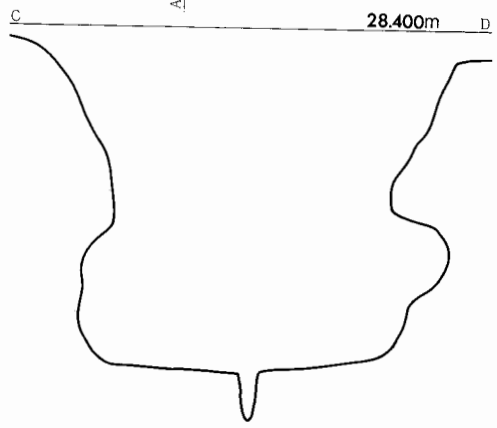
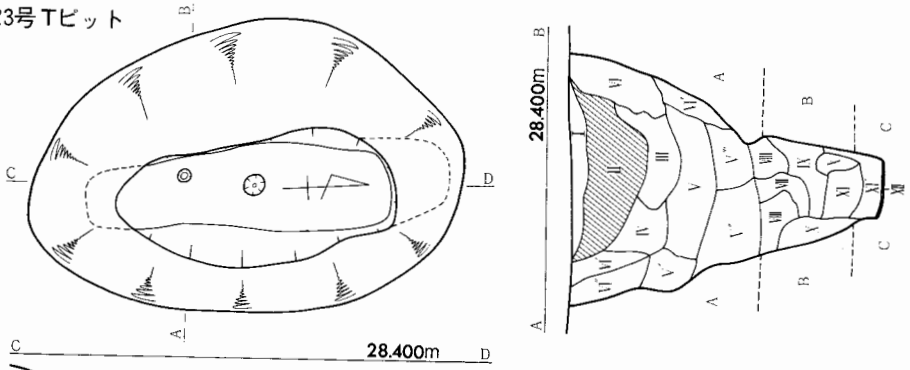
第21号Tピット



第22号Tピット

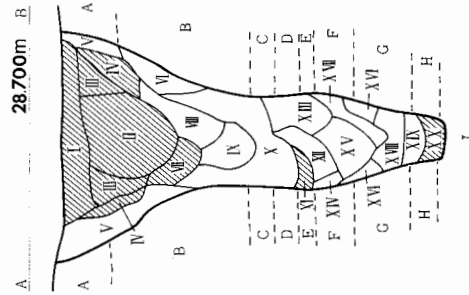
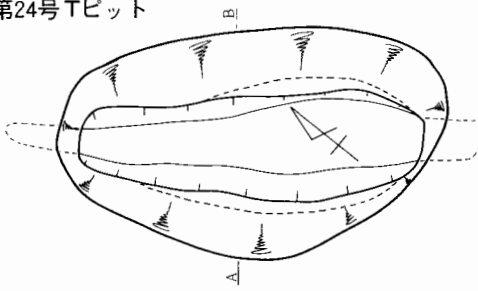


第23号Tピット

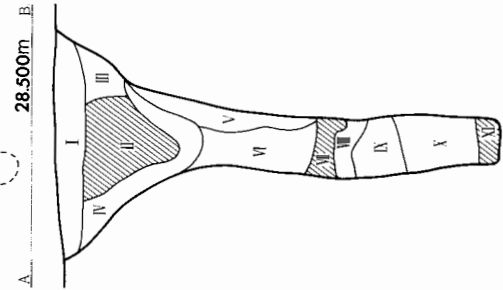
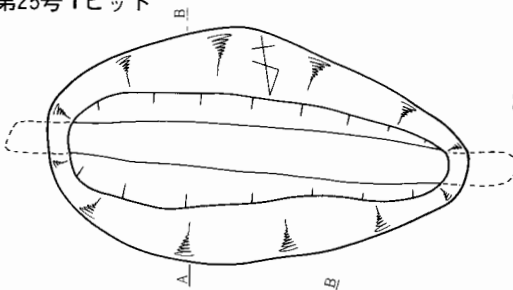


第30図 遺構実測図

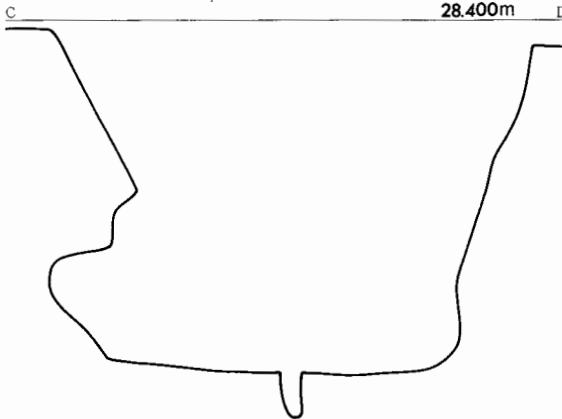
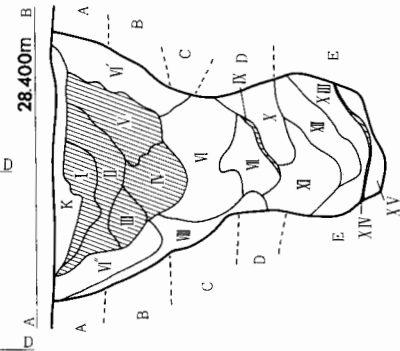
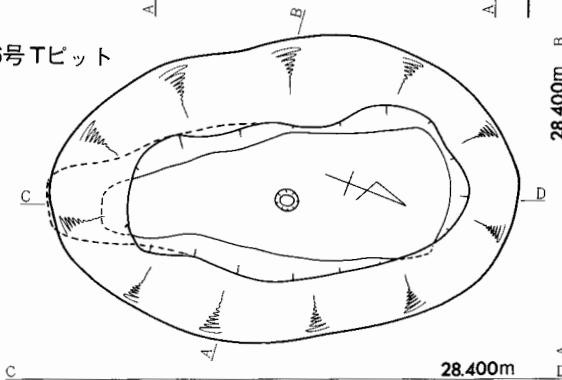
第24号Tビット



第25号Tビット

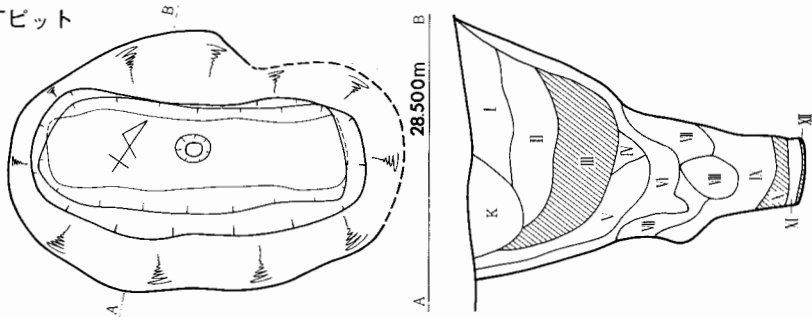


第26号Tビット

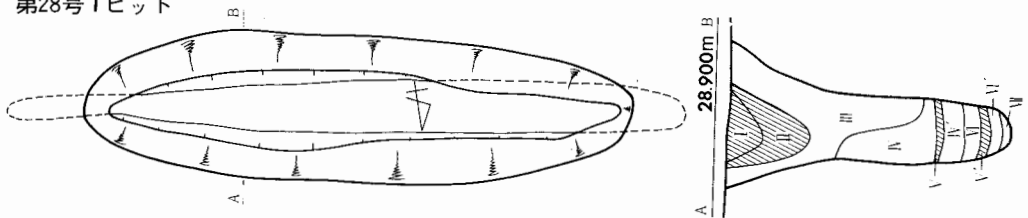


第31図 遺構実測図

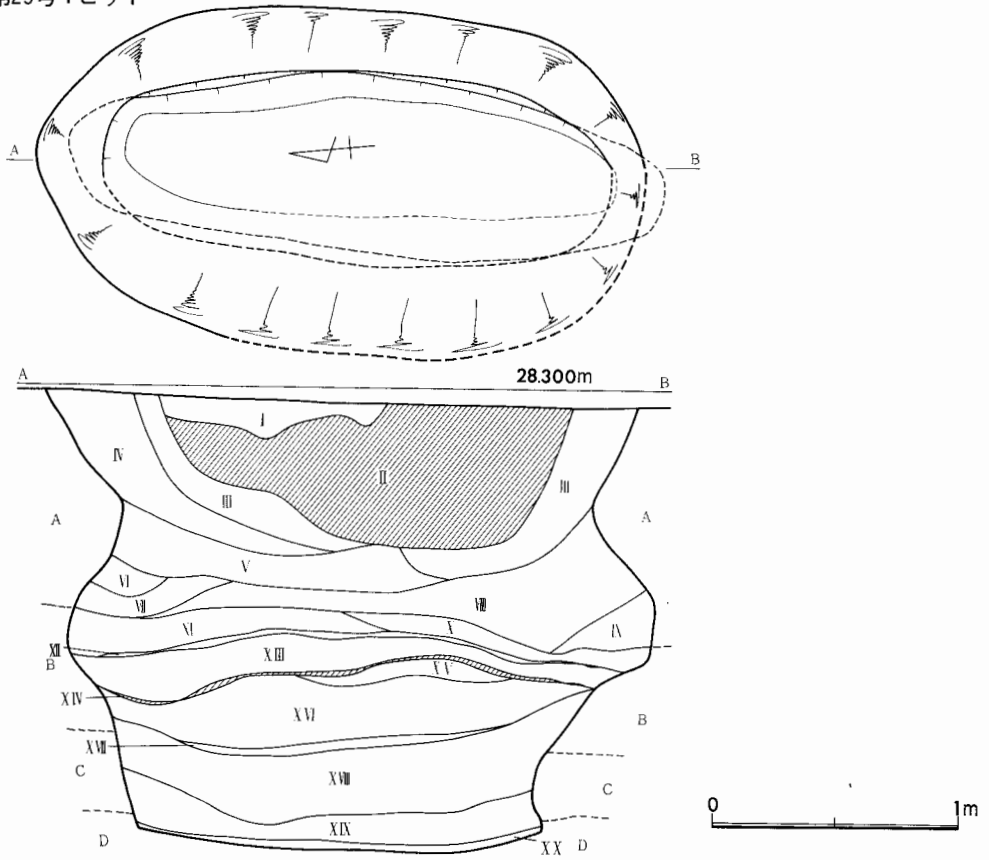
第27号Tピット



第28号Tピット

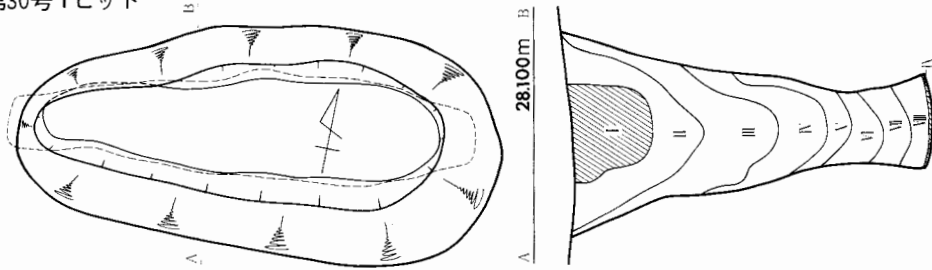


第29号Tピット

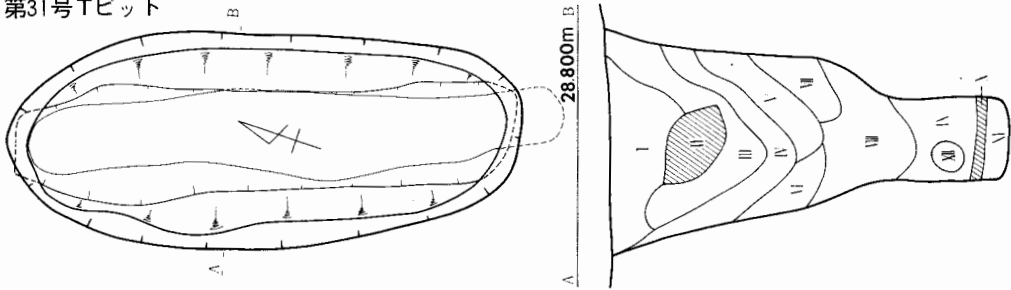


第32図 遺構実測図

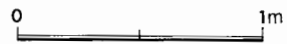
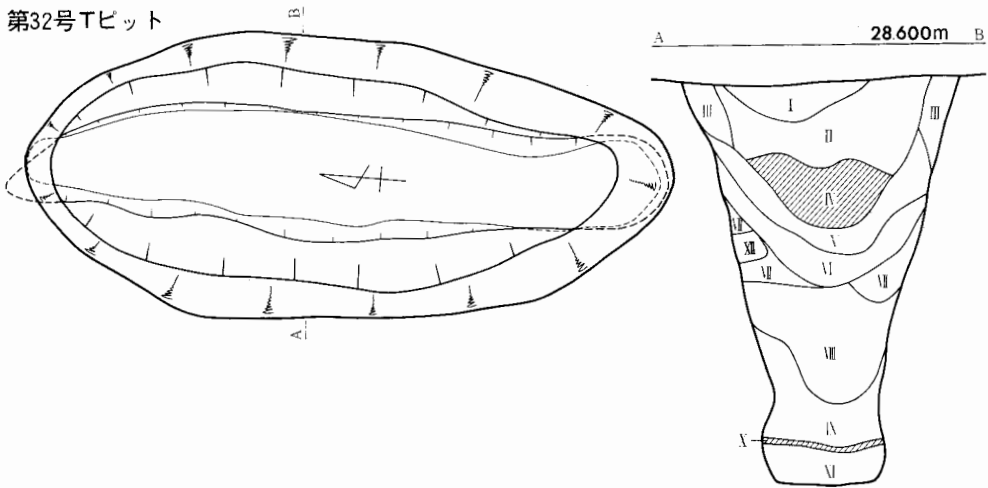
第30号Tビット



第31号Tビット

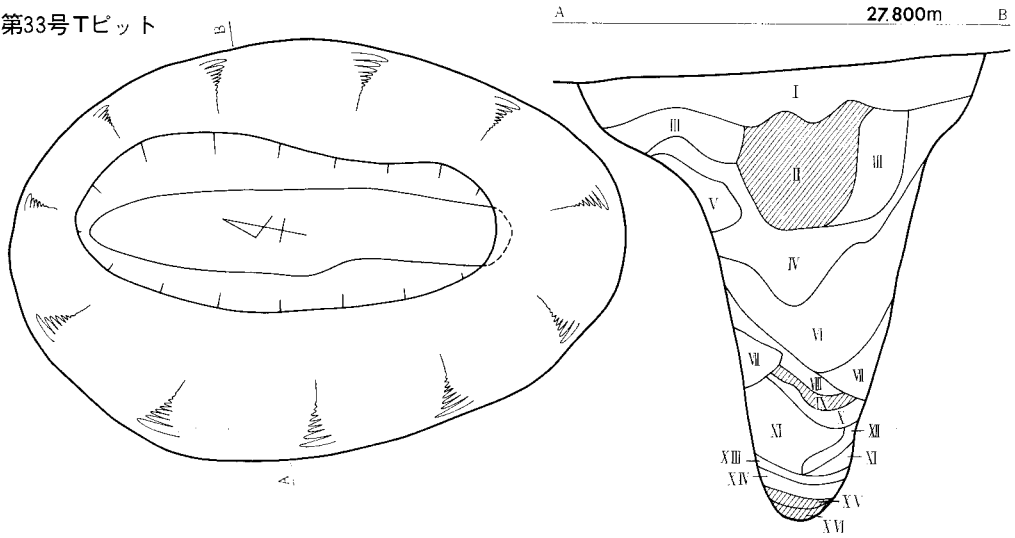


第32号Tビット

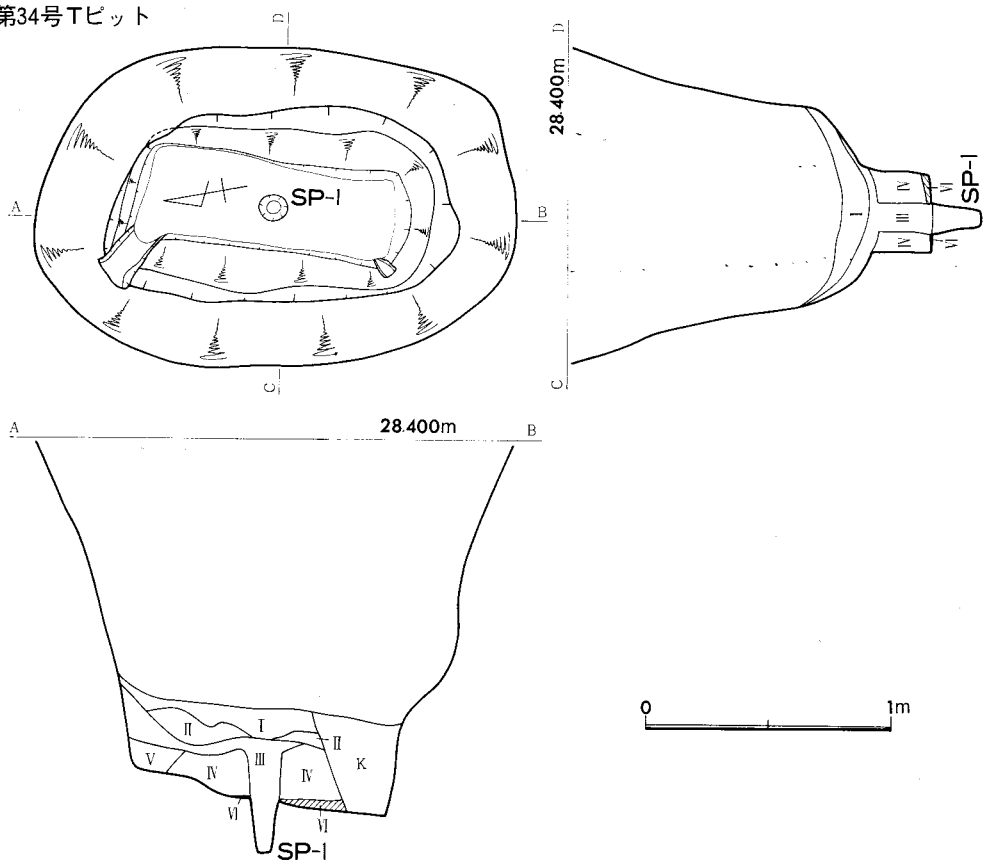


第33図 遺構実測図

第33号Tピット

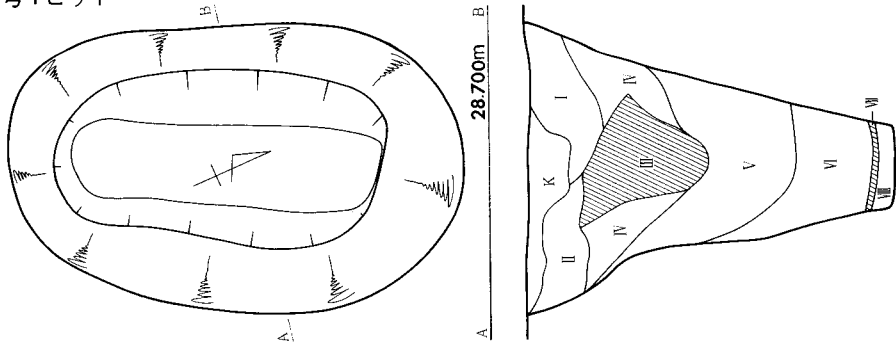


第34号Tピット



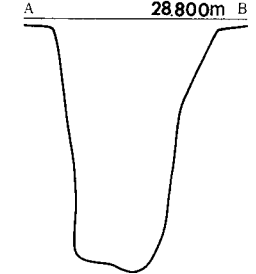
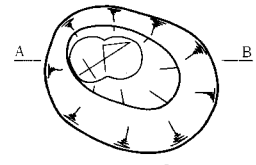
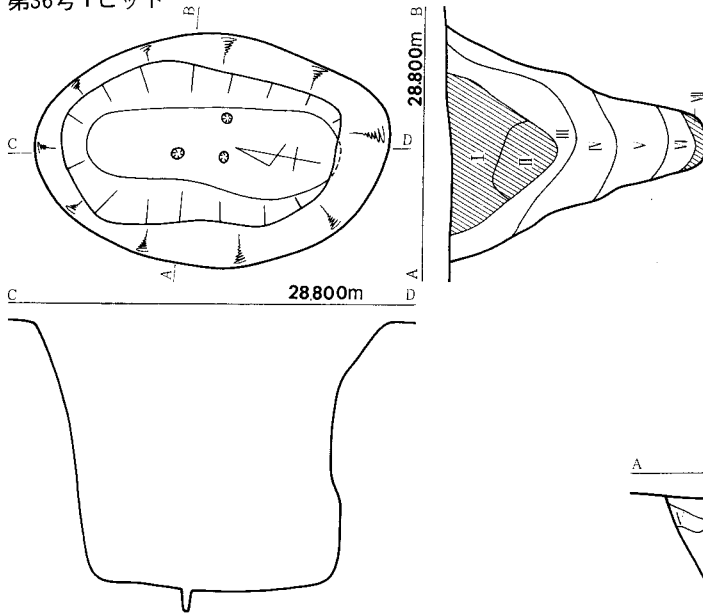
第34図 遺構実測図

第35号Tピット

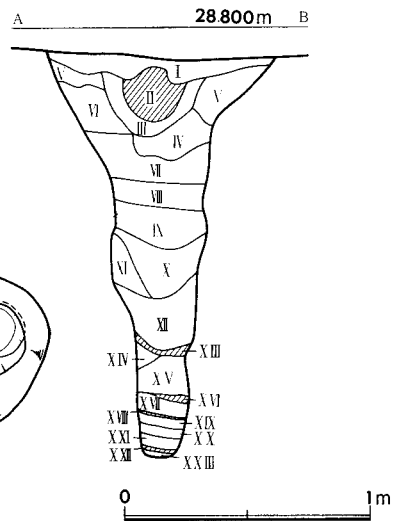
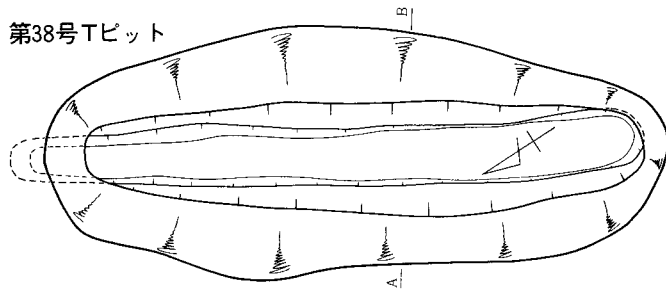


第37号Tピット

第36号Tピット

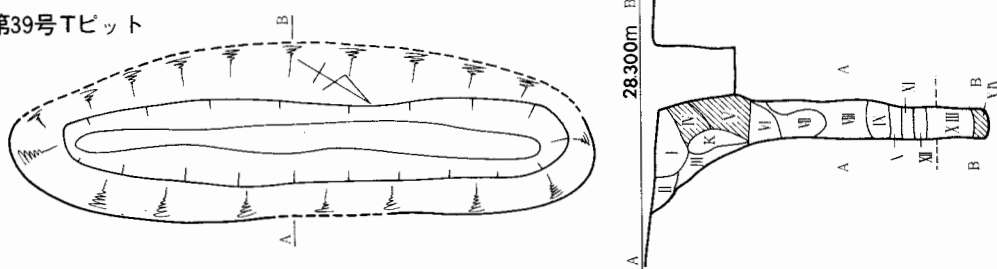


第38号Tピット

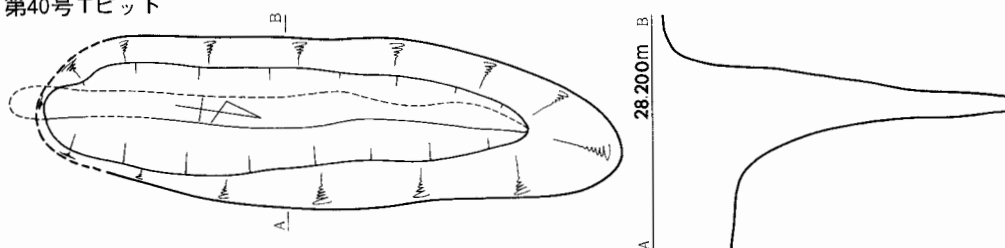


第35図 遺構実測図

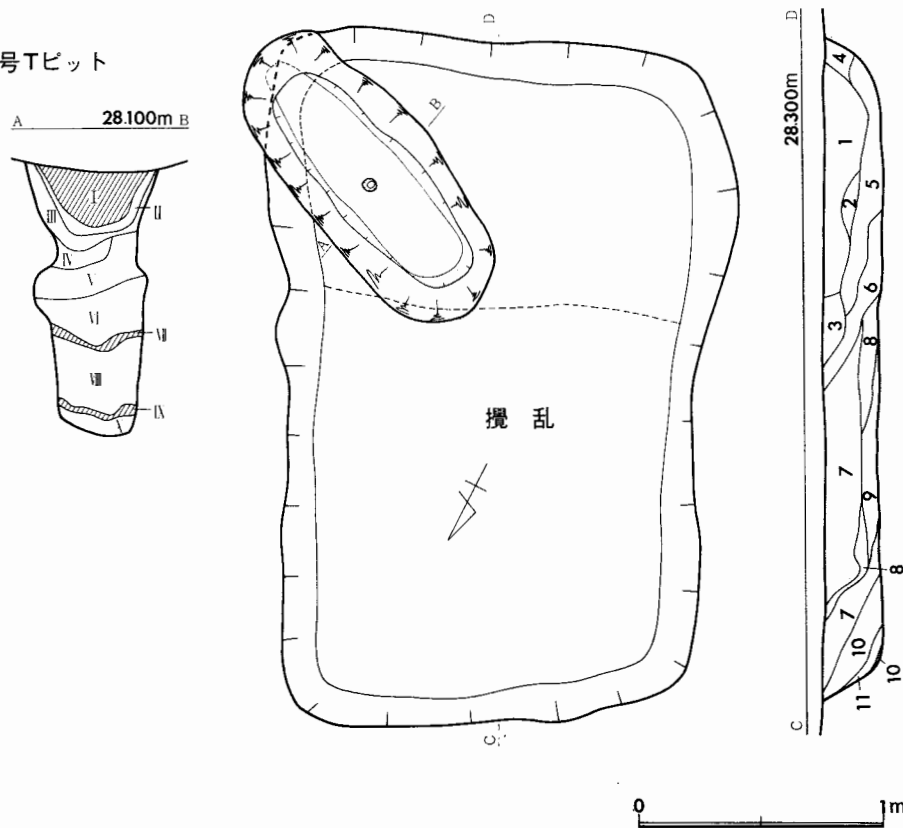
第39号Tビット



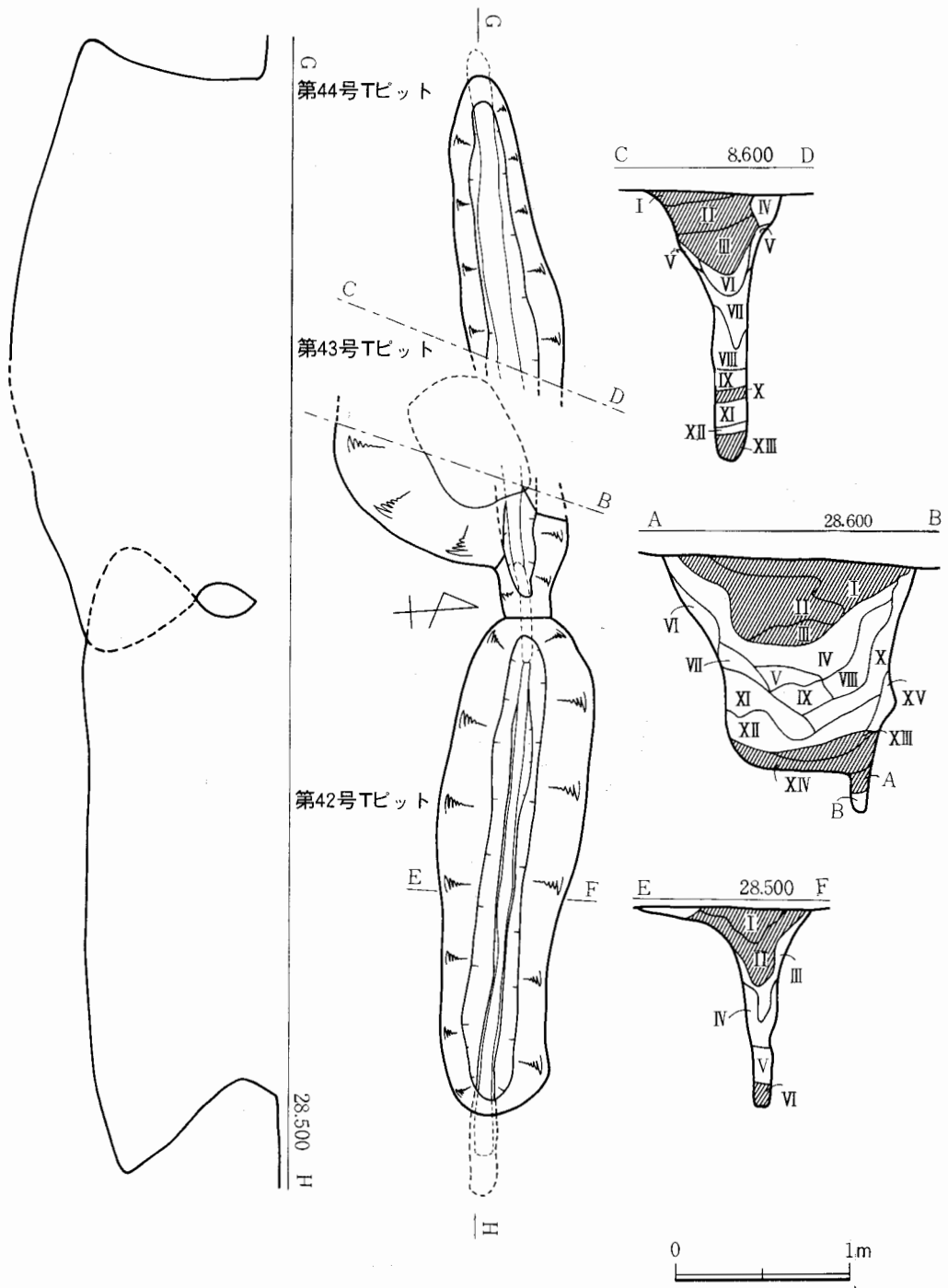
第40号Tビット



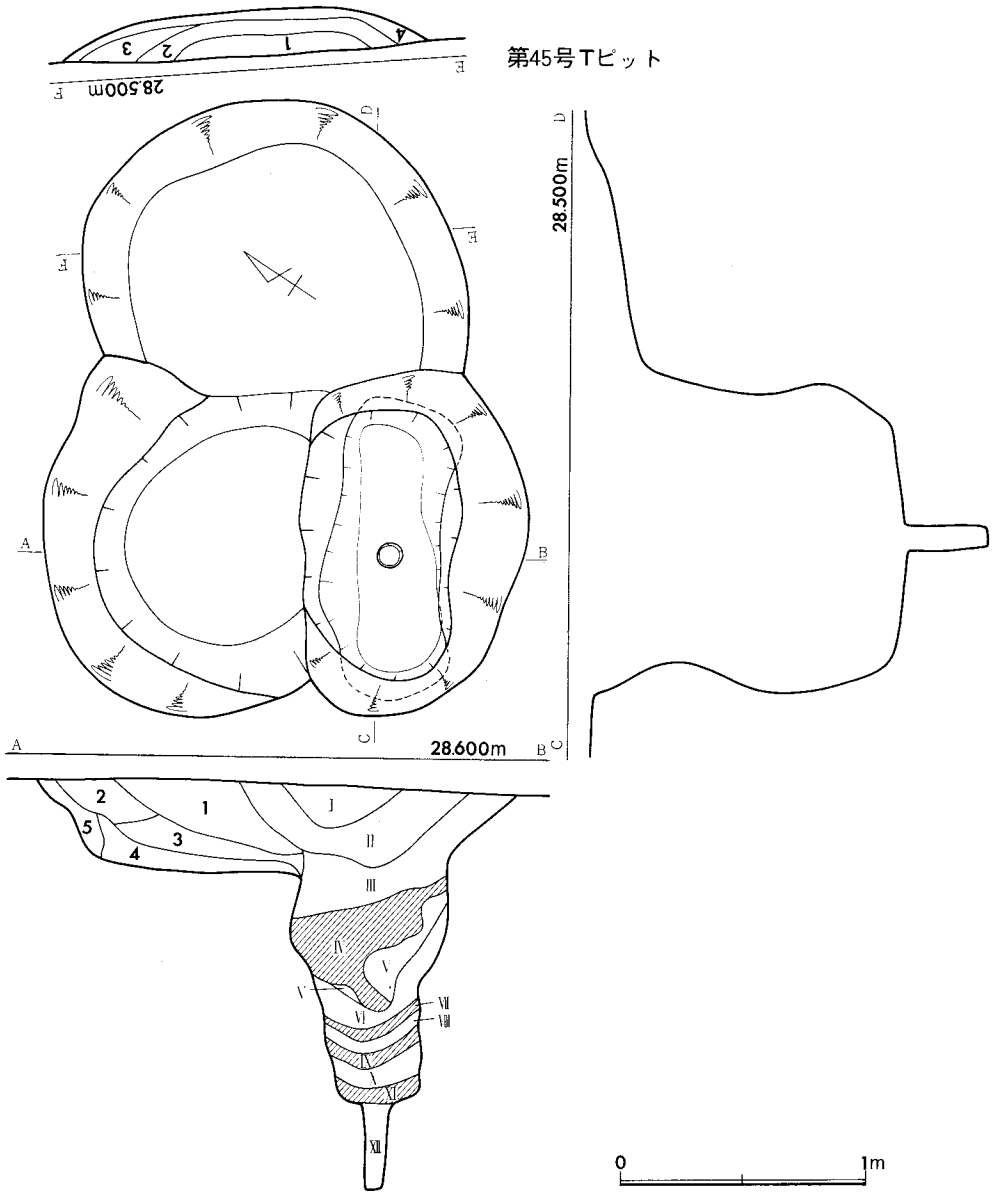
第41号Tビット



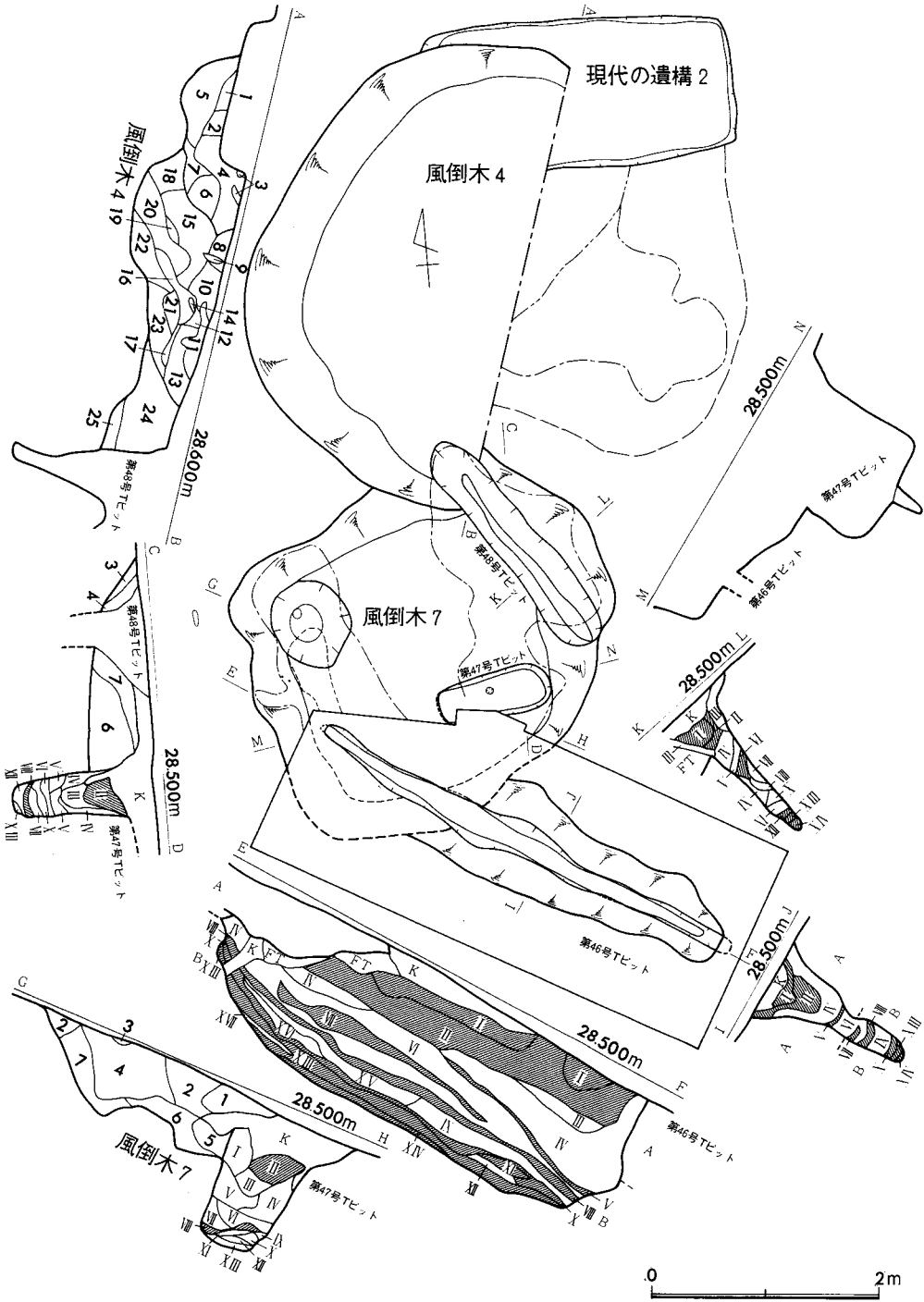
第36図 遺構実測図



第37図 遺構実測図



第38図 遺構実測図



第39図 遺構実測図

Tピット出土遺物

本遺跡に於いては、いわゆるTピットと呼称される溝状、まゆ型等を呈する遺構が48個検出されている。

これらの遺構からは、土器片、石器、剥片等の遺物が若干ではあるが検出されている。

遺構の性格の上からみても、出土した遺物は、遺構に伴うものではなく、覆土中に混入していたものが落ち込んだものと解される。

尚、遺物は土器が大部分を占め、石器等は非常に少ない。土器は縄文時代中期に属するものが大多数を占めている。

第1号Tピット出土土器（第40図1～6）

縄文時代早期に属する貝殻文を特徴とする土器が2点、口縁部に円形刺突文が特徴となる縄文時代中期の土器が2点、底部が1点、器面が磨滅して形式表徴が明らかではないが、縄文時代晩期に属するであろう土器片が1点得られている。

早期の土器は、沈線文が主体をなし（2）さらに貝殻の腹縁圧痕文が組み合わせられ施文されるもの（1）もある。

中期の土器は、口縁部が若干肥厚し円形刺突文が特徴となり、肥厚帯上に連続刺突文が一段ある（5）、口唇上にも縄文が施文される（3）等がある。さらに底部は、底面と胴部が接する部分が若干くびれをみせ、指圧痕が残されているものがある（6）。

晩期の土器は、波状口縁を呈し地文として縄文が施文される（4）のものである。

焼成は、全例良好であり、胎土には砂粒、小石を含んでいる。色調は褐色（3, 5, 6）、茶褐色（1, 2）黄褐色（4）等を呈し、器厚は0.8 cm内外（1, 2）1.0～1.5 cm（3～6）である。

第3号Tピット出土土器（第40図7～10）

全例比較的薄手で、縄文時代晩期に属するものであろう。

口唇は平らであり、口唇の外縁部にへら状工具による縦位のきざみ目が連続してみられる（7, 8）。無文の鉢形土器（9）等がある。縄文は、右下りの単節斜行縄文（7）、羽状縄文（8, 10）等がみられる。

焼成は、比較的良好であり、胎土中には砂粒を含む。色調は黄褐色を呈し、器厚は0.8 cm内外である。

第6号Tピット出土土器（第40図12, 13）

器面が磨滅した土器が、2点得られている。

口縁部に半截竹管の内面を使用する連続刺突文が一段みられ、内面に縄文がみられるもの（12）、比較的厚手で形式表徴が明らかでない土器（13）の2点である。

焼成は悪くもろい（12）、胎土には砂粒を多く含んでいる。色調は黒褐色を呈し、器厚は1.2 cm内である。

第7号Tピット出土土器 (第40図14, 15)

縄文時代早期に属する貝殻腹縁文土器と、縄文時代中期に属する厚手で貼付帯を有するものの2点が得られている。

早期の土器は、沈線文、貝殻腹縁文が組み合わされて施文され、縦位の列点文がみられるもの(14)である。

中期の土器は、太い貼付帯がありその上にきざみ目を施文する、地文として左下りの単節斜行縄文が施文されるもの(15)である。

焼成は良好であり、胎土には砂粒を若干含んでいる。色調は茶褐色(14)褐色(15)を呈する。器厚は0.8 cm (14), 1.5 cm (15)である。

第8号Tピット出土土器 (第40図16~25)

全例、縄文時代中期に属する土器である。

口唇を折り返し肥厚帯を作り出す、肥厚帯上にも縄文が施文される(16)。

以下は、胴部の破片である。

左下りの単節斜行縄文が施文されるもの(17, 21, 23, 24)

右下りの単節斜行縄文が施文されるもの(18~20, 22, 25)等である。

焼成は、比較的良い。胎土には砂粒を含んでいる。色調は黒褐色(16~18)黄褐色(19~25)を呈し、器厚は1.0~1.2cmである。

第9号Tピット出土土器 (第40図26)

比較的厚手で左下りの単節斜行縄文が施文される胴部の破片である。

焼成は良く、胎土に砂粒を若干含んでいる。色調は黒褐色を呈し、器厚は1.0 cmである。

第10号Tピット出土土器 (第40図27~38)

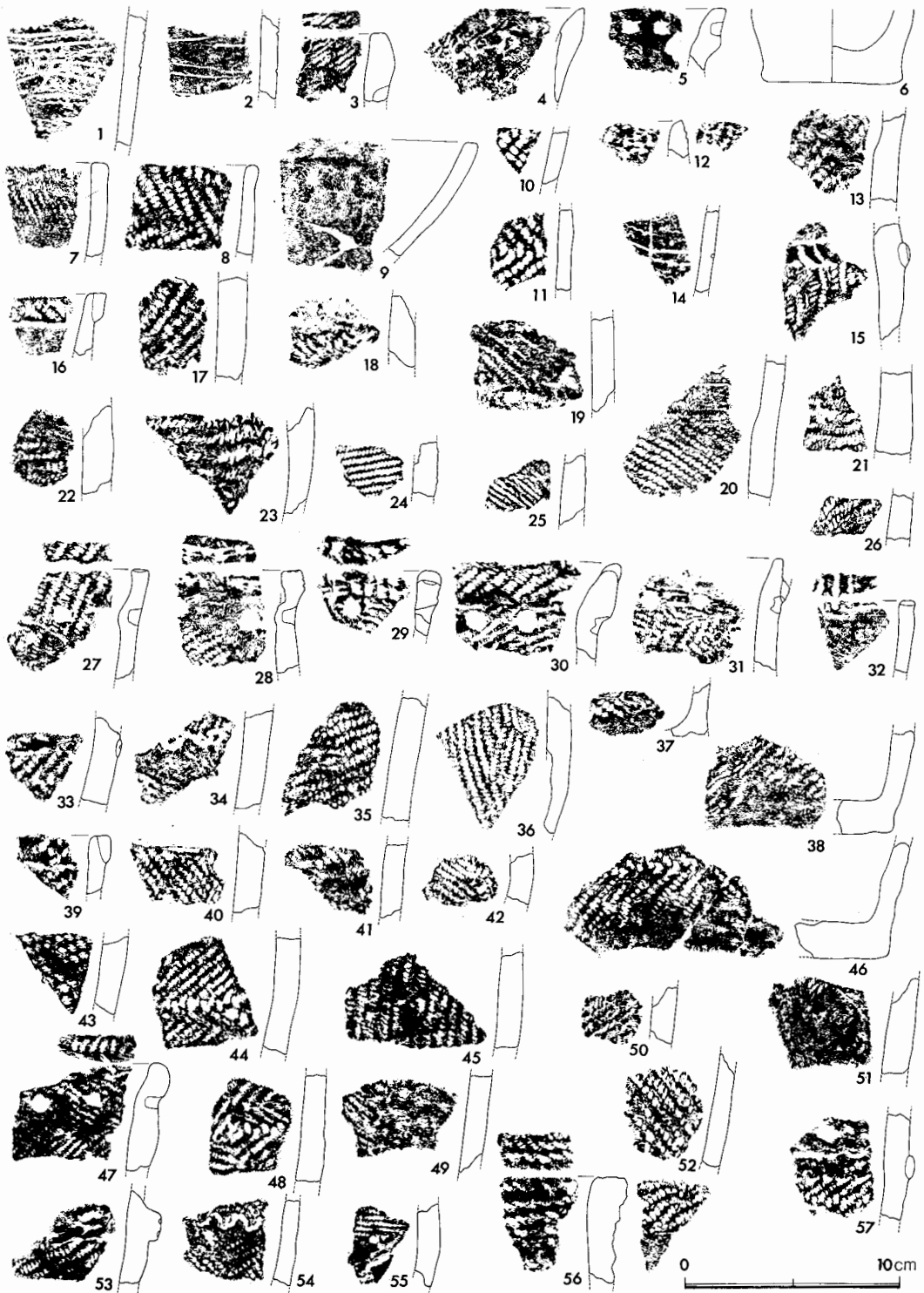
縄文時代中期に属する、円形刺突文が特徴となる土器が主に出土している。他に1点のみ縄文時代晩期に属するであろう土器がある。

中期の土器は、口縁部が若干肥厚し、円形刺突文が例外なくめぐる。口唇上に縄文が施文されるもの(27)、小突起を有するもの(29, 30)、肥厚帯上に半截竹管状工具による連続刺突文が数段施文されるもの(28, 29)等がある。

胴部及び底部については、貼付帯を有するもの(33)等がある。

晩期の土器は、波状口縁を有し口唇上に撚糸の圧痕によるきざみ目が施文される。地文として、左下りの単節斜行縄文がみられる。

焼成は全例とも比較的良く、胎土には砂粒を含んでいる。色調は黒褐色(27, 30)褐色(28, 29, 31~38)を呈し、器厚は0.1 cm (32), 1.2 cm 内外(27~31, 33~38)である。



第40図 Tピット内出土土器拓影図

第11号Tピット出土土器（第40図39～42）

縄文時代中期に属する、比較的厚手の土器である。

39は、口唇を折り返し肥厚させ、縄文を施文する。沈線文のみられるもの(40)等がある。

焼成は比較的良好であり、胎土には砂粒を含んでいる。色調は黒褐色(39)茶褐色(40)褐色(41, 42)を呈し、器厚は1.2 cm内外である。

第12号Tピット出土土器（第40図43～46）

比較的厚手の縄文時代中期に属する胴部片が3点と底部片が1点得られている。

複節の斜行縄文が施文されるもの(43)。

単節の羽状縄文が施文されるもの(44)。

左下りの単節斜行縄文が施文されるもの(45)等がある。

底部は、胴部と底面の接する部分にて若干くびれをみせる。

焼成は良好であり、胎土には砂粒を含んでいる。色調は、黄褐色を呈し、器厚は、1.2cm内外である。

第13号Tピット出土土器（第40図53～57）

縄文時代中期に属する比較的厚手の土器が得られている。

貼付帯を有するもの(53, 57)、貼付帯上に半截竹管状工具による連続刺突文が施文されるもの(53)。

口縁部が肥厚し、口唇上、口縁に捺糸圧痕文が施文され、内面にも縄文が施文されるもの(56)。

右下りの単節斜行縄文の施文されるもの(54, 55)等である。

焼成は良好であり、胎土には砂粒を含んでいる。色調は黒褐色(53, 56)、褐色(54, 55, 57)を呈する。器厚は、1.2 cmである。

第14号Tピット出土土器（第41図47～52）

全例縄文時代中期に属する土器である。

口縁が若干肥厚し、口唇上にきざみ目が付けられ、口頸部に円形刺突文がめぐる(47)。

以下は、胴部片である。

右下りの単節斜行縄文が施されるもの(50, 51)

左下りの単節斜行縄文が施されるもの(49, 52)

単節の羽状縄文が施文されるもの(48)等がある。

焼成は比較的良好であり、胎土には砂粒を含んでいる。色調は、褐色(47, 50)黄褐色(48, 51)茶褐色(49, 52)、器厚は1.2 cm内外である。

第15号Tピット出土土器（第41図58～64）

全例縄文時代中期に属する土器である。

口縁部が肥厚し、幅広の沈線文が施文され円形刺突文が施される (58)。
小形の土器で、口唇上に連続刺突文が一段みられるもの (59) 等があり他は、胴部破片である。
左下りの単節斜行縄文の施されるもの (61, 64)
右下りの単節斜行縄文の施されるもの (60, 62)
焼成は、不良である。胎土中には砂粒を含んでいる。色調は、黒褐色 (58), 褐色 (59~62, 64)
茶褐色 (63) を呈している。器厚は、1.0~1.5cmである。

第16号Tピット出土土器 (第41図75, 76)

縄文時代中期に属する土器が2点のみ得られている。
太い貼付帯を有し、貼付帯上に連続刺突文が施されるもので内面にも縄文が施文される (75)。
左下りの複節斜行縄文が、施文される胴部破片 (76) 等がある。
焼成は比較的良好であり、胎土には砂粒を含み、色調は茶褐色を呈する。器厚は1.0cm内外である。

第17号Tピット出土土器 (第41図65~74)

全例縄文時代中期に属する土器である。
口縁が若干肥厚し、口頸部に円形刺突文がめぐる (65, 66), 肥厚帯上に半截竹管状工具の先端による連続刺突文が2段みられ内面にも縄文が施文されるもの (65) がある。
貼付帯が特徴となり、貼付帯上に半截竹管状工具の内面を押しあてたきざみ目が施文される (67)。
器面内面にも縄文の施文されるもの (68)
半截竹管状工具の内面を使用する沈線文のみられるもの (74)
口縁が若干肥厚し、内面にも縄文の施文されるもの (69) 等がみられる。
胴部片については、左下りの単節斜行縄文を有するもの (71~73), 内面にも縄文の施文されるものがある (71)。
右下りの単節斜行縄文の施文されるもの (70)。焼成は良好である。
胎土は、砂粒を多く含んでいる。
色調は、黒褐色 (69) 褐色 (65~68, 70~74) を呈する。器厚は、1.0~1.2cmである。

第18号Tピット出土土器 (第41図77~79)

器面が磨滅しており形式表徴が明らかにされないが、胎土、焼成等により縄文時代中期に属するであろうと考えられる土器が得られている。

右下りの単節斜行縄文が施文されるもの (79)
左下りの単節斜行縄文が施文されるもの (77, 78)
焼成は不良であり、胎土は砂粒及び小石を含んでいる。色調は黄褐色を呈し、器厚は1.2cm内外である。



第41図 Tピット内出土土器拓影図

第19号Tピット出土土器 (第41図80～85)

全例、縄文時代中期に属する土器である。

口縁部に円形刺突文がめぐり、口唇上にまで縄文が施文されるもの(80)。

口唇上にきざみ目を有し、口縁が若干外反する。複節の斜行縄文が地文として施文される(81)。

以下は、胴部破片である。

右下りの単節斜行縄文が施文されるもの(85)

左下りの単節斜行縄文が施文されるもの(92)

羽状の単節縄文が施文される(83, 84)。

焼成は全て良好であり、胎土は砂粒及び若干の小石を含んでいる。色調は、黒褐色(84) 褐色(85) 黄褐色(80～83)を呈する。器厚は、1.0～1.5cm内外である。

第22号Tピット出土土器 (第41図86)

形式表徴の明らかではない土器片が一点のみ得られている。

焼成は良好であり、単節の斜行縄文が施文されている。茶褐色を呈し、器厚は、1.0cm内外である。

第31号Tピット出土土器 (第41図87, 88)

縄文時代中期に属する土器片が、2点得られている。

無節の右下り斜行縄文が施文されるもの(87)

左下りの単節斜行縄文が施文されるもの(88)

焼成は良く、胎土には砂粒、小石を含んでおり、繊維を混入した痕跡を有するもの(87)もある。色調は黄褐色を呈する。器厚は、1.2cm内外である。

第33号Tピット出土土器 (第41図89, 90)

器面が磨滅し、形式表徴の明らかにされない土器片が2点得られている。胎土等より縄文時代中期に属するであろうと考えられるものである。

左下りの単節斜行縄文の施文されるもの(90)

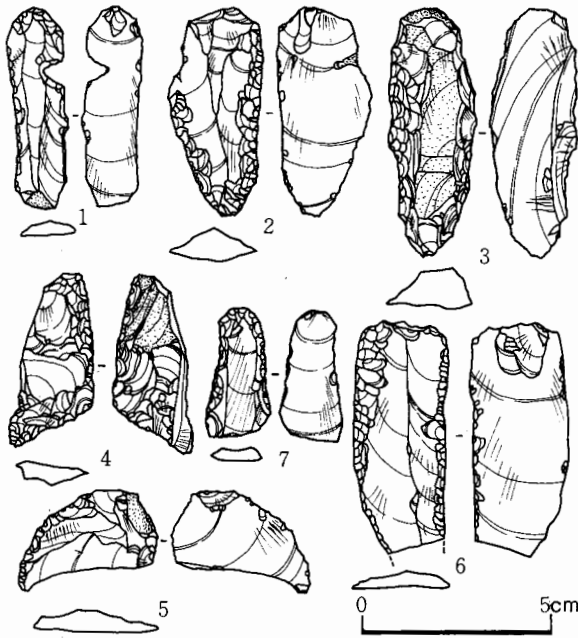
羽状の単節縄文が施文されるもの(89)

焼成は不良であり、胎土には砂粒を多く含んでいる。色調は、黒褐色(90) 茶褐色(89)を呈する。器厚は、1.2cm内外である。

第38号Tピット出土土器 (第41図91)

器面が磨滅しており、全く形式表徴の明らかな土器片が1点得られている(91)。

第42号Tピット出土土器 (第41図92～94)



第42図 Tピット内出土石器実測図

貝殻腹縁文と沈線文が組み合わされた縄文時代早期に属するもの(93)と、

比較的厚手で砂粒及び小石を含んだ縄文時代中期に属するもの(92, 94)が得られている。

色調は、茶褐色(93, 94)黄褐色(92)を呈している。器厚は、0.8 cm(93), 1.2 cm(92, 94)である。

第43号Tピット出土土器(第41図95, 96)

比較的厚手の胎土、焼成等より縄文時代中期に属するであろう土器が得られている。

左下りの単節斜行縄文が施文されている(95, 96)

焼成は比較的良好であり、胎土には砂粒を多く含んでいる。色調は、黒褐色を呈しており、器厚は、1.2 cm内外である。

第45号Tピット出土土器(第41図97~103)

全例厚手で縄文時代中期に属する、土器片が得られている。

口頸部に円形刺突文がめぐる(97)

口縁が肥厚し、肥厚帯上に貼付帯が2段付けられ、その上にきざみ目を付ける(101)。

右下りの無節斜行縄文の施文されるもの(98)

左下りの単節斜行縄文の施文されるもの(99, 102, 103)

底面のみ底部1点(100)等が出土している。

焼成は比較的良好であり、胎土中には砂粒を多く含んでいる。色調は、黒褐色(98, 101)褐色(97, 103)黄褐色(99, 100, 102)

器厚は、1.2~1.5 cm内外である。

第46号Tピット出土土器(第41図104~107)

縄文時代中期に属する、土器が得られている。

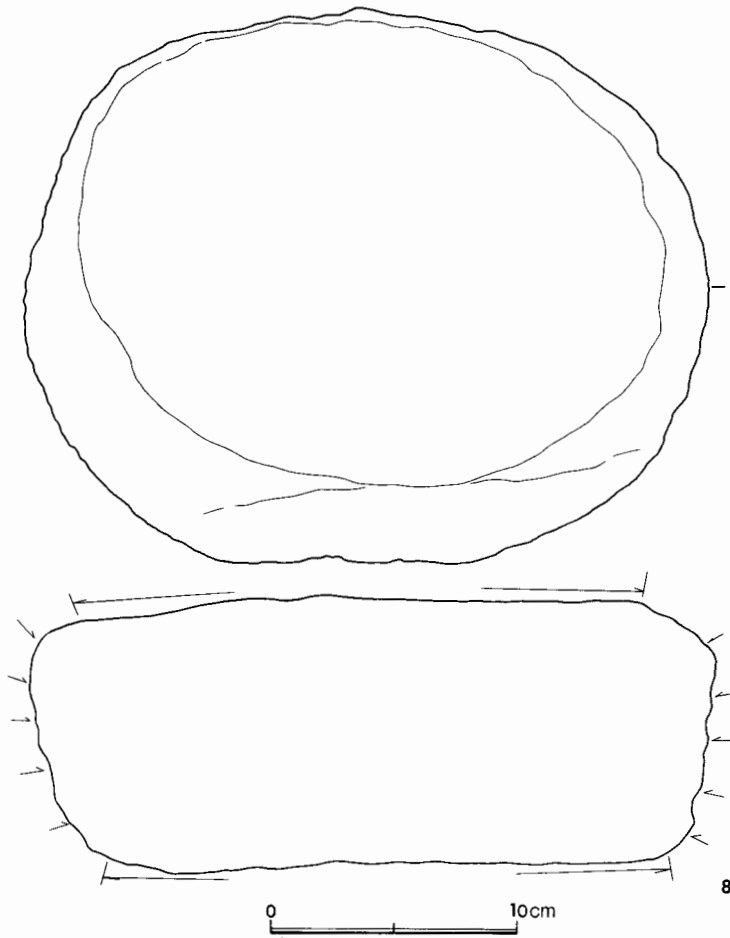
口縁部が肥厚し、肥厚帯上にへら状工具による連続刺突文が一段あり、円形刺突文がめぐる(104)。

胴部片については、

左下りの単節斜行縄文が施文される(109, 107)

底部片が1点(106)みられる。

焼成は、比較的良く、胎土中には砂粒を多く含んでいる。色調は、褐色(104, 106), 黒褐色(105,



第43図 Tピット内出土石器実測図

107)を呈しており、器厚は、1.0～1.2cm内外である。

Tピット内出土石器（第42・43図）（図版29B，31）

剥片石器のすべてが削器の類である。

出土石器と同様に覆土中に混入していたものが落ち込んだと解される。全例黒耀石製である。

1，第1号Tピット出土，縦長剥片の一侧縁のエッジに2次加工を施したものである。

2，第46号Tピット出土，縦長剥片の左右両側縁のエッジに2次加工を施したものでバルブ下方に尖頭部を作り出している。

3，第8号Tピット出土，横剥ぎの幅広剥片を素材に左右両側縁に2次加工を施したもので，表面に大きく

原石面を残している。

4，第6号Tピット出土，両面加工が乱雑になされている。

5，6，第17号Tピット出土，6は，縦長剥片の左右両側縁に2次加工を施したものであり，5は横剥ぎの幅広剥片を素材として一侧縁に加工がなされている。

7，第31号Tピット出土，縦長剥片の左右両側縁に2次加工を施したものである。

8，（第43図）第19号Tピット出土，石皿であり，若干ふくらんだ小判形を呈している。周囲は敲打により整形されており，使用面は，2面にわたり，細かな敲打による虫食い状態を呈している。安山岩製である。

（羽賀 憲二）

第3章 発掘区出土の遺物

本遺跡より得られた遺物は、遺構より検出されたものを除いて、何ら層位的な出土事実は得られていない。

先の項で記した如く、本遺跡における遺物包含層は、きわめてうすく、耕作時に於けるプラオによる攪乱は、基盤のローム層上面にまでおよんでいる。為にうすい遺物包含層は、完全に攪乱され遺物の層位的な裏付けは一切なされなかった。

しかし、沢に近くなって黒色腐植土は、徐々に深くなり、プライマリーに近い状態を残すと考えられる部分もみられた。

この状態からみると、これから記す「第Ⅱ群土器」以降の土器は、黒色腐植土層中にみられ、第Ⅰ群土器は、基盤のソフトローム層上面にくい込む様な状態で検出されているものも多くみられた。

第1節 土 器

本遺跡より得られた土器は、縄文時代早期に属する「貝殻文を特徴とする平底土器」と縄文時代中期に属するであろう、円形刺突文、沈線文、貼付帯等が特徴となる土器群、若干の縄文時代晩期に位置するであろう土器が得られている。

縄文時代早期の土器は、今の所類例があまりみられない様であるが、縄文時代中期の土器は、「トコロ6類土器」「余市式土器」「平岸天神山式土器」等に対比されるものである。また縄文時代晩期の土器は「タンネットウL式土器」に相当する土器群である。

第Ⅰ群土器（第44, 45図）（図版21A, B, 22A）

今回の調査では、他の土器群に比較して若干より得られてはいないが、文様等々は非常にバラエティに富んでいる。

土器破片より推定して、器形は平底円筒形をなし、貝殻腹縁文、沈線文、列点文が単独にあるいは複合して施文される土器群である。

文様要素、その組み合わせより5～6の小グループに細分される。

縄文時代早期に属するものでその中でも早い時期のものと考えられる。

a (1, 2)

無文、細い擦痕文が付けられるものをaとする。

平縁で口唇下に列点文が一段、口縁より垂下する列点文が付けられたもの。

口唇部の断面は、やや丸味を帯びる(1)。

細かな横位の擦痕がみられる(2)。



第44图 发掘区出土第I群土器拓影

c (3~11)

貝殻腹縁文のみ器面にみられるものを、cとする。

縦位のジグザグに連続して施文される波状貝殻腹縁文がみられる(5, 6)。

口唇は、削り取ったかの様に鋭角的となり口唇上には、沈線によるきざみ目が連続してみられるものがある(6)。

横位に数段貝殻腹縁文が施文され、その下段に縦位の波状貝殻腹縁文がある。口唇の断面は削り取ったかのように鋭角的となる。

横位の貝殻腹縁文が数段めぐり(3, 7, 10, 11)。さらに内面には、整形の為の条痕文が見られるもの(10)もある。

横位の貝殻腹縁文が数段めぐり、その下位に縦位の波状貝殻文が施文されるもの(8, 9)等もみられる。

色調は、黒褐色を呈するもの(4, 6)の他は全て赤褐色となる。胎土中には全例少量の火山灰粒と石英を含んでいる。焼成は非常に良好である、器厚は0.6~0.8cm内外である。

d (12~18)

貝殻腹縁文と沈線文が交互に複合して施文されるものをdとした。

口唇に小突起を有するゆるやかな波状口縁をなし、口唇の断面は斜めに削り取ったかの様に鋭角的となる。さらにこの部分にはきざみ目が連続して付けられる。

文様構成は、横位にめぐり数本の沈線文の間に貝殻腹縁文が数段ずつ施文されるものがある(13)。他の物の文様も、前述のものと同様のモチーフをなす。

18は、横位にめぐり沈線文を中心として矢羽根状に貝殻腹縁文が連続して押圧される。

色調は、黒褐色を呈するもの(14, 17)の他は全例、茶褐色ないしは赤褐色を呈する。胎土中には、ごく少量の火山灰粒と石英を含んでいる。焼成は非常に良好であり、器厚は0.6~0.8cmである。

e (19~28, 39)

dと分類した、貝殻腹縁文と沈線文が交互に複合施文されるものに、列点文がさらに文様要素として加わるものをeとする。

口唇の形状として、断面がやや丸味を帯びるものが多く、小突起を有し波状口縁となるもの(19, 26)、平縁となるもの(20, 25, 27, 28)等がある。

列点文は、小突起下に垂下する様施文される(19)、口唇下にも垂下する列点文が施こされる(20)、口縁に並列して列点文が2~3段めぐり(26, 28)。

横位にめぐり貝殻腹縁文、沈線文が交互に数段ずつ施文され、その間に列点文がめぐりもの(21~25, 27, 29, 39)が主体となる。

口唇上に、きざみ目が連続して施文されるもの(19, 20)もみられる。

色調は、全例赤褐色、茶褐色を呈する。胎土中には、ごく少量の火山灰粒と石英を含み、焼成は



第45図 発掘区出土第I群土器拓影

非常に良好である、器厚は0.6~0.8cm内外である。

f (30~38, 40~46, 53~63)

貝殻腹縁文を欠き、沈線文のみあるいはこれに列点文が加わって施文されるものをfとした。

30~32は、同一個体かと考えられるもので、横位にめぐる乱雑な沈線文が数本みられ、その間に列点様の短い沈線が所々に施文される。内面には、整形の為の横位の条痕が残されている。

横位に数段めぐる沈線文のみが文様となるもの (35, 37, 40, 42, 44, 46)。

35は、口唇の断面が丸味を帯びるよう整形され、平縁の口縁部である。

37は、口唇の断面が、削り取ったかのように整形され鋭角状をなし、小突起があるゆるやかな波状口縁となるものである。

41は、横位に数段から数10段めぐる沈線文に縦位の列点文が加わる。

横位に数段から数10段めぐる沈線文と、横位に列点文がめぐる、あるいは、幾段かの沈線中に列点文がめぐるのがある (34, 36, 43, 45, 53~63)。

36は、口唇上が平らに削り取られたかのように整形され、断面は角頭状をなしている。口縁部に施

こされた列点文の上にさらに1~2mm間隔に縦位の連続してつけられた細かいきざみ目がみられる。

34は、口唇が削られたかの様に整形され、断面は鋭角的となり、平縁である。口唇直下に一段の列点文がめぐり、その下位に横位の沈線文が数段0.5~1.2cm間隔にめぐる。

43, 45は、横位にめぐる沈線文中に列点文が数mmおきに施こされたものである。

53~63は、同一個体であり、推定だが口径約34cm、現在高さ30cm程度と非常に大形の深鉢形土器である。

口唇部の断面は鋭角的に整形され、平縁となる。

横位に数10段めぐる沈線文が特徴となり、口唇下に一段の横位にめぐる列点文、口唇下3本目までの沈線中に列点文が施こされている。

器形は、平縁の円筒形となるであろうが、口縁部はやや内反の傾向を示めず。胴部は、若干脹り出している。

胴部下、底部近くに至ると沈線文は減少し、底面近くに至ると全くの無文となる。

色調は、茶褐色、赤褐色を呈するもの(30~32, 35~37, 42, 43, 45, 46)の他は、全例黒褐色を呈している。胎土中には、全例ごく少量の火山灰粒と石英を含み、焼成は非常に良く焼きは硬い。器厚は、0.6~0.8cm内外である。

底部 (47~52)

得られた底部片は、全例平底である。

底面が胴部より、若干の脹り出しをみせるもの(50, 52)

脹り出しをみせないもの(47~49, 51)の2種の形態がある。

ほとんどのものが、無文か細い擦痕がみられるものである。

沈線文が数段横位にめぐるもの(48)。

条痕文が横位に施文されるもの(50)等もある。

色調は、赤褐色及び茶褐色を呈し、胎土中には例外なくごく少量の火山灰粒と石英を含んでいる。焼成は、良好であり硬い。器厚は、0.8~1.0cm内外である。(羽賀憲二)

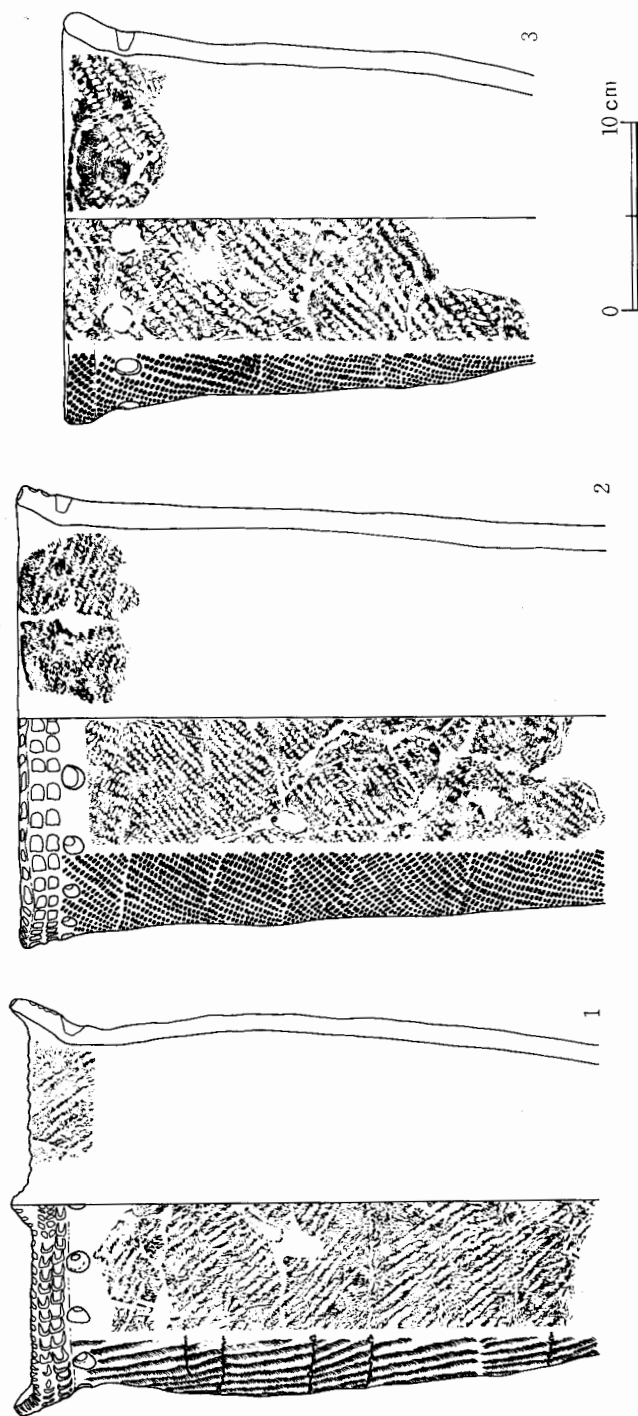
第Ⅱ群土器 (第46~50図)(図版22B, 23A, B, 24A)

本遺跡で得られた土器群中大部分を示める土器であり、縄文時代中期に属する厚手の土器群である。

少なくとも、3型式の土器がみとめられる。

a類 (第46図, 第47図, 第48図33~40, 47~49)

器形は、土器破片より推定するならば、深鉢円筒形をなし、口縁部が若干肥厚し、肥厚帯下に直径1cm内外の丸棒状工具あるいは竹管状工具による円形刺突文が2~3cm間隔で器面をめぐっている。いわゆる「トコロ6類土器」によって代表される土器群である。



第46图 尧掘区出土第Ⅱ群土器类测图

完形土器 (第46図)(図版19B, 20)

1. 口径約22cm, 現存部高さ30cmの大形の深鉢形土器である。底部は欠損している。

口縁部は若干肥厚し, 外反しており4個の突起が存在している。口頸部にてくびれをみせ, 胴部にて若干張らみをみせる。

口唇上には, 半截竹管状工具の内面を使用した連続刺突文がみられ, さらに口縁の肥厚帯上にも同様の文様が2段みられる。

肥厚帯下には, 直径1cm内外の円形刺突文が2~3cm間隔にめぐっている。頸部より以下の器面には右下りの無節斜行縄文が地文として施こされ, 口縁部内面にも同様の縄文が施文される。

焼成は良好であり, 胎土には砂粒, 小石を含み, 繊維を若干混入した痕跡も認められる。色調は黄褐色を呈し, 器厚は1.0cm内外である。

2. 口径約25cm, 現存部高さ31cmの大形の深鉢形土器である。底部は欠損している。

口縁は平縁であり, 若干肥厚し外反している。口頸部より胴部にかけてはすんなりと直立に近く下っている。

口唇上には, 棒状工具を使用する連続刺突がみられ, 肥厚帯上には同種の文様が2段みられる。肥厚帯下には, 直径1cm前後の円形刺突文が2~3cm間隔でめぐっている。

口頸部下より胴部には, 左下りの単節斜行縄文が地文として施文されており, 口縁部内面にも同様の縄文が施文される。

焼成は比較的良好であり, 胎土には砂粒, 小石を含み, 若干の繊維を混入した痕跡を有している。色調は, 褐色を呈し, 器厚は1.2cm内外である。

3. 底部を欠損している。口径22cm, 現存部高さ35cmの深鉢形土器である。

口縁部は, 若干肥厚しやや外反する傾向がうかがえる。胴部は直立に近く, 底部近に至って若干すばまる。

口頸部に直径1.5cm内外の円形刺突文が4cm間隔にめぐっている。地文として左下りの単節斜行縄文が器面全面に施文され, 口縁部内面にも同種の縄文が施こされている。

焼成は比較的良好であり, 胎土中には砂粒, 小石を含んでいる。色調は黒褐色を呈し, 器厚は, 1.2cm内外である。

口縁はやや外反し, 肥厚するものもみられる。例外なく口頸部に1cm内外の円形刺突文がめぐっており, 地文として縄文のみ施文されるものである(1~15, 18~20)。

さらに口唇上にも文様の施文されるもの(1, 9, 13)

口縁部内面にも縄文が施文されるもの(4, 20)等がみられる。

16は, 円形刺突文を欠いているが, 口唇上に竹管文が施文されている。

口縁は, やや外反し小突起を有するものもある。

口縁部は若干肥厚し, その肥厚部に2~3段のへら状工具ないしは半截竹管状工具の内面を使用する連続刺突文がみられ, 例外なく, 肥厚帯下に直径1cm内外の円形刺突文がめぐっている。さら



第47图 发掘区出土第Ⅱ群土器拓影

に地文として縄文を施文するものである (17, 21~32, 33, 40)。

口唇上にも連続刺突文がみられるもの (26, 27, 36)

口唇上に縄文のみられるもの (30, 33, 34, 35, 39), 口縁部内面にも縄文が施文されるもの (21, 25~27, 32, 35, 39) 等がみられる。

焼成は全例良く, 胎土には砂粒, 小石を含んでおり若干の繊維を混入した痕跡のあるもの (1, 2, 7, 9~12, 14, 17, 21, 22, 24, 26, 27, 35, 39, 40) がみられる。

色調は, 褐色 (2, 4, 10, 14, 19, 25, 28, 36), 黄褐色 (1, 5, 7, 12, 13, 15, 26, 27, 36), 茶褐色 (3, 6, 8, 11, 16, 20~23, 29, 33, 35, 37, 39), 黒褐色 (9, 17, 18, 24, 30~32, 34, 40) 等を呈している。器厚は1.2~1.5cm内外である。

47~49は, 円形刺突文を欠いているが, A類のグループに入るものと考えられる。

b 類 (41~46)

本遺跡より得られたものは非常に少ないが, いずれも, 口縁部に口唇を折り返えした肥厚帯を有し, 胴部には幅広の粘土紐を貼付するといった特徴を有し, 貼付帯上には地文と同様の縄文が施文される。いわゆる「余市式土器」と称されるグループである。

焼成は, 比較的良く, 胎土には若干の砂粒を含んでいる。色調は, 淡黄褐色 (44) 褐色 (43) 黄褐色 (42) 茶褐色 (46) 黒褐色 (41, 45) を呈している。器厚は1.2cm内外である。

c 類 (第49図57~91)

粘土紐による貼付帯, 半截竹管状工具を使用する。連続刺突文, 沈線文等により器面に複雑な文様を構成する土器群であり, 「平岸天神山式土器」等に代表される土器群である。

口縁に突起を有し, 貼付帯が数段施文され貼付帯上にはきざみが施こされる (57, 89)。

口縁に突起を有し, 口唇部, 器面に半截竹管状工具の内面を使用する沈線文, きざみ目が施文される (58)。口唇を折り返えして肥厚帯とし, 肥厚帯上に一段深い棒状刺突具による連続刺突文がみられる (59)。口唇を折り返えして肥厚帯とし, 突起を有している。胴部には幅広の粘土帯を貼付し, さらに半截竹管状工具の内面による沈線文を施こし文様を構成している。

口唇上, 肥厚帯上には撚糸圧痕文が各1段ずつ施文され, 突起上には, きざみ目を施してある。貼付帯にそって刺突文が連続的に施こされている (60, 72)。

口縁が肥厚し, 突起を有する。突起の側縁には, 半截竹管状工具の内面による沈線文が施され, 口唇上にも同種の沈線文がめぐる。突起正面には, 棒状工具による刺突文が残されている (61)。

口縁部がやや外反し口唇直下に, 棒状刺突具による連続刺突文が一段みられる (62)。

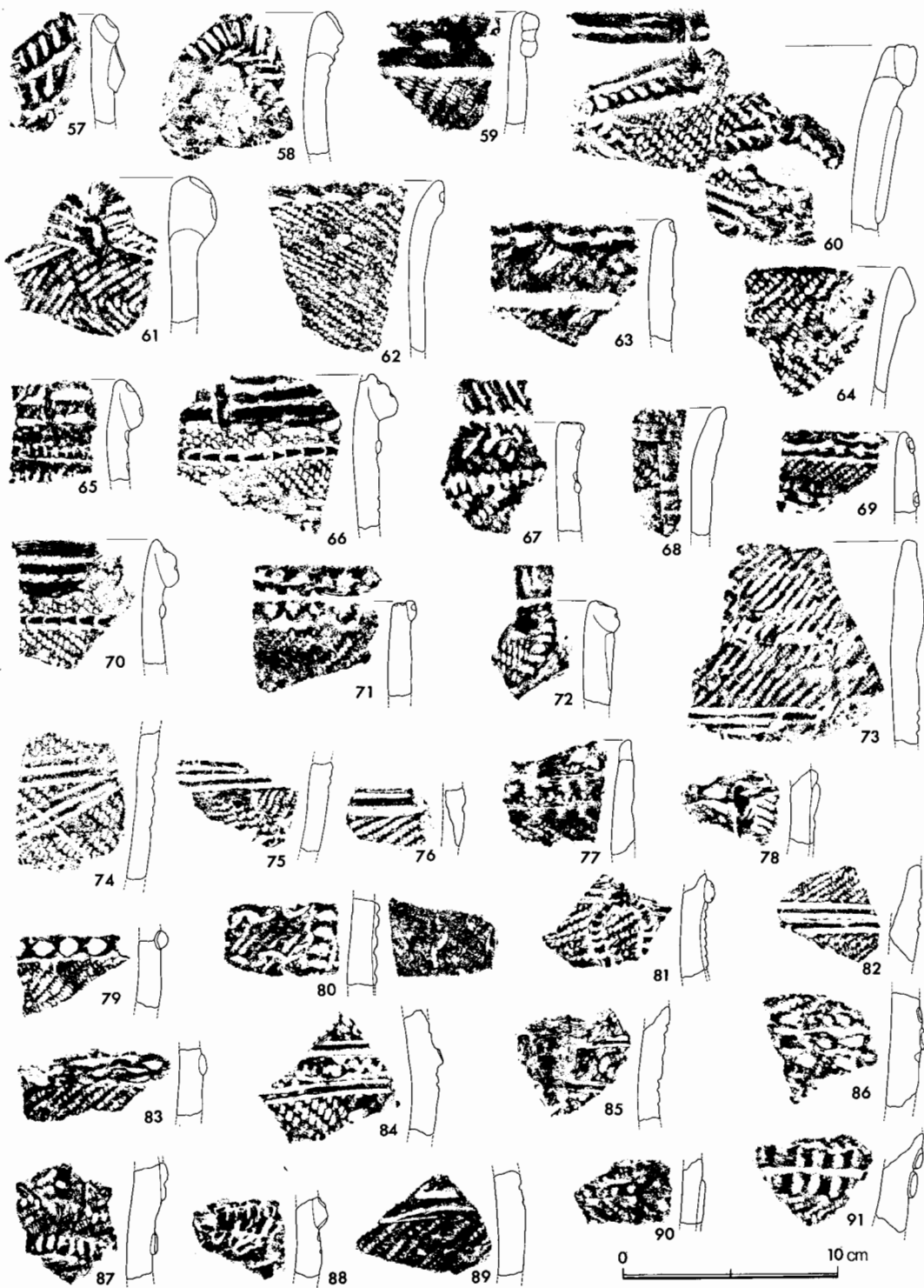
さらに胴部には幅広の沈線がある (63)。

地文としての縄文のみで, 口縁部に肥厚帯を有するもの (64)。

口唇の折り返えしによって口縁を肥厚させ肥厚帯上に2本の沈線を施文し, その上に細い粘土紐を貼付し文様を作り出す。肥厚帯下には直径1cm前後の断面が円形の刺突具を用い連続刺突を行っ



第48图 发掘区出土第Ⅱ群土器拓影



第49图 発掘区出土第Ⅱ群土器拓影

ている。さらに一段下にも同様の刺突文がみられる (65)。

口縁が肥厚し、肥厚帯上に2条の捺糸圧痕文がある。口縁を縦に切る形でその上に粘土紐を貼付し、その上半截竹管の内面にて押しつけている。肥厚帯下には、半截竹管状工具の内面による連続刺突文によって隆起帯が作り出される (66, 70)。

口縁が若干外反し、口唇上に絡縄体圧痕文をもってきざみ目を付ける。口頸部には貼付帯が一本みられ、その上に棒状工具を使用する刺突文が連続的になされる (67)。

口縁がやや外返し、口唇直下に一段、縦位に一段の幅広のへら状工具による沈線文がある (68)。

口唇直下と口頸部に貼付帯があり貼付帯上を棒状工具にて突引文が施文される (69)。

口唇上、口唇の外縁に貼付された部分に竹管文を0.5cm間隔に施文する (71)。

胴部下に半截竹管の内面による沈線文を数段施文する (73~77, 82, 85, 89)

Tの字状に貼付帯が付く (78, 90)。

縦位、横位に貼付帯がつき、その上に指圧によるきざみ目を付ける (79, 80) 80は内面にも縄文が施文される。

器面に貼付瘤をつけこれを中心として、貼付帯上に半截竹管の内面を連続的に押しあてた隆起帯と、半截竹管の内面による沈線文により文様を構成するもの (81)。

貼付帯の上に、棒状工具による連続刺突文が施文される (83, 86)。

貼付帯上に半截竹管を用い連続刺突を行い、その上下に一本ずつ内面を用いた沈線文を施文する (84)。

貼付帯上にきざみ目を付す (87)

貼付帯が2段付けられ、絡縄体を用いきざみ目を連続的に施す (91)。

焼成は、全て良好である。胎土には砂粒を多く含んでいる。色調は、褐色 (57, 65, 75, 81, 85, 89) 黄褐色 (62, 68, 71, 76, 79, 83, 86~88, 90) 茶褐色 (60, 64, 72~74, 78, 82, 84) 黒褐色 (58, 59, 61, 63, 66, 67, 69, 70, 77, 80, 91) 等を呈する。器厚は1.5cm内外である。

底部 (第50図92~105)

第Ⅱ群土器の底部と考えられる資料は比較的多くみられるが、どの類に伴うかは不明である。

底面に接する部分にてくびれをみせ底面に至って若干広がるもの (95, 98~100, 103~105)。

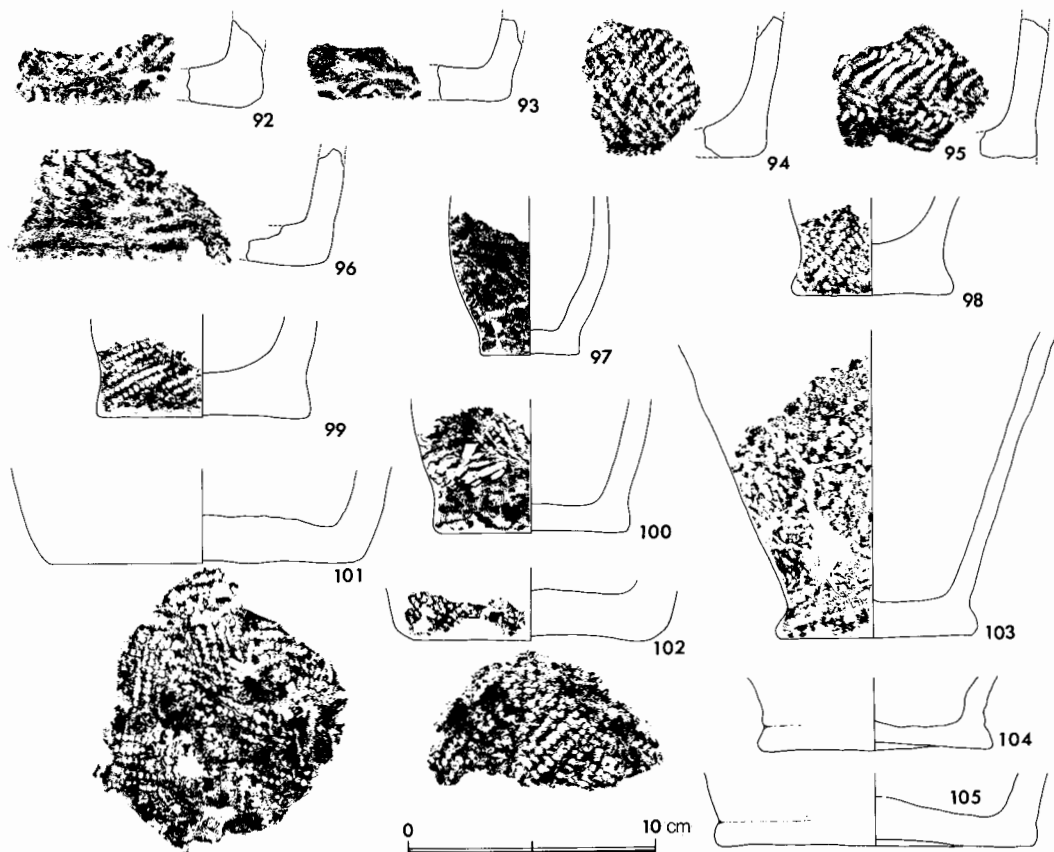
くびれがみられず、すんなりと底面へと至り『くの字』の底角を有するもの (92~94, 101, 102)。

若干揚底となるもの (104, 105)

底面にも縄文が施文されるもの (101, 102) 等がみられる。 (羽賀憲二)

第Ⅲ群土器第1類 (第51図1~4)(図版24B)

縄文時代後期の土器である。1は、地文の縄文に山形の沈線の特徴とする土器である。沈線は下方から口唇にかけてかなり斜めに工具を押し当てて施文している。波状口縁を呈する土器で、沈線はこの波頂部から山形に描かれているものと思われる。2は、縄文の上に山形沈線を描く土器であ



第50図 発掘区出土第Ⅱ群土器底部実測図

るが1より沈線の間隔が広い。更に山形沈線の頂部に刺突が施文されている。3もやはり縄文と沈線を施文する土器である。4は粗雑な沈線を施文する。

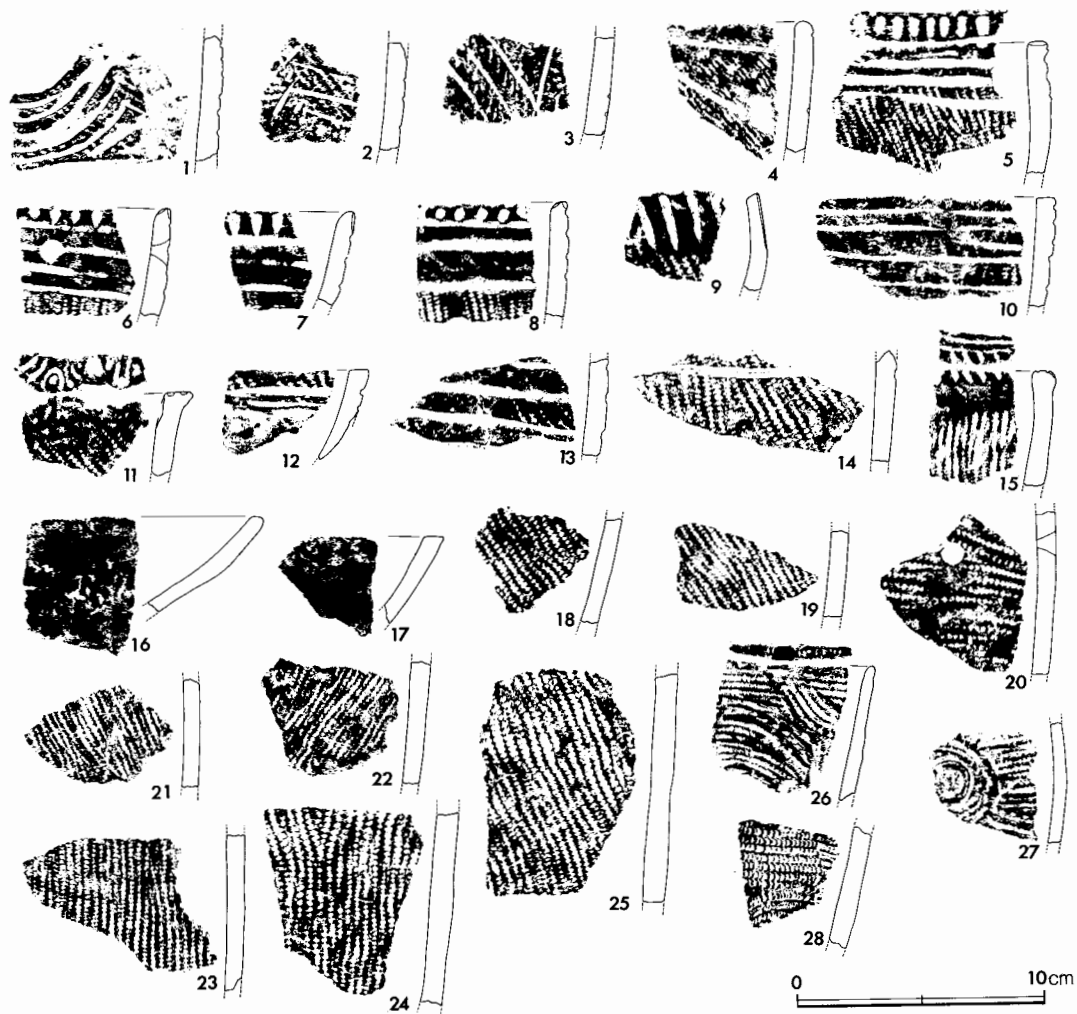
第Ⅳ群土器 (第51図5~25)(図版24B)

縄文時代晩期に位置する土器であり、縄文と横走沈線を主体とするものが多い。

5は、口唇に竹管工具の側面による刻みを施文する。表面は、地文の縄文の上から横走る3条の沈線をめぐらす。6~8は、口縁にめぐらす数条の沈線と縄文による文様と、口唇の刻みを特徴とする。沈線をめぐらす部位の縄文は、いずれも磨滅している。6には表面からの穿孔が見られる。9は、口唇から垂下する数条の沈線とその下部の縄文が主体となる。器形は、口唇部がやや内湾する鉢形土器である。10は、口縁部に粗雑な沈線を周繞させる。地文としての縄文がところどころに見られる。

11は、浅鉢形土器の破片である。中央に大きい突起、その両側に1対のやや小さ目の突起を配するものと思われる。突起頂部には、撚紐の押捺が見られる。

12~44は、横走沈線と縄文の施文されるものである。15は、口唇部の無文帯と縄文を施文する。



第51図 発掘区出土第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群土器拓影

口唇には、撚紐の押捺により刻みの効果をあらわすとともに、横走する2条の撚紐圧痕を施文する。16, 17は無文土器である。両者とも口唇を平坦に整形している。18~25は、縄文の施文される胴部破片である。

第Ⅴ群土器 (第51図26~28)(図版24B)

続縄文時代の土器である。26, 27は、曲線の微隆起線と縄文ならびに三角列点文を主体とする。26の口唇には浅いこまかな刻みが施文されている。28は、爪形の刺突のみを施文するものである。

(加藤邦雄)

第2節 石 器

本遺跡からは、遺構より出土したものを除いて、約300点に及ぶ石器類が得られている。

その器種は、石鏃、石銛先、両面加工のナイフ状石器、搔器、石匙、剥片より作られた削器、特殊な石錐、石核、各種の石斧、石錘、砥石、たたき石、錘玉、くぼみ石、擦り石、石皿等である。

本遺跡出土の土器は、前述した第Ⅱ群土器が主体をなし、第Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ群土器は若干数混入の状態で出土したものである。

本遺跡にて得られた石器群は、遺構より得られたそれに比して、層位的な裏付けもなくどの土器群に伴うものか明確でない部分が多く存在している。

以下、石器類を、形態別に分類し説明を加えて行く。

1 石鏃 (第52図1~10)

10点出土しており、全例入念な両面加工が施こされている。無茎のものが3点、他は全て有茎である。

全例黒耀石を素材としている。全長1.5cm~4.5cm、最大幅0.9cm~1.4cm、厚さ2.5mm~6mmの大きさを呈する。

無茎であり形状は、2等辺三角形を呈し底面にえぐりを入れる(1, 2)。

1は、全長は短かく、えぐりこみは深い。2は、細味で長く、えぐり込みは浅い。

柳葉形を、呈するもの(4)。

かえしが未発達であり、明確ではないもの(3, 5, 6)。

明らかなかえしを作り出し、太い基部を有する(7~10)。

10は、尖頭部を欠損している比較的大形である。

2 石銛先 (第52図11~27)

太い柄部を有し、幅広い明確なかえしをもっている。入念な両面加工が施こされ、全例黒耀石製である。

刃部(尖頭部)とかえしの形状より、いくつかに細分される。

a類(11, 13~17, 21, 22)

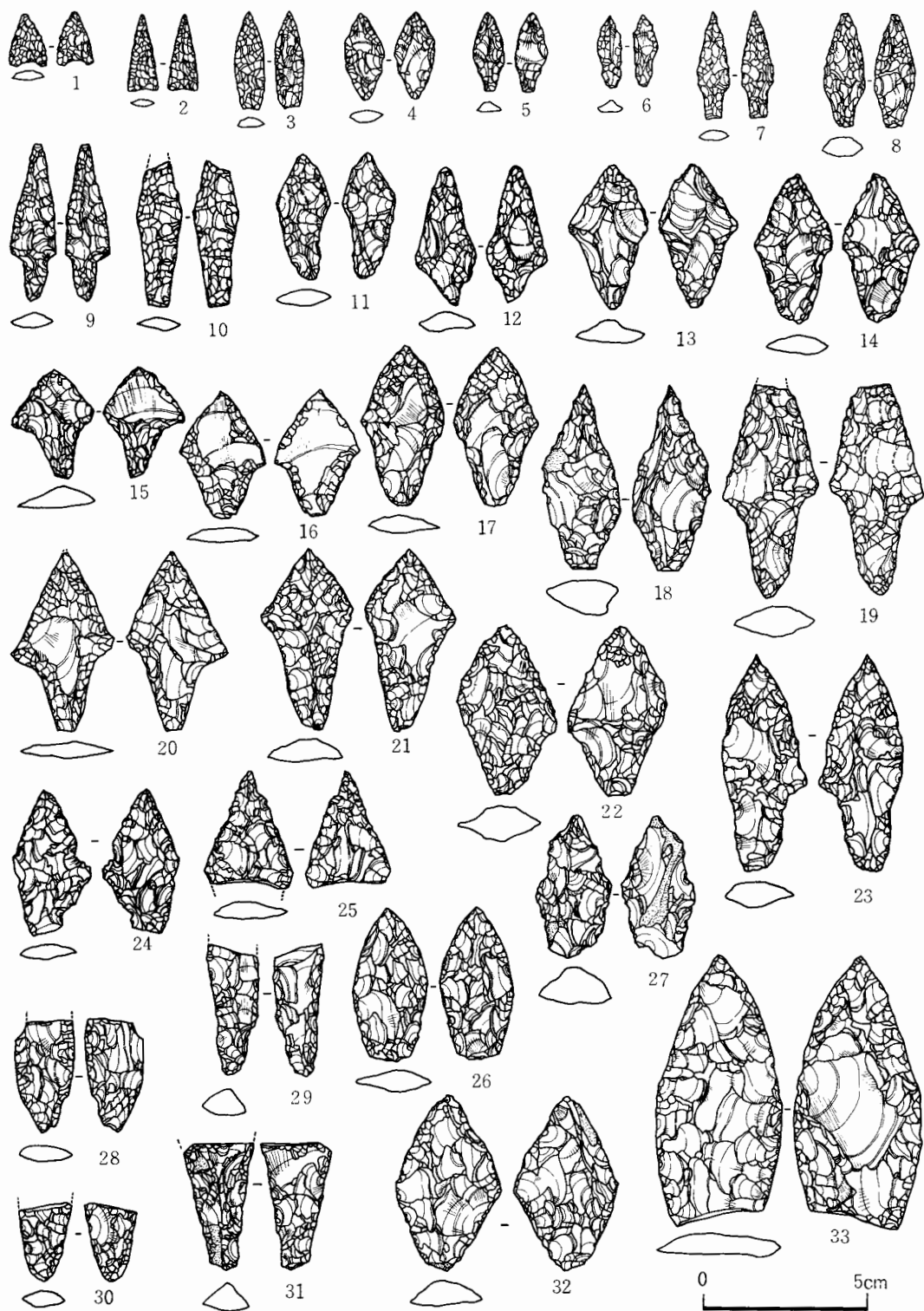
尖頭部の長さとかえしの幅の比率が0.6~0.9までの範囲に含まれるもので、尖頭部は極端に短かく、かえしの幅が非常に広いものである。

小形で左右が非対称形となる(11)、背面に大きく第一次剝離面を残している(15, 16)。

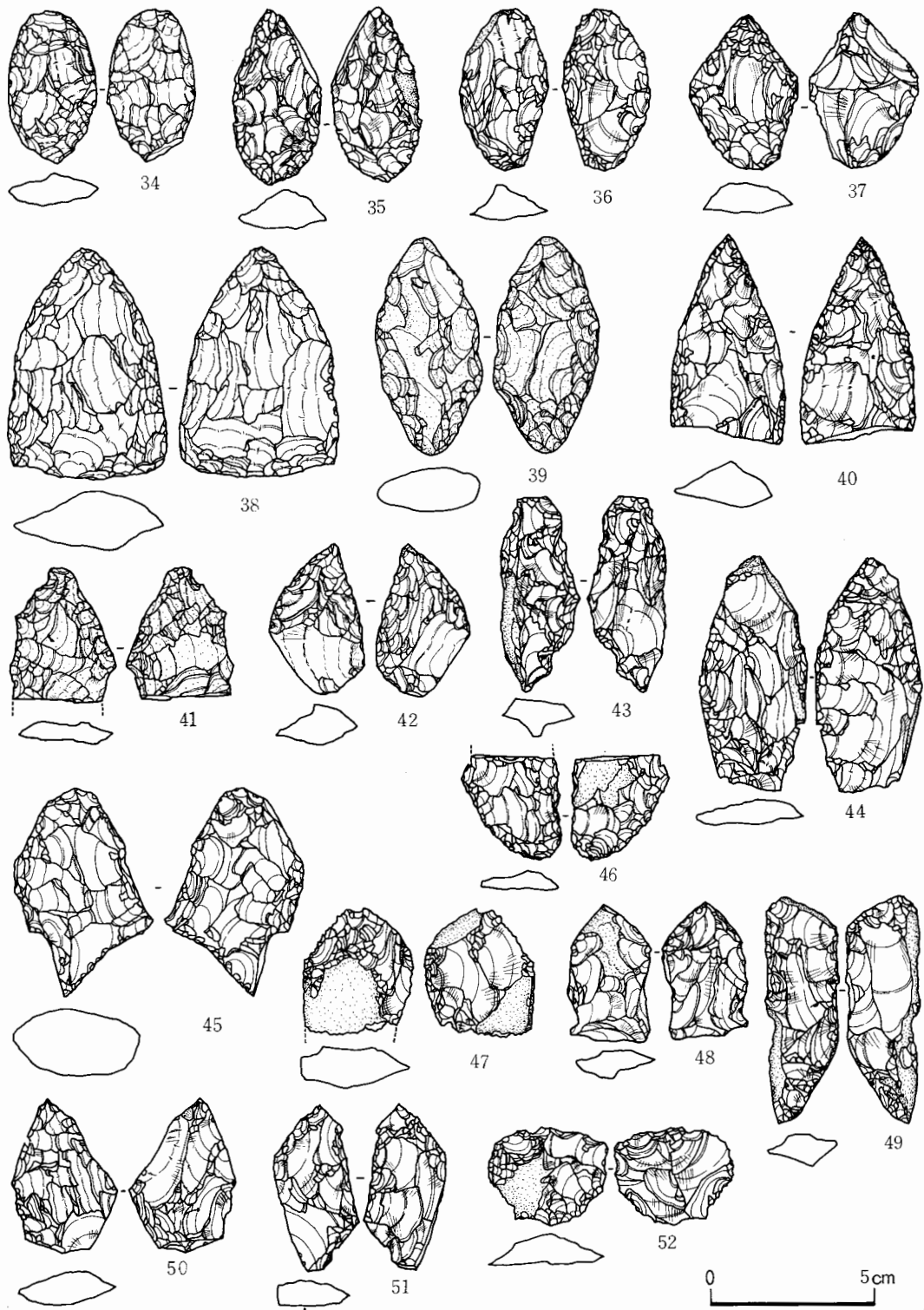
柄部の先端が尖っている(13)、他は全て平らである。

b類(12, 18, 19, 23)

尖頭部の長さとかえしの幅の比率が0.9~1.0までの範囲に含まれるもので、尖頭部が比較的長く、かえしの幅も大きく、バランスのとれているものである。



第52图 发掘区出土石器实测图



第53图 尧掘区出土石器实测图

12は、左右が非対称形であり柄部の先端は尖っている。

19は、尖頭部を欠損している柄部の先端は丸味を帯びている。

23は、左右が非対称形となり、一側縁のみ明確なかえしが突出している。

c類 (20, 24~27)

尖頭部の長さとかえしの幅の比率が1.1~1.2の範囲に含まれるものである。尖頭部の長さとかえしの幅がほとんど同じ長さの物であり、かえしは明確でないものが多い。

20は、明確なかえしを有し、第1次剝離面を比較的大きく残している。

24は、左右非対称形となり、一側縁のみかえしが発達している。

25は、柄部を欠損している。

26は、明確なかえしはなく木の葉状を呈する。

27は、背面に原石面を残し部厚い、製作途上のものかもしれない、これもかえしは未発達である。

3 石銛先破片 (第52図28~31)

全例入念に両面加工が施こされている、石銛先の柄部であろうと考えられるものである、全例黒耀石製である。

4 ナイフ状石器 (第52, 53図32~52)

比較的多量に出土している。ほとんどのものが両面、半両面加工が施こされている。側縁部が刃部となり、「削ぐ、切る」等の目的を有したと考えられる石器である。ほとんどのものは、柄部はない。

32, 34~37, 39は、柄部はなく、扁平で両面加工が入念になされ、一見石槍の様な形をする。左右は対称形に近く、木の葉状の形状を呈している、比較的薄手である。

39は、全面にわたって厚くパティナが発達しており、川の中等で磨滅したかの様な状態を呈する。

33, 40, 44は、比較的大型で入念な両面加工が施こされ、薄手である。全例基部を欠損している。

38は、大型で部厚い、玄武岩製であり入念に両面加工が施こされている。左右は対称形をなし、2等辺三角形形状を呈する。

41~43, 45~52は、不定形であり、部厚いもの、薄手のもの、入念に両面加工が施こされるもの、片面調整のもの等がある。

41は、パティナが厚く発達している、水等をかぶった為と考えられる。

5 石核 (第54図53)

発掘区よりは、1点より得られてはいない。原石面をそのまま打面とし、5面の縦長剝片を剝離した痕跡を有している。打面と剝離面の角度は、約60°内外である。尚打面調整等は、一切行われていない。

6 石錐 (第54図54)

縦長剥片のバルブ下方に刃部を作り出している、刃部のエッジは磨滅している。バルブ部分は幅広くつまみとなる、黒耀石製である。

7 搔器 (第54図55～58)

全例比較的厚手の縦長剥片を素材に一方に背の高い面をもつよう加工の施こされたもので、エンド・スクレパーと称されるものである。

55～57は、下部に背の高い面をもつ様加工がなされ、58は、左右の両側縁エッジに背の高い面をもつよう加工が施こされている。

8 石匙 (第54図59～61)

縦長剥片の左右両側縁より加工がなされ、主剥離面には一切の剥離加工はなされていない。一端につまみを作り出している。

59、61は、硬質頁岩製、60は、下部を欠損している。

9 削器 (第54・55・56図62～101)

ほとんどのものは、縦長剥片及び幅広剥片を素材とし、簡単な2次加工が施こされたものである。刃部の作り出される部分、剥片の利用方法、素材・製作技法等によっていくつかに細分される。

a類、左右両側縁のエッジに2次加工がなされ、背面にも若干の加工のなされるものもある。また一面のみ入念に加工の施こされるものをも含めた(62～74, 78～83)。

68は、グレイバー・ファシット様の剥離がみられる。

b類、左右どちらかの一側縁のエッジに加工がなされるもので、刃部が直線的なものと湾曲しているものの2種がある(84～100)。

c類、左右両側縁より加工がなされ、さらに背面にも若干の加工を施こし、尖頭部を作り出すものである(75～77)。

d類、扁平な礫核から作られた削器である。扁平な円礫の一端を左右交互に打ち欠き、直線的な刃部を作り出している。

刃部の断面は、くさび形を呈し背の部分には礫の自然面を残している(101)。

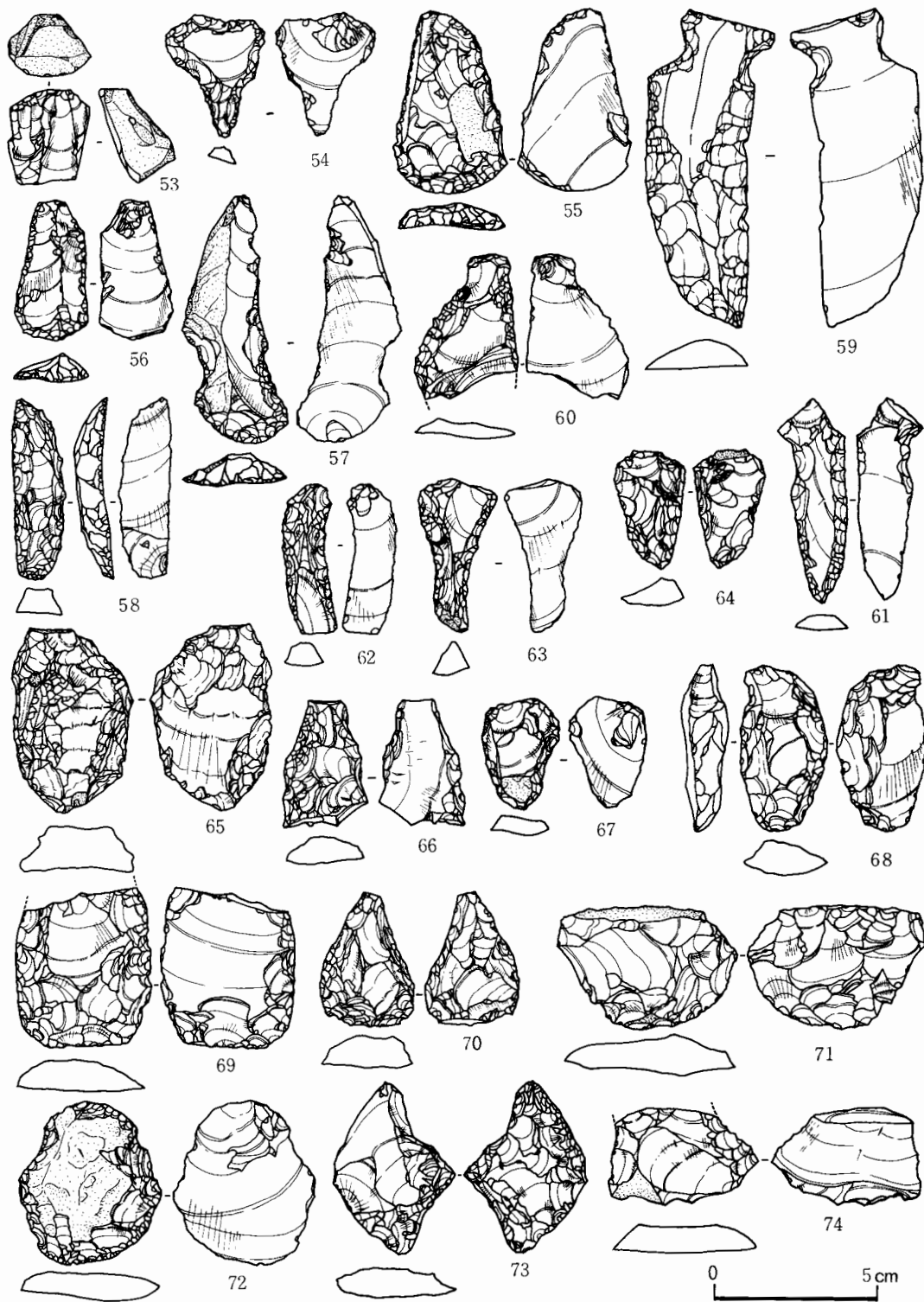
10 石剣 (第56図102)

石材は、黒色片岩を用い厚さ7mmと薄く扁平な棒状を呈する。

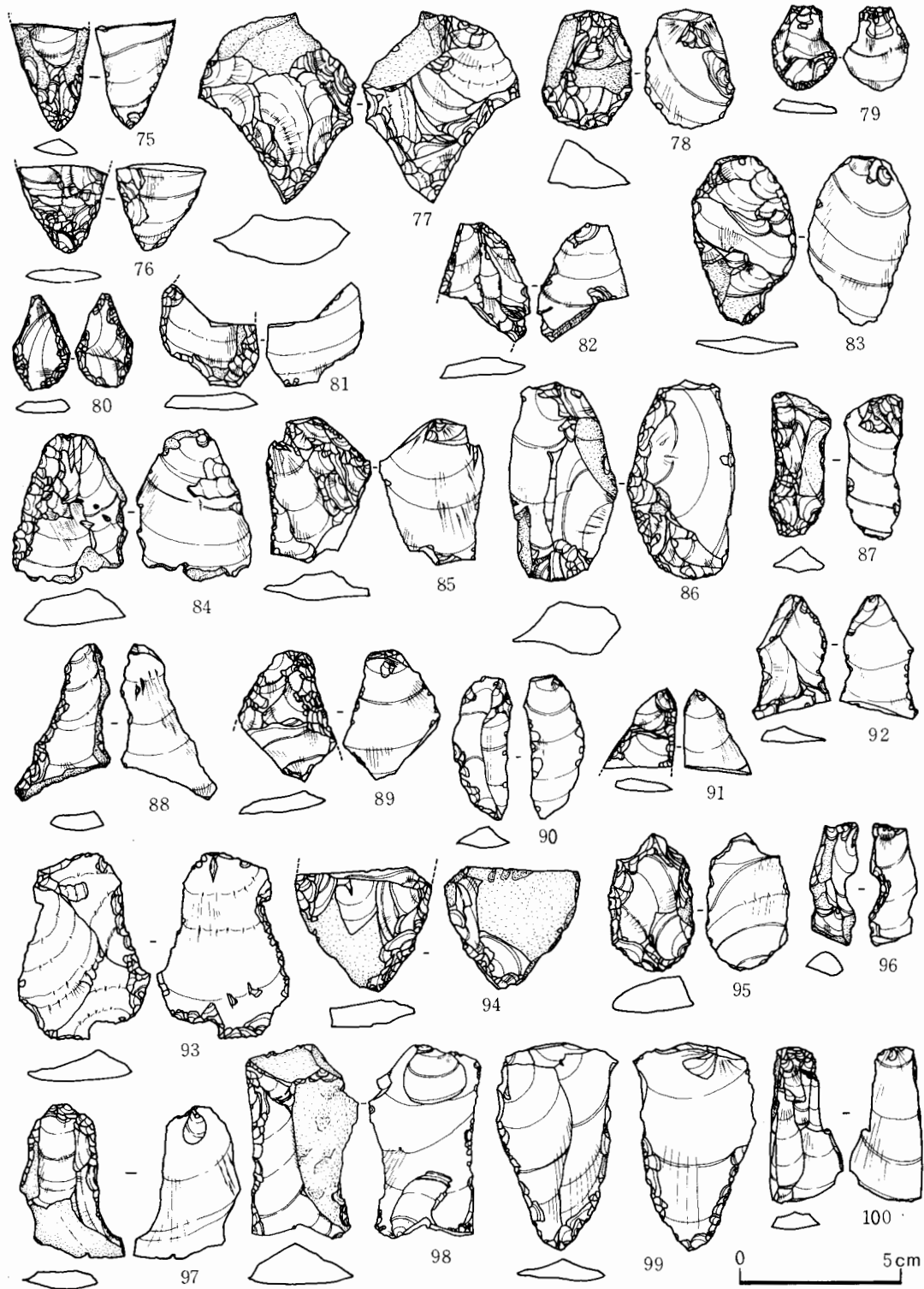
まず側縁部に細かな剥離加工を施こし整形する。さらに柄部をやや細味に加工した後に全面を入念に研磨している。

先端部は、丸味を帯び基部はやや細味となり柄部と考えられる。

両側縁の刃部は、鋭く両刃となる。



第54图 尧掘区出土石器实测图



第55图 尧掘区出土石器实测图

柄部には、ソケットあるいは「つか」がはめ込まれていた可能性がある。
磨製のナイフ状石器であろう。

11 錘玉 (第56図103)

石質は、黒色片岩であり大形の錘玉である、約半分程を欠損している。全面にわたり入念に研磨整形される。左右の両面より円錘形に穿孔され、貫通している。

重量は、半分程欠損しているにもかかわらず150 gある。

12 石斧 (第56, 57図104~118)

全例磨製である。製作技法として素材となる石塊を荒削し石斧状に整形し、さらに全面を細かく敲打し、丸味を帯びる様に角を取る。この後に全面を研磨するといった製作過程が考えられる。

形状、大きさ、製作技法よりいくつかに細分される。

a 類 (115)

狭長で刃部の幅が狭い。

全面に整形の為の剝離痕が全面に残っており、刃部のみ研磨されている。

b 類 (104~106)

小型の石斧である。

104は、擦切手法によったものと考えられ、左右両側縁には構状の研磨痕を残している。頭部は欠損しており、刃先は直線的であり両刃である。

105は、刃先は丸味を帯びる、頭部を欠損している、両刃である。

106は、刃先はやや丸味を帯び一部を欠損している、両刃である。

c 類 (107~114)

中型の石斧であり、未成品、破損している物等を加えた。

107, 108は、全面を入念に研磨している。刃先はやや丸味を帯び、両刃となる。

111, 113は、局部的に素材面を残し研磨している。刃先はやや丸味を帯び、113は一部を欠損している、両刃である。

112は、厚味のある石斧で、頭部を欠損している。刃先は左右非対称形となり、両刃である。

109, 110は、石斧として使用中に刃部を欠損してしまったものである。110は、未成品の可能性が強い。

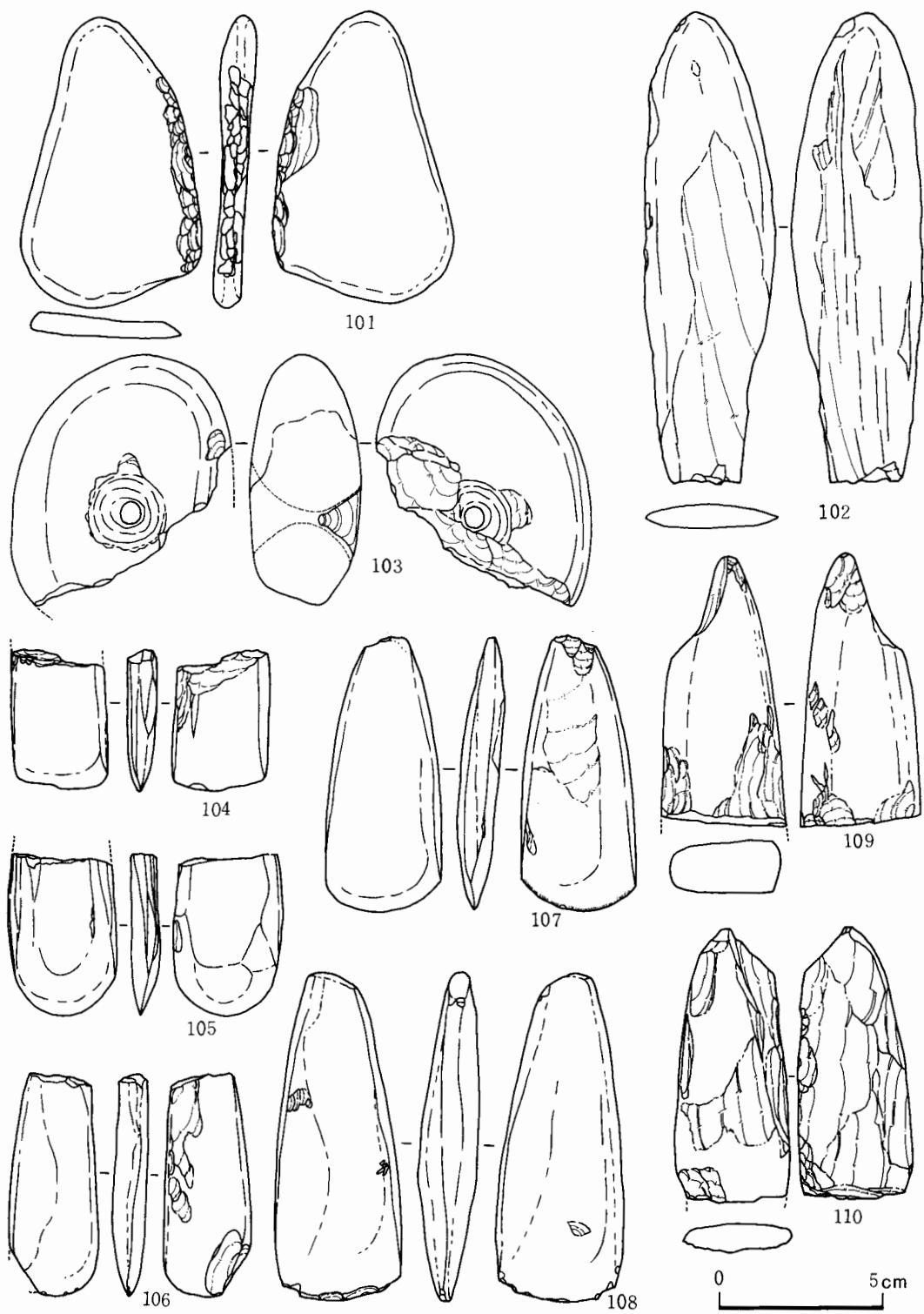
d 類 (114, 116~118)

比較的大型のものである、完形品は得られてはいない。

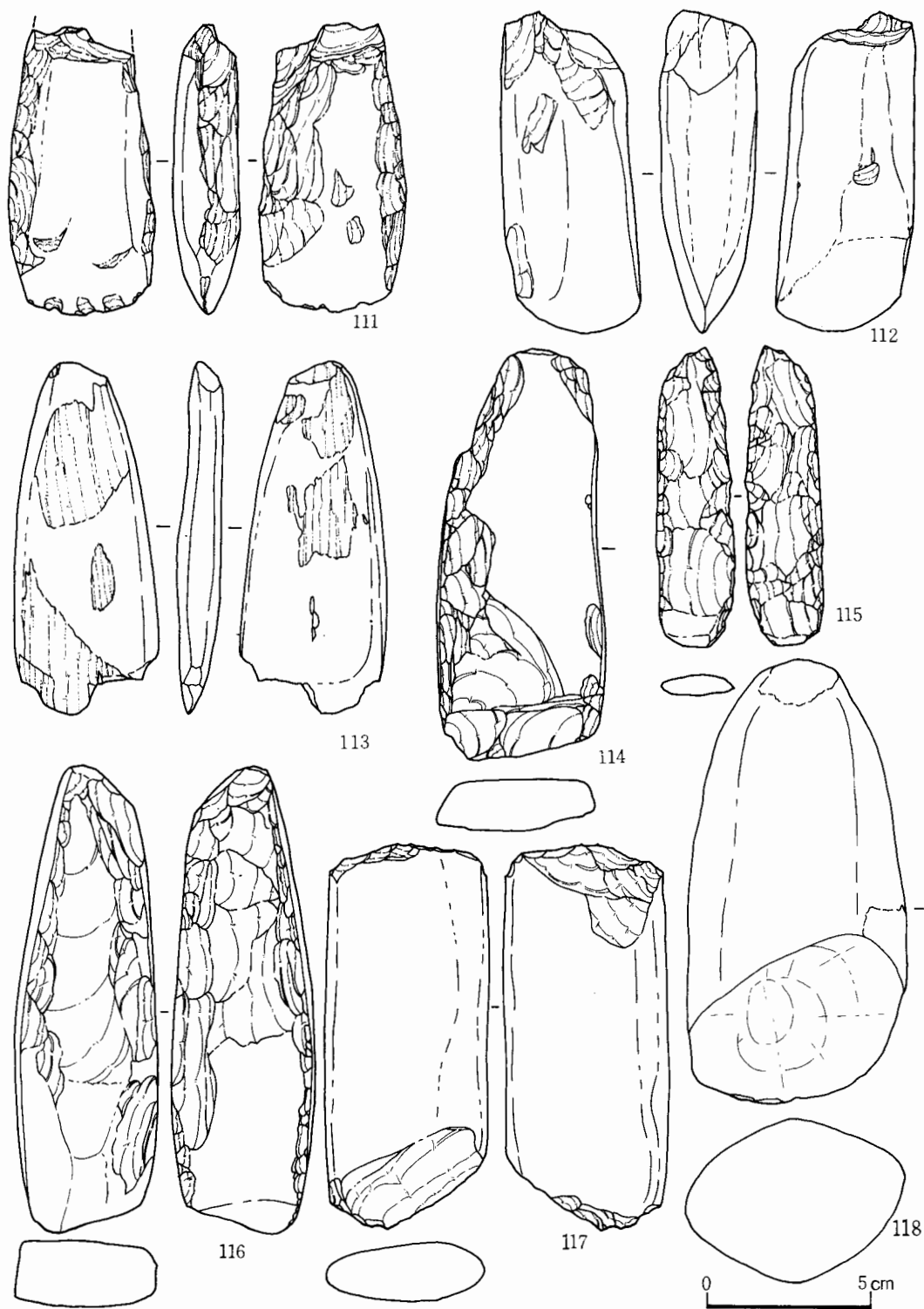
114, 116は、敲打による剝離整形の後に、研磨を加えたもので製作途上のものと考えられる。

118は、敲打による剝離が行われている途中で壊れてしまったものである、断面は円形に近い。

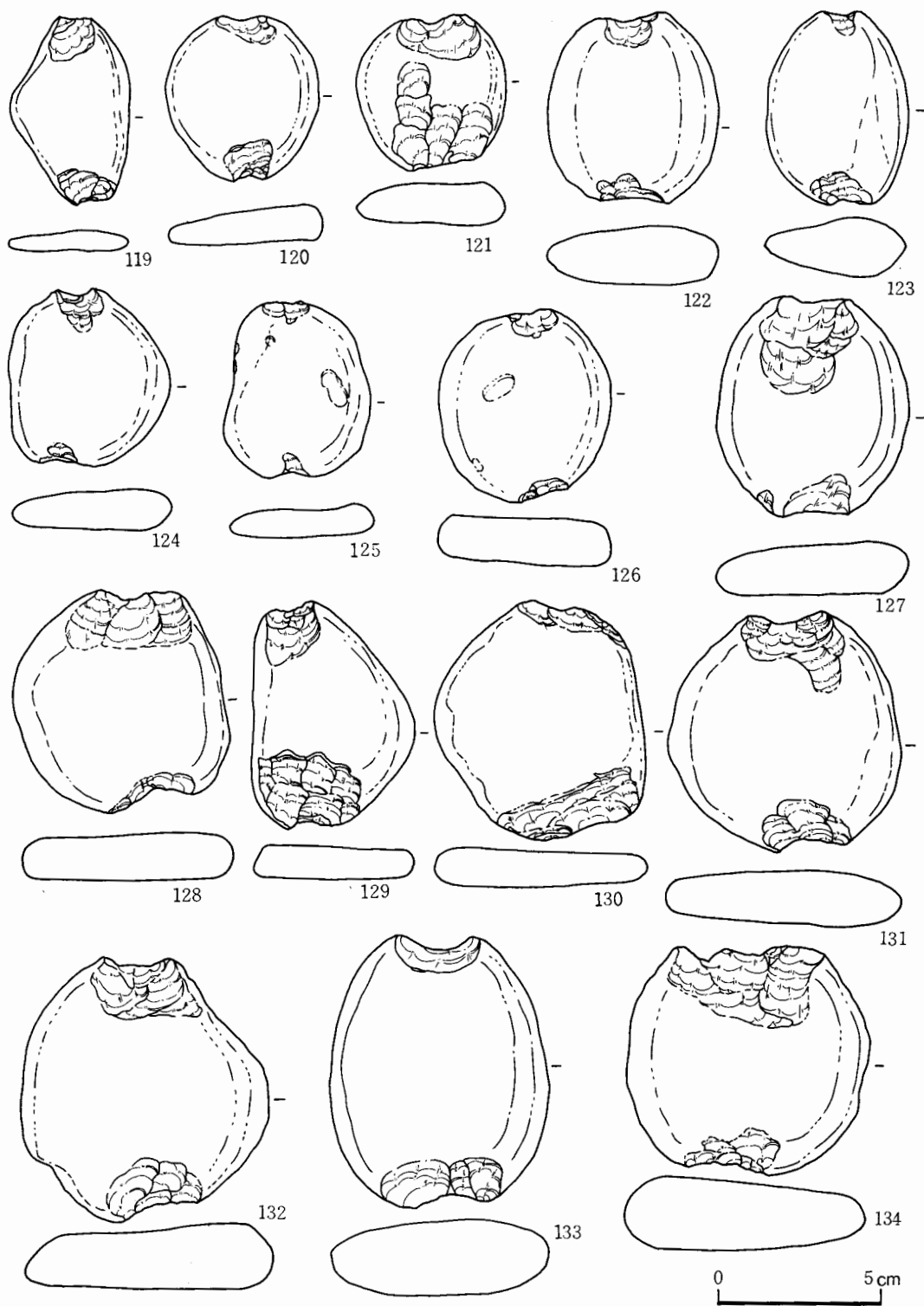
117は、全面入念に研磨され、刃部及び頭部を欠損している。



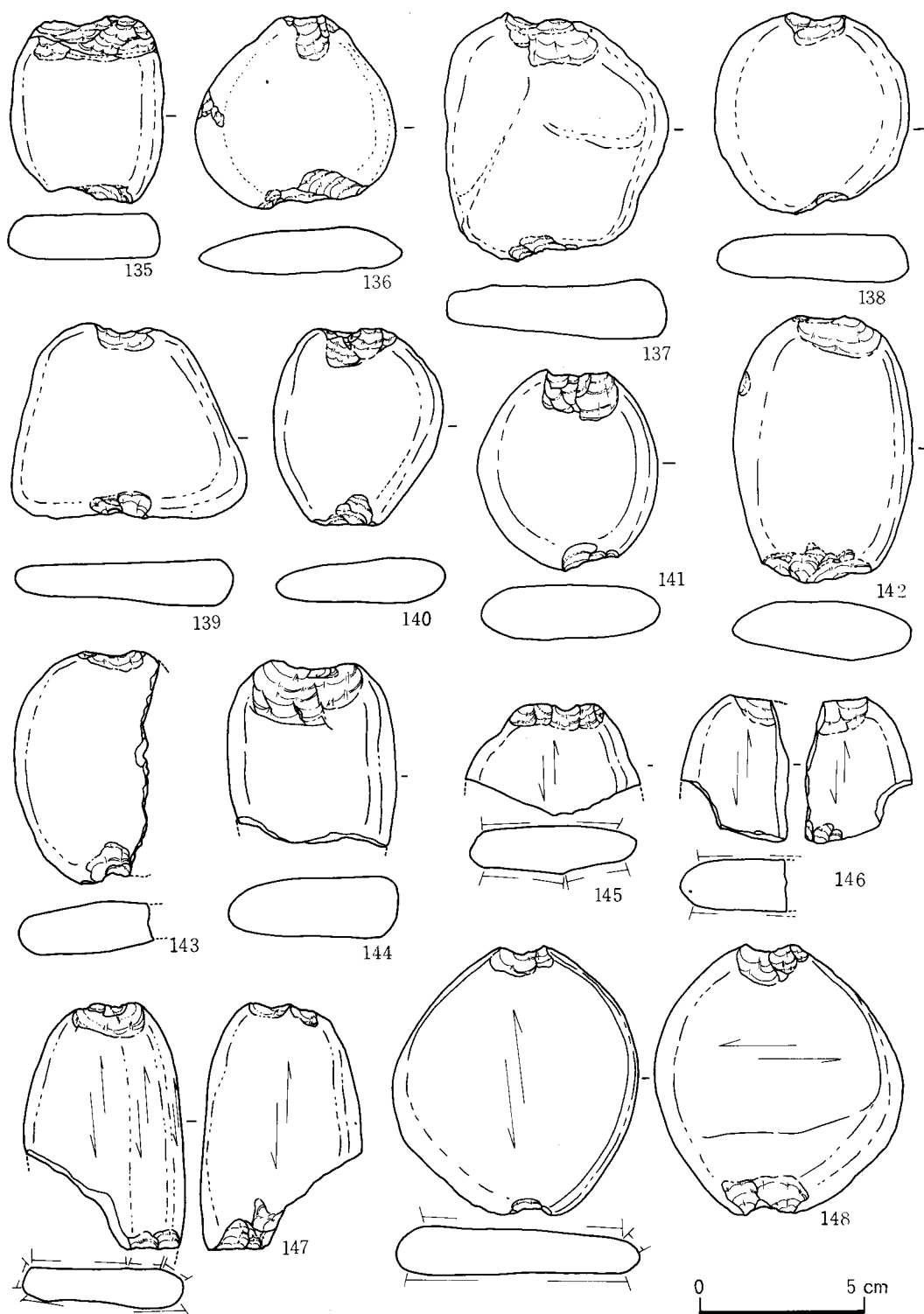
第56图 发掘区出土石器实测图



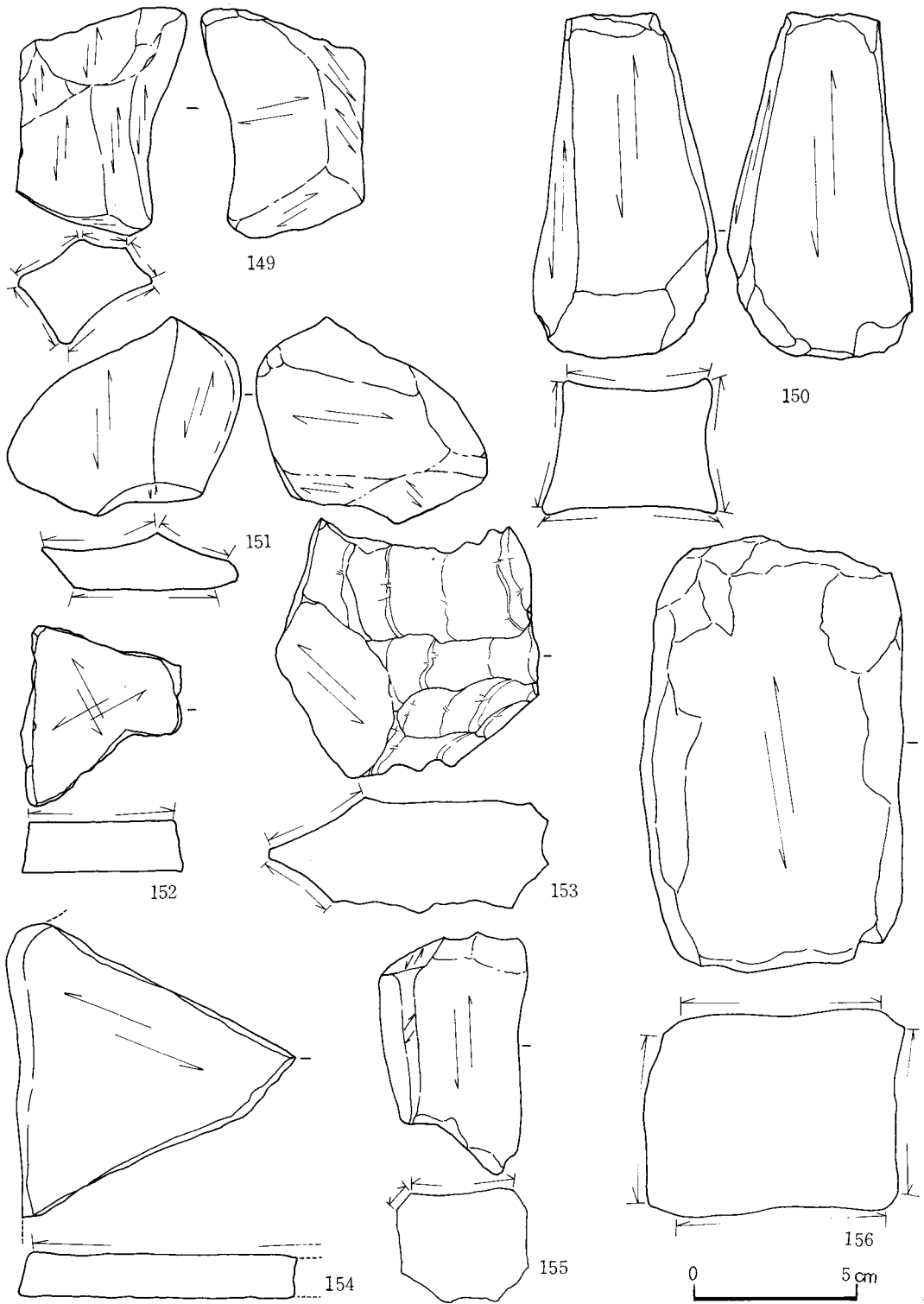
第57图 尧掘区出土石器实测图



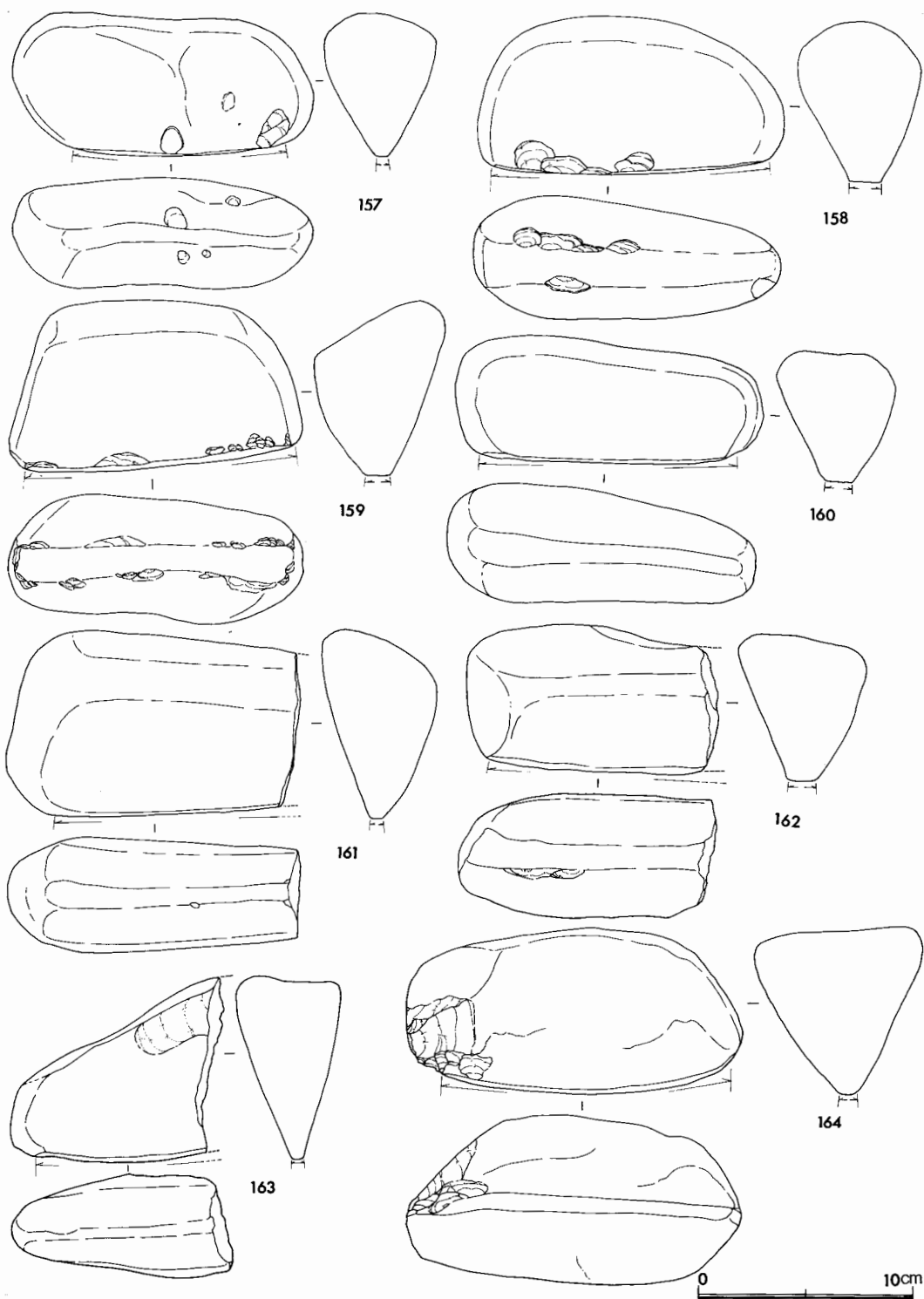
第58图 发掘区出土石器实测图



第59图 发掘区出土石器实测图



第60图 尧掘区出土石器实测图



第61图 発掘区出土石器実測図

13 石錘 (第58, 59図119~148)

いずれも楕円形で扁平な河原石を素材に、長軸方向の両端に数度の打ち欠きを施し縄等をかける袂入を作り出したものである。

重量は18g~180gあり、非常に小型のものから比較的大きなものまである。

単なるおもりとしての機能のみではなく、砥石として使用されたと考えられる研磨痕を有するものもある(145~148)。

145~147は、砂岩製であり、2~3面にわたって研磨痕が残されている。砥石として使用され破損した後に、両端を打ち欠き石錘としたものと考えられる。

148は、両面にわたり研磨され、平坦である。さらにエッジも面取りがなされ、シャープな角を有している。この資料は、石錘として作られた後に砥石としてさらに利用されたものと考えられる。

14 砥石 (第60図149~156, 第62図170~172)

砂岩、凝灰岩、安山岩等の石質が使用されている。

多くの面にわたって研磨痕が残されているものと、一面のみ残されている物がある。

149~151, 153, 155, 156は、多くの面を擦面とした例であり151, 153は凝灰岩を素材としており、他は砂岩である。

擦面は、研磨した方向に直交する断面にて中央部がややくぼみを呈している。

152, 154は、砂岩を素材に一面のみ擦面がみられ、擦面は平らである。

170, 171は、凝灰岩を素材に一面のみ擦面がみられ、擦面は平らとなる。

172は、安山岩であり、一面に擦面が残される。擦面は、研磨した方向に直交する断面は、中央部がややくぼんでいる。

15 擦石 (第61図157~168)

すべて断面が三角形ないしは楕円形の自然礫の一稜面を擦面とした石器である。石質は、安山岩、砂岩等が使用されている。

擦面の幅は、0.5~1.5cmで非常に狭い事が特徴となる。擦痕は、長軸方向、短軸方向、斜方向と雑にみられ、一定の方向は有していない。また擦面の側縁には、擦面方向より打撃を加えたと考えられる、表皮の剥脱のみられるものが多くみられる。

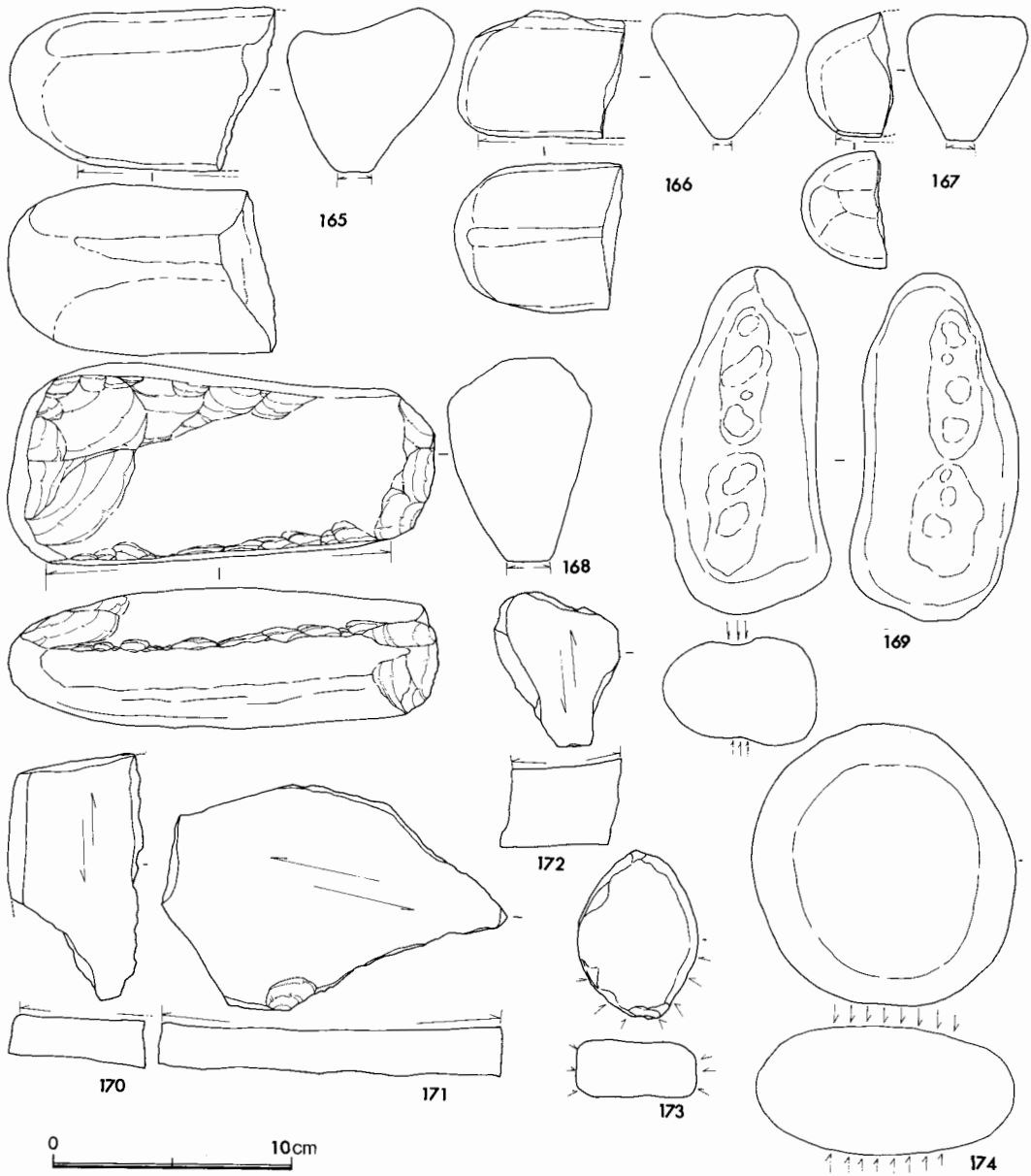
使用面としての擦面以外に細かな敲打痕が集中してみられるもの(166)もある。

168は、石塊を荒割し断面が三角形を呈するように整形したのものと考えられるものである。

161~163, 165~167は、欠損部分が存在するものである。

16 くぼみ石 (第62図169)

1点のみ出土している、細かい敲打のくり返しにより、石の表面にくぼみ状の使用痕の残されるものである、凝灰岩である。

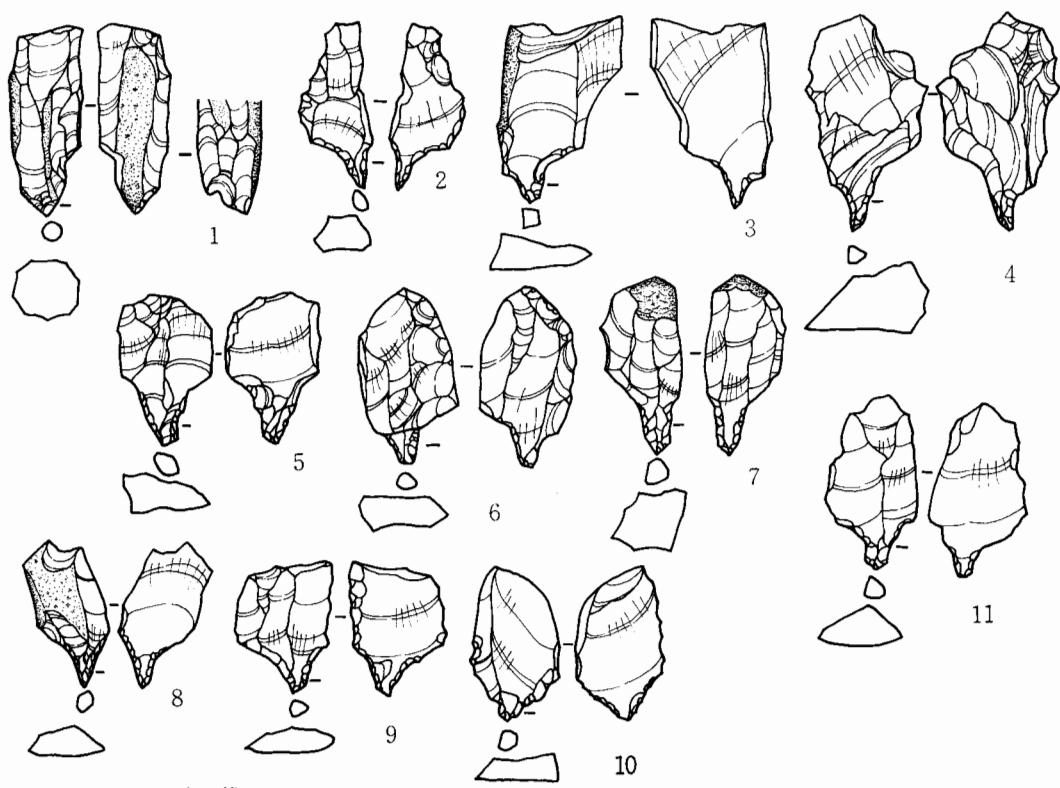


第62図 発掘区出土石器実測図

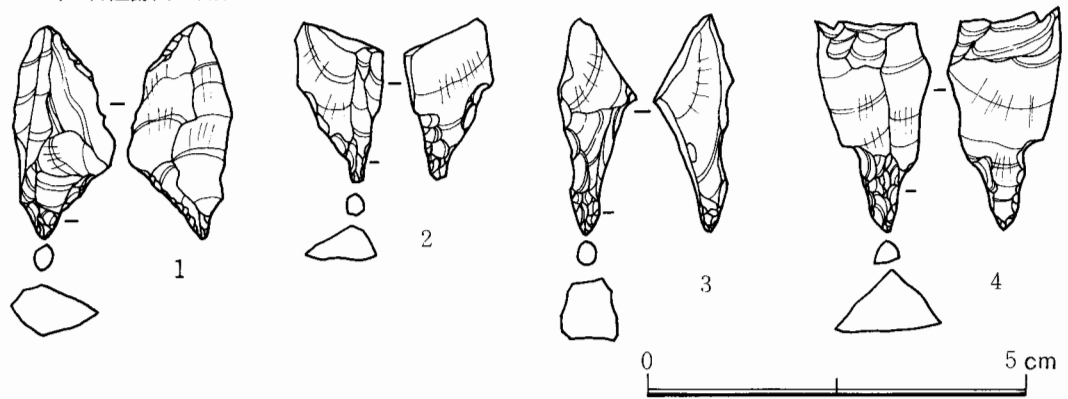
17 敲石 (第62図173, 174)

173は、扁平な円礫の側縁部分を使用面としたもので、細かな剝離痕（敲打痕）がみられる。石器製作具であろうか。

174は、やや厚味のある円礫の両面に細かな敲打痕が集中してみられるものである。



— T-77遺跡出土石錐



第63図 発掘区出土石錐状石器実測図及びT 77遺跡出土石錐状石器実測図

石錐状石器 (第63図)(図版34 A)

発掘区より10数点の特異な形態を有する石錐状石器が出土している。

部厚く、柱状を呈する素材を使用したものと、縦長及び幅広の剥片を素材にしたものの2種に分類される。

a類 (1, 4, 7)

部厚く、柱状を呈する剥片及び自然の力により剥脱した剥片のそのままの形を利用し素材とした

ものである。

1, 柱状を呈する素材に、縦長の剥離を周囲に施こし、刃部をも縦位の剥離にて作り出している。先端部を欠損している。

4, 人為的に目的を有して剥がされた剥片ではない剥片の形状をそのまま利用し、先端部を作り出し、エッジに加工を施こしている。エッジは、磨滅し丸味を帯びている。

7, 石核から柱状の剥片を作り出し、一端に先端部を作り出したものである。刃部の断面は丸く、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

b類(2, 3, 5, 6, 8~11)

石核より意図的に剥離された剥片を素材に細部加工を施こし、刃部を作り出したものである。

2, 縦長剥片の側縁を折り取って先端部を作り出し、この部分に細かな加工を施こし刃部としている。刃部の断面は楕円形を呈し、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

3, 幅広剥片の一端に先端部を作り出したもので、この部分に細かな剥離加工を集中して行い刃部としたものである。刃部の断面は方形である。

5, 縦長剥片を素材に、バルブ下方に加工を施こし先端部を作り出したものである。さらに細かな加工が集中して施こされ刃部としている。刃部の断面は、楕円形に近く、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

6, 縦長剥片を素材に、一端に先端部を作り出し、さらに細かな剥離加工を集中して行い刃部としている。刃部の断面は円形に近く、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

8, 表面に原石面を残す縦長剥片を素材にバルブ部分を尖頭部として作り出し、さらに細かな加工を集中して施こし刃部としている。刃部の断面は楕円形を呈し、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

9, 縦長剥片を素材に、側縁を折り取って整形し先端部を作り出している。さらにこの部分に細かな加工を集中して施こし刃部としている。刃部の断面は円形に近く、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

10, 剥片の一端を先端部とし、この部分に細部加工を施こし刃部としている。刃部の断面形は、楕円形に近く、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

11, 縦長剥片のバルブ下方に先端部を作り出すよう加工を施こし、さらに細かな加工を集中して行い刃部としている。刃部の断面形は、三角形に近く、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

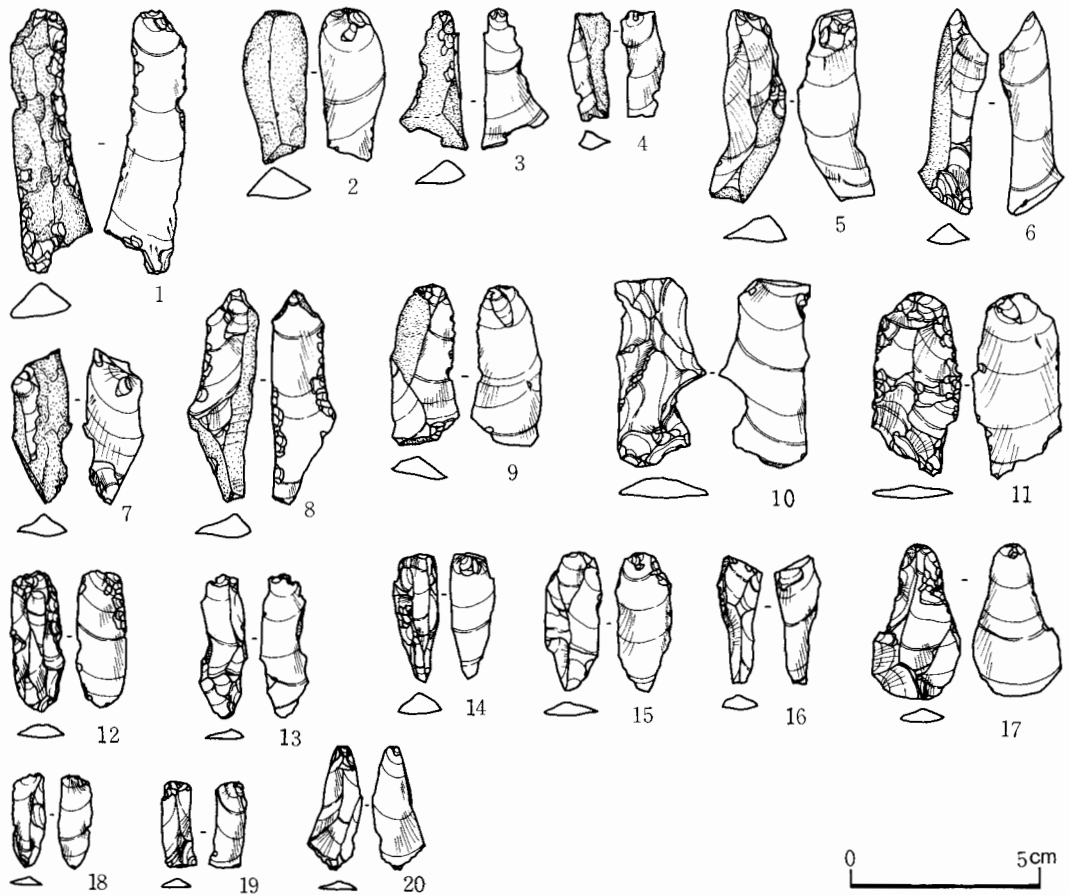
T77遺跡出土の石錐状石器(第63図)(図版34B)

T77遺跡からは、「トコロ6類土器」に伴って、4点の石錐状石器が出土している。

1, メノー製であり剥片の形状をそのまま利用している。先端部が作り出され、さらに細かな剥離を集中して行い刃部としている。刃部の断面形は、楕円形に近く、エッジは磨滅し丸味を帯びる。

2, 縦長剥片を素材に一側縁を折り取って先端部を作り出し、さらに細かな加工を施こし刃部としている。刃部の断面は円形に近く、エッジは磨滅している。

3, 厚手の幅広剥片の形状をそのまま利用し、一端に先端部を作り、さらに細かな加工を集中し



第64図 発掘区出土黒耀石剥片実測図

て施こし刃部としている。刃部の断面形は楕円形を呈し、エッジは磨滅している。

4、厚手の断面が三角形を呈する縦長剥片のバルブ下方に尖頭部を作り出し、さらに細かな加工を集中して行い刃部としている。刃部の断面形は三角形をなし、エッジは磨滅し丸味を帯びている。

石刃様剥片について（第64図）

a類、自然面が一面に残されている剥片で、原石より最初に剥離されたと考えられるものである（1～3）。

b類、自然面が主剥離面と同一方向の、あるいは逆方向の剥離面によって切られている剥片で、a類の剥片が剥離された後にその隣から剥離されたと考えられるものである（4～9）。

d類、主剥離面と同一方向、あるいは逆方向の剥離面が一面に残される剥片（12～16、18～20）。

e類、主剥離面と直交する剥離面が主剥離面と同一方向、あるいは逆方向の剥離面によって切られている剥片（17）。

f類、主剥離面と直交する剥離面が全面をおおう剥片（10、11）。

IV 第 2 次 調 査

第1章 発掘調査の方法と遺跡の層序

第1節 発掘調査の方法

今回の調査地区は、昭和50年度に行われた第1次調査の際、未買収地域のため発掘を調査する事ができなかった部分約4,000㎡を対象とした（第66図）。

本地区は、昭和50年度の第1次調査の際に設定された発掘区域の北西端部にあたる。

今回の発掘区域の設定にあたっては、第1次調査で用いられた基線をそのまま延長して発掘区をもうけた。また発掘調査の方法も第1次調査と同一の方法をとった。

しかし今回の発掘対象地域には全域にわたり、直径10～20cmの植木の松林となり、さらには自然林を半数含むといった非常に条件の悪い状態であった。ために発掘対象地域を全面発掘までには至らず、発掘総面積は3,200㎡であった。

第2節 遺跡の層序

本調査地区においては、沢に直交するⅡ-G, H, I区の南東側にセクションラインをもうけ、地層断面図を作成している。この部分は松の植林がなされていた部分であり、沢にむけゆるやかに傾斜しており、30mで約1mの比高差がある（第65図）。

現在は、松が整然と植林されており比較的プライマリーな層位であろうと推定されたが植林以前には、畑地として耕作がなされており、表面下15cm～30cmは、全体的に攪乱されていた。

第1次発掘調査区域とは、基本的には同様の層準を示めすと考えられるが、比較的黒色土の堆積が厚いため、台地の低くなる部分には攪乱のおよばないプライマリーな黒色土を多く残している。

層序は、

第Ⅰ層；黒褐色を呈する耕作による攪乱層

第Ⅱ層；黒色土

第Ⅲ層；黄褐色粘質土

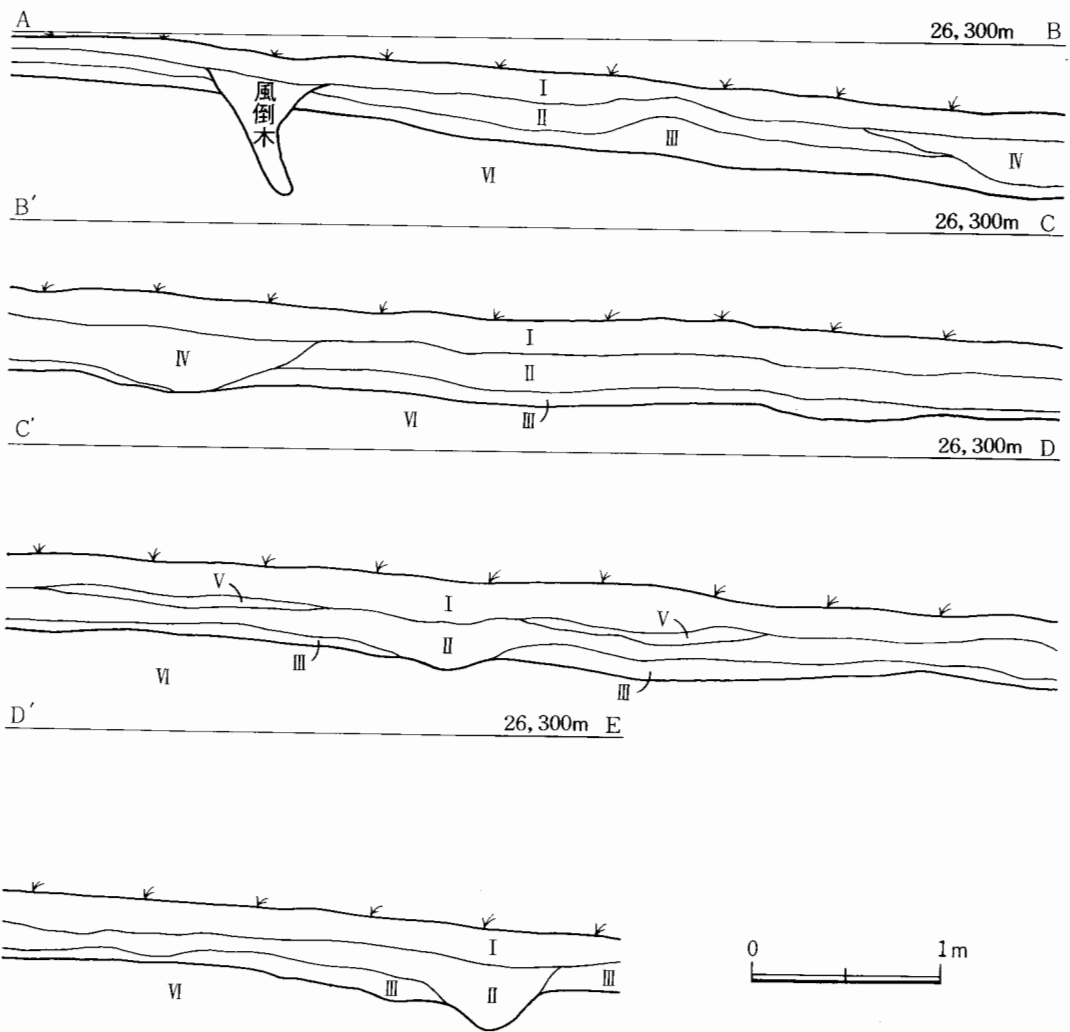
第Ⅳ層；黒色土のおちこみ

第Ⅴ層；灰色火山灰層

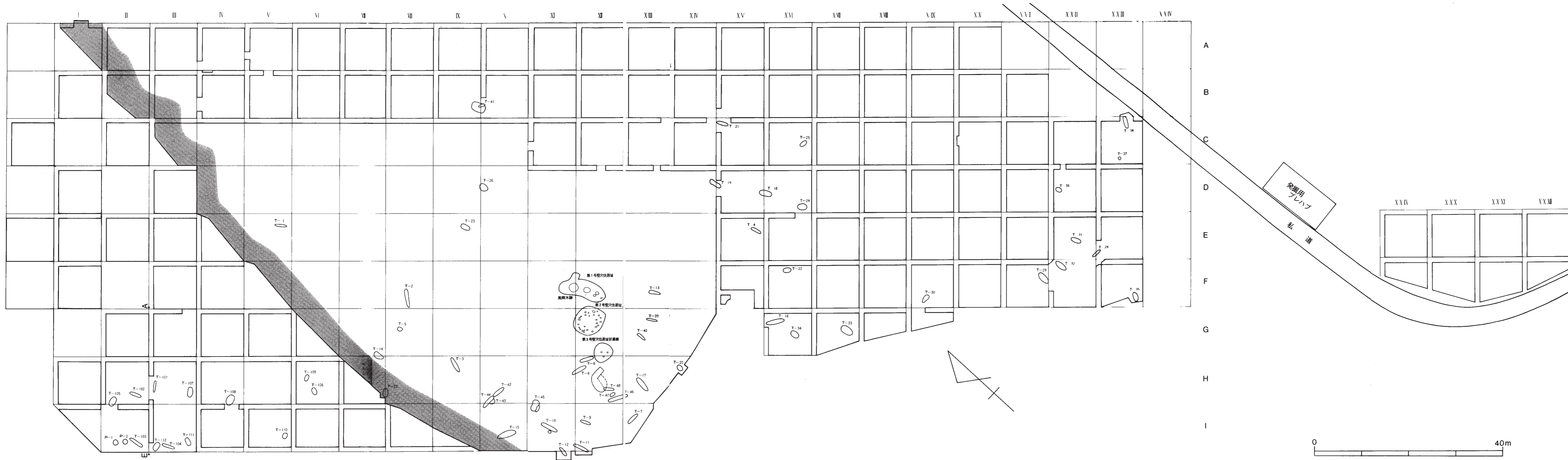
第Ⅵ層；黄褐色土で比較的硬い。

遺物は第Ⅰ層～第Ⅵ層中に含まれており、遺構は、第Ⅵ層上面にて確認された。

（羽賀憲二）



第65図 セクション図



第66図 遺跡発掘区配置及び遺構関連図

第2章 遺構及び遺構内出土の遺物について

第2次調査においては、2個の墓址かと考えられる円形のピットと、従来より陥穴と推定される狭長の深い特異な形状を呈するピットが12基確認されている。

これらのピット内より、若干ながら遺物も出土している。

以下、各ピットごとに説明を加えていく。

第1節 ピ ッ ト

第1号ピット (第67図)(図版41B)

Ⅱ—Ⅰ区に位置し、黒色土を剥いだ段階でその存在が確認された。

プランは、ほぼ円形を呈し、規模は、直径1.2m、深さは30cm内外である。

壁面は、かたくやや傾斜し底面近くにて丸味を帯び壙底面へと至っている。壙底面は、平坦であり、かたくしまっている。

遺物は、比較的少なくその全てが覆土中より得られている。

覆土の層序は、以下の通りである。

第Ⅰ層；黒色土

第Ⅱ層；暗褐色土

第Ⅲ層；粘質に富み、炭化物を含む褐色土

第Ⅳ層；茶褐色土

第Ⅴ層；やわらかな茶褐色土

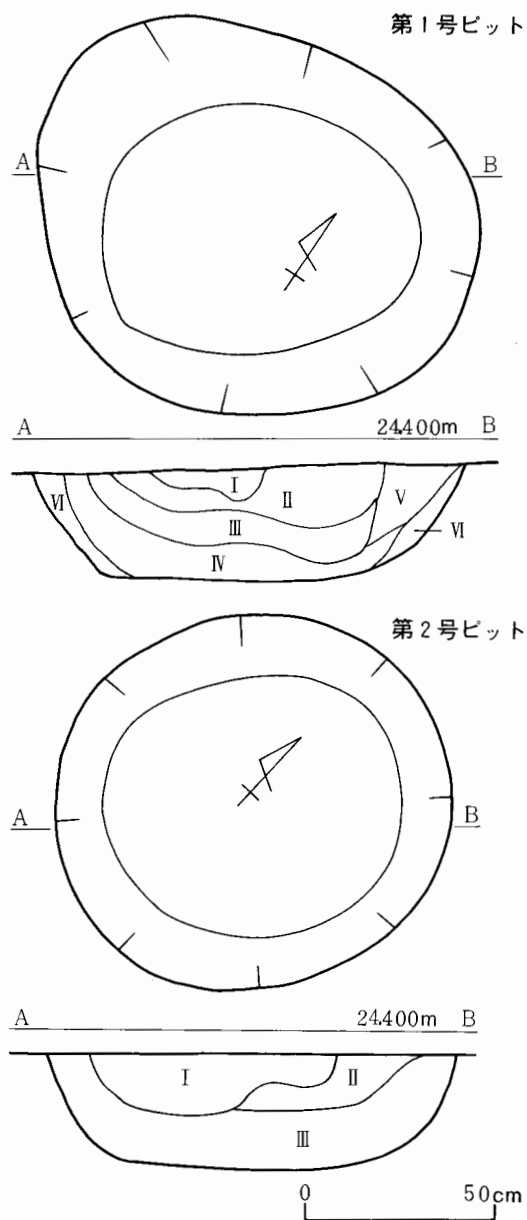
第Ⅵ層；黄褐色粘質土

第1号ピット出土土器

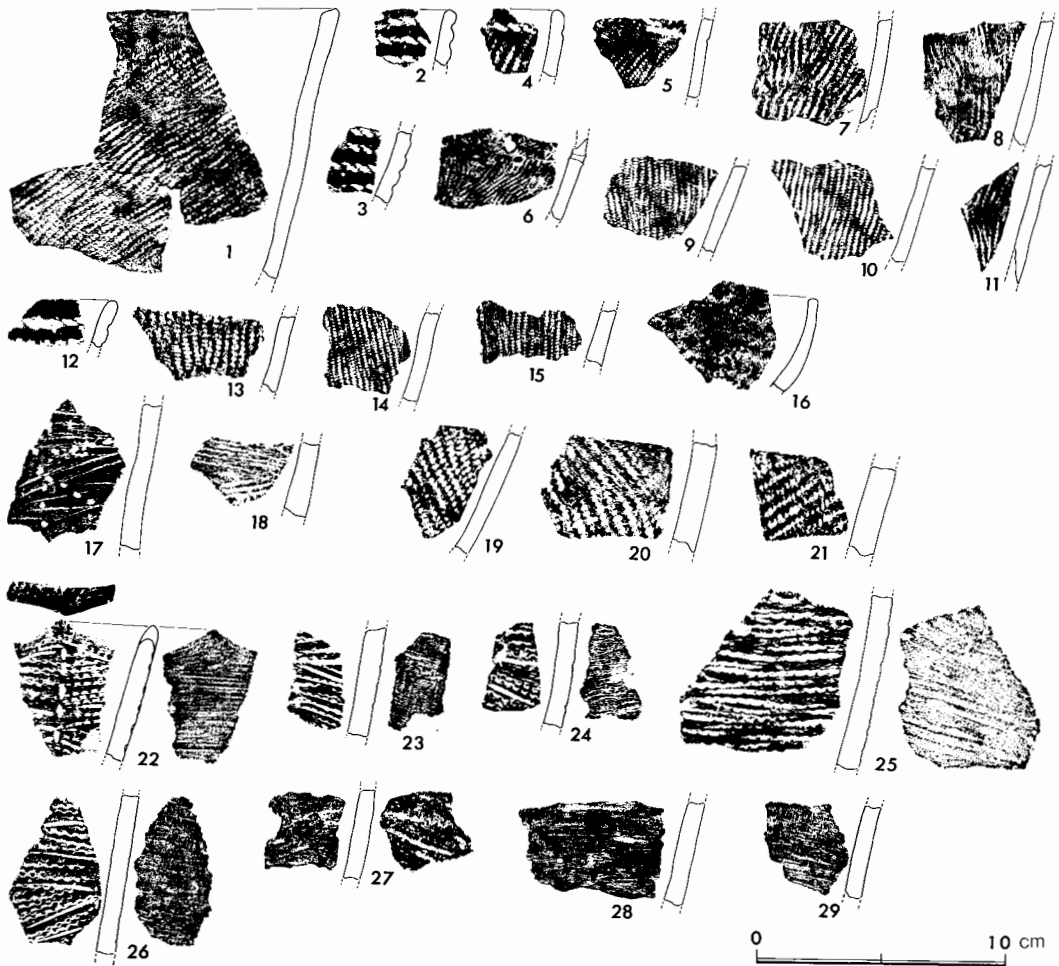
(第68図1～11)(図版45B)

本ピットからの出土土器は、すべて第Ⅳ群に含まれるものである。

1は、縄文のみを施文する深鉢形土器の破片である。2～4は、口唇部に横走る数条の縄線文を主体とする。この縄線文の下部は4の如く縄文が施文されるであろう。6～11



第67図 遺構実測図



第68図 遺構内出土土器拓影

は、深鉢形土器破片である。6は、内側からの穿孔が見られる。

(加藤邦雄)

第1号ピット出土石器 (第79図, 9)(図版50)

幅広の剥片を素材とし、両面加工を施し尖頭部を作り出した両面体石器である。ナイフとしての機能が考えられる、黒耀石製。

(羽賀憲二)

第2号ピット (第67図)(図版41C)

Ⅱ-I区にて第1号ピットと隣接して検出された。

プランは、円形を呈し、規模は、直径1 m、深さは30cm内外である。

壁面、壙底面ともにかたくしまっておりしっかりしている。壁は、直立に近く壙底面近くにてやや丸味を帯び壙底面へと至っている。

城底面は、平坦である。

遺物は、その全てが覆土中より得られたものである。

覆土の層序は、以下の通りである。

第Ⅰ層；暗褐色土

第Ⅱ層；褐色土

第Ⅲ層；茶褐色土

(羽賀憲二)

第2号ピット出土土器 (第68図12～16)

12は、口唇に横走する一条の縄線文を施文し、以下縄文である。13～15は、縄文の見られる深鉢形土器。16は、ボウル形に近い器形を呈する土器であろう。

(加藤邦雄)

第2節 Tピット

1. 開墾部の規模は、遺構確認面の計測値である。
2. 墾底部の規模は、長軸最大値×短軸の平均的な数値である。
3. 長軸の方向は、磁北を基準としている。
4. 遺物の○印は、出土遺物の有無を表している。
5. セクション図中に斜線で示されるのは黒色土の堆積である。

第3表 Tピット概要一覧(第2次調査)

ピット番号	開 墾 部 (cm)	墾 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
101	242×85	214×15	133	N-57°-E		第 69 図 図版42A
<p>層位 第Ⅰ層：黒色土層a 第Ⅳ層：褐色土層 第Ⅱ層：黒褐色土層 第Ⅴ層：灰褐色砂層 第Ⅲ層：暗褐色土層 第Ⅵ層：黒色土層b</p> <p>概要 開墾部の平面は、やや幅広の溝状、墾底部の平面は、中央部が他に比べて、やや幅広となるが溝状を呈している。長軸の断面は、西端部で袋状にオーバーハングしているが、東側では、ほぼ垂直に立ち上っている。短軸断面は、墾底部に比べ開墾部が広がる、太めのクサビ状と言えよう。</p> <p>埋土は、中位までが壁面を形成していたと考えられる褐色ローム層と砂層が繰り返し堆積し、最下の第Ⅵ層は水平に堆積した腐植性の黒色土である。上位では、黒色土を含む3層の流れ込みが見られた。</p>						
ピット番号	開 墾 部 (cm)	墾 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
102	253×84	218×14	133	N-27°-W		第 69 図 図版44A
<p>層位 第Ⅰ層：黒色土層a 第Ⅶ層：黒色土層b 第Ⅱ層：黒褐色土層 第Ⅲ層：暗褐色土層 A層：黄褐色ローム層（軟） 第Ⅳ層：褐色土層 B層：黄褐色ローム層（硬） 第Ⅴ層：黒褐色土層（火山灰をやや含む） C層：砂礫層 第Ⅵ層：黒褐色土層（砂、火山灰を含む）</p> <p>概要 開墾部における平面形は、幅広の溝状を呈しており、墾底部平面形は、溝状である。長軸方向の断面は、両端部の中下位において、壁部の崩落によって生じたと考えられるオーバーハングの見られる袋状となっており、短軸断面は、上方がやや幅広となるクサビ状を示している。</p> <p>埋土は、第Ⅳ～Ⅵ層までが、壁面を形成する第A、B層などが、急速に崩落堆積したものと考えられる。最下層では、腐植性の黒色土bが、水平に堆積している。上方位を占める第Ⅰ～Ⅲ層は、中位まで急速に埋没の進んだのち、遺構の肩部などのズレ込みとともに長時間に渡って堆積したものである。</p>						

ピット 番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
103	316×76	282×15	83	N-13°-W		第 69 図 図版43D

層位	第Ⅰ層：黒色土層	A層：黄褐色ローム層
	第Ⅱ層：暗褐色土層	B層：淡黄色火山灰質砂層
	第Ⅲ層：茶褐色粘質ローム層	C層：黄色火山灰質砂層
	第Ⅳ層：褐色土層	D層：灰褐色火山灰質砂層
	第Ⅴ層：淡黄色火山灰質砂層	
	第Ⅵ層：暗褐色砂層	

概要 開壙部及び、壙底部の平面形は、共に溝状を呈しており、長軸の断面は、南北両端部において共にオーバーハングしているのが認められた。このオーバーハングは、南側に比べ北端部が大きくえぐられている。短軸断面は、壙底部に比べ開壙部が大きく広がる不整逆台形にちかい形と言えよう。壙底面は、ほぼ平坦な状態であり、西壁の中央部では、約40cmに渡ってオーバーハングを生じている部位が認められた。

埋土は、中下位において、壁面を形成したと考えられる褐色ローム層、砂層が繰り返し崩落堆積した層がみられ、上位では、黒色土を含む3層が流れ込んでいる。本号では、通常最下層に見られる腐植性黒色土の存在は、認められていない。

ピット 番号	開 壙 部 (cm)	壙 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
104	275×106	250×13	161	N-25°-W		第 70 図 図版44C

層位	第Ⅰ層：黒色土層 a	第Ⅶ層：暗褐色砂層
	第Ⅱ層：暗黒褐色土層	第Ⅷ層：茶褐色砂層
	第Ⅲ層：暗褐色土層	第Ⅸ層：黒色砂層
	第Ⅳ層：褐色火山灰層	第Ⅹ層：茶褐色砂層
	第Ⅴ層：乳灰色火山灰層	第Ⅺ層：黒色土層 b
	第Ⅵ層：褐色砂層	第Ⅻ層：茶褐色砂層

概要 開壙部の平面形は、幅広の溝状を呈し、壙底部平面形は、溝状である。長軸における断面は、南北の両端部が若干オーバーハングを示す袋状、短軸断面は壙底に比べ開壙部が大きく広がるクサビ状である。

埋土は、壁面部を形成していたと考えられる褐色ローム層、砂層が繰り返し崩落堆積したと思われる土層が中位まで占めており、最下層では、腐植性の黒色土bが水平に堆

第Ⅹ層：灰色火山灰層

第Ⅺ層：黒色土層d

第Ⅺ層：黄褐色火山灰層

概要 開墾部平面形は、不整楕円形、墾底部平面形は、不整隅丸長方形であるが、南北両端壁では崩落によっていびつな形になっている。長軸方向の断面は、ほぼ平坦な底面に対して垂直に近い角度で立ち上っているが、部分的にかかるいオーバーハングの見られる所があり、上方部では、やや広がっている。短軸断面では垂直に近い角度で立ち上り、上方部では広がっている。

埋土は、最下層に腐植性の黒色土bが水平堆積し、その後、壁面を形成する黄褐色ローム層、火山層が繰り返して崩落堆積している。上層部では、黒色土aを含む5層の流れ込みが認められた。

ピット番号	開墾部 (cm)	墾底部 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
107	206×111	119×30	169	N-55°-E		第71図

層位 第Ⅰ層：黒色土層a
 第Ⅱ層：暗黒褐色土層
 第Ⅲ層：黒褐色土層
 第Ⅳ層：褐色土層
 第Ⅴ層：暗褐色土層
 第Ⅵ層：褐色砂層
 第Ⅶ層：黒色土層b
 第Ⅷ層：暗褐色砂層

概要 開墾部における平面形は、不整な長楕円形を呈しており、墾底部の平面形は、ややいびつな形になっているが隅丸長方形にちかい形である。長軸方向の断面は、墾底面は、ほぼ平坦に構築され、壁は垂直にちかい角度で立ち上り、上方部では、湾曲して広がっている。短軸断面は、平坦な墾底面より垂直にちかい角度で立ち上り、上方部では広がっている。又、墾底面中央部には、13×12cmの小ピットが1個配されていた。

埋土は、第Ⅶ層の腐植性黒色土層bを含む第Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層が、ほぼ水平に堆積している。第Ⅶ層を除くこれらの層は、壁部を形成していた褐色ローム層、砂層の崩落層と考えられる。上方では、3層の流れ込みが認められた。

ピット番号	開墾部 (cm)	墾底部 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
108	204×151	105×33	153	N-70°-E	○	第71図 図版43C

層位 第Ⅰ層：茶褐色土層
 第Ⅱ層：黒色土層a
 第Ⅲ層：暗褐色土層
 第Ⅳ層：黄褐色土層
 第Ⅴ層：褐色土層
 第Ⅵ層：黒色土層b

第Ⅶ層：黒色土層 c

B層：暗褐色粘質土層

第Ⅷ層：黒色土層 d

B層：淡茶褐色火山灰質砂層

D層：灰褐色シルト質砂層

A層：黄褐色粘質土層

概要 開塋部における周縁形は、ほぼ楕円形を呈するものと言えよう。しかし、この周縁は土壌の肩が崩落したものと考えられる。したがって、より構築時にちかい姿を推測するならば、中位の平面形でみられる隅丸長方形にちかい形といえよう。塋底部の平面形は、中央部に小ピット1個を配する不整な隅丸長方形である。長軸方向の断面は、ほぼ平坦な底面より垂直にちかい角度で立ち上り、上方部で大きく広がっている。短軸断面も、ほぼ長軸断面にちかい状態で、垂直にちかい立ち上りを示し、上方部で大きな広がりを見せている。

埋土は、壁面を形成していたと考えられる第Ⅴ層中に、バンド状に腐植性の黒色土層が第Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層の3層にわかれて堆積している。上方では、4層の流れ込みがみられた。

ピット番号	開 塋 部 (cm)	塋 底 部 (cm)	深 さ (cm)	長軸方向	遺 物	挿図・図版
109	130×92	91×35	120	N-69°-E	○	第71図 図版43B

層位 第Ⅰ層：暗黒褐色土層

第Ⅵ層：褐色土層

第Ⅱ層：白色火山灰層

第Ⅶ層：灰褐色火山灰層

第Ⅲ層：黒色土層 a

第Ⅷ層：黒色土層 b

第Ⅳ層：黒褐色土層

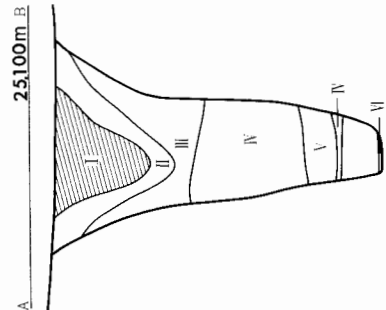
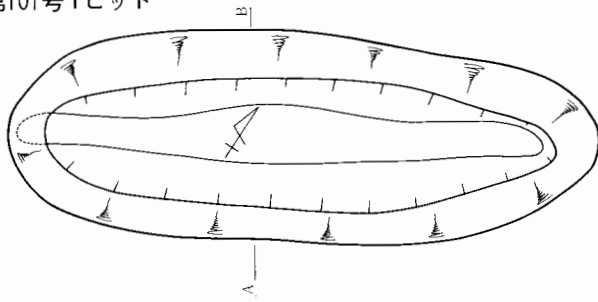
第Ⅸ層：青灰色砂層

第Ⅴ層：暗褐色土層

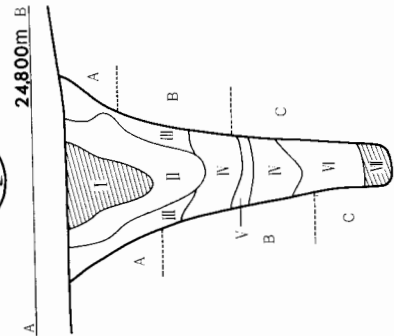
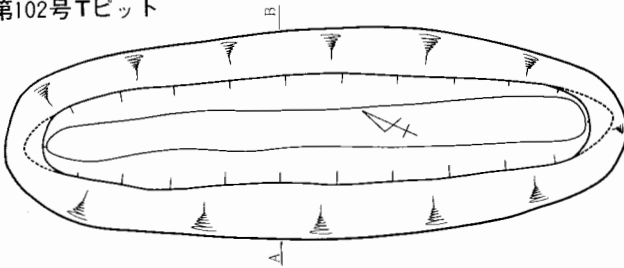
概要 開塋部平面形は、ほぼ楕円形、塋底部平面形は、西端部では、ややゆるやかな弧を描いているが総じて隅丸長方形を呈するものといえよう。長軸方向の断面は、ほぼ平坦な底面に対して、壁はほぼ垂直にちかい角度で立ち上っている。しかし、西側では、崩落のため一部いびつになっている部位がある。短軸断面の形状は、崩落のおこっていない下部では、平坦な底面より垂直に立ち上っている。しかし、上中位では崩落体積によって形状の変化が認められる。つまり、中位で一度ふくらみ、上方に向って広がる状態となっている。又、塋底面中央にはピット1個が配されていた。

埋土は、塋底面近くに腐植性の黒色土がバンド状に2枚認められ、中下位では壁面を形成していたと思われる黄褐色ローム層、砂層がくりかえし堆積しており、上部では4層の流れ込みが見られた。

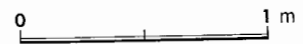
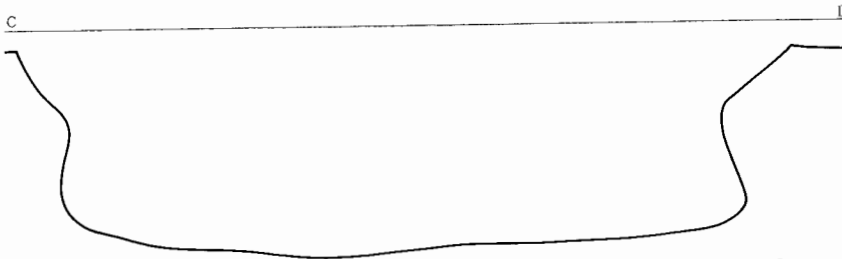
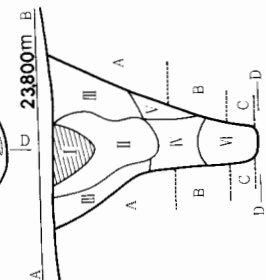
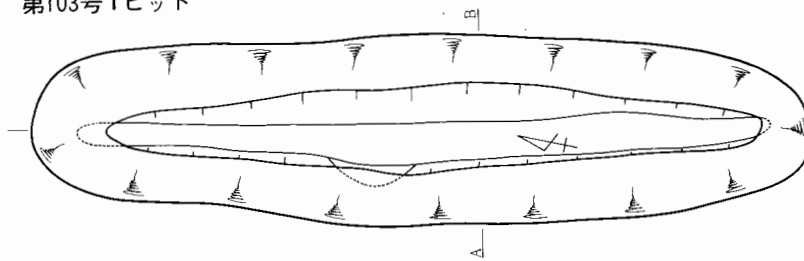
第101号Tピット



第102号Tピット

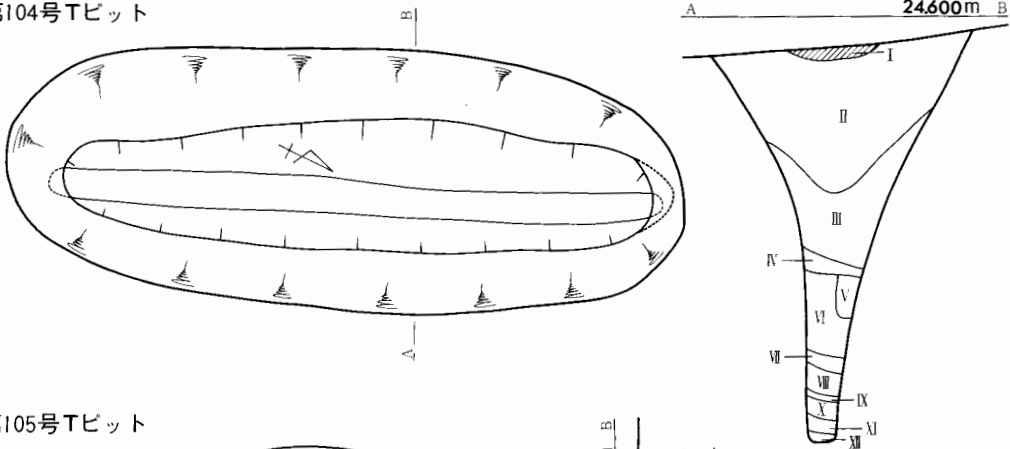


第103号Tピット

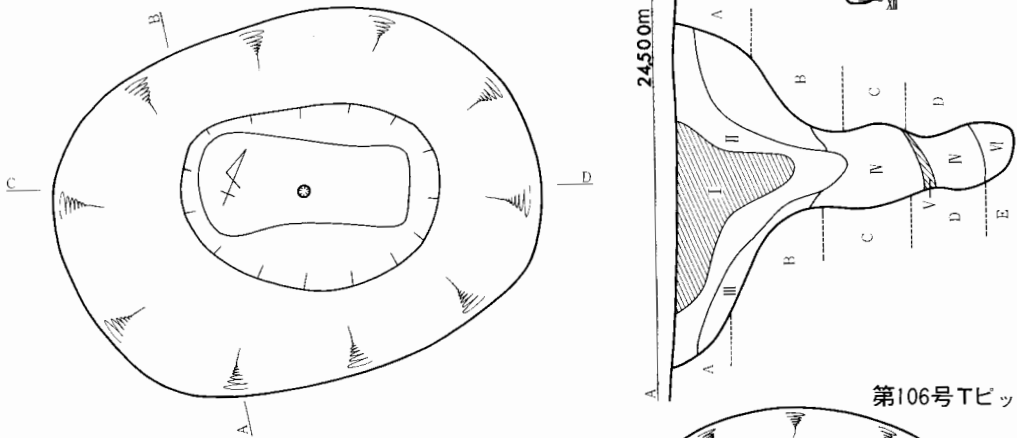


第69図 遺構実測図

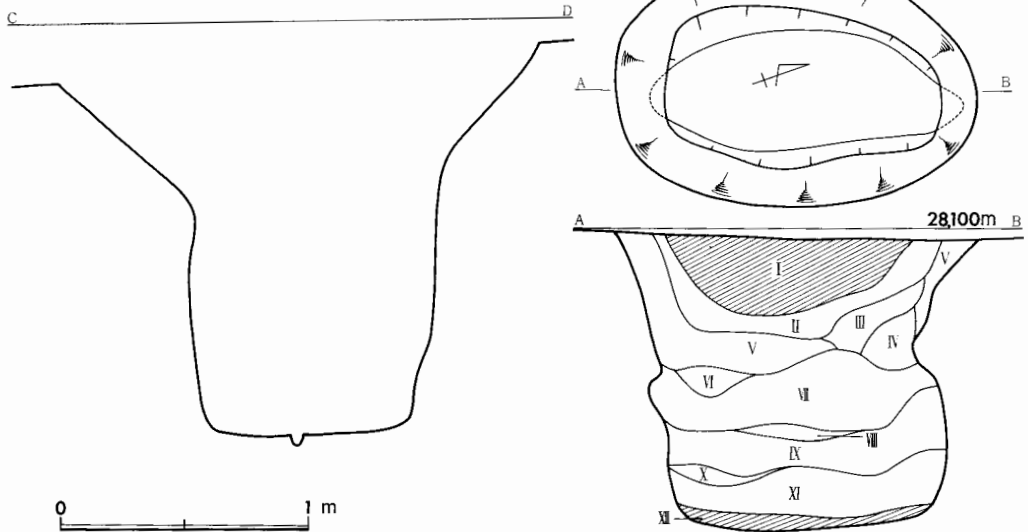
第104号Tピット



第105号Tピット

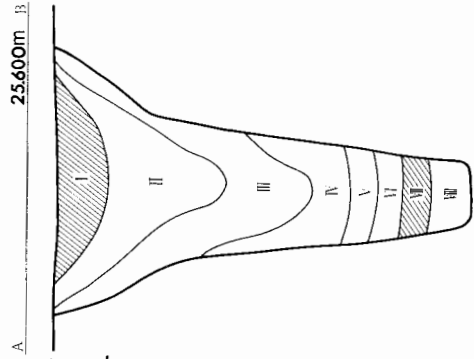
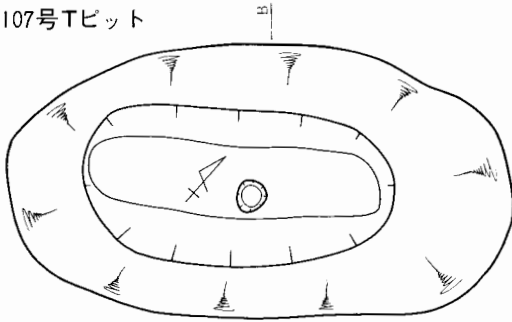


第106号Tピット

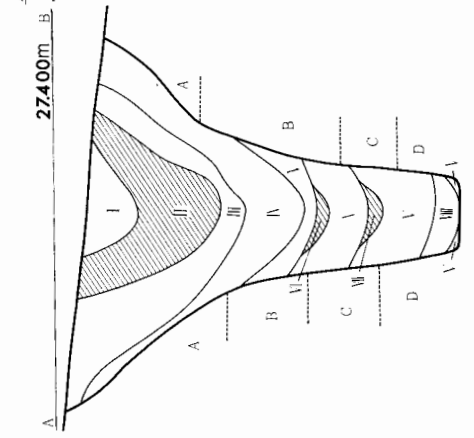
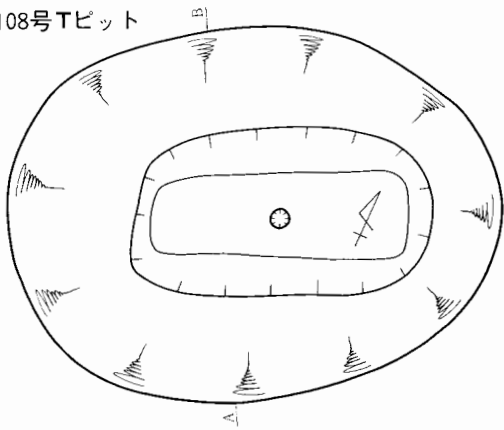


第70図 遺構実測図

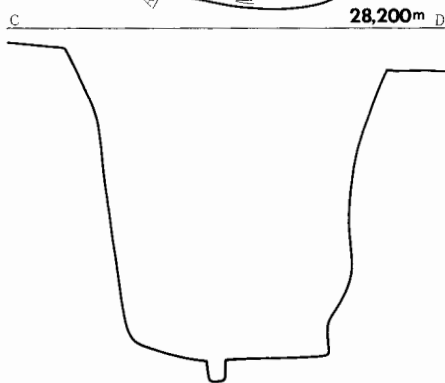
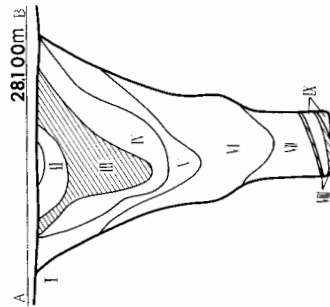
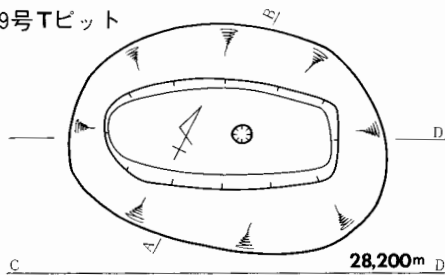
第107号Tピット



第108号Tピット

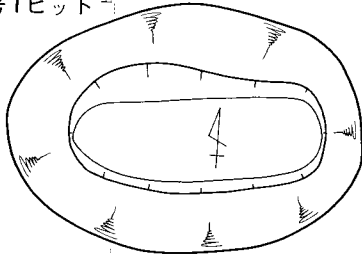


第109号Tピット

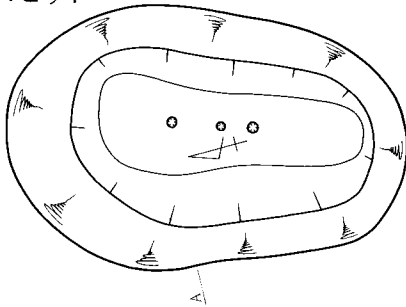


第71図 遺構実測図

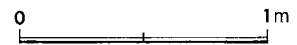
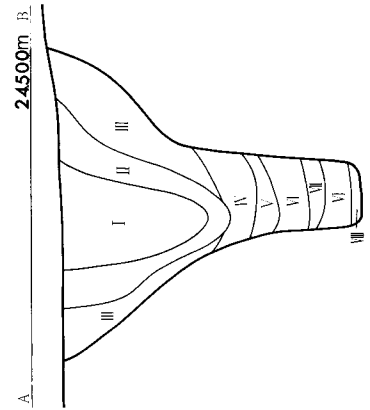
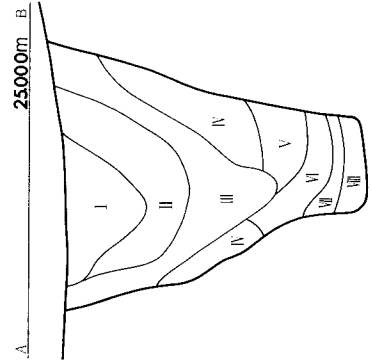
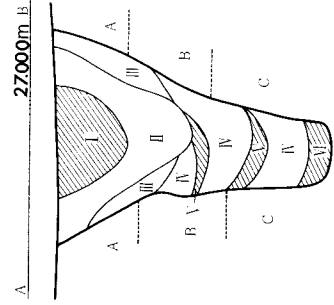
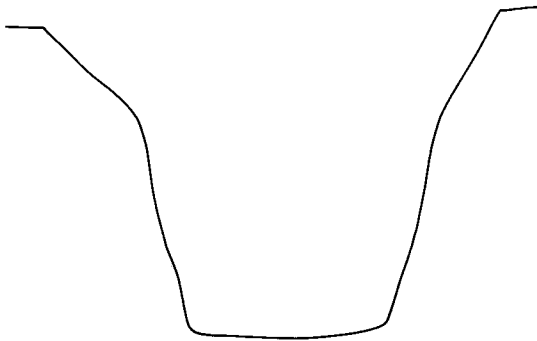
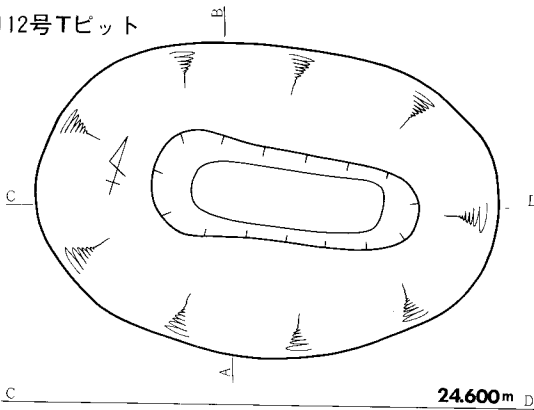
第110号Tピット



第111号Tピット



第112号Tピット



第72図 遺構実測図

Tピット内出土土器 (第68図)

第2次調査においては、12基のTピットが得られている。全てのTピットより、遺物が検出されたのではないが、2、3のTピットの覆土中より若干の土器破片が得られている。

第103号Tピット出土土器 (17, 18)

いずれも覆土中より得られたものである。2点とも後述する第Ⅰ群土器eとしたものである。繊細な貝殻腹縁文が横あるいは斜方向に付けられ、列点文と組み合わせられる(17)。横位の貝殻腹縁文と沈線文が交互に複合してみられ、縦位の列点文が加わる(18)。色調は、17が黒褐色を呈する。胎土中には、いずれも少量の火山灰粒を含んでいる。焼成は良好であり、器厚は0.6cm内外である。

第105号Tピット出土土器 (19～21)

いずれも斜行縄文が地文としてみられる胴部破片であり、細かな形式表徴はみい出せない。胎土等より、19は、後述する第Ⅲ群土器に、20, 21は第Ⅱ群土器に含まれよう。色調は、19が褐色を呈し、20, 21は茶褐色、胎土中には、いずれも若干の砂粒を含み、20, 21にはごく微量の繊維が含まれている。焼成は、比較的良く、器厚は19が0.6cm、20, 21は1.0～1.2cm内外である。

第108号Tピット出土土器 (22～29)

他Tピットに対して比較的多くの土器が得られているが、全て、後述する第Ⅰ群土器に含まれるものである。27～29は、無文であり、aとしたものに含まれる。25は、横位に施文された貝殻腹縁文のみ施文され、cとしたものに含まれる。26は、横位の沈線文と、貝殻腹縁文が交互に複合施文され、dとしたものに含まれる。22, 23は、横位の沈線文及び貝殻腹縁文が交互に複合施文されたものに加えて、突起下より垂下する列点文が付けられる(22)。沈線の内部にも列点文が施こされる(23)等、列点文が特徴となり、eとしたものに含まれよう。いずれも内面に調整の為の横位の条痕文がみられるものが多くみられる(22～27)。色調は、22, 24, 25が黒褐色、他は赤褐色である。胎土中には、例外なく若干の火山灰粒が含まれている。焼成は全て良好である。器厚は、
(羽賀憲二)

Tピット出土石器 (第79図 1)(図版50)

第103号Tピットより、1点出土があった。入念に両面加工が施こされた比較的厚味のある石器で、柄部を作出している。尖頭部は、磨滅痕がみられ鈍い。かえしは、それほど発達しているとは思われない、銚先と称せられる石器であろう、黒耀石製。
(羽賀憲二)

第3章 発掘区出土の遺物

第2次調査においては、比較的多くの遺物が得られている。

しかし遺物包含層は永年の耕作の為ほとんどの部分にて基盤のローム上面まで攪乱され、得られた遺物は何ら層位的な裏付けを有していない。

第1節 土 器

出土した遺物の主体を占めるのは土器であり、縄文時代早期より続縄文時代に至るまでの土器が出土している。

第2次調査での土器群の主体は、貝殻腹縁文を有する縄文時代早期の土器が最も多く出土し、以下、晩期、中期となる。

これらの出土土器は、時期的な分類より第Ⅰ群より第Ⅴ群土器までに分類され、さらに小グループに細分された。

第Ⅰ群土器 (第73図1～3, 第74, 75図)(図版21A, B, 22A)

貝殻の腹縁部を器面に押しあて、ひっかく様にした条痕文、押圧した腹縁文、沈線文、列点文等が特徴的にみられる平底円筒形の土器群であり、縄文時代早期の前半に位置するであろう。

文様要素等の組成より、5つの小グループに細分し、以下説明を加えて行く。

a (第73図1, 第74図1～8)

無文、あるいは細かな擦痕のみられるものをaとした。

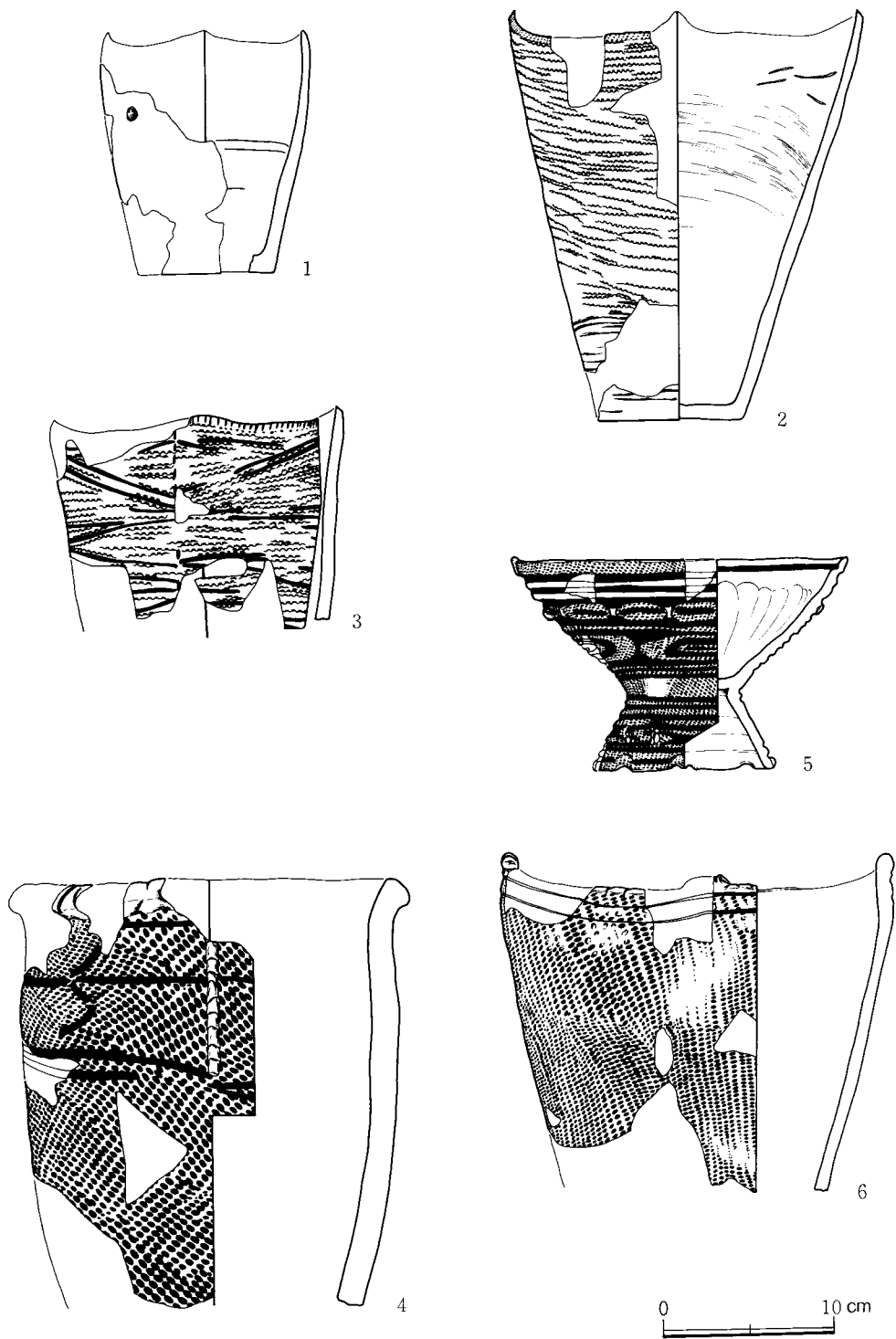
口縁は、いずれも平縁をなすと思われ、口唇をやや内反するような感じに口唇外側を削り取る様に整形する(1, 2)。

口縁が、やや外反し、口頸部にゆるやかなくびれの存在するもの(3)と2形態の口縁部形状がみられる。

4には、貫通している、円形の刺突文がみられる。

5～8は、胴部の破片である。

色調は、赤褐色、褐色を呈し、胎土には若干の火山灰粒を含んでいる。焼成は良く、器厚は0.6～0.8cmである。



第73图 瓮掘区出土土器实测图

復元土器（第73図1）（図版46，1）

全体の3分の1程の破片より接合されたものである。口径11.5cm，底径8.0cm，高さ14.2cmの深鉢円筒形を呈する平底土器で，口唇に4個の大型の突起部を有し，ゆるやかな波状口縁となる。

口唇部の断面形は，やや丸味を帯びている。

口頸部にてやや内反する傾向がみられ，口唇はやや内側を向く，口頸部に補修孔が1個みられる。土器内面には，横位の整形痕がみられ，部分的に沈線状のそれが残っている。

色調は，全体的に暗褐色を呈し，胎土には若干の火山灰粒が含まれている。

焼成は良好であり，器厚は0.5～0.8cmである。

b（第74図，9～12）

横位の条痕文が地文として施文され，間隔をおいて2本一単位の横位の貝殻腹縁文が数段施文されるものを**b**とした。

9～12は，同一個体と考えられる。

口唇上は，斜めに削り取ったかのように整形され，口唇の断面形は，鋭角部分のある角頭状となる。さらにこの部位に約1mm間隔に連続したきざみ目が施こされる。

口縁部形態は，平縁となる。土器内面には，炭化物が厚く付着している。

色調は，口唇部は黒色を呈し以下は赤褐色となる。胎土中には若干の火山灰粒を含み，焼成は良好である。器厚は0.6～0.8cmである。

c（第74図2，13～32）

貝殻腹縁文のみ施文されるものを，**c**とした。

横位の貝殻腹縁文が連続し，器面全体にみられるもの（15～17，19～21，23～32）

斜位の貝殻腹縁文が連続してみられるもの（13，14）

横走する綾杉状を呈する，貝殻腹縁文が施文される（22）等のバラエティーがみられる。

口唇上を削り取ったかのように，口唇断面が鋭角もしくは，鋭角部分のある角頭状をなす様整形したものが主体をなす。

口縁の形状は，やや外反する傾向がみられる。

小突起を有し，ゆるやかな波状口縁となるもの（16，25）

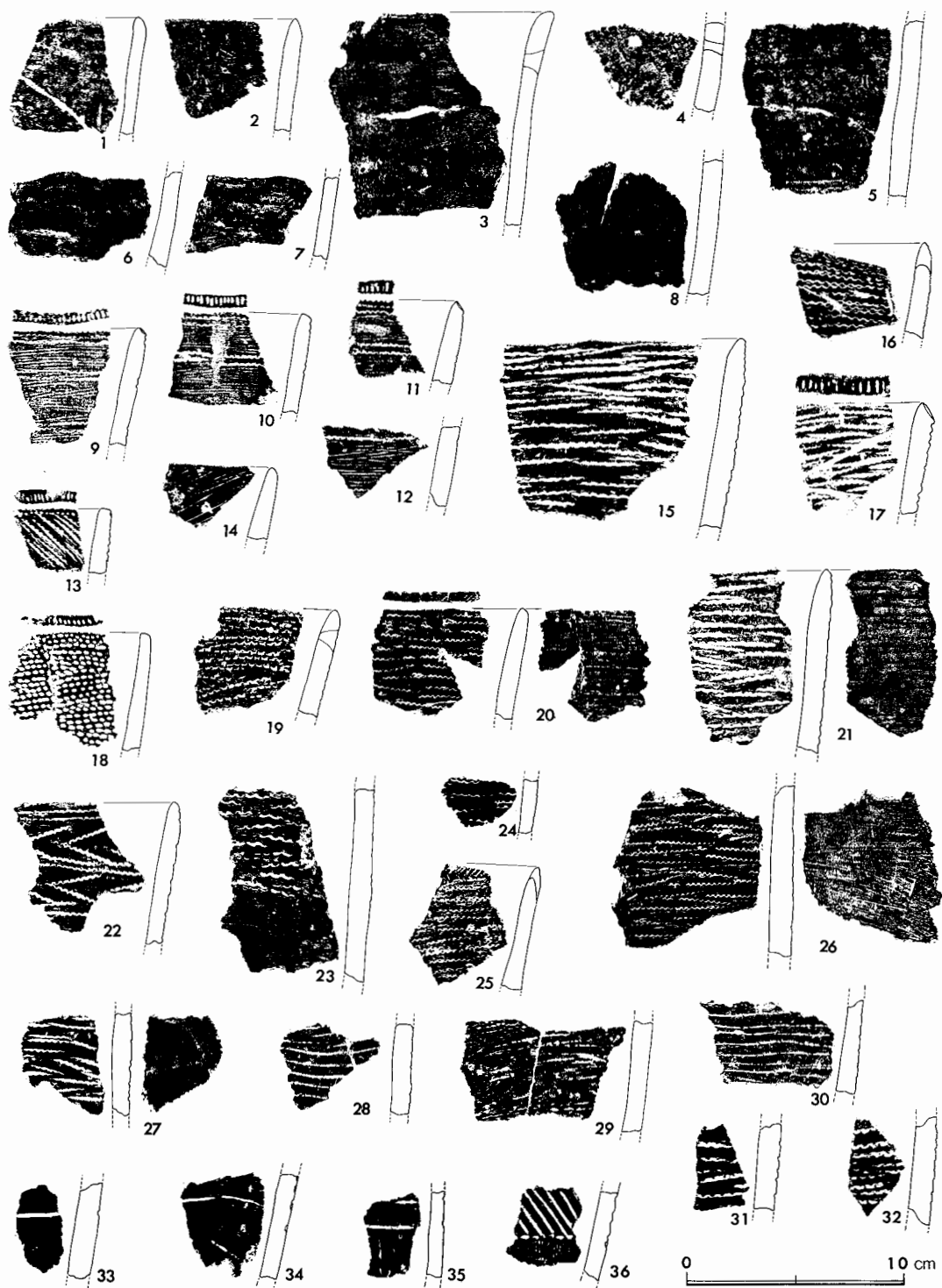
平縁となるもの（13～15，17～22）の2種の口縁部形態がみられる。

口唇上に，連続してきざみ目を施文する（13，17，18）。

細かな貝殻腹縁文が連続して施文されるもの（20）等がみられる。

土器内面に，調整の為の条痕文のみられるもの（20，21，26）。

色調は，茶褐色，赤褐色を呈するものが主で黒褐色を呈するものも若干みられる。胎土中には，若干の火山灰粒を含んでいる。焼成は良好である。器厚は，0.6～0.8cmである。



第74図 発掘区出土第I群土器拓影

復元土器 (第73図2) (図版46, 2)

全体の3分の2程の土器片より接合された土器であるが、口径、底径ともやや楕円形に近い器形とも思えるものである。

口径約20cm, 底径8.5cm, 高さ24cmの深鉢円筒形を呈する平底土器である。

口唇には、4個の小突起を有しゆるやかな波状口縁となり、口頸にてややくびれ、外反する。

口唇は、削り取ったかの様に整形され、断面は、鋭角的となる。さらに口唇上には、細かな貝殻腹縁文が連続して施文される。

胴部には、底部ちかくの約3分の1部分を除いて横位の貝殻腹縁文が連続して施文される。

土器内面には、整形の為の条痕文が横位に若干だが残されている。

色調は、全体的に赤褐色を呈する。胎土中には若干の火山灰粒と石英を含んでいる。

焼成は良好である。器厚は、0.8cm内外である。

d (第74図33~36, 第75図37~57)

貝殻腹縁文と沈線文が組み合わされて施文されるものをdとする。

大部分のものは、平縁となるが、小突起を有し波状口縁となるものもある(50)。

口唇は、削り取られたかのように整形され、断面が鋭角的な部分を有する角頭状をなすもの(39, 44, 50)。

鋭角的な断面をなすもの(37, 48, 49)がある。

口縁部形態は、全例やや外反する傾向を有している。

口唇上に、きざみ目を連続的に施すもの(44)、口唇上に、細かな貝殻腹縁文を連続的に施文する(50)等もある。

文様のパターンについては、斜方向の数本の沈線文と横位の数段の貝殻腹縁文が組み合わされるもの(37, 38)。

横位の沈線文を中心に斜位に連続して貝殻腹縁文が綾杉状に施文されるもの(42)等が特異な文様としてみられるが、他のほとんどのものは、沈線文と貝殻腹縁文が横位に交互にあるいは乱雑に施文されたものである。

内面に、整形のための横位の条痕が残されているものもある(47, 55, 56)。

色調は、全て赤褐色、茶褐色を呈するものが主体をなし、黒褐色を呈するもの(44, 55)も含んでいる。胎土中には、若干の火山灰粒及び石英を含み、焼成は良好である。器厚は、0.8cm内外である。

e (第73図3, 第75図58~72)

貝殻腹縁文と沈線文が複合施文されるdとした土器に、さらに列点文(刺突文)が加わるものをeとする。

文様構成のパターンは全てdとしたものと同じであるが、波状口縁を呈するものが大部分を示め、

その小突起下に垂下する様に施文される列点文が特徴的にあらわれる。

得られた口縁部破片は全て、小突起を有するゆるやかな波状口縁をなしている。

口唇部は、断面が削取ったかのように整形され、鋭角的な部分を有する角頭状を呈するもの(60) 鋭角的となるもの(58, 59, 61, 62)。

やや丸味を帯びるもの(66)の3つの形状がみられる。

口唇部には、文様の施文される例もみられ連続したきざみ目を施すもの(59) 繊細な貝殻腹縁文を連続的に施文するもの(61, 62)等がある。

文様構成は、小突起部分を頂点として、横位の沈線文、貝殻腹縁文が数段交互に山形を呈する様施文され、列点文は、この小突起下に5mm間隔で施文される(58, 60, 61)。

小突起を頂点とする横位の沈線文に対して地文として貝殻の腹縁部を縦位に用いジグザグに連続押圧する波状貝殻腹縁文を有するもの、列点文は、口唇下に一段、さらに小突起より垂下するように連続してみられる(59)。

横位に乱雑に施文される貝殻腹縁文と、口唇下に2段の列点文、小突起より垂下するようつけられる列点文が複合施文されるもの(62)。

菱形を構成する、数本の沈線文の中心に貝殻腹縁文が3段みられ、これらの中心を垂下する列点文が施文されるもの(68)等がみられる。

69のみ、文様構成は前述のものと同様だが貝殻腹縁文が繊細な絡縄体圧痕文によりおきかえられたものもある。

この絡縄体の原体は、0段rに撚った撚り糸を細い棒状工具に左巻きしたものを使用している。

66は、口縁の断面が方形をなす器形を有すると考えられるもので、小突起の部分に角を有する。文様として、小突起部分に貫通する刺突痕を有している。

色調は、茶褐色、赤褐色が主体をなし、暗褐色を呈するものも若干存在する。胎土中には、若干の火山灰粒と石英を含んでいる。焼成は良好である。器厚は0.8cm内外である。

復元土器 (第73図3)(図版46)

全体の3分の1程の破片より、復元されたものである。

口径17cm、現存部高さ13cmの4個の小突起を有するゆるやかな波状口縁を呈する土器である。

口唇は、削り取ったかのように断面は鋭角的に整形され、口唇上には繊細な貝殻腹縁文が縦位に連続して施文される。以下の文様は、貝殻腹縁文と沈線文が横位に数段ずつ施文され、突起下には垂下する列点文がみられる。

色調は、暗褐色を呈し、胎土中には若干の火山灰粒を含んでいる。焼成は良好であり、器厚は0.8cm内外である。

底部 (73~77)

いずれも、平底で底面に脹り出しはない。無文のものが多い(75~77)



第75图 发掘区出土第I群土器拓影

縦位の擦痕様の文様のあるもの(74)

沈線文と繊細な貝殻腹縁文が複合施文されるもの(73)等である。

色調は、全て赤褐色及び茶褐色となり、胎土中には例外なく少量の火山灰粒を含んでいる。焼成は良好であり、器厚は0.6 cm内外である。(羽賀憲二)

第Ⅱ群土器(第73図4, 第76図)(図版48B)

縄文時代中期に属する厚手の土器群であり、沈線文、円形刺突文、半截竹管状工具を施文具とした文様、貼付文等が特徴となる。

2～3形式の細分が可能となろう。

a類(6, 7, 9, 10)

トコロ6類土器と称せられる土器群に属するものである。

平縁で口縁部に肥厚帯を有し、口唇上にへら状工具によるきざみ目を施す、さらに肥厚帯上には2段のへら状工具による連続刺突文を施す。肥厚帯下に直径1 cm内外の円形刺突文がめぐる(9)。口唇上、及び口縁部に半截竹管状工具の内面による連続刺突文がみられる(7, 10)

口縁部の内面にも縄文が施文されるもの(6)等である。

色調は、黒褐色(7, 9) 赤褐色(10) 黄褐色(6)を呈し、胎土には小石を若干含んでいる。繊維の混入はみられない。焼成は比較的良好、器厚は1～1.2cmである。

b類(第73図4)(第76図1～5, 8, 11～26)

貼付文、半截竹管状工具による沈線文あるいは連続刺突文が特徴的にみられるもので、智東B式、平岸天神山式土器等と称されている土器群に属するものであろう。

粘土紐の貼付によりディコレートされた突起部を有し、貼付帯上にはへら状工具による連続したきざみ目が施され、突起下には棒状工具による連続刺突による沈線化した文様のみられるもの(1)。

小突起を有し、沈線による文様が地文としての縄文とともに施されるもの、口縁はやや外反する傾向のみられるもの、口唇上には、縄文が施文される。さらに器内面にも縄文が施文される(2)。

突起部及び口縁に肥厚帯があり、この部分に、指頭の押圧による文様が連続して施文される(3)。口唇を折り返し肥厚帯とし、この上に指頭を連続して押圧する(4)、縄原体を連続的に押圧する(5)等もみられる。

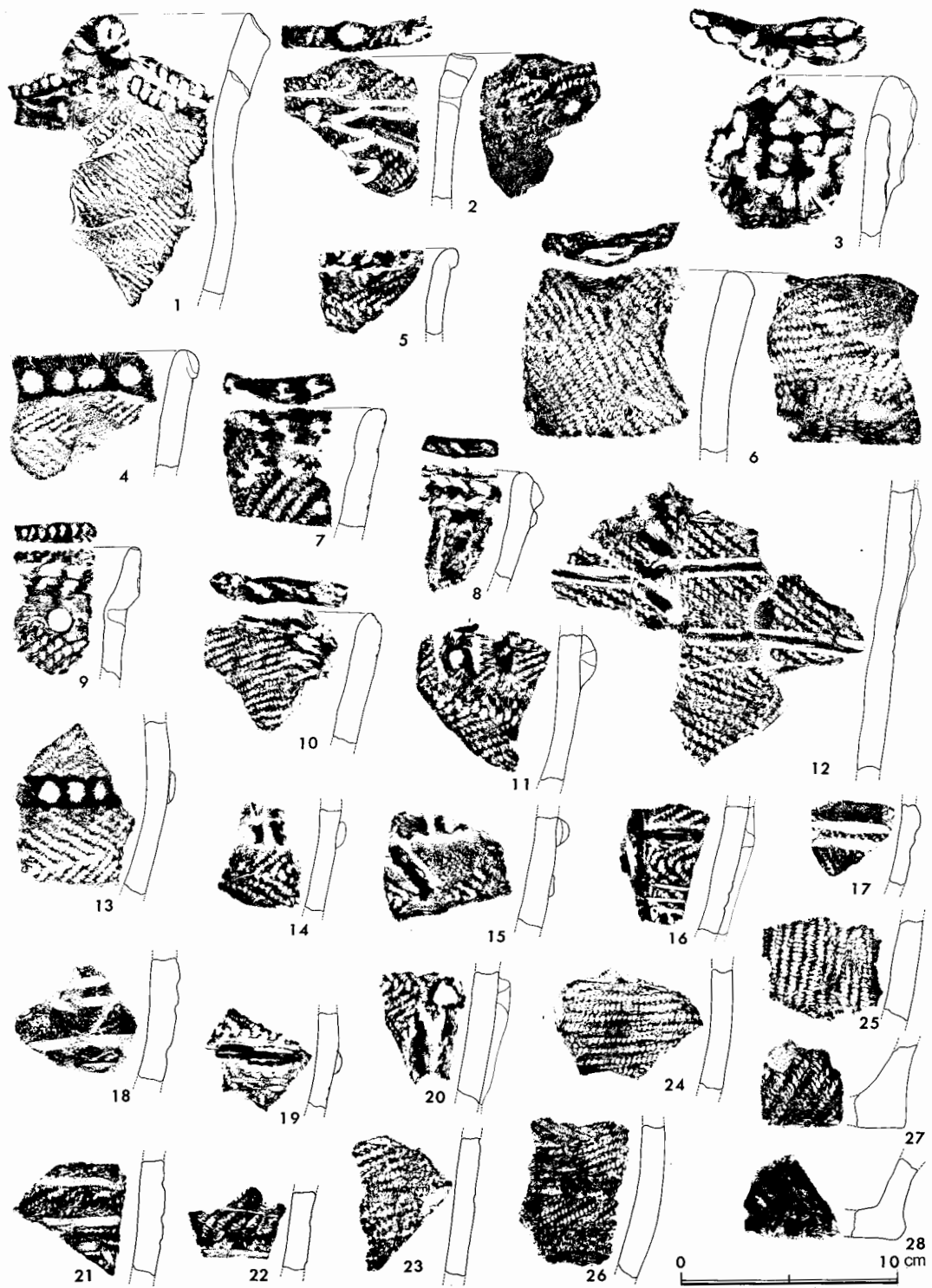
口唇下に貼付帯が2段みられ、へら状工具の先端による連続刺突がその上になされる(8)

貼付帯と半截竹管状工具の内面を使用する2本1単位の沈線文が複合施文されるもの(12, 16, 19, 20)。

貼付帯上に、指頭による連続した押圧文を施す(13)。

縄原体を連続的に、押圧したきざみ目を施す(14, 15)。

ボタン状の貼付文を施す物(11)等がみられる。



第76图 发掘区出土第Ⅱ群土器拓影

17, 18, 21~23は、沈線文のみられる例である。

色調は、黒褐色（4, 13）を呈するものの他は、茶褐色を主とする。胎土にはを全て若干の砂粒を含み、繊維を若干含むもの（1, 2, 8, 12~16, 25, 26）も比較的多くみられる。焼成は比較的良い、器厚は1.0~1.2cm内外である。

復元土器（第73図4）（図版47A1）

全体の2分の1程度の破片より接合されたものである。

口径22cm, 現存高25cmの円筒形土器であり底部を欠いている。

口縁は大きく肥厚し、へら状工具によるきざみ目が連続して施こされ、地文としての縄文とともに横位に数段の沈線文が施文される。さらに縦位にS字状を描く沈線文もみられる。口唇より垂下するよう付けられた半截竹管の内面を使用する連続刺突文が一段ある。

色調は、全体的に茶褐色を呈し、胎土中には、若干の砂粒と繊維を含んでいる。焼成は比較的良好である、器厚は1.0cm内外である。

底部（27, 28）

いずれも底面がやや脹り出しており、底面より若干上部に少しのくびれ部分がみられる。

単節の斜行縄文が地文として施文されている。

色調は、茶褐色を呈し、胎土中には砂粒と繊維を若干だが含まれている。焼成は比較的良く、器厚は1~1.2cmである。

（羽賀憲二）

第Ⅲ群土器（第77図1~5）（図版47A2, 49A）

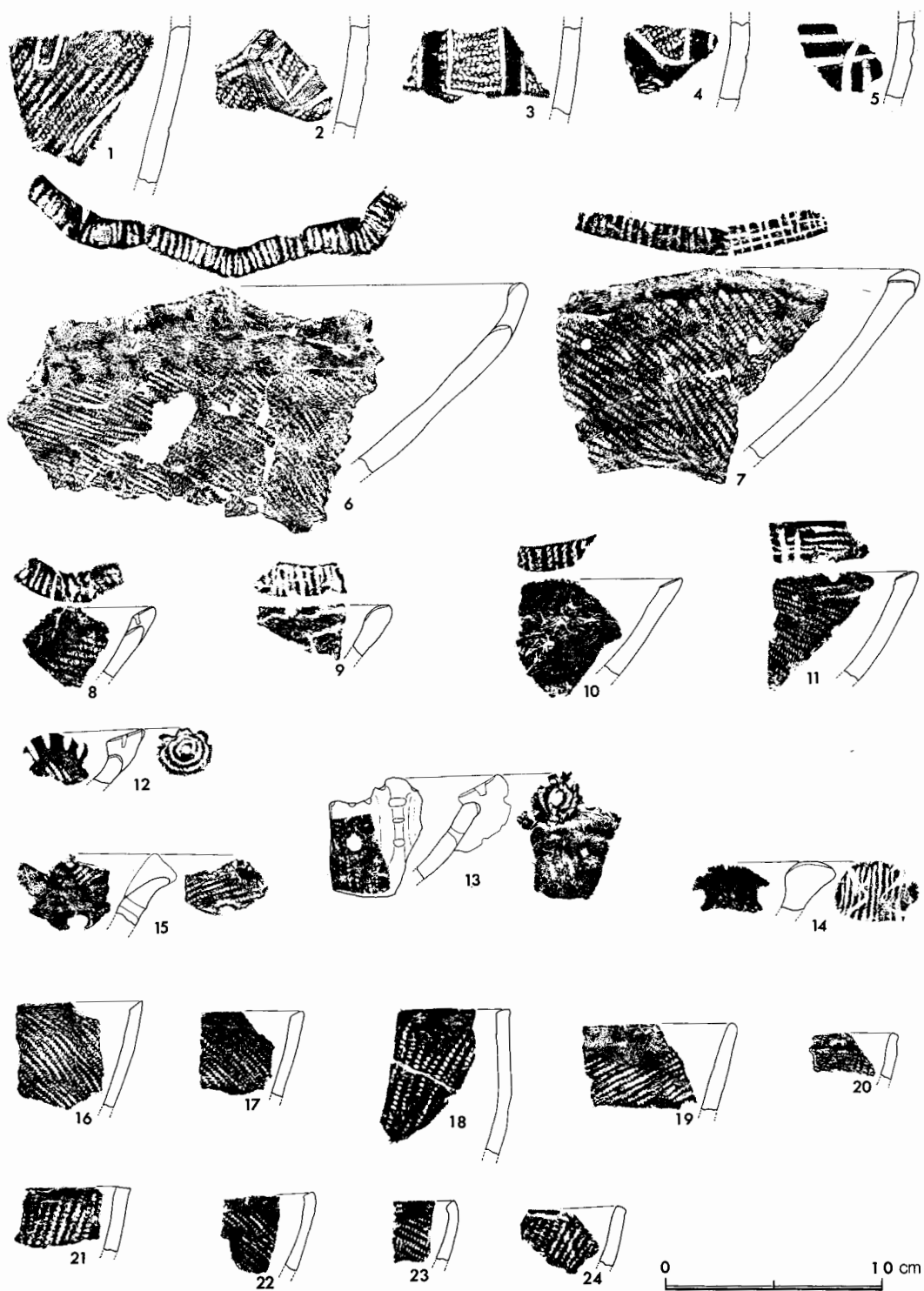
本群に属する土器の発見数は非常に少ない。第77図に図示したものがすべてである。

いずれも胴部破片であり1~4は地文としての縄文を有し、幾何学的な沈線により区画される磨消帯を有する。5は、無文に沈線を配する。器形は深鉢形である。

第Ⅳ群土器（第73図5, 6, 第77図6~24, 第78図25~46）（図版49A, B）

本群土器は、縄文時代晩期に属するものである。第73図5は台付鉢のほぼ完形に近い土器である。器高約12.4cm, 口径19.5cmである。口唇部に一個の突起が現存する。現存部から突起の数を類推すれば、多くとも二個以上にはならないであろう。口縁部に三条の横走沈線をめぐらし、その下部には、いわゆる二重の三角工字文風の縄文帯による文様を有する。台部の現存部には、2個一對の半月状の窓々が2ヶ所に見られる。

第73図6は45.2cm, 現存高約40cmである。器面全体には縄文を施文する。口唇部には、おそらく4個突起を有するであろう。突起部分の裏面に、口唇に直交する撚紐を数条押圧し、その他の部分では刻みを配する。口縁には横走する2条の沈線が見られる。器形は、口縁部にてやや内傾を示す深鉢形である。



第77图 发掘区出土第三·VI群土器拓影

第77図6～14に示すものは、浅鉢形土器である。6は、口唇部内側に、やや太めの撚紐を口縁に直交して押圧する。表面は、口縁部に無文帯を配し、以下縄文となる。器形は、浅鉢形であるが、くまみ状、の突起を中心にして、左右に2個づつの小突起を有するものであろうか。

7は、口縁に直交する撚紐の押圧をつけ、更にその一部に横走する撚紐の押圧が見られる。表面には、全面に縄文が見られる。器形は、口縁が破状を呈し、口唇部をやや肥厚させる。

8～10は、口縁に直交する撚紐の押圧を主体とするものである。8は、突起頂部にやや四角い工具による刺突起が見られ、口縁に無文帯を配し以下縄文である。9は、撚紐の押圧に加えて更に刻みを配する。表面は、無文であらうか。10は、撚紐を押圧し、表面は無文である。

11は、口唇に横走する撚紐の押圧と、これに直交する撚紐の押圧が見られる。破片が小さく確言できないが、やや太めの円形工具の側面による押圧も加えられるようである。表面は縄文である。なお、表面に2条の横走する縄文原体による押圧が見られる。

12, 13は、突起頂部に指紋状の撚紐押圧の施文されるものであり、その中央部には、いずれも円形工具の側面による押圧も見られる。表面は縄文を施文する。ただ13は、突起頂部から表側に把手状の貼付が施され、その左側に表面から内側に向けての穿孔が見られる。

14は、指頭状の突起で、撚紐の押圧が施文され、両側からのく状、の押圧が加えられる。15は、口唇及び表面に縄文が見られ、突起頂部から内側をやや肥厚させる。その肥厚部の下端に内側から外に向けて穿孔がされている。

16～37は、深鉢形土器である。16～24は口唇が無文で表面に縄文を施文する土器である。口唇の形としては、内側に斜めに切り込むもの(16, 17, 22, 23)平坦なもの(18, 21)丸味をおびるもの(19)外側に傾斜するもの(20, 24)などがある。また口唇をやや肥厚するもの(24)口縁部をやや浅い溝状に削り整形するもの(20)がある。縄文は、器面全体に施文する(16, 24)のほかは口縁部に無文帯が見られる。

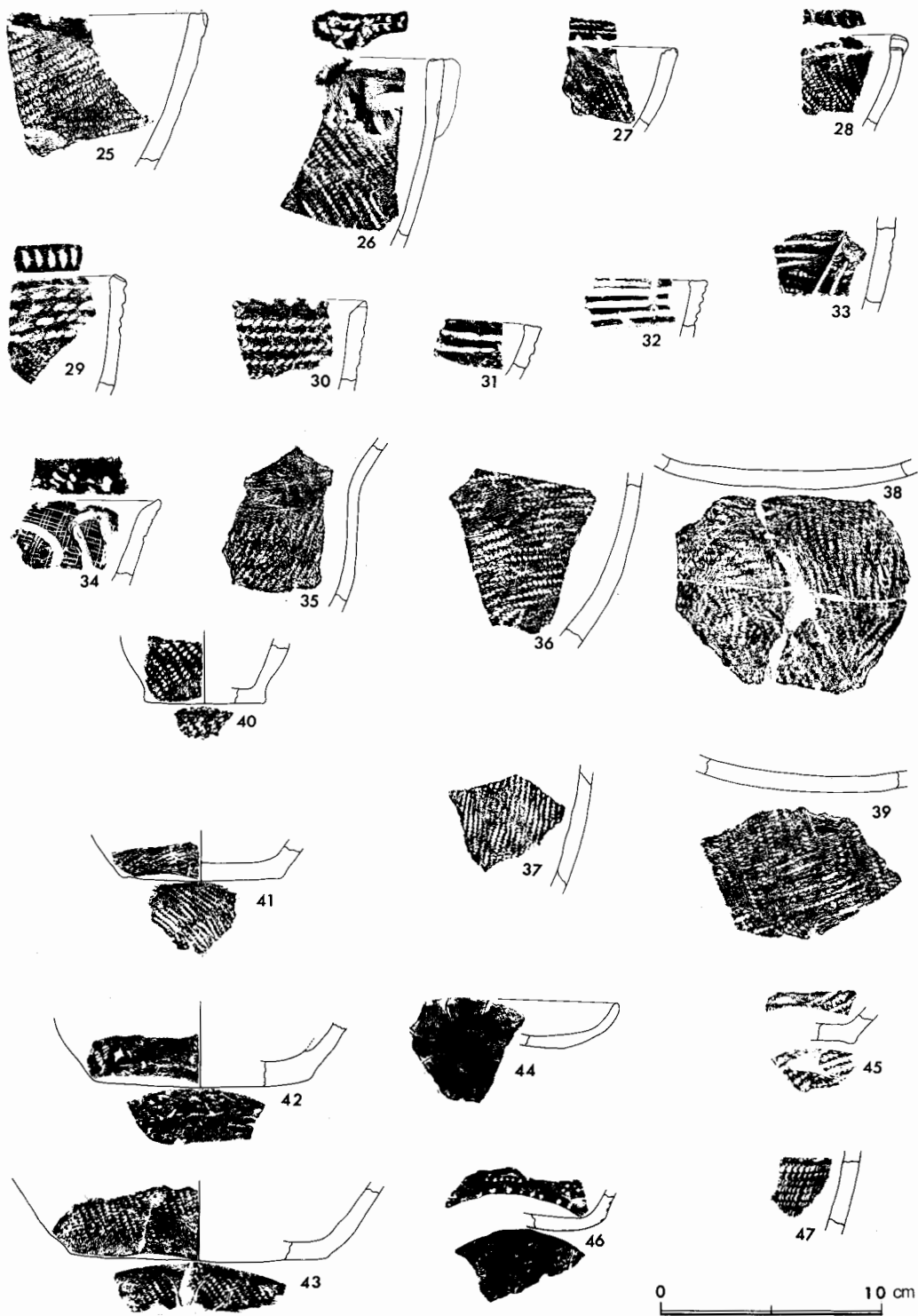
器形は、口縁がやや直立するもの(18)やや内反するもの(23)がある。

25は、口唇に円形工具の側面による押圧を施文している。口縁部は、縄文施文後にやや肥厚させている。26は、口唇に縄文原体を押圧している。表面は、縄文施文後に、口唇より垂下する貼付帯と、横走する沈線を施文する。27は、口唇に横走する撚紐押圧を刻み図を配し、口縁の無文帯を残し、以下縄文を施文する。28は、口唇に直交する2段の撚紐を押圧し、口唇を幅広くすることによって、口縁に沈線を施文した如くの効果を見せている。表面は縄文である。

29は、口縁部に4条の横走する縄線文を施文し、以下縄文である。口唇部は、縄線文と同一原体により口縁に直交する文様を施文する。30も29に近似する土器であるが、口唇部の文様は、円形工具の側面による押圧である。

31～34は、沈線文を主体とする破片である。31, 32は太めの工具による横走沈線を施文する。口唇を平坦に整形する際に、口唇の粘土が内側に押し出されている。33は、沈線と縄文が見られる。

34は、口唇部に縄文原体の押捺による刻みをつけ、内側にも同様な施文をする。表面は細い工具による沈線を施文し、この後に太めの工具による粗雑な曲線文をつける。



第78图 発掘区出土第Ⅳ・Ⅴ群土器拓影

35は、壺形に近い器形を有する。胴部に縄文を施文し、上部は無文であろう。

36, 37は深鉢形土器の胴部破片, 38, 39は土器底面であろう。

底部 (第78図)(40~45)

40, 41, 43はいずれも底面にまで縄文を施文するもので、底面がやや丸味をおびる。40は、やや外反して底面へ至り、43は、若干稜を有する形態をとる。42は、底面が無文のものである。

44は、手ヅクネの皿状を呈する土器、46はおそらく舟形土器の底部であろう。刺突文を多用し、底面にも縄文が施文されていたと思われるが磨滅しており明瞭でない。34のような口縁部を有するであろうか。

第V群土器 (第78図47)(図版49B)

続縄文時代の土器であり、今年度の発掘では、唯一の出土破片である。

(加藤邦雄)

第2節 石器 (第79図~85図)(図版50~54)

第2次調査において得られた石器群の特徴として、剥片石器の数が非常に少なく、石錘、擦り石の量が特に目だつて多い点があげられる。後者は、いずれも縄文時代早期に特徴的な石器であり、本遺跡出土土器、第I群土器に伴ったものであろう。

1 石鏃(3)

比較的狭長な形状であり、尖頭部を欠損している。入念な両面加工が施こされ、太い基部が作り出されている。

2 両面加工のナイフ状石器(2, 4~6, 7)

太い柄部が作り出され、幅広の刃部を有する。入念に両面加工が施こされており、柄部の剝離面の稜線は磨滅部分が所々にみられる(4)。柳葉状を呈する石器で、入念な両面加工が施こされている。下部に尖頭部を有する、玄武岩製である(5)。

2は、きわめて入念に両面加工が施こされ、全周のエッジを刃部としている。

7は、幅広の剥片の左右両側縁部より剝離加工を施こしたものである。

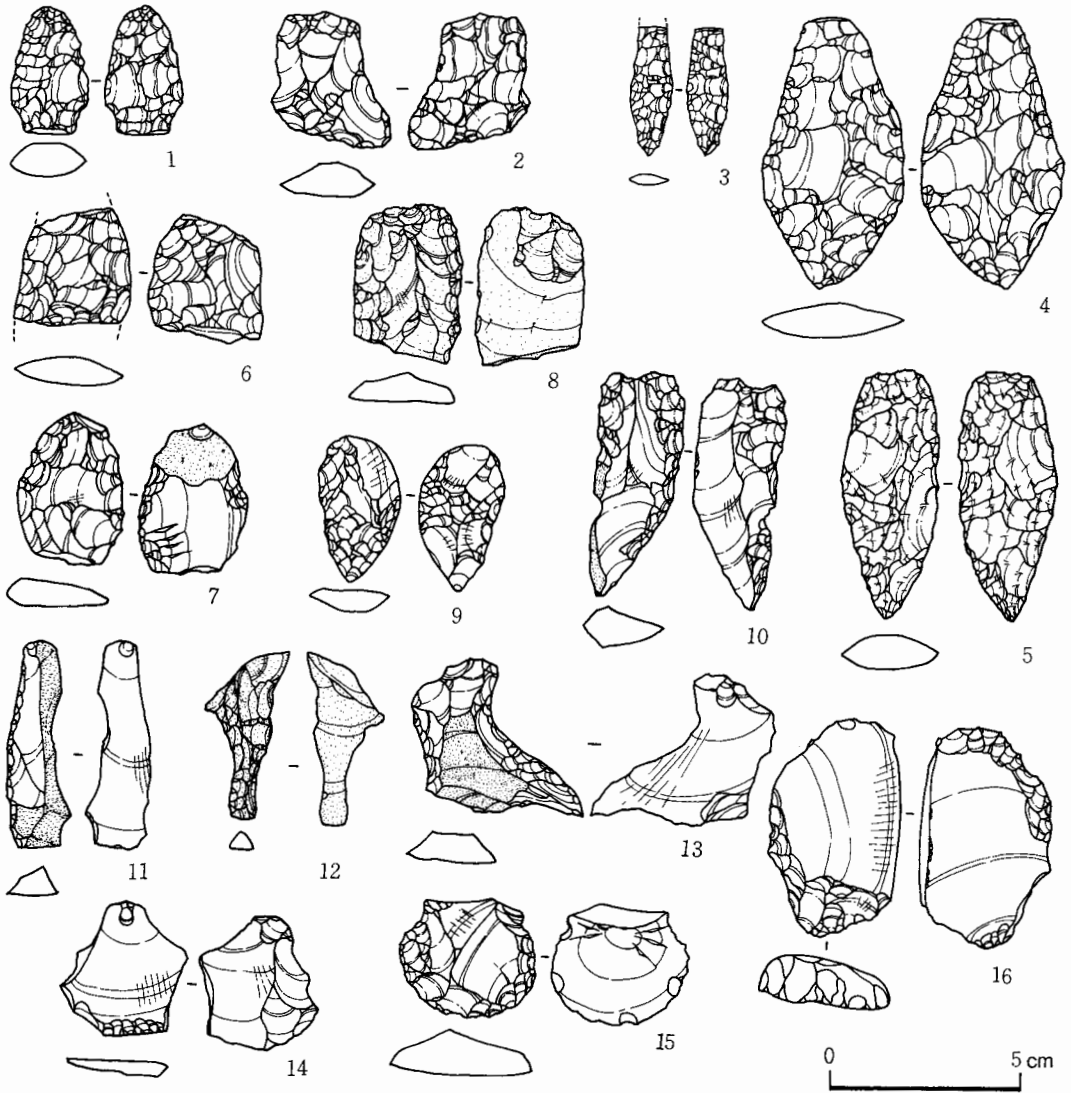
6は、先端部と下部を欠損している両面加工の石器である。

3 擲器(15, 16)

15は、部厚い剥片の周囲に第1次剝離面より背の高い面をもつ様加工されたものである。

16は、大型の剥片の長軸両端に第1次剝離面より背の高い面をもつよう加工されたものである。

前者は、円形削器、ラウンド・スクレパー、後者は、エンド・スクレパーと称されるものである。



第79図 遺構及び発掘区出土石器実測図

4 削器 (8, 10~14)

いずれも黒耀石の剥片に2次加工を施こしたもので定形化はなく、剥片の形に制約される。

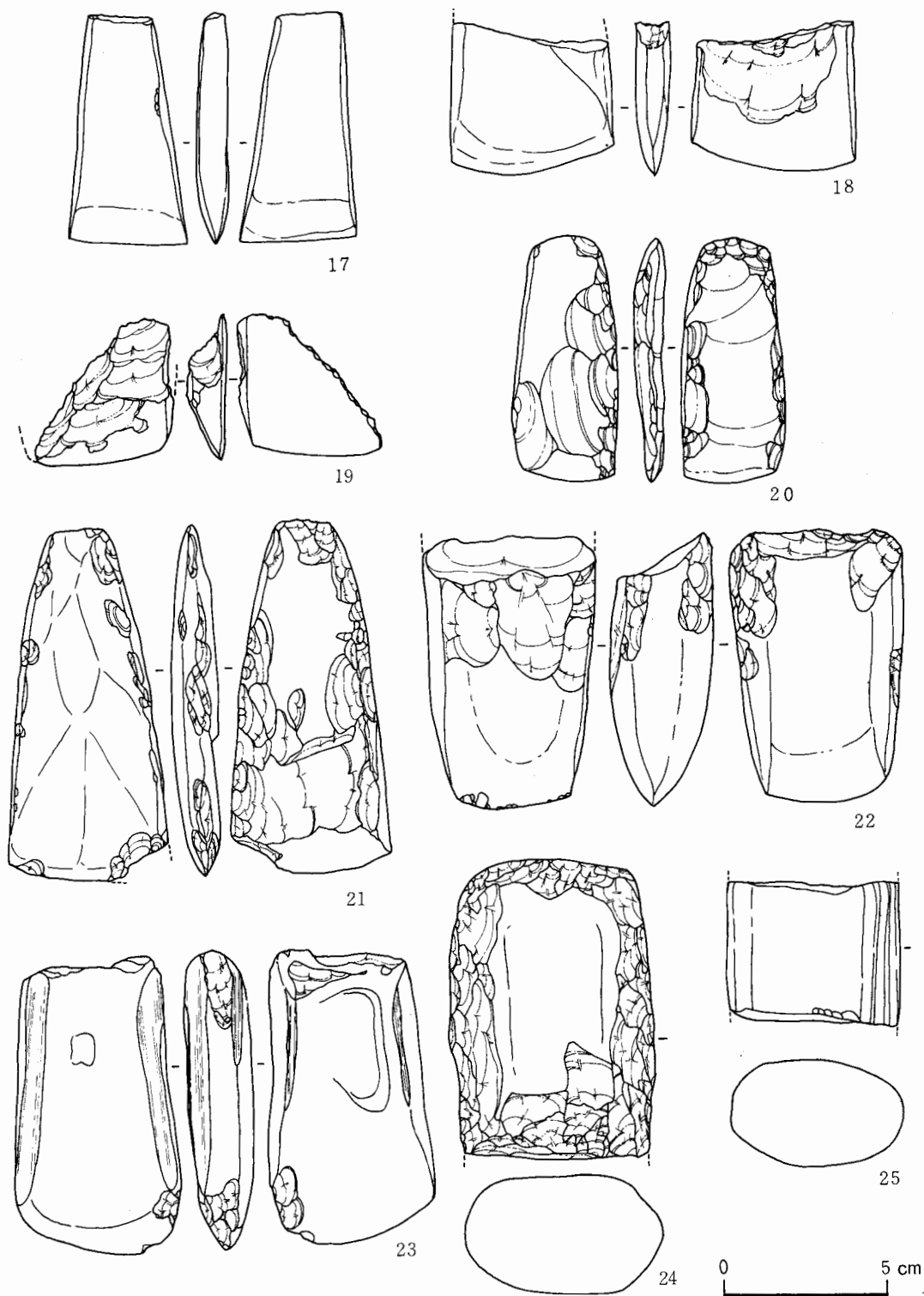
8, 12は、剥片の左右両側縁部に加工の施こされるもので、いずれも表面に焼けたと考えられるくもりガラス状の痕跡がみとめられる。

10は、縦長の剥片を幾度か剥離した石核の残部を素材としたもので一側縁部のみに加工痕がある。

11は、縦長剥片の一側縁部のみに、加工の施こされるものである。

13は、内側に湾曲する刃部のみられるものである。

14は、幅広の剥片の一部に刃部がある例である。



第80图 发掘区出土石器实测图

5 石斧 (17~25)

全例片刃であり、入念な研磨加工が施こされたものである。

全面入念な研磨加工が施こされ、比較的小型で刃部は片刃となる (17)。

頭部を欠損しており、比較的幅広の片刃の刃部を有するもの (18)

大形の剥片に研磨加工を施こし片刃の刃部を有し、大部分に剝離時の面をそのまま残している比較的小型のもの (20)。

刃部を一部欠損し、大きさに比し薄手の石斧 (21)。

柱状とも思える太い石斧でやや片刃の湾曲した刃部を有する (22)

左右両側縁に擦切痕の残されるもので入念な研磨加工が施こされている。片刃であり、刃部はやや斜めとなる (23)。

24, 25は、大型の石斧の刃部を欠損したものである。25のみ砂岩のため石斧であったか少々疑問が残る。

6 擦り切り石斧の残部 (26, 27)

26, 27ともに両面より擦り切り折り取った痕跡を有する。また両者とも全面に研磨痕が残っている。

7 石製装身具 (28)

いわゆる虫蝕い石と称されるもので自然に削孔された孔を、さらに人為的に加工したものである。

8 砥石 (29~40)

全例砂岩を利用している。

非常に多くの面を擦面として使用する例 (29)、溝状の擦面がある例 (30, 31)。

擦面が、2~4面にわたり存在するものがほとんどである。

擦面は、そのほとんどのものが、研磨される方向と直交する断面にて中央部が湾曲し周囲が高くなる傾向が特徴としてみられる。概して小型のものが多い。

9 石錘 (41~76)

第2次調査で、最も数多く得られた石器であり、総数45個あった。

全例扁平な楕円形を呈する河原石の長軸両端を打ち欠き、綱、紐等をかける部分を作り出したものである。

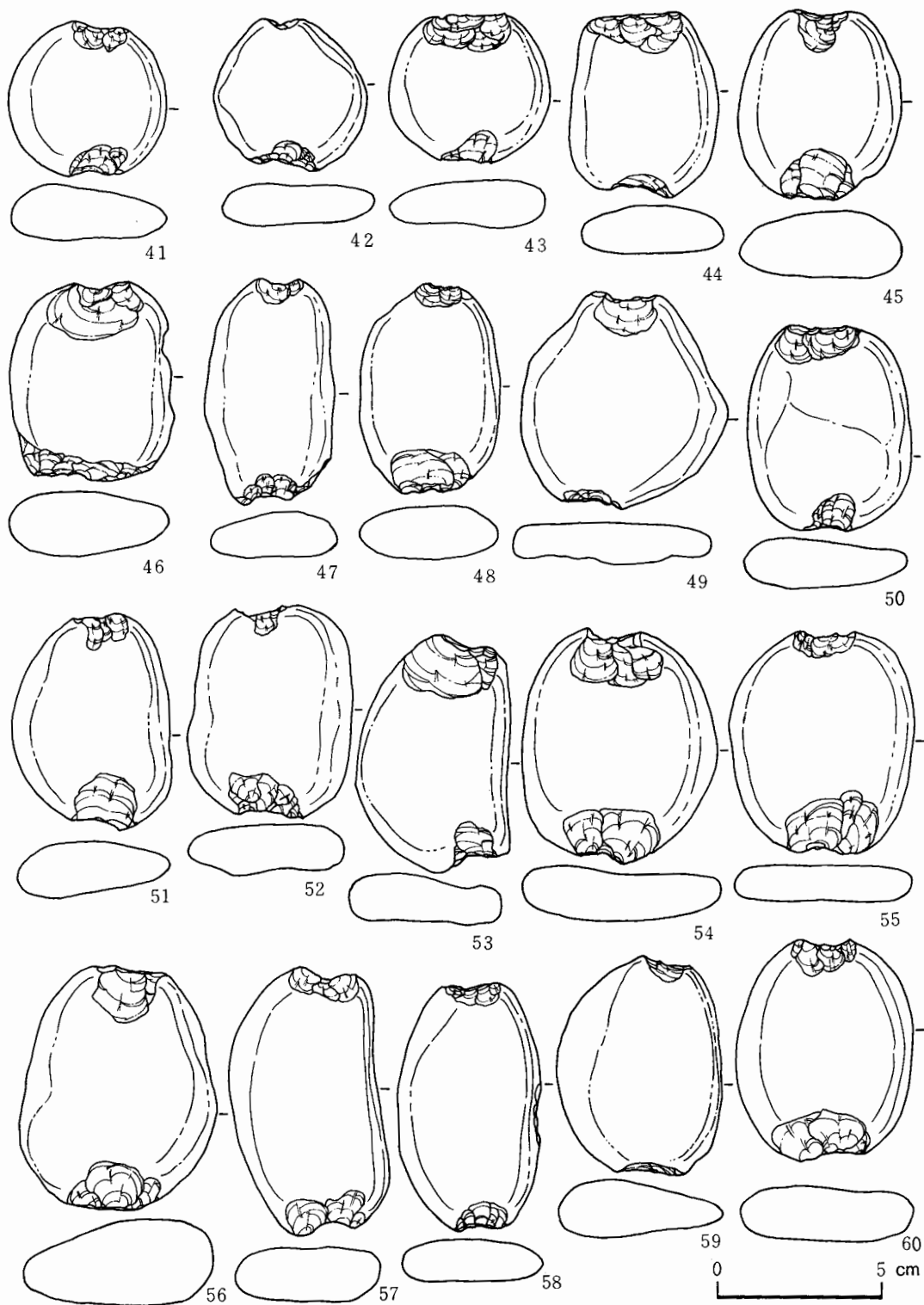
重量は、35g~130gと比較的大きな幅を有している。

10 擦り石 (77~93)

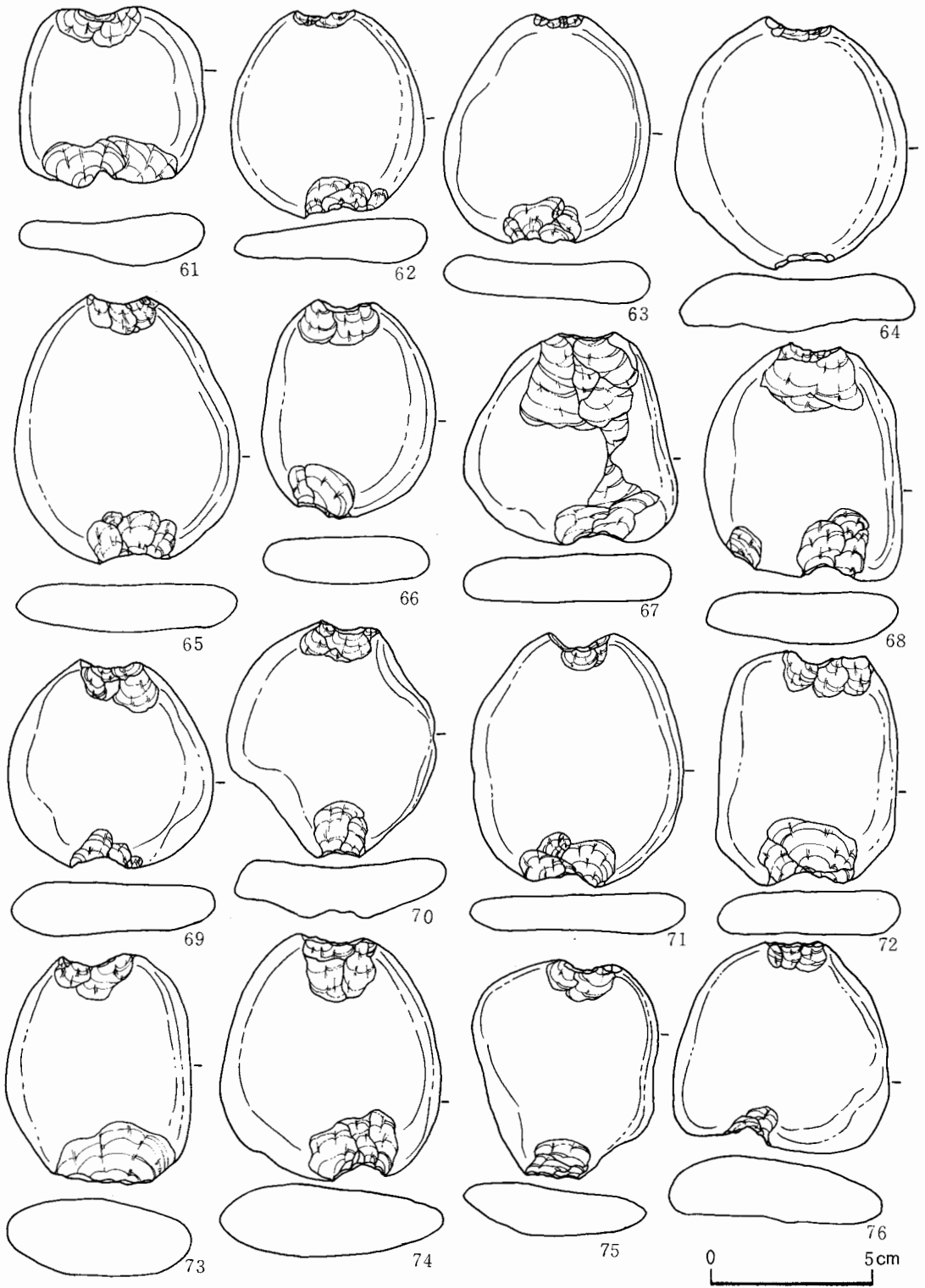
この類の石器も、比較的多く得られている。



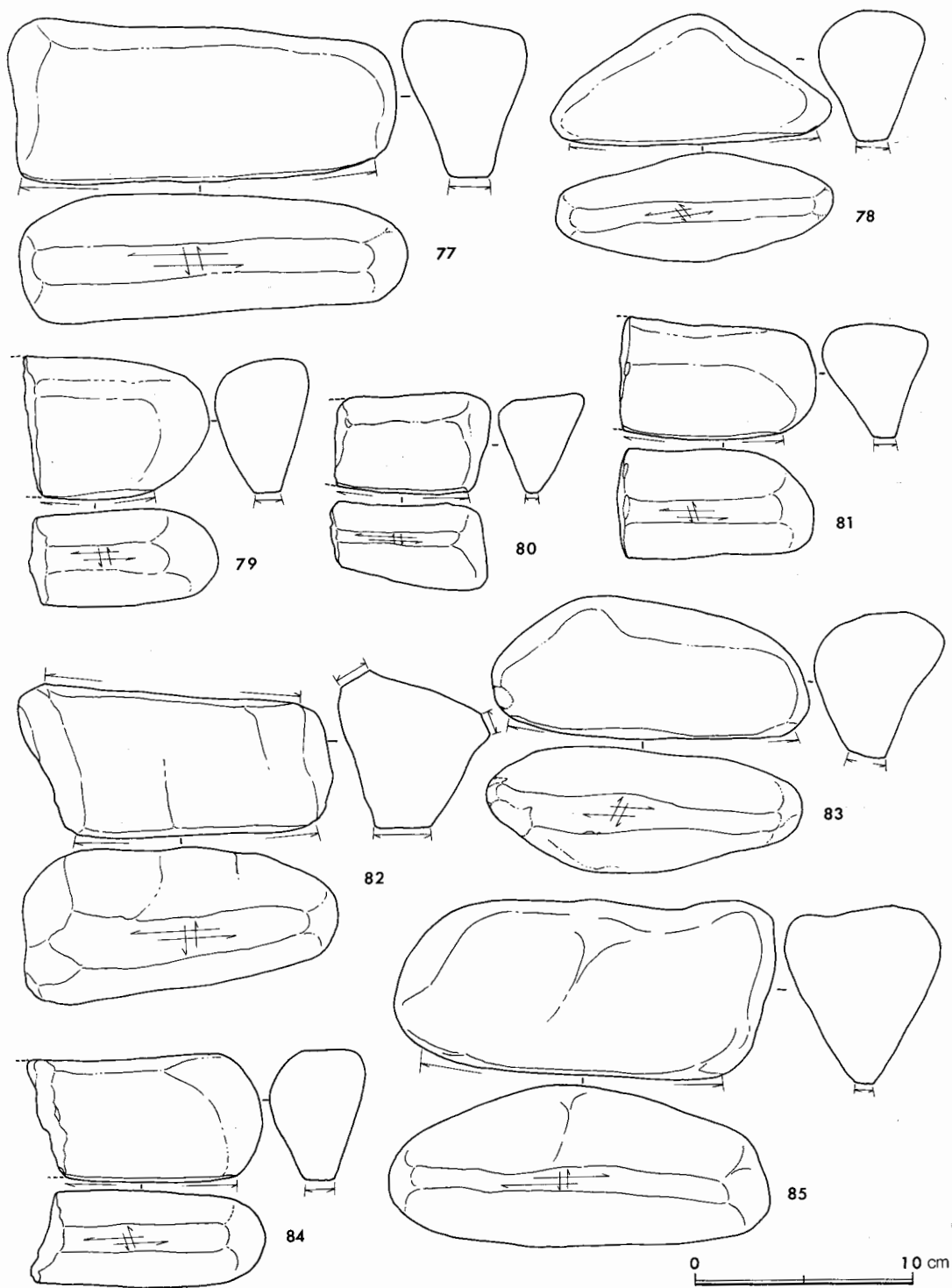
第81图 尧掘区出土石器实测图



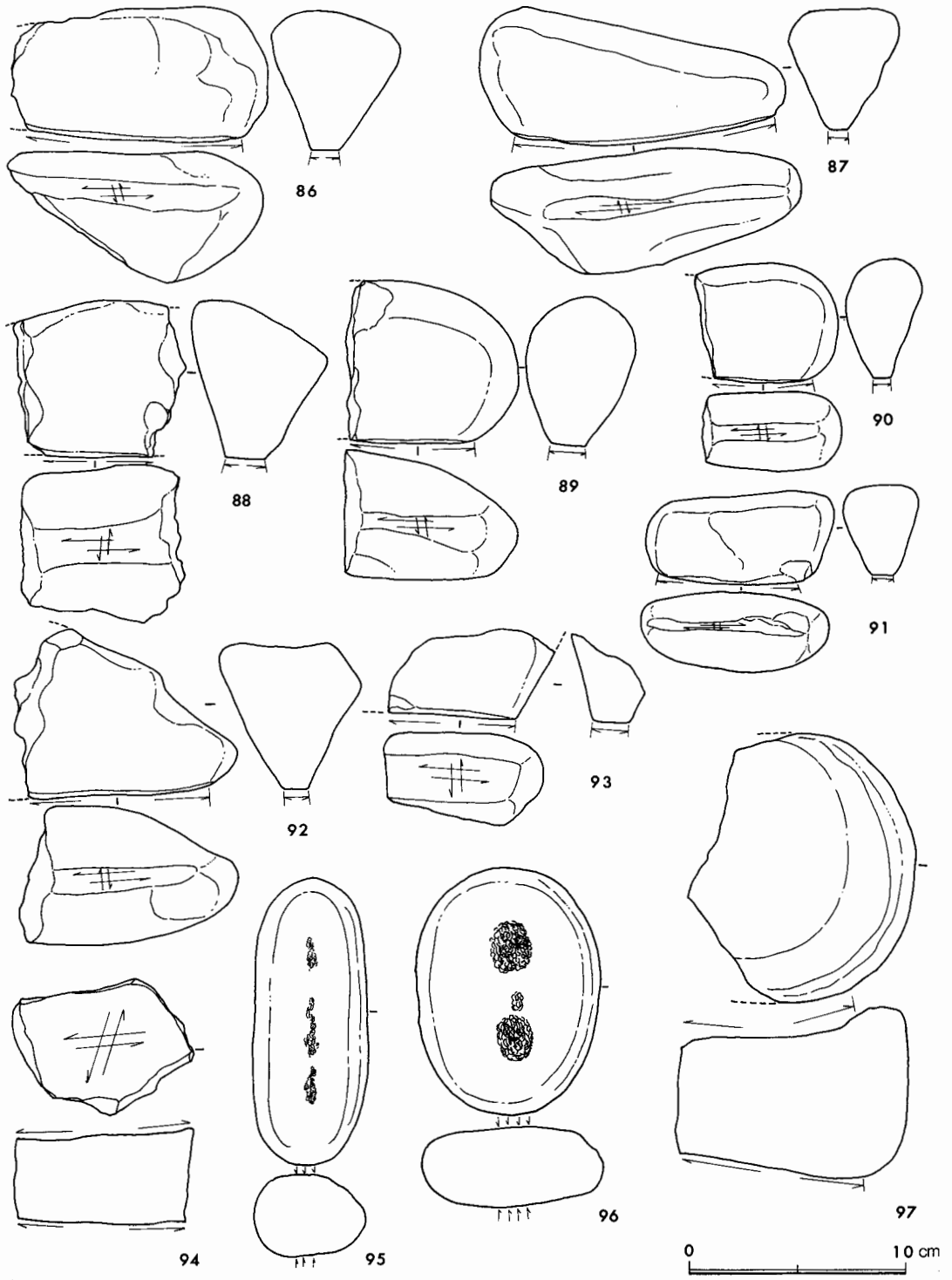
第82图 尧掘区出土石器实测图



第83图 发掘区出土石器实测图



第84图 发掘区出土石器实测图



第85图 发掘区出土石器实测图

断面が三角形，ないし楕円形の河原石の陵面を擦面とした石器である。

比較的小型のものもあるが，擦面の幅は，0.8～1.8cmの幅をもっている。

82は，3つの陵面に擦痕のみられるものである。

擦痕の方向は，長軸方向，短軸方向及び斜方向のものが複合してみられる。

11 石皿 (94, 97)

2点得られているが，いずれも破片である，94は平らな面が2面ありいずれも乱雑な擦痕がみられる。

97は，両面とも若干中央部に向って臼の様な形状を呈すると考えられる。

12 敲き石 (95, 96)

楕円形の河原石の両面に，敲打痕のみられるものである。打製石器の調整具等としての機能が考えられるものである。

(羽賀憲二)

V ま と め

第1章 豎穴住居址

本遺跡の調査では、隣接した2軒の豎穴住居址が検出されている。

これら2軒の豎穴住居址からは、「トコロ6類土器」が主に伴出し、さらに石器組成及びその出土状況より同時期の所産、すなわちきわめて接近した、あるいは同一時代に営まれたものであろうと推定された。

しかし、隣接し同時期に営まれたであろうと推定されるにもかかわらず、2軒の豎穴住居址は、規模、構造、プランにおいてはなほだしく趣を異とし、さらに出土した遺物については、その数量、組成等に微妙な差異が認められる。

2軒の豎穴住居址のあり方の差は、何を意味するものであろうか、豎穴住居址内に残された、遺物の状況等より豎穴住居址の廃絶、使用されていた道具類の廃棄のシステムを考え、さらに本遺跡に於いての豎穴住居址に居住した人間集団の行動の一端なりとも明らかにして行こうと考える。

豎穴住居址内の遺物の分布と廃棄のパターン

今日、多くの研究報告書が出版され、縄文時代に於ける豎穴住居址の様相も序々に明らかにされつつある。

しかし多くの場合、やはり土器形式論、石器タイプ論が主流となり、遺構、特に豎穴住居址については、床面・壁・炉址・柱穴を明らかにすれば大きな成果であり、類時期の類例の羅列に終止しその型式を論ずるといった傾向がみられる。

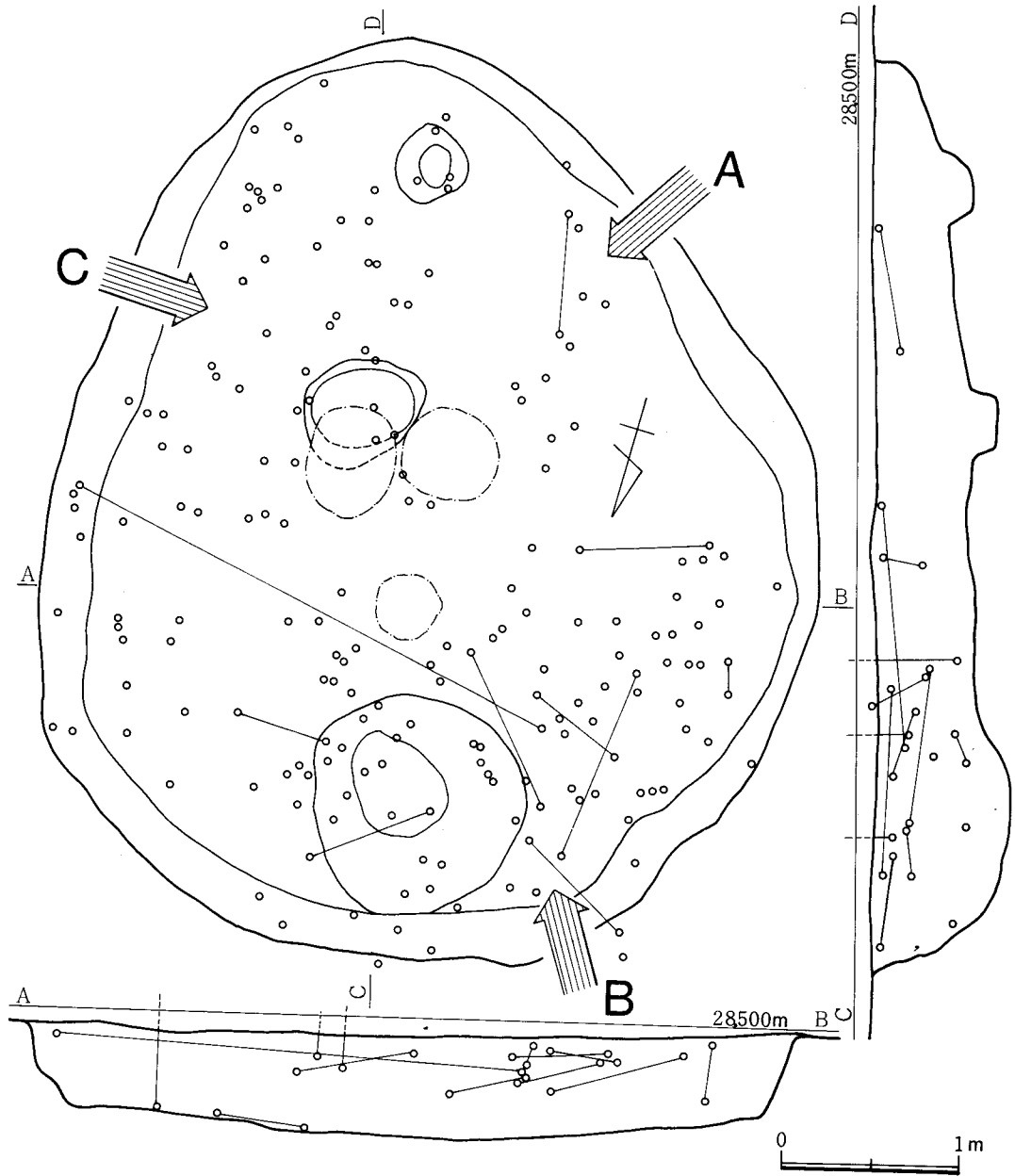
これらの反省の上にたち、近年では遺跡と遺構及び遺物の有機的な関連にたった「原位置」論的研究が、今日の考古学研究に大きなウエイトをしめつつある（麻生 1969）。

さらに、「原位置」論的研究の実践として、豎穴住居址内より出土する土器の分布状況及び出土高（レベル）等々の解析より、〈住居の構築〉→〈一定期間の居住〉→〈住居の廃絶〉→〈住居の埋没〉といった一連の事実について、そこに居住した人間集団の行動の結果がいくらかでも反映しているのではないかと、いくつかのパターンに分類して考えて行く作業も行われている。

すなわち小林氏が、提唱した《吹上パターン》、《井戸尻パターン》であり（小林 1965）、最近では事例の増加により《平和台パターン》が加えられ（可児 1969）、大きく考えて約3種類のパターンが想定されている。

概略的に、先にあげたパターンを説明すると以下の様になる。

A. 吹上パターン；〈住居の廃絶〉→〈住居址の埋没開始〉→〈土器の廃棄〉→〈貝殻の遺棄〉



第86図 第1号竪穴住居址出土土器分布図

の過程をとるもので、住居廃絶の際に土器は運び去られ、第1次埋没土によって住居址の床面が完全におおわれた後に土器が運び込まれ廃棄された過程のものを想定している。

B. 井戸尻パターン；〈住居の廃絶〉と〈土器の廃棄〉が同時に行われ、使用していた土器群（完形土器を含む）を住居址の床面に残し、住居址に居住した人間集団は移動したその後に住居址が埋没したものと想定している。

C. 平和台パターン；「住居址の床面，覆土からの出土がなく，土器の廃棄は他の場所（住居址以外の場所）に行われたもの」である。廃棄住居址に土器片が，床面上，覆土層中に認められないという事は，住居址を廃絶した人間集団が土器を持って他の土地へ移動したと想定するものである。

さて本遺跡に於いて，検出された2軒の竪穴住居址については，住居址内より出土した土器破片，石器，剥片について不完全ながらもとの分布図及び出土高（レベル）を記録している。土器破片，石器，剥片の分布の状況より，先にあげたパターンの類形がみられるかどうか検討して行こう。

1 土器破片

A 第1号竪穴住居址（第86図）

本住居址を埋没させた覆土は，床面全体をおおう第1次埋没土，土器破片を含んだ第2次埋没土，最終的にくぼみをおった黒色土の基本的には3層に分層されている。

遺物は，床面上においては非常に少なく，検出されたものは，床面にくい込む様にしかも散発的に得られたものである。

大部分の土器は，第2次埋没土中に含まれたものであり，大型の破片及び完形土器に類するものは全くみられず，小破片がほとんどであった。

平面的な分布の状況をみると，床面の南西部分，北部分，さらに東壁際の部分と大きく3つのブロックに土器破片が集中して分布している。

個々の土器破片の接合状態は，ほとんどが1+1の状態であり3個以上の破片が接合した例は皆無であった。

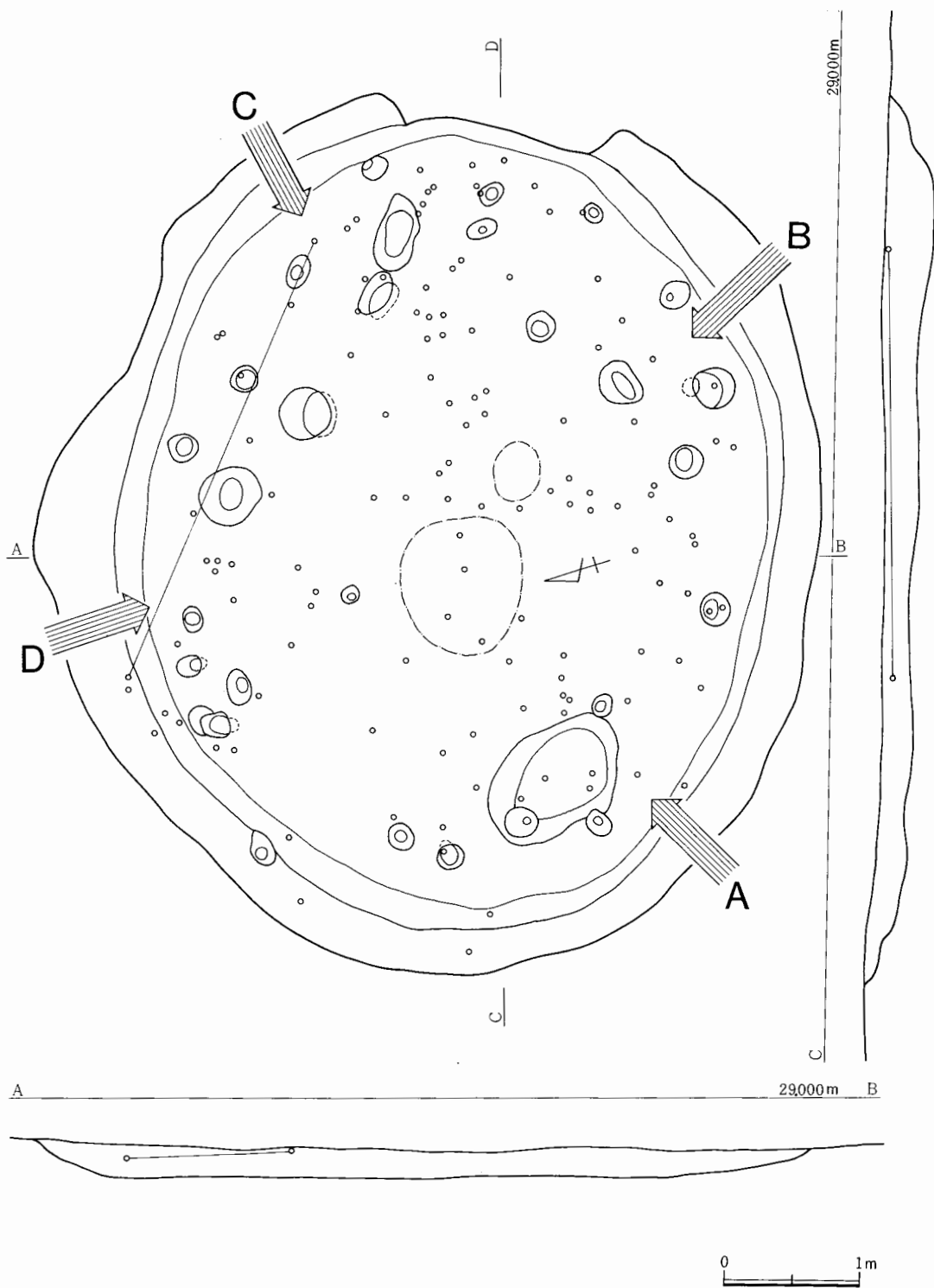
土器破片の集中する部分が，3カ所見られる点については，土器の廃棄が3方向より行われた結果と考えられる。しかし，分布図のみからはそれが同時に行われたか，時間差があるものかは，土器破片の出土状況の傾斜角，接合された土器破片の接合面の方向等について，調査時に記録していないため推測の域は抜けられない。

さらに土器破片の接合を示めすため，個々の破片間を結ぶ線を記した。先に記してきた住居址を埋没させた埋土の基本的な層序関係，埋土の傾斜より考え，接合された土器片を結ぶ線は，土器を住居址内に廃棄した方向A，B，C，と一致すると考えられる。

以上土器の廃棄の結果による，住居址内からの土器の出土状態から考えるならば，〈吹上パターン〉の類形をなすと考えられよう。

B 第2号竪穴住居址（第87図）

第1号竪穴住居址に比較して，平面形の規模は大きくなるが，浅いといった特徴がみ出される。しかし，竪穴住居址を埋没させた覆土は，第1号竪穴住居址と同様であり，基本的には，床面全体をおおう第1次埋没土，遺物を多く含んだ第2次埋没土，最終的にくぼみを埋める黒色土の3層に分層される。



第87图 第2号竖穴住居址出土土器分布图

出土した土器のあり方もほとんど第1号竪穴住居址と同様の状態であり、床面上には微量にしか残されておらず、第2次埋没土中に多く検出されている。

平面的な分布の状況を見れば、やはり集中して分布している部分とさらに希薄な部分とがみられ、壁の周囲にそって約4カ所のグループがある。

土器破片の総数は、第1号竪穴住居址に比較して約半数と少なく、完形土器はもちろん大型の破片もほとんど検出されていない。さらに、出土した全土器片で接合されたものは1点よりみい出されてはいない。

第1号竪穴住居址の土器の出土状況と、ほとんど同様であるため〈吹上パターン〉として考えてさしつかえないであろう。

本住居址の場合浅い為に、竪穴住居址を埋没させた埋土の層序関係、遺物との関連についてかならずしも明確とはいえないが、壁の周囲に沿って4カ所の土器片の集中する部分が見られる。第1号竪穴住居址と同様にこれは、土器片が廃棄された回数を表わすのと同時に廃棄の時間的差も表わしているように考えられた。

これらの点に関して小林氏は、住居址に廃棄された土器の中に完形土器が廃棄される例とともに補修孔を有し、明らかに修理されたと解されるものをも含んでいる事より、土器の製作の季節、土器を廃棄する時期がある程度限定されていたのではとの考えを示めている（可児 1969）。

2 石器・剥片類の分布

A 第1号竪穴住居址（第88図）

本住居址にて得られた石器・剥片類の出土状況は、土器破片の出土状況と同様であり、床面及び壁にはりついて発見されたものは、ごく希少であった。

かつて小林氏は、土器の廃棄のシステムと、石器のそれは、かならずしも同一ではなく、その取扱上の内容に於いて区別されるべき差異があり、一方が厨房具としての側面を有するならば、他方は生産具、加工具としての処遇の差と考えられる点を指摘している（小林 1965）。

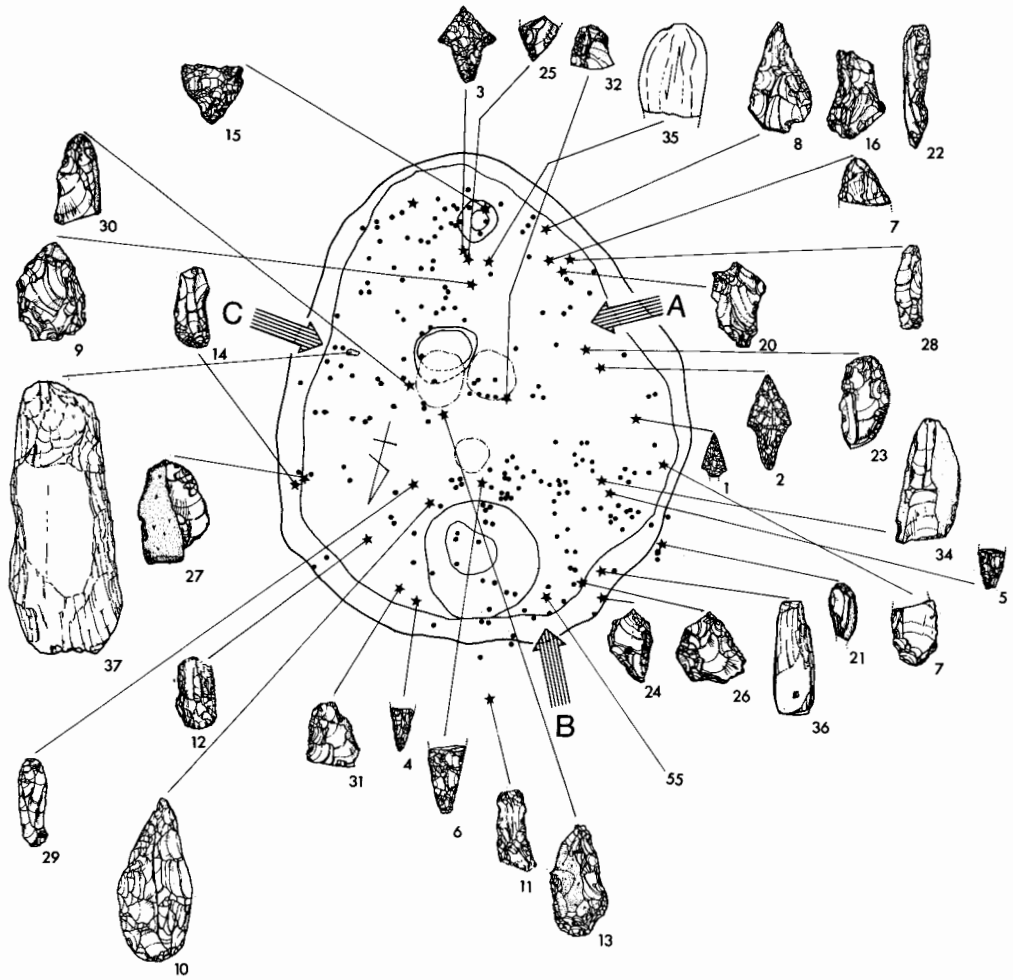
その後、可児氏は住居址内に廃棄された、打製石斧が、破損品ばかりではなく完形品も共に廃棄され、土器と同様に石器も廃棄されている事実を指摘している（可児 1969）。

本竪穴住居址より出土した石器、剥片類の数は非常に多く、しかも土器の分布と同一のグループを形成して廃棄されている。床面において検出されたものは、ごく微量のものを除いてほとんどみられないといった出土状況よりみて土器の廃棄のシステムと同様に〈吹上パターン〉をとったと考えられる様相を示めている。

平面的な分布の状況は、土器のそれと同様に土器が集中してみられた状況とかさなり合って3グループのまとまりが認められる。

石器・剥片類の集中するまとまり、石器群をとりあげるならば、その組成等に若干のばらつきがみられる。

これらのばらつきのもつ意味は、土器と伴に廃棄された石器群の各グループ間の廃棄時での時間



第88図 第1号竪穴住居址出土石器・剥片分布図

的差異ではなかろうかと考えられ、さらに、土器の製作・廃棄に時間的あるいは季節的な制約があったのではないかとする論が石器にもあてはまる可能性をもっている。

各グループ間の石器組成、数量、剥片石器の数量と剥片類（チップを含む）との数量的比率、完形石器と破損した石器との比率を記して行う。

Aグループ	}	銚先	2点	16%
		ナイフ	3点	25%
		削器	6点	50%
		砥石	1点	9%

破損した石器類は、12点中に4例認められる。

剥片石器と剥片類（チップを含む）との比率は前者が11に対し後者は43である。

Bグループ	鎌	1点	6%
	銛先	4点	23%
	ナイフ	2点	12%
	削器	9点	53%
	石斧	1点	6%

破損した石器類は、17点中に6例認められる。

剥片石器と剥片類（チップを含む）との比率は前者が16に対し後者は107である。

Cグループ	ナイフ	1点	25%
	削器	2点	50%
	石斧	1点	25%

破損している石器は、全石器中3点に達している。

剥片石器と剥片類（チップを含む）との比率は、3：60であった。

上記してきたように、各グループ間の石器組成は、ばらつきをもって存在しさらに、器種の面よりみてもその差異が比較的みられるようである。

A・BグループとCグループ間には、非常に大きな差が認められる。

特に「トコロ6類土器」における伴出石器群の様相は、朝日トコロ貝塚の調査によってほぼ明らかにされている（東大文学部 1965）。さらに、札幌周辺における「トコロ6類土器」の伴出石器群についても朝日トコロ貝塚の石器組成と基本的には同様の結果が得られている（羽賀 1974）。

これによれば、太い柄部を有するバイフェースの大形の鎌、いわゆる銛先と称されるものが例外なくみられ、さらに縦長削片等のエッジの一部に簡単な細部加工を施こした削器の類が全石器中50%内外を占めるといった諸特徴が明らかにされている。

本竪穴住居址より出土した石器群の個々のグループ中の組成についても、先に述べた数量及び百分率よりCグループを除いて同様の「トコロ6類土器」の伴出石器の特徴を有している。

B 第2号竪穴住居址（第89図）

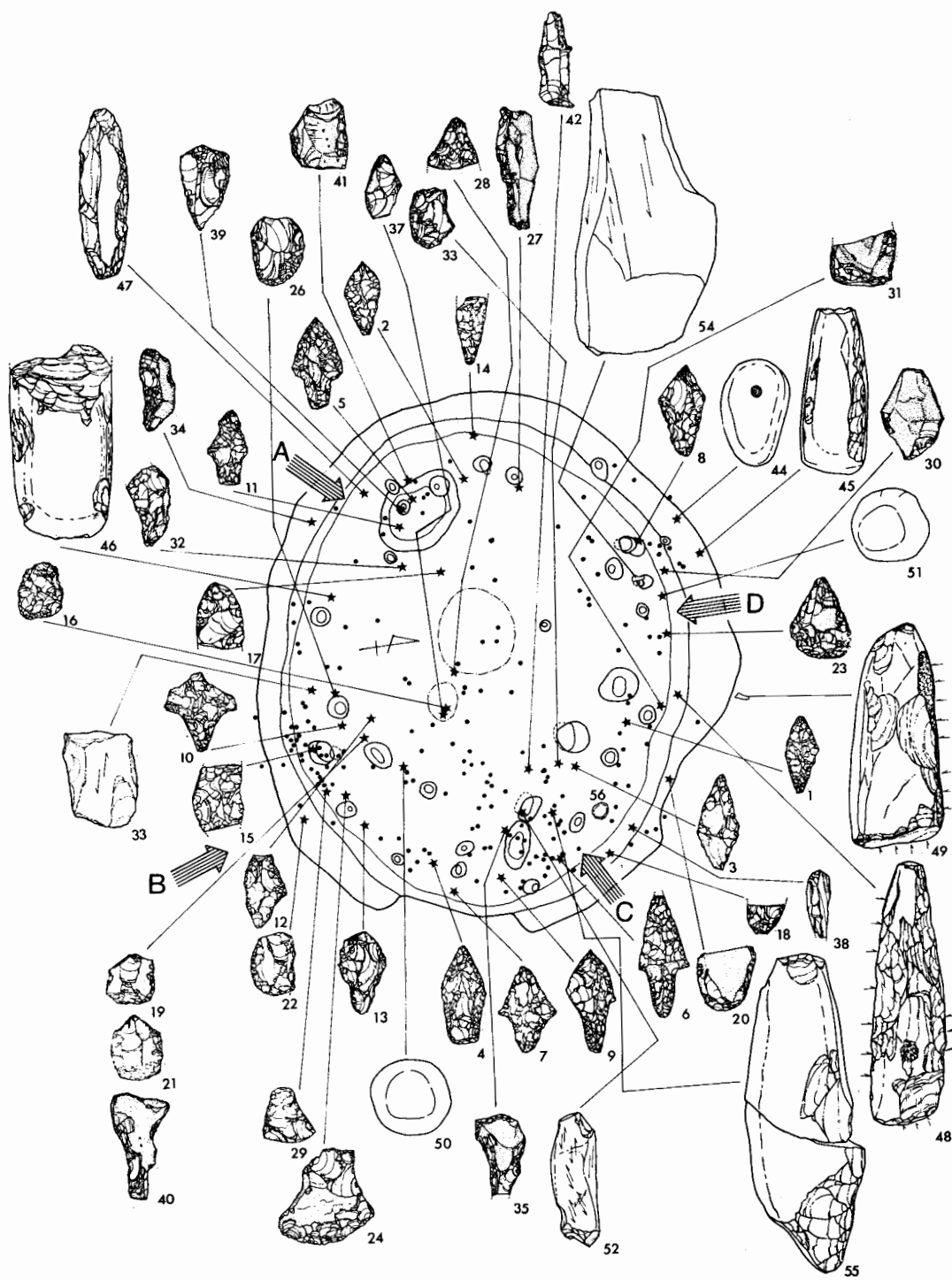
第1号竪穴住居址のそれに比較して多量の石器が得られている。

分布の状況は、土器破片のそれに比してさらに明確なグループに分けられる。出土したレベル及び出土層より考えて〈吹上パターン〉をとったと考えてさしつかえないであろう。

石器の器種の多様性及び、数量より第1号竪穴住居址にみられるより、より以上に廃棄のシステム、及び廃棄の際の時間的差異等を適確に抽出できる資料と考えられる。

平面的な分布状況は、炉址と考えられる焼土の集積部分を除き、壁の周囲に沿って4グループ、土器の分布と同様の範囲にかさなって存在している。

各グループごとの、組成及び、破損した石器と完形品、さらに剥片を素材とした石器と剥片類（チップを含む）との比率を記して行こう。



第89图 第2号竖穴住居址出土石器·剥片分布图

Aグループ	銚先	4点	30%
	ナイフ	2点	15%
	削器	5点	40%
	石斧	2点	15%

破損している石器は、13点中に2点認められる。剥片（チップを含む）の数は、石器11点に対し、19点と少ない。

Bグループ	銚先	3点	23%
	ナイフ	1点	8%
	削器	7点	53%
	たたき石	1点	8%
	砥石	1点	8%

破損している石器は、13点中に2点認められる。剥片（チップを含む）の数は、剥片石器11点に対し、58点ある。

Cグループ	銚先	6点	40%
	ナイフ	1点	7%
	削器	4点	26%
	石斧	3点	20%
	石皿	1点	7%

破損している石器は、全石器15点中に5点みとめられる。剥片（チップを含む）の数は、剥片を素材とする石器11点に対し、61点みられる。

Dグループ	銚先	1点	12.5%
	削器	3点	37.5%
	たたき石	1点	12.5%
	石斧	1点	12.5%
	錘玉	1点	12.5%
	砥石	1点	12.5%

破損している石器は、全石器8点中に1点のみ認められる。剥片（チップを含む）の数は、剥片を素材とする石器4点に対し、23点みられている。

第1号竪穴住居址の説明でも述べて来たのであるが、各グループにおける石器の組成については、銚先と称した尖頭器類が例外なく認められ総じて全石器中の比率が20~40%をしめ、さらには剥片のエッジの一部に簡単な細部加工を施こした削器類が、50%内外をしめるといった特徴がうかがえる、全般的な「トコロ6類土器」における伴出石器の組成と基本的には一致している点が指摘される。

各グループ間の石器群には、基本的なあり方には共通点があるのだが、その総量及び器種等については、差異が生じている。

銚先は、全グループにみられるがDグループに至っては非常に少なく、ナイフ類に関しては、A、B、Cグループには各10%内外の比率で存在しているがDグループには欠けている。石斧は、Bグループになく、砥石はA、Cグループにみられないといった差と同時に、銚先、ナイフ、削器類についても各グループによってその数的な差がみられる。

これらの差は、まさに石器の廃棄時における人間集団の生業の差を示めすものではなかろうか。各グループ間の組成の差、器種より、石器、剥片（チップを含む）類の各まともりは、本竪穴住居址に少なくとも4回以上にわたりそれが廃棄された事を示めている。

石器には、それぞれ加工具として用いられたものと、生産具として用いられた石器と機能の面においてはある程度分類される。また食料生産という事をとりあげても、動物、植物により使用される石器もおのずと変化していると考えられる。前者には、鏃、銚、ナイフ、石匙等があげられ、後者には石皿、すり石、たたき石等がある。

本竪穴住居址における石器群のグループにおいても、これら、直接的に生産活動にかかわった石器類と、間接的に調理・加工という意味で理解される石器群との比率が大きく変化し、差異のある点が認められる。

現在の様に、科学的、物理的に食料を保存、加工するあらゆる手段を有していなかった、かつての人間集団の食料生産は、その種類においても季節的、時間的制約が非常に大きく存在していたと考えられ、これらの季節的、時間的制約は、使用された石器群にも石器器種の比率の差という点で反映されたと考えるのが自然であろう。

本竪穴住居址及び前述した第1号竪穴住居址に廃棄された石器群の分布状況、各グループよりの石器組成、数的な差異は、石器群、剥片類（チップを含む）の使用された対称目的の差、つまり季節の差としてとらえられよう。

これは、同時に廃棄についても時間的な制約が存在していた事をも示めているようである。

ある季節に使用される目的をもって使られた石器群が、一応の使用目的が達せられてのちに一括して廃棄されたと考えられた。しかし、いわゆる完形品の石器、及び破損したものを剥離調整した再生品、破損品がいわば混在してみられている。先述して来たが、完形の石器と再生した石器の一応使用に耐えうると考えられる石器の数量と、破損して使用に耐えられないと考えられる石器との比率はそれほど大きくない。

竪穴住居址内に分布する、個々のグループの石器群が、ある期間に1度に廃棄された量であると解されているが、石器類の製作にも土器と同様に一定の期間にのみ製作され、次のシーズンにはそれらは完形品をも含んだ上で一括して捨て去ったという事もありうるのではないかという仮定もなされよう。

以上、本遺跡において得られた2軒の竪穴住居址についての廃絶のパターンが明らかにされた。

竪穴住居址の廃絶のシステムのパターン化という作業は、〈住居の構築〉→〈一程期間の居住〉→〈住居の廃絶〉→〈土器等の廃棄〉→〈住居の埋没〉という一連の事実が、人間集団の行動の結

果として出現している事をふまえ、縄文時代の人々の行動をトータルシステムとしてとらえようとする一つの試みであった。

住居の廃棄、土器・石器等の廃棄がなぜ行われるのかは、明確な断が下されてはいないが、かつてアイヌの人々の間で行われていた、家送り、物送りの精神的背景が存在していたかもしれないといった推定がなされている例（小林 1974）もある。

また、土器作り、その廃棄が常時行われたのではなく、季節的な制約をもって行われたという事実が解されている。

縄文時代に生きた人々の生活は、季節的な制約をうけつつも、それに即応した生産活動のサイクルを有していた事が考えられよう。

住居址は、休息、外敵、自然（寒・暖）からの保護、防備を目的として構築されたと考えられ、一軒の住居は、ある種の人間集団が日常生活（狩猟、魚撈、採集、加工等）を営むうえにおいて最少の単位として中心に位置し、これを核として居住空間としての集落構造が形成され、さらにテリトリーとしての行動領域があったと巨視的にとらえられるであろう。

住居址が廃絶されたという事実をいくつかのパターンに考えて行く作業は、居住空間としての集落構造の内部における人間集団の行動の軌跡をたどる一手段であり、縄文時代の社会構造、さらには精神構造を知るうえにおいての初現的なデータを保有しているのである。

本遺跡では、2軒の竪穴住居址が隣接して得られ、しかも同時期（同一型式の土器が廃棄された）に営まれたと考えられたのであるが、廃絶のパターン化という作業のうちからは、2軒の住居址の相互の関連をとらえるには至っていない。

両竪穴住居址における石器組成等の差異については、項をあらためて述べよう。

（羽賀憲二）

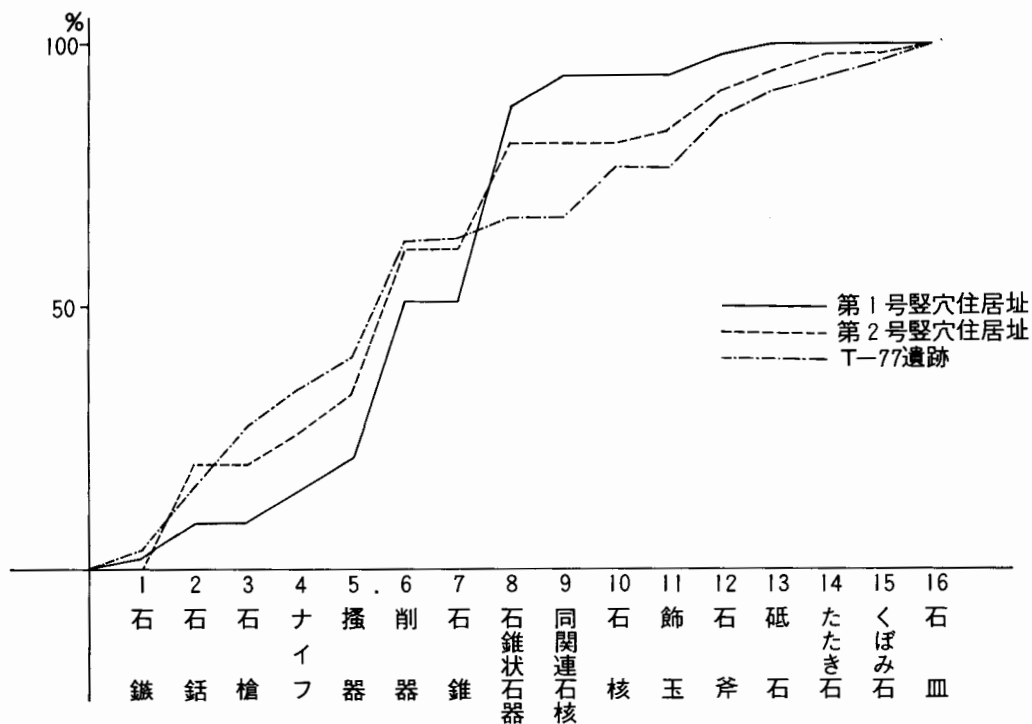
竪穴住居址の石器組成

本遺跡では、同時期に営まれ隣接した2軒の竪穴住居址が得られている。これら2軒の竪穴住居址からは、前述して来たように多数の石器群が幾度かにわたって投げ込まれ廃棄された状態で出土している。

そして個々の竪穴住居址に廃棄されたと考えられる石器群の総体は、その竪穴住居址に居住した人間集団の生業、さらには社会構造の一端を現わしていると考えられる。

「トコロ6類土器」に伴出する石器群の組成については、すでに朝日トコロ貝塚の調査によってその傾向、組み合わせ等について明らかにされている。また石狩低地帯、札幌周辺での「トコロ6類土器」に伴出する石器群の様相も朝日トコロ貝塚との比較により、その特徴等が明らかにされている（羽賀 1974）。

まず2軒の竪穴住居址より検出された全石器類を、従来分類されて来た基準に従い形態分類した。全石器の種類は、16器種を数える。



第90図 竪穴住居址石器群石器組成比較百分率累積グラフ

石器の器種及び、組成に関して2軒の竪穴住居址を比較すると、比較的大きな差異がみられる。これらの差異は、何を意味するのであろうか、石器群間の差異を抽出し検討を加えて行こう。

分類した各器種の石器が、竪穴住居址より検出された全石器中にしめる比率から百分率累積グラフを作成した。さらに、この地方の「トコロ6類土器」の伴出石器の平均的な組成を有すると考えられたT77遺跡における石器群の様相を加え資料とした(第90図)。

2軒の竪穴住居址における石器組成の全体的なパターンを考えてみると、石鏃が全く無いが、あっても1~2%と極端に少なく、それに比較して、やや大形のバイフエイスな鏃(銛先と称されるもの)が非常に多くみられる。

ナイフ状石器、搔器の比率はほとんど変化がみられず10%内外となっている。

剥片のエッジの一部に簡単な剝離加工を施した削器の類は、2軒の竪穴住居址ともに非常に多く30%内外の比率をもっている。

これらの特徴は、朝日トコロ貝塚に於いてみられる石器組成の諸特徴と基本的には一致し、一般的な「トコロ6類土器」に於ける伴出石器の組成とほとんど変化の無い事が示めされている。

2軒の竪穴住居址間における差には、全体的比率についてはそれほどの差異はみられない。しか

し個々の器種においては、数量的差、また一方の竪穴住居址にはあるが、他方の竪穴住居址にはみられないといった器種的な差異がみられるようである。

先の項にも若干記して来たのであるが、石器類にはその機能的な面より考えるならば、狩猟等が想定される尖頭器類、魚網等の沈子と考えられる石錘等直接的に生産活動にかかわった石器群、それに付随し、食料の調理・加工に関連すると考えられるナイフ、削器の類、道具を加工・作成等に関連する石錐、石斧、砥石等の石器群と大まかには3種程度の分類がなされよう。

さらに、食料生産（狩猟・魚撈・採集）といった一連の生産諸活動の中においても使用された石器は、その対称物つまり動物に対してと植物質のものに対してでは大きな変化を有すると考えられ、石器群はさらに細分されるであろう。

2軒の竪穴住居址についてのそれぞれの特徴点をいくつかあげてみよう。

第1号竪穴住居址には、1点のみ石鏃が検出され、さらに銚先と考えられるものが破損品をも含め5点みられ、全石器中の比率より尖頭器類のしめる数は、9%と少ない点が指摘される。

第2号竪穴住居址における狩猟等に、直接的に関連する尖頭器類のあり方は、どうであろうか。

石鏃は、皆無であるが銚先は特に多く破損品をも含め14点みられ、全石器よりの比率は、20%と第1号竪穴住居址にみられたそれと倍以上の差異がある。

さらに、動物質の食料に対して調理・加工器具として用いられたと考えられる、ナイフ状石器、削器類では、2軒の竪穴住居址においては数量的差異はあるのだが全石器中の比率が両者ともに30%内外と同様の数字が得られている点が指摘される。

道具等の製作に関連したと考えられる石器群については、第1号竪穴住居址については、搔器が4点、石斧2点、砥石1点、特殊な石錐が25点得られており、特殊な石錐の多量の存在（全石器中の40%弱を示める）が特徴としてあげられる。

第2号竪穴住居址からは、搔器5点、石斧は破損品を含めて6点、砥石3点、特殊な石錐14点と、特殊な石錐を除く石器は総体的に第1号竪穴住居址のそれより約2倍の数が検出されているのであるが、特殊な石錐に限り第1号竪穴住居址の半数以下となる点が特異である。

植物質食料を加工する事に関するであろう石皿は、第2号竪穴住居址より1点得られたのみであった。

2軒の竪穴住居址における石器群の差異は、以上で明らかになった。両竪穴住居址ともに石器の総数はほぼ同数であり、第1号竪穴住居址に特に少ない尖頭器類、特に多い特殊な石錐のあり方が問題となるであろう。

同様の「トコロ6類土器」に伴出する石器群をもつ札幌T77遺跡の石器組成を一つの基準として考えるならば、第2号竪穴住居址における石器群の様相と似たグラフで現わされる。この結果より第2号竪穴住居址における石器群は、当該地方における「トコロ6類土器」をになって来た人間集団の最もポピュラーなあり方を示めしている様に考えられる。

第1号竪穴住居址における、特殊性については、狩猟等の生産行為に直接的にかかわったと考えられる尖頭器類が非常に少ないという点であり、道具等の加工具としての特殊な石錐の数が他の石

器類に比較して異様に多いといった点である。

狩猟等に直接的にかかわった尖頭器類の数量的、比率的差異は、2軒の竪穴住居址間における初現的な分業形態を思わせ、さらに、竪穴住居址に居住していた人々の構成（家族構成）の差等も考えさせられる。

特殊な石錐については、その分布する地域、時期、用途等についてすでに解明されている（大塚 1976）。

これによれば分布する地域は、利尻・礼文両島および宗谷湾と猿払から雄武を含むオホーツク海沿岸地方北部、さらに積丹半島の南端にあたる岩内周辺に限定されている。さらにこの特殊な石錐を多量に出土する遺跡は、そのすべてが海岸に臨んだ砂丘上もしくはその背後の段丘上に拠って存在しているという。

時期的には「トコロ6類土器」を最古に、後期初頭の頃と考えられている。

また特殊な石錐を出土する遺跡の分布は、ホッキ貝の棲息に適した水深3～5mの砂地の海がよく発達した地域であり、この石錐の主な用途は、ホッキ貝を素材とした貝製平玉の穿孔と深く結びついていたのではないかと考えが明らかにされている（大塚 1976）。

分布の状況よりみれば、札幌周辺に関しては空白部分であったのであるが、本遺跡及び、T77遺跡にて得られた頁岩製及びメノウ製の特異な形状の石錐状石器は、これらと同じものと考えられる。

しかし、海岸に面する従来の遺跡とは立地条件が非常に異っている点が留意される。

これらの特殊な石錐の存在が、ホッキ貝製の貝製平玉の製作、ないしは骨角器の製作に重要な関連を有したのではないかという考えを尊重すると、本遺跡での第1号竪穴住居址における石器群のあり方は、狩猟等の生産活動にかかわった尖頭器類が非常に少なく、加工具としての特殊な石錐が非常に多い事より、これを中心とした何かの工房址（アトリエ）的な性格を示めすのではなからうか。

つまり、第1号竪穴住居址と第2号竪穴住居址における、調理・加工用具としてのナイフ状石器、削器の類は、その数・比率とも非常に類似しており、基礎的な生活一般（食生活に関して）に関しては同様の形態であったらうと推定される。

やはり、この2軒の竪穴住居址にみられる石器群の様相からは、一方が狩猟等に直接的に関連する石器が多い点、他方はそれがきわめて少なく、特殊な加工具が特に多い事より、初現的な分業形態、さらには動物的食料を得る生産行為に関しては一方が他方に依存していた事実等があったのではなからうかとの考えに至った。

この様な、2軒の竪穴住居址における様な石器組成の差異は、他遺跡の類例には比較的にみられる様である。

時期は、かなり差があるが札幌S256遺跡では早期末様の竪穴住居址が3軒得られている。検出された石器類は、本遺跡に比して数は非常に少なくしかも、廃棄のパターンも同一ではなくほとんどのものが床面ないしは壁にはりついて出土したものであるが、個々の竪穴住居址の石器の組成、数量には差異がみられる（上野編 1975）。

石器の器種は、擦石、石皿、削器、ナイフ状石器、石核と数少ないが、擦石がその中でも特に多くみられ、植物質の食料の依存度が比較的高かった事実が考えられる石器組成を示めている。

1号住居址にては、擦石2点、削器3点、ナイフ4点、石核1点が検出され、1号竪穴住居址状遺構では、擦石が1点のみ得られ、2号竪穴住居址状遺構では、擦石5点、石皿1点、ナイフ1点、石核1点が全石器である。

この中でも擦石が1点より得られていない、1号竪穴住居址状遺構を除いて、1号住居址と2号竪穴住居址状遺構には、かなりの差異がみられる。特に擦石・石皿の数と、削器・ナイフ類においてその差は顕著となる。

これは、石器のもつ機能によって考えるなら、植物質の食料に関する前者と、ごく一般には、動物質食料の解体、調理に関連する後者との差としてとらえられる一面を有している。

社会構造がどういった形態であったか、不明ではあるが、少なくとも、これら差異が顕著な住居址間には、ごく簡単な分業形態があった可能性を示めているのではなかろうか。

さらには、石器群の共有性、家族構成の差等の問題が新たに導き出されよう。

(羽賀憲二)

第2章 札幌S267,268遺跡の土壌群

—いわゆるTピットについて—

本遺跡では、いわゆるTピットとよばれる土壌が、60基検出されている。北海道内におけるこの種の土壌の発見報告は、静内御殿山遺跡(河野・藤本 1961)より始まり、現在までに21遺跡においてその存在報告がなされている。

ここでは、31基の同種遺構の検出がなされている札幌S153遺跡(加藤編 1976)との比較対照を通して考えてみたい。

土壌の立地

本遺跡の位置と環境については、第2章において詳しく述べられているごとく、比高差約10m程の谷が北から西を迂回し南へと抜けている。遺跡はこの谷に舌状に張り出す平坦な台地上に営まれており、遺構の構築されているこの台地に立ち、調査区域を見渡すならば、北側の一部の地域を除き全く傾斜をかんじさせない平坦な状態である。この状況を数字でみるならば以下のごとくである。

発掘区の全長330mに対し、昭和51年度に調査を行った北端より第101号Tピットを結ぶ地域は、距離50m、比高差3.550m、斜度4°4′となっており、遺跡内で傾斜のかんずる唯一の地域である。第101号Tピットより南端までの大部分の発掘区では距離280mに対して比高差0.930m、斜度0°11′25″となり傾斜を全くかんじることの出来ない平坦な台地である。

このような環境にあって60基におよぶ土壌の構築される位置は全体的に谷沿いの地域に、より多

くみられ谷から遠ざかるにしたがって希弱になる傾向にある。又、台地が舌状に張り出す地域では過密といえるほど集中して構築されている。谷よりみて遠くの地域で検出される土壌は配列様式に関する場合が多く、又、谷より極端に遠い場所に単独で構築される例は少ない。

札幌S 153遺跡は、豊平川扇状地に面する海拔27～28mの平坦な台地上に営まれており、比高約12mの浸蝕谷が南から北に入り込んでいる。遺構は、この浸蝕谷をとりかこむがごとくの状態構築されている。検出された31基の遺構は、谷沿いの地域に、より多くみられ谷から遠ざかるにしたがって希弱となっている。又、これらの遺構は、浸蝕谷を意識して構築されているが、各遺構は長軸を谷に向け一定の間隔で整然と配置されるグループと長軸が谷と平行し、配置状態が谷と直交するように並ぶグループがみられる。

以上のことにより札幌 S 153 遺跡及び札幌 S 267, 268 遺跡は共に谷に面する平坦な台地上に営まれており、遺構の占地位置としては谷沿いの地域に多く構築されているが、ある程度の傾斜地においても検出されていることなどからみて、谷より遠ざかるにしたがって希弱になるという以外にあまり立地についての制約や好みは強くないようである。

土壌の堆積

土壌の埋没状態は、どの土壌もほぼ同様な堆積を示しており、これらの土壌は同じ様な過程をたどって埋没したことがうかがえる。又、札幌 S 153 遺跡で検出されている31基の同種遺構についても同じことが考えられる。

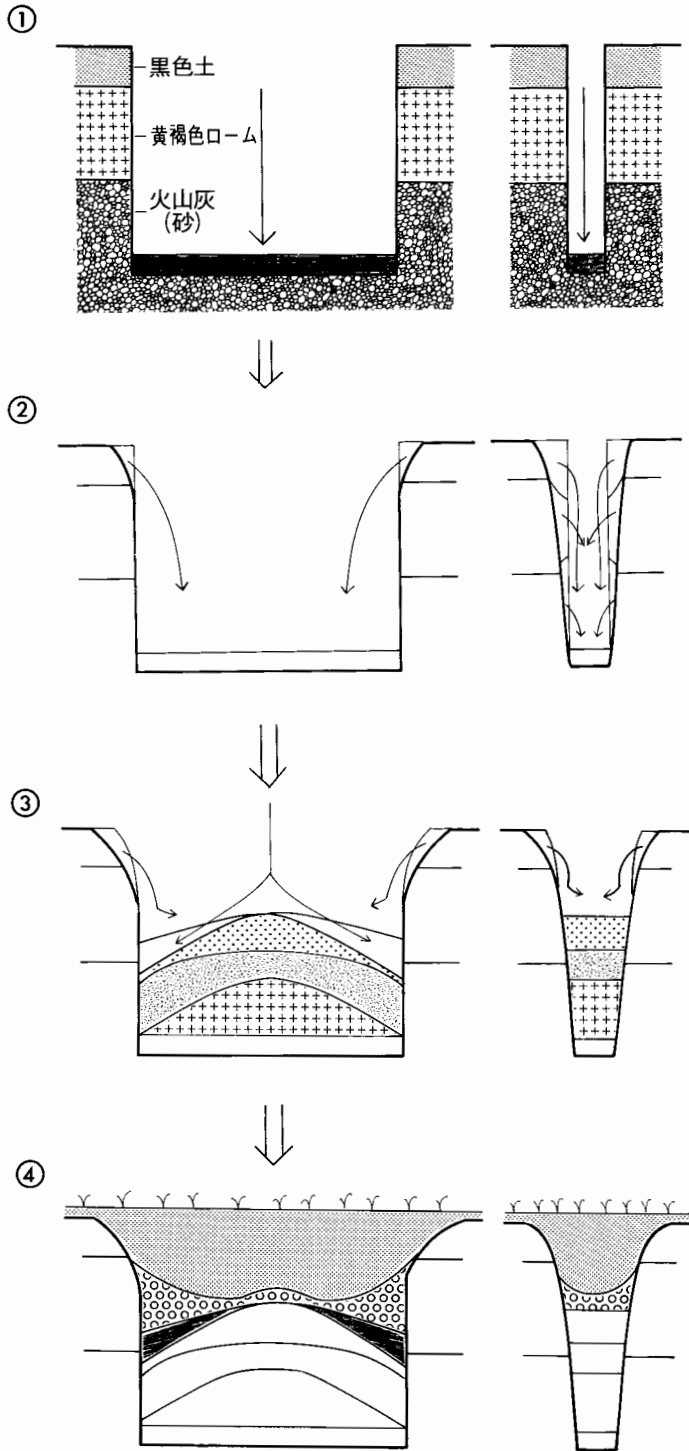
本遺跡の層序は、耕作土、褐色ローム層、火山灰（砂）の順になっている。遺構の壁面を形成する層位でみるならば、上中位は褐色ローム層、中下位では火山灰（砂）となり、更に遺構下方には火山灰（砂）が続いている。遺構は最上層の耕作土を除去した後、黒色土の落ち込みによって確認されるのが一般的であった。しかし、全体の3分の1程は完全に褐色のローム層に覆われており、ボーリング探査によって検出されている。

土壌の一般的な堆積状態をみるならば、第91図に示すように以下のごとくである。

壙底面には、腐植質の黒色土が5 cm程の厚さで水平に堆積しており、この層を詳細に観察するならば、壙上方に向う壁に沿って黒色土が非常に薄く張りついている状態がみられる。この黒色土の上方には火山灰（砂）、褐色土、暗褐色土が次々と堆積している。ここまでの堆積状態を長軸セクションでみるならば第3号、第7号、第46号等によって代表されるような二等辺三角形（山形）にちかい形状となっている。この三角形（山形）の斜辺上には最下層にみられた腐植質の黒色土と同質な黒色土が2～5 cmの厚さで堆積している。土壌の上方は黒褐色土、最上層には黒色土が流れ込んで、土壌は完全に埋没している。

この種の土壌の埋没過程については、各土壌の事実記載の中においてもふれているごとく人為的に埋め戻されたものではなく自然堆積によって埋没したものと考えている。

自然の営為がくりかえされることによって埋没していくと考えるならば、調査を終了した段階で空洞の状態に放置される本遺跡の各土壌においても自然営為のくりかえしによる崩落堆積が進行す



第91図 Tピット埋没状況模式図

るものとおもわれる。

この様な前提にたち発掘後1年を経過した時点で再調査を行ったものが第92図、図版14Aにかかげる第13号Tピットである。

上段の図は、昭和50年の調査時のものであり、下段の図が昭和51年6月の再調査によって得られたものである。以下、事実記載を行い、層位については昭和50年度に得られたもと対比してかかげる。

第13号Tピット

(昭和51年6月再調査)

本号は昭和50年度の調査において第13号Tピットという番号をあたえられたものに対し、北海道の様な寒冷地において越冬を経験した土壌の崩落堆積状態を観測するため、昭和51年6月に改めて発掘調査を行ったものである。

昭和50年の調査終了時における本号の形状は、開墾部及び、墾底部は共に溝状を呈し、長軸断面では両端部がオーバーハングしており、短軸断面は上方部が若干広がっているが中下位では溝状であった。

昭和51年6月の再調査時では、約5割程の埋没状況にあった。

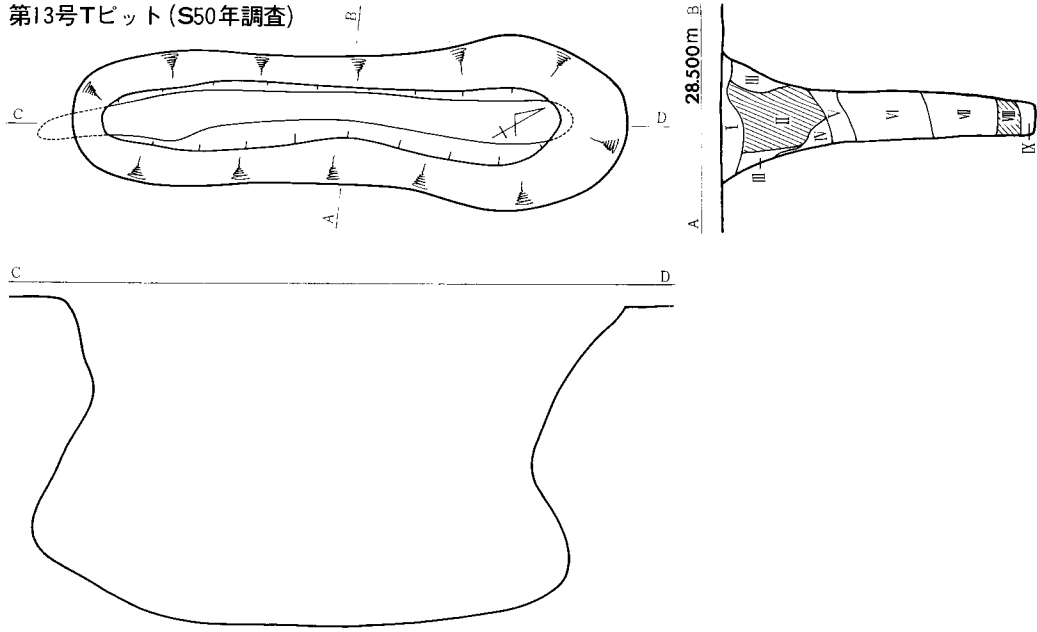
開墾部の平面形は、壁部の崩落によって部分的にいびつな溝状となり、墾底部の平面形は前

年度の調査時と比べあまり差異のない状態であった。長軸方向の断面は南北両端部における中上位部の壁面の崩落が進行しており、大きなオーバーハングを示していた形状がやや小さめな袋状の断面となっていた。短軸方向における断面は、前年度の形状が上方部の若干広がる溝状であったのに対してかなりの差異がみられる。壁面の中位では、縦70cm、奥行20cmを最大とするオーバーハングが認められ、上方部でも各所にかたくずれがおきており、全体的に大きく崩落が進行している。

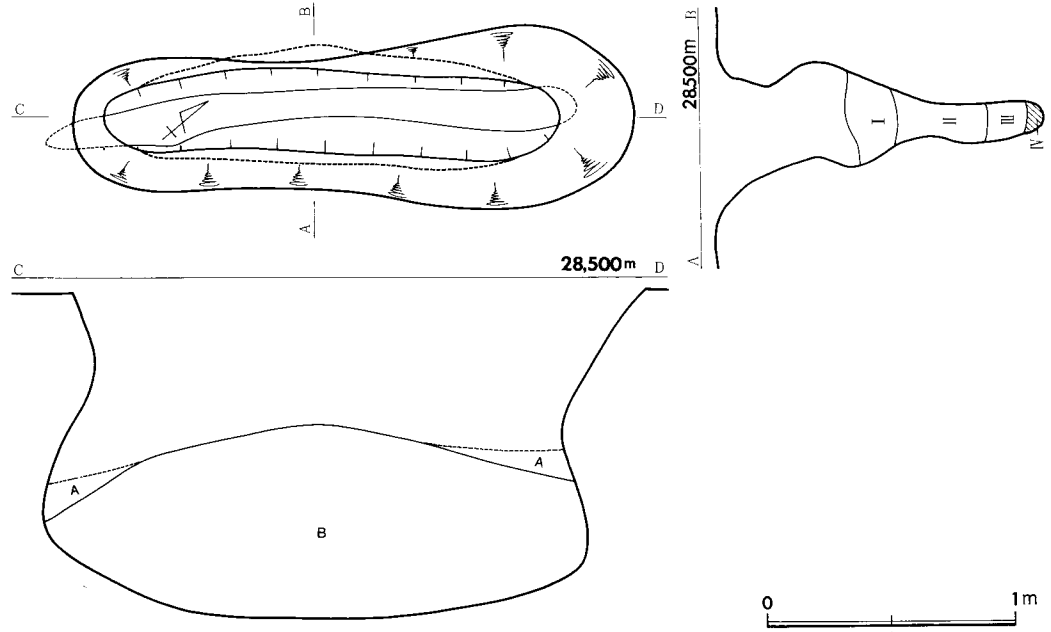
昭和50年調査		昭和51年崩落堆積状態再調査	
第Ⅰ層	暗褐色土層	第Ⅰ層	黄褐色土層（壁の上位を形成する黄褐色ロームが小ブロック状に崩落堆積した層）
第Ⅱ層	黒色土層 a	第Ⅱ層	黄褐色土+火山灰層（壁の上位を形成する黄褐色ロームと中位を形成する火山灰が混在する層、黄褐色土が多く火山灰の比率が少ない）
第Ⅲ層	褐色土層（かたい）	第Ⅲ層	火山灰+黄褐色土層（火山灰が多く黄褐色ロームが少ない、第Ⅱ層と逆の比率である）
第Ⅳ層	褐色土層（やわらかい）	第Ⅳ層	枯葉+落葉層（少量の第Ⅲ層が混入している。この層は通常、遺構最下層にみられる腐植性の黒色土に対比されよう）
第Ⅴ層	茶褐色土層	第Ⅴ層	枯葉+落葉層（この層は通常、長軸セクションにおいて山形に堆積している層の斜辺にみられる腐植性の黒色土に対比される）
第Ⅵ層	褐色砂質土層	第Ⅵ層	崩落堆積層（第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層を示す）
第Ⅶ層	灰褐色砂質土層		
第Ⅷ層	黒色土層 b		
第Ⅸ層	灰褐色砂質土層		

埋土は、遺構の約5割程度の堆積状況であり、埋土の大部分は壁部の上中位を形成する黄褐色ローム層、火山灰（砂）層の崩落堆積によるものと考えられる。遺構最下の壙底面には、枯葉や落葉の層が5cm程の厚さで水平堆積しており、この層は通常腐植性の黒色土として認識される層に相当するものと思われる。中下位の層は、黄褐色ロームと火山灰（砂）がくりかえし堆積した状態であり、長軸断面でみるならば、二等辺三角形（山形）にちかい形状で堆積していることが認められ、他の土壌における堆積状態とほぼ同様な状況と言えよう。又、長軸断面において山形を示す堆積層

第13号Tピット (S50年調査)



第13号Tピット (S51年崩落堆積状態再調査)



第92図 第13号Tピット埋没状況図

の南北両端にちかい斜辺上に枯葉や落葉の層がみられ、他の土壌の斜辺上に認められる腐植性の黒色土層に対比することが出来よう。

本遺構の中上方は、堆積のおよんでいない空洞状態であった。

第13号Tピットの再調査を始め、各土壌のセクションを通観し、堆積過程を模式化したものは、前述したように第91図にかかげたものである。今一度この模式図に従って埋没して行く過程を振り返ってみるならば、以下のごとくであろう。

①に示される図は、本遺跡における層序とともに最下層に認められる黒色土の堆積を示している。この黒色土の性状は、植物性の腐植土で繊維物質の存在が認められ、最上層に流れ込んでいる黒色土の性状とは明らかに異なるものであった。この層が持つ意味については、土壌の性格より求められるべきであろうが明確な答は得られていない。第92図に示される越冬を経験した第13号Tピットの例より考えるならば、枯葉や落葉等が大量に流入し、腐植土層を形成するに足る十分な量が得られることが判る。又、この黒色土層の存在、あるいは厚さに差異が認められるのは、流入する枯葉や落葉等の量の差によるものであろうか。

②、③に示されるのは、火山灰（砂）、褐色土、暗褐色土による中下位3層の堆積状態である。これらの3層は、壁面を構成していた層や土壌開墾部のカタ等が崩落堆積したものと考えている。この中下位に堆積する層は一般的に3層に分かれる。まず、黒色土を覆い下位を占める層は、壁面を構成する地山層の中でも中下位に位置する非常にもろく、崩落しやすい火山灰層や砂層が最も早く堆積し、次いで最上層に存在したと考えられる黒色土と褐色ロームが混合した暗褐色土層となってみられ、この後に壁面の中上位を構成する褐色土ロームの崩落堆積が起ったものと思われる。この遺構中位にみられる褐色土層の色調は地山として認められる褐色土ローム層と全ど差異がないため、調査を行う上でしばしば混乱するところであったが、判別の基準となるのは、地山に比べやや軟らかいことであった。

上記した3層の堆積を考える時、2年間に亘って調査の行われた本遺跡と札幌S153遺跡において、越冬を経験した遺構より得られた事実は興味深い。つまり、北海道の様に冬が長く、寒冷の厳しい地方では、凍土現象がおこり、その結果として春になると解氷された地表面は非常にもろい状態となり、又、非常に早いスピードで崩壊が進むことになる。第92図の下段は、前述したごとく本遺跡の第13号Tピットが越冬した状態で再調査したものであるが、これによれば、第3号、第7号、第46号等によって代表される二等辺三角形（山形）にちかい形状で堆積しており、埋土は本図にみられる3層と同様に崩落によって埋没していく過程が確認され、堆積層の厚さにおいても大差のないことが認められた。

更に、現存した褐色ロームの壁面では、今、まさに崩落が起きようとするロームの浮きあがった状態がみられた。又、壁の崩落現象は、土壌の中上位では激しく、下位では小さい。従って、遺構

壙底部ちかくでは、旧態があまり大きな変化なく残されていると言えよう。大地に非常に細い溝状の穴をもってするこの種の土壌は、越冬を経験することによって埋没が大きく進行し機能が消失してゆくものと思われ、使用される期間についても限定されてくるであろう。ただし、越冬による埋没の進行については、現在発掘終了後にローム層を露出させ放置した状態で観察を行っているため、構築時と条件を異にしていると思われ進行の速度にも差異が生じるとみるべきかもしれない。又、越冬によって起こる崩落堆積とともに、他の理由による堆積についても考えねばならない。模式図には、図示されていないが遺構実測図中、特に長軸セクションにみられる袋状のオーバーハングについてである。このオーバーハングについては、越冬による崩落堆積によっても、ある程度説明がなされるが、最下層に堆積する黒色土よりも更に下位に火山灰や、砂層がみられる例があり、越冬による堆積だけでは説明のつかないものもある。各土壌のセクションを通観する中でオーバーハングがみられるのは、下位の壁を形成する火山灰や砂層に多く、黒色土よりも更に下位にみられる火山灰や砂層は、壁部より流れ込んだものと考えられる。つまり、長軸断面下位にみられるオーバーハングの形状には、全く人為的な構築姿勢をうかがうことの出来ない第1号、第3号、第7号、第29号等によって代表される多くの例がある。本遺跡の調査中、豪雨にみまわれたことがあり、後日、火山灰層まで掘り込まれた調査区において、雨水の流入のため大きくえぐり込まれた部所を発見した。この雨水の流入によって崩落した部所の形状は、図版14Bに示される土壌のオーバーハング部をていねいに除去露出させた形状と非常に強い類似性が認められた。

土壌下位にオーバーハングが生ずる要因の一つに雨水の流入があげられるとするならば、土壌が構築される地点の地層によってオーバーハングの規模に差が生じることも考えられよう。したがって、土壌の壁を構成する層位に火山灰や砂等、非常にくずれやすい層の占る割合が高いもの程大きくオーバーハングし、その逆の場合には小さいと言えよう。本遺跡では、地層の関係より割合大きなオーバーハングを持つものが多いが、ローム層が厚く、火山灰層のしっかりしていた札幌S153遺跡では、本遺跡の様に大きくオーバーハングするものは少なく、比較的小さなものが多い。

③、④に示されるものは、三角形（山形）にちかい形状で堆積した層の斜面上に、2～5cm程の厚さで認められる層である。この層の性状は、土壌最下層にみられる腐植性の黒色土と同質であり、堆積については、①の黒色土堆積で述べているごとく落葉や枯葉の流入によるものとおもわれる。表層土を除去し土壌より、かなりの距離までも草木のない状態で放置した第13号Tピットの再調査で得られた結果からみても斜面上に堆積する黒色土層を形成するに足る十分な量の枯葉や落葉が得られることは十分理解出来よう。

④は、開壙部の残されたカタ等が崩落し、その後、黒色土が流れ込んで土壌の埋没が完了した状態を示している。

以上が、本遺跡及び札幌S153遺跡におけるTピットの埋没過程である。

次いで、北海道の様に凍結の激しい寒冷な地方と、各地方における同種遺構との堆積状態を若干比較してみよう。

関東地方の横浜霧ヶ丘（今村他 1973）遺跡や、横浜池辺第4遺跡（今井・宮沢 1974）等で

は、壙底面直上に黒色土層が5cm程の厚さで水平堆積しており、この層を覆う埋土は上方に向かってソフトロームに近い褐色土、褐色土、黒色土が相互に入り混りながら、順次流れ込んだ様な堆積を示すが、下部程褐色土の占める割合が多い。土壌の埋没は、自然堆積によるものと考えられる点や、壙底面直上に黒色土の水平堆積がみられる点等、本遺跡の遺構群と共通するところが多く、その機能においても、目的とするところは同様なものであろう。しかし、土壌の堆積状態は、本遺跡や札幌 S 153 遺跡等で通常3層に分かれてみられる中下位の明瞭な層位が認められない。本遺跡では、この3層の生因を越冬後におこる崩落によるものと考えているが、凍土の生じない関東地方等では、短期間に崩落堆積がおこるのではなく、乾燥風化等によって少しずつ、くずれ落ち埋没が進行していくものと思われる。又、短期間に極端な崩落がおこらないため大きなオーバーハング等の形状変化も、あまり顕著にあらわれていない。

青森では、千歳遺跡(13)(北林他 1975)をはじめとして報告例が増加しているが、壙底面に黒色土のみられないものが多い。土壌の中下位を占める層は、壁部を構成する地山層の堆積したものと思われ、本遺跡の中下位を占める層位状況と類似性が強い。遺構の形状では、長軸方向におけるオーバーハングや、短軸断面の変化はあまりみられず、開壙部のカタ等が落ち込んでいる程度である。

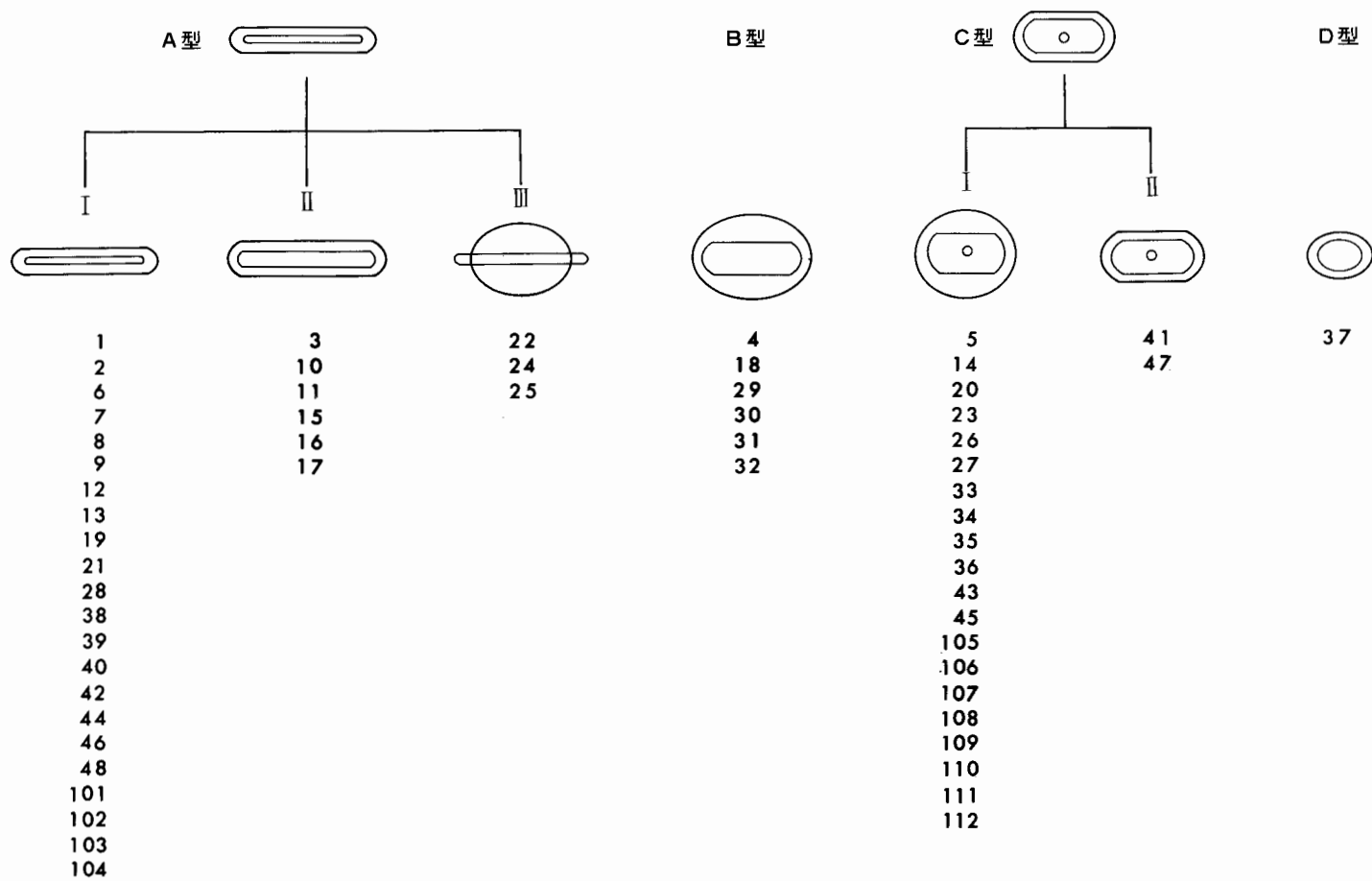
遺構の層堆積は、自然条件の異なる各地において、ややおもむきを異とするが、総じて自然堆積による埋没であり、人為的に埋め戻されたものとは考えがたい。又、遺構の形状変化は、凍土のおこらない関東では、少ないが、北海道等の寒冷な地方では、おこりやすいといえよう。又、構築時の形状について模式図では、開壙部より壙底までの幅を同一にしてあらわしているが、調査によって得られた短軸断面の形状ほどではないにしても、土壌上方に向かってある程度湾曲して広がっていたものと思われる。

土壌の形態分類

本遺跡において検出された60基の土壌について、基形の差異等から形態分類をおこなってみよう。

土壌を分類するにあたっては、その平面形(開壙部、壙底部)、断面形(長軸、短軸)、規模、深さ、付属施設等の諸要素をもって分類の基準としなければならないであろう。しかし、開壙部の平面形、長軸、短軸断面の形状は、土壌の堆積の項で述べるごとく、調査によって得られた形状が、常に土壌構築時の形状を正しくとどめているとは考えがたい点も多い。したがって、この形態分類をおこなうについては、形態変化の最も少ないと考えられる壙底部の平面形に重点をおいて分類をおこなったものである。

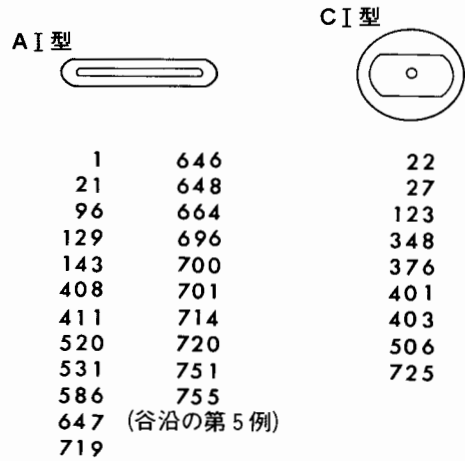
前述の指針に従って分類を行い、得られた結果を表記したものが第93図にかがげるものである。又、第93図にみられる図形は、各土壌の特徴を極端に略図化したものである。土壌群は、それぞれの形状によってA、B、C、Dの4型式に分かれ、更にA型は基本となる基形をもとに3類に細分され、C型も同じく2分される。従って、土壌群は第93図に示されるごとく4型式7類に型式分類されることになる。又、この形態分類を札幌 S 153 遺跡の同種土壌群にあてはめてみるならば、



第93図 S 267、268遺跡Tピット型態分類

札幌市文化財調査報告書Ⅹにおいて、A型と言われている土壌はAI型、B型はCI型に表現が変わり、第94図に示されるごとく2型式2類に分かれることが知れよう。

次に、第95図についてであるが、この2枚の図表は、各土壌の壙底部規模を図表上におきかえ、更に、各土壌の長軸方向と相対的な大きさを極端に模式化(縮尺1:500)してあらわしたものである。第95図によれば4型式に分類される土壌群は、各型式ごとにあきらかに異った偏差値をもって分布していることが認められる。この分布様相は、形態分類を行ううえで決定要素の一因になるものとする。



第94図 S 153遺跡Tピット形態分類

A 型

平面形は溝状を呈し、短軸断面は壙底部に比べ開壙部がやや幅広となる溝状、又は、クサビ形にちかいものが一般的である。壙底面は平坦なものが大半を占め、施設の痕跡は認められない。長軸方向における規模は最小のもので178cm、最大のもので422cmと長大になり、その差は大きい。形態分類を行ううえでの大きな特徴とは言いがたい。

このA型に属するものは、本遺跡では60基中31基と最も多く、全体の過半数をこえている。これらA型の土壌群は、壙底部の規模、様相、開壙部の差異によって、更に3類に細分することが出来る。

A型Ⅰ類：非常に細い溝状を呈するグループである。壙底部における短軸の幅が10数cmのものも多く、調査を行ううえで手足のとどかないものがたびたびみうけられた。本遺跡では22基、札幌 S 153 遺跡ではA型に属する22基の総てが属する。

A型Ⅱ類：A型Ⅰ類に比べ壙底部の短軸幅が広くなり20cmをこえ、開壙部における短軸の幅も非常に広がっている。長軸規模は3mをこえる長大なグループで、第3号、第10号、第11号、第15号、第16号、第17号の6基が属する。

A型Ⅲ類：A型Ⅰ類に比べ壙底部の幅が若干広く、長軸方向の大きさは2m前後を測る最小規模のグループである。開壙部の周縁が皿状に大きく広がっているのが大きな特徴で配列よりみるならば、同一グループに属する第22号、第24号、第25号の3基である。しかし、開壙部周縁の状態を崩落によって生じたものとするならば、A型Ⅰ類の範疇に組入れられる可能性もあろうか。

B 型

平面形は幅広の溝状を呈し、その短軸断面も幅広の溝状と言えよう。形態的にはA型とC型の間位置し、よりA型にちかい状態にあるが、第95図によって分布様相をみるならば、明らかに一つの型式を形成するにたるものと言えよう。壙底面の短軸幅、長軸両端のコーナーのありかたはC型にちかい隅丸長方形の状態、長軸規模ではA型に匹敵し、多くの場合、壙底面は平坦で施設の存在した痕跡はみられないが第4号Tピットにおいては、4個の小ピットが検出されており特殊な例と言えよう。配列状態よりみるならば第8列、第9列を形成する、第4号、第18号、第29号、第30号、第31号、第32号の6基から成る。

C 型

壙底面の平面形は隅丸長方形を呈し、壙底面中央部に小ピットを有することが特徴である。短軸断面の形状は縦長の長方形を呈するものが多いが、中には擡鉢状の断面を示す例もみられる。

C型に分類される土壌群を遺構の配列によりみるならば第10列、第11列、第12列、第14列を形成する22基が属する。これらの遺構は開壙部の差異によって、更に、2分することが出来る。

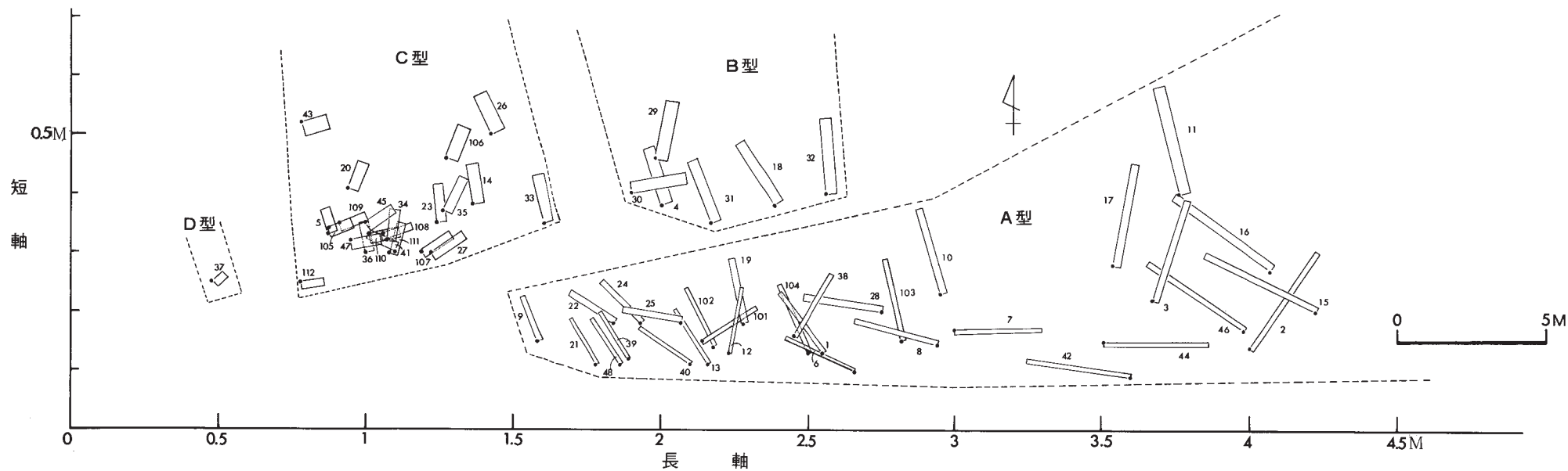
C型Ⅰ類：開壙部の平面形は楕円形、長楕円形、壙底部の平面形は隅丸の長方形を呈する。本遺跡では20基、札幌 S 153 遺跡では9基が属する。本類の大きな特徴の一つに壙底中央部に配される小ピットの存在があげられるが、第33号、第35号、第106号、第108号、第110号、第112号の6基では検出されていない。この事実をもって他にもう一类を付け加えることも考えられるが第95図の分布様相より求め、更に、配列グループをみるならば同一類系と考えられよう。又、第43号においても小ピットの存在は確認されていないが、本号はトレンチによって切断され遺構の大半を削失しているためである。

C型Ⅱ類：開壙部及び壙底部の平面形は、共に隅丸の長方形を呈し、壙底面中央部に小ピットを配するグループで2基が属する。しかし、第41号は現代の構築物によって上部が削失し、第47号は風倒木痕との切り合いによって上部を消失している。このように上部を失った形でC型Ⅰ類と比較するならば差異を認めることが出来る。しかし、C型Ⅰ類の上方部を差し引いて比較し、遺構の配列関係、更に、第95図の分布様相をも加えて考えるならば本類はC型Ⅰ類の範疇に含まれ、C型は1型式におさまることも十分考えられる。

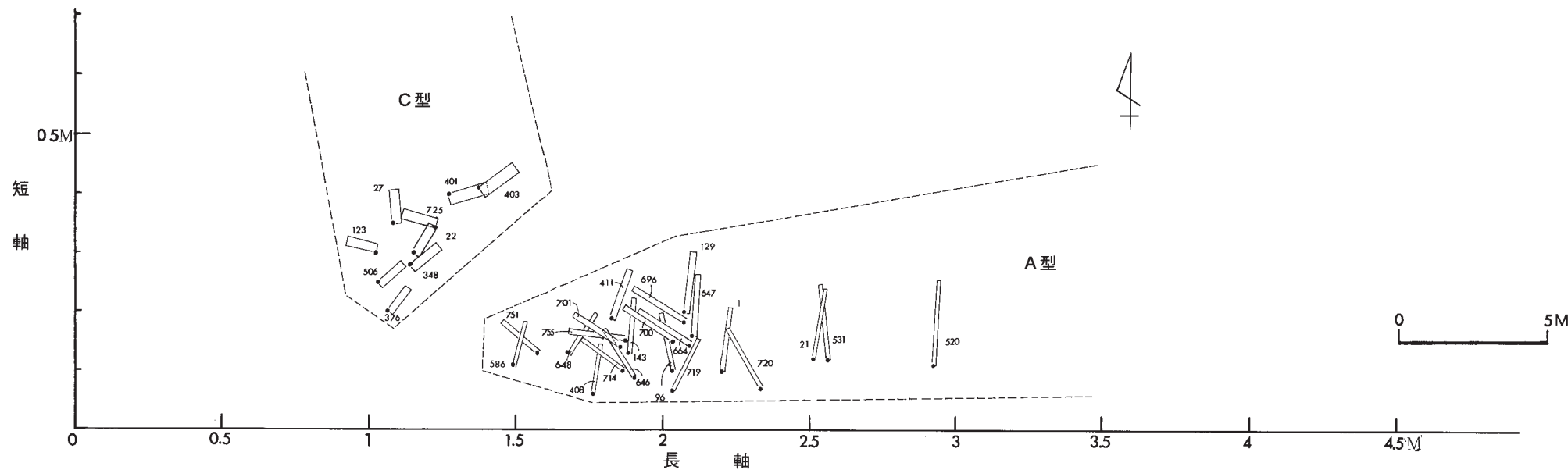
D 型

開壙部及び壙底部の平面形は、共に楕円形を呈し柱穴状の断面を示す第37号1基のみである。このような形状を示す遺構の類例は非常に少ない。北海道における発見例は、札幌 S 153 遺跡第187号ピットが最も近似するものであろう。又、この種の遺構がTピットの範疇に入るか否かは、現在

S-267, S-268



S-153



第95図 Tピット拡底面規模、長軸方向、及び模式図

のところ不明と言わざるをえないが、青森千歳遺跡(13)で1基、横浜霧ヶ丘遺跡で3基の類似例がみられる。

以上が、本遺跡と札幌 S153 遺跡における土壌群の基形差による分類である。この形態分類は、各形式による配列にも大きく関係している。

道内における同種遺構の報告は、21遺跡を数え、札幌周辺、日高地方、函館地方において数多く検出されているようである。遺構の形態はA型に属するものが圧倒的に多く、C型に属するとおもわれるものは本遺跡を含め、札幌 S153 遺跡、札幌 S239 遺跡(上野・高橋 1975)等で検出されている程度である。関東及び中部地方では、C型に属するとおもわれる形状の遺構が多様な形態をとって数多く発見されているがA型に属する例は極めて少数しか検出されていない。又、青森地方では千歳遺跡(13)をはじめ、同種遺構の報告例が増加しているが総てA型に属するものであり、各地方においては、形態的差異にもとづく土壌群の出現頻度にいちじるしい差が生じていることを指摘することが出来る。

土壌の配列

本遺跡における土壌のありかたは、一見してかなり整然とした配列のもとに構築されていることがわかる。これらの土壌を個々にみるならば、長軸が谷を向いて構築されるものと、谷に並行して構築される二者に分かれる。更に、これらの土壌を大きくみると、ある程度の規則性をもって列をなして配置されている。長軸が谷を向いて構築される前者は、互いに並行関係にある同型式の土壌との配置様式においては、谷と並行する列ということになる。長軸が谷と並行するかたちで構築される後者は、互いに並行関係にある同型式の土壌と配列を共にしており、配列様式においては谷と直交する列という。この様な各土壌の配列関係を示したものが、第96図と第97図によってあらわされるTピット配列見取図である。

第96図より本遺跡における土壌の配列をみるならば以下のごとくとなろう。

第1列：遺跡の中央よりやや東側に位置し、谷に向かって直交する様に並んだグループである。A型の第16号、第22号、第24号、第25号の4基によって構成される。

第2列：第1列の北側に位置し、谷に向かって直交するグループで、A型の第19号、第21号より成る。

第3列：遺跡の西側にあつて台地が西に向つて舌状に張り出す位置に構築されており、谷と平行する列である。この付近一帯は、多数の土壌が入り乱れて構築されているため、各配列の関係を知らうで混乱が生じている可能性が考えられるが、土壌番号を記すならば、A型の第12号、第13号、第39号、第40号、第48号の5基によって構成されている。

第4列：第3列の南側に位置し、谷に並行する列である。A型の第11号、第17号の2基から成る。

第5列：遺跡の西側にあつて谷に直交するグループと思われるが、未調査区域に向つて伸びているため、明確にはとらえられない。又、何基によって構成されているのかも不明であると言わざるをえない。調査区域内では、A型の第15号、第44号の2基である。

第6列：多くの土壌が、密に構築されている西側部に位置し、谷に直交する列である。A型の第6号、第7号、第46号によって構成されている。

第7列：本列は土壌の密集する西側に位置し、未調査区域に向って伸びるグループである。谷との関係は調査区内よりみるならば、斜交する角度と言えよう。本列の構成については、他の列に入るものが混乱してとらえている可能性があるとともに、未調査区域まで伸びるならば、何基より成るものか不明である。発掘区内でとらえられるのは、A型に属する第8号と第9号の2基である。

第8列：第1列と第2列の中間に位置し、谷と直交する角度で並んだ列である。B型の第4号、第18号の2基によって構成されている。

第9列：遺跡の南側に位置し、谷に向って斜交する角度で並ぶピット列である。B型の第29号、第31号、第32号の3基から成っているが、第30号を含めた4基によるものとも考えられよう。

第10列：北側に位置し、台地の舌状部に向って並ぶグループである。巨視的にみるならば谷と直交する角度をなしていると言える。C型の第5号、第14号、第23号、第26号、第41号、第106号、第111号の7基によって構成される。

第11列：北西部に位置し、舌状に張り出す未調査区に向って並び、谷と並行するグループである。C型の第108号、第110号の2基より構成されるが、未調査区域に向って伸びているため、構成数が増加することも十分考えられる。

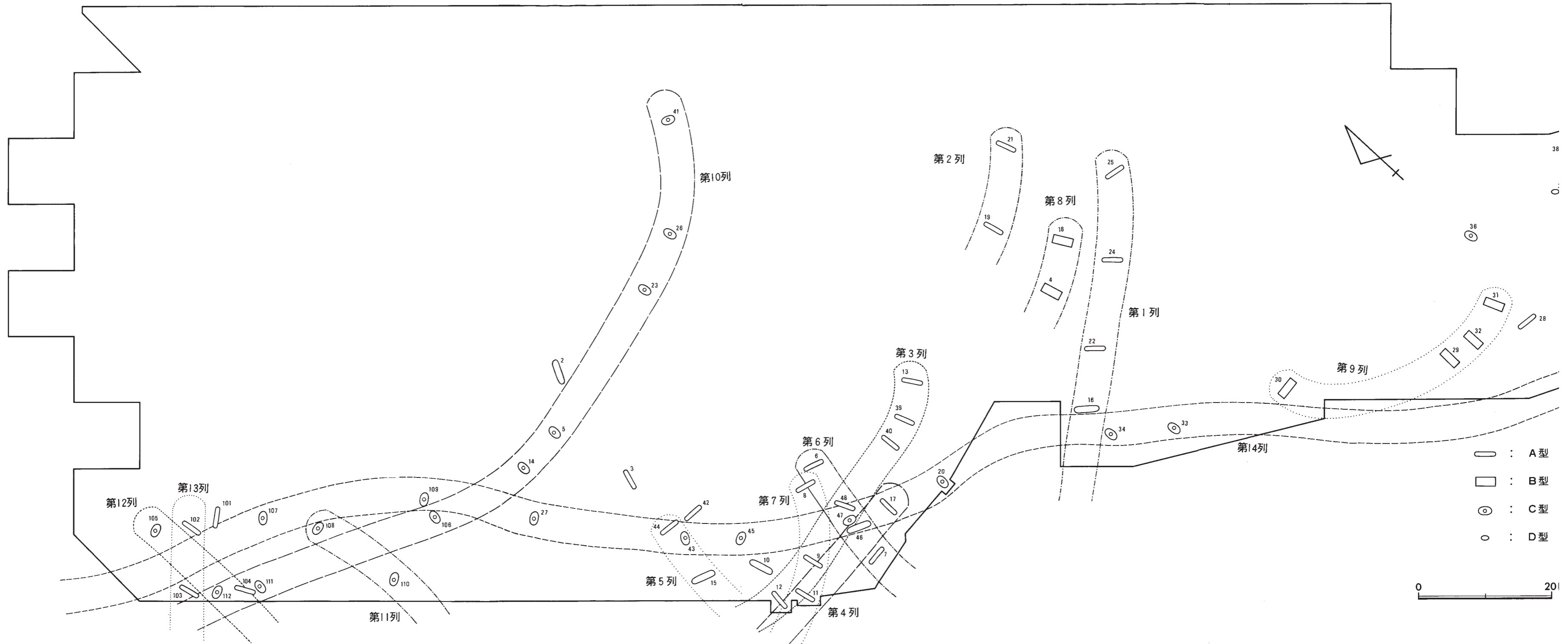
第12列：第11列の北側に位置し、同じく未調査区に向って並び、谷と並行するグループである。C型の第105号、第112号の2基によって構成される。

第13列：北西部に位置し、第12列と交差する様に並び、谷と斜交する角度のグループである。A型の第102号、第103号の2基より成る。

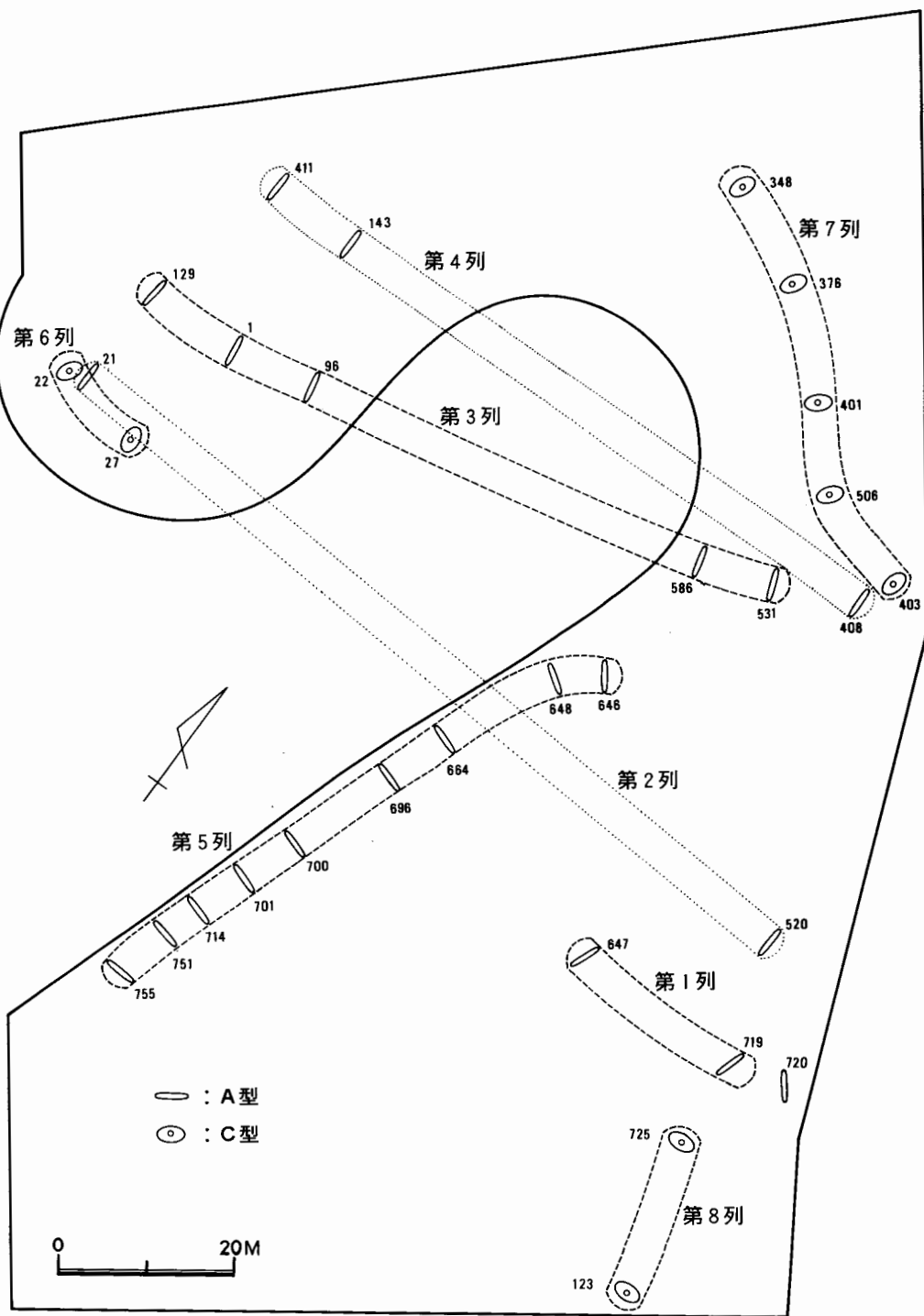
第14列：本列は谷沿に構築され、谷に対して並行して並ぶグループである。発掘区の全長に渡って延々と続いて、とらえられる。C型に属する第20号、第27号、第33号、第34号、第35号、第43号、第45号、第107号、第109号、長軸方向の異なる第47号の10基によって構成されている。本列は、他列に比べ特に長大となっているが、数基より構成されるいくつかのグループに細分されるべきかもしれない。

以上のごとく本遺跡においては、同一型式ごとに整然と並ぶ14の配列が、認められている。しかし、第14列によって代表される細分可能な長大なピット列や、どの列に属するのか混乱の多い西側の地域等、整理されているとはいいがたい点も多い。発掘区中央部に位置し、2基によって一群を成す第2列や第8列、南部にあって3基を基本構成とする第9列等の例からみるならば、細分可能なピット列も存在する。

2基又は、3基の単位として各配列をとらえるならば、第1列では、第22号、第24号、第25号によって一群を成し、第10列では、第5号と第14号、第23号と第26号の二群が考えられる。第14列では、第33号と第34号、長軸のやや異なる第44号と第45号、第27号と第109号の三群が独立して考えられる。又、長軸方向の共通性でみるならば、距離的に、やや離れすぎているが、C型Ⅱ類と型式の共通する第47号と第10列の第41号の組合せも考えられる。土壌が、数多く構築されている西側



第96図 S-267、S268遺跡、Tピット配列見取図



第97図 札幌S153遺跡、Tピット配列見取図

の地域の第3列では、第13号、第39号、第40号の3基による一群と第9号、第12号、第48号による一群の二者に細分できよう。又、第6列第7号と第7列第8号による組合せも考えられる。従って、以上の組合せを加えて考えるならば、19の群列が形成されていることになる。しかし、14列から成る配列と大きく変わるわけではない。この他に、前述した2様の配列様式の、どの列にも属さず単独で検出されている第1号、第2号、第3号、第10号、第36号、第37号、第38号、第42号、第101号、第104号の11基の土壌が存在する。しかし、これらの土壌の多くは、調査区境近くにあり調査が行われていない西側の舌状台地に配列を形成する土壌の存在が求められることも大いに考えられる。又、未調査区に向って配列が伸びている第3列、第4列、第11列、第12列、第13列や、小分割の行われる第14列等は、舌状部に沿って配列が伸びていくならば南北に湾曲して続く、幾列かに収束することも想像されよう。

本遺跡の様に土壌が整然と並んで構築される例は、札幌 S 153 遺跡により明瞭な配列をもってあらわれる群列をみることが出来る。谷に並行して並ぶ第5列、第8列の2本、谷と直交する様に並ぶ第1列、第2列、第3列、第4列の4本、舌状部に構築される第6列、谷の奥まった所に位置し、直交とも並行ともとれる第7列の計8本のピット列がみられる。

本遺跡と札幌 S 153 遺跡における土壌の構築状態をみるならば、多くの場合、意識的に整然と並んで構築されているといえる。又、札幌 S 237 遺跡等では、単独で発見されており、この種の土壌は単独、もしくはピット列をかたちづくることによって、その機能をはたしていたものとおもわれる。

以上の記述の上で土壌の長軸方向について、等高線に対する角度を用いず、谷に対して直交あるいは並行する角度という表現を使用したのは、遺構の立地で述べているごとく、本遺跡や札幌 S 153 遺跡の台地は、一見して平坦な状態にある。遺跡に立って、全く傾斜の感じられない斜度 $0^{\circ}11'25''$ という台地において本遺跡を営んだ人々が、なお精密に等高線に対する感覚が必要であったとは考えがたいこと、等高線が細かな曲線をもって表現される地域においては、長軸方向があいまいとなり遺構の配列をつかむうえで、有効ではないと考えられるからである。又、傾斜地において検出される土壌が、常に等高線に対して規則的な状態を示しているとはいいがたく、特に、本遺跡や札幌 S153 遺跡では、谷の存在を強く意識したうえで構築される配列方向がとられていることから判断して、谷に対するおおまかな方向性のほうが、より有効と考えたからである。

土壌の構築年代

土壌の構築年代を明らかにするものの一つに、遺物の検出があげられよう。本遺跡において調査された60基の土壌のうち24基のピット内より、何らかの遺物が認められている。しかし、これらの遺物は、土壌の構築時期を明らかにするためには、あまりにも貧弱であり、遺物のありかたも土壌の用途に関係なく覆土上層に位置する黒色土中に偶然転がり込んだものであった。又、土壌の底部部に堆積する腐植性の黒色土中より検出されたものは、第46号において、トコロ第6類の小破片が数点認められたのが唯一の例であるが、土壌の構築状況を埋土の堆積よりみるならば、空洞の状態

で、機能が發揮される様に構築されており、壙底面に土器の小破片が転落することも考えられ、唯一の発見例である第46号においても、土壙の構築に直接結びつくとは言いきれない面もある。従って、本遺跡では土壙の正確な構築時期は、全く不明といわざるをえない。ただ、土壙相互の重複関係よりみるならば、A型とC型の構築時代差について、第42号、第43号、第44号の重複関係よりA型が古く、C型が新しく構築されているといえる。又、第44号と現代の構築物、第46号と風倒木痕第47号と風倒木痕、第48号と風倒木痕による4例の重複関係からは、構築年代の手がかりはつかめない。

以上、本遺跡で検出された土壙の構築年代に触れてきたわけであるが、構築年代を明確にする手がかりをつかむことは出来なかった。そこで、北海道の他遺跡に構築年代のある程度適格な判断を下しうる例を求めるならば、札幌S153遺跡、函館空港第4遺跡（石本他 1975）、森越遺跡（峰山・大島他 1975）があげられよう。

札幌S153遺跡では、墓壙との重複関係より計って、縄文時代晩期末葉以前の構築との結論を得ている。又、A型とC型の時間差については、A型が古く、C型が新しいとされており、本遺跡におけるA型とC型の時間差を肯定するものといえよう。

函館空港第4遺跡では、縄文時代前期の竪穴住居址との重複関係、及び、いわゆる銭亀沢火山灰層（4470±100B, P）を切って構築されている事実からすれば、縄文時代前期以後のものといえよう。

森越遺跡では、縄文時代中期の竪立住居址を切って構築されており、これら数少い事例よりおおまかな構築年代を捉えるならば、縄文時代中期以降、縄文時代晩期末葉以前の構築物といえよう。又、形態による時間差は、A型が古く、C型が新しく構築されている。しかし、本州各地の構築年代に関する報告例をみるならば、横浜霧ヶ丘遺跡では早期以前、横浜港北ニュータウンでは早期、前期中葉以前、前期末～中期初頭以前、前期末～中期初頭など各時期にわたって構築されているようである（横浜市埋蔵文化財調査委員会編 1974）。従って、この種の遺構が単一の時期に出現、消失するのではなく、狩猟伝統に基づいて構築されるのであれば、長期間各時代にわたって受け継がれていったものとも考えられる。

土壙の性格

本遺跡において検出された60基の土壙について、いくつかの角度より検討を加えてみた。これによると各土壙は、自然堆積によって埋没したものであり、構築されるにおいては空洞の状態が必要とされていたものとおもわれる。構築される位置は、谷の存在を強く意識したうえで谷沿の地域に多くつくられ、谷から遠のくにしたがって減少する傾向にある。又、ある程度の傾斜地においても構築されている事実からすれば、立地に対する制約や好みは、あまり強くないようである。土壙相互の関係は、谷に対して並行に並ぶか、谷と直交するような角度で並ぶ数基からなるピット列を形成することによってその目的とするところの機能を果していたものとおもわれる。各土壙の構築年代については前述したごとく明確に決定することは出来なかったが、北海道内の他遺跡の類例などより推測するならば、縄文時代中期以降、晩期末葉以前に構築されたものとおおまかに捉えること

が出来る。しかし、関東各地の報告例と比べるならば時間的な差異が認められ、この種の土壌は各時代にわたって長い間存続していたことも考えられる。

この種の土壌の用途・性格については、構築年代を明確に決定するに足る要素が何ら発見されていないことと同様に、性格決定を明確に行うに足る遺物は、全く検出されていない。したがって、ここでは現実に存在する土壌の状況から求めて考えてみたい。

大地に穴を掘ることによって成される土壌の用途としては、一般的に墓塚、貯蔵穴、陥穴などが想像されよう。しかし、前二者とするには埋土の状態が自然堆積によってなされたものであり、人為的な埋め戻しが行われた様子はない。集落が近くに存在しない場所にも構築されており、特定の地域に集中することなく広い範囲にわたって整然と配置され自然の地勢を意識し谷と強い相互関係のもとに長軸方向を決定している。又、構造的には壙底部にみられる小柱穴の存在、形態的には溝状を呈する形状など否定的な要素が強い。後者の陥穴とする説をとるならば前述した状況の多くがよく説明され、否定的な要素はあまりみられない。

狩猟方法の一つに陥穴が存在していたであろうことは、すでに直良信夫氏の指摘するところであった(直良 1963, 1965, 1968)。氏は、住居の周辺にみられる不可解な孔や溝はクマやオオカミといった野獣の来襲を防ぐとともにイノシシやキツネを捕獲する目的で掘られた陥穴であったろうといい、又、陥穴が独自に存在するならば住居の位置とは、相当離れた場所に設けられているのであろうと述べている。構築される場所については、獣には、おおよそ定まった通路があり、その通路にそって2～5個ならべて設け上部は草木などで偽装し、時には壙底より上向きに竹槍をつきさしたものがあるとしている。

このような条件を本遺跡の土壌群のありかたと比べてみるならば、人為的な埋め戻しが行われないう自然堆積であることは当然のこととして、集落が近くに存在しない場所にも構築され、自然の地勢を強く意識したうえで特定の地域ではなく広い範囲にわたって検出されており、各土壌は谷と強い相互関係のもとに長軸方向を決定し整然と並ぶピット列をかたちづくっている。構造的には壙底部に小ピットの存在するものもあることなど上記の陥穴を構築する条件に十分みあっていると考える。又、札幌 S 153 遺跡における土壌のあり方も陥穴として構築されたとする条件を十分にみたしているものと言えよう。

さて、本遺跡や札幌 S 153 遺跡において数多く検出されている土壌が陥穴とするならば、特に北海道という自然においてはどのような動物を対象としていたのであろうか。かつて札幌周辺には、ヒグマ、エゾシカ、エゾオオカミ、キタキツネ、エゾノウサギ、エゾイタチ、エゾモモンガなどの獣類が生息していた(札幌市史編集委員会 1958)。なかでもエゾシカの生息数は多く(犬飼 1952)、開拓以前の北海道はシカでみちあふれており、シカの落角は土中に層をなし、落角の掘りおこしは入植者を悩ませたという(大泰可 1972)。

捕獲しようとする動物を土壌の形態、規模からみるならば、クマを対象とした場合には細小すぎて来襲を防いだり、陥穴猟によって捕獲するという合理性に欠ける。又、小動物を対象とするならば構築に費やす労力に比べあまりにも非効率であり、たとえ偶然何らかの小動物が落ち込むことが

あったにせよ具体的な対象動物を想像することが出来ないなど否定的な要素が強いといえよう。では、シカを対象とした場合にはどうであろうか。溝状を呈するA型のものでは、シカの胴部幅にほぼかい広さであり、深さにおいてはシカの平均肩高80~110cmを十分カバーしている。長楕円形を呈するC型のものではシカの平均体長110~170cmに相当し、深さにおいても同様のことが考えられる。つまり、このような規模にある土壌中に落ち込んだ場合、身動きのとれない状態となり、シカのように優れた跳躍家でも跳び上って逃げ出すことは困難であろう。又、一頭を捕獲することによって得ることの出来る肉の量や毛皮の利用性という点からみてもシカを対象としていたことは十分考えられる。

シカは、群をつくって行動する動物であり群の編成や規模は、各季節の暮らし方の違いによって異なっている。

春がきて木々が芽を吹く頃になると雌たちは、小さな群に分かれ山里近くまで広く散り柔らかい草の上に子を生子、夏の間も子連れの雌は数組集まって小さな群をつくり山奥から山里近くまで分散して子供を育てる。雄シカは沢や泉のわき出るところにぬた場をつくりテリトリーでは、数頭から10数頭の雌を従えているといわれ、ぬた場近くの台地は、交尾の場所となっている。雪が積もる頃になると雌同志、雄同志の群は集合して数十頭から100頭以上の大きな群を形成し、雪が深くなると山の奥へと移動を行う。シカの群が移動を行い積雪期を過ごす場所は、野山が深い雪に覆われても北風によって雪が吹き飛ばされ笹の葉が露出したり、深くは積もらない谷などを見通すことの出来る南西向きの斜面や雑木林である。このような場所を積雪期の『居つき場所』といい、居つき場所では各自定まった寝床を決め採食を繰り返している。寝床では一様な姿勢をとっており、頭は谷を望み尾は山側を向き排泄物が1カ所にかたまってうずたかく山のようになっているという。2月、3月の積雪が最も多く、溶けかかった雪が凍りつく時期はシカにとって一番苦しい季節である。この時期には、笹を掘ることが出来ずに餓死するものや、野犬に襲われるものがでる。又、春先には穴から出て来たヒグマに捕えられることもあるという。

シカの食物は、春から夏は木の芽や葉、秋にはドングリやコクワの実も採食し、冬になると笹、タラノキ、アオダモ、トドマツ、シナノキなどの樹皮や萌芽林の小枝を食べる。冬のシカは、ヒツメやツノで雪を掘りながら食べ、時には1mも雪を掘って採食するが、笹の他、樹皮や小枝は栄養に乏しく採食に時間がかかる。

このように、シカは冬になると大きな群をつくり居つき場所へ移動を行うが、オオカミなどの捕食者から一番ねられるのもこの時期である。

以上、やや冗長にシカの行動について触れてきた。本遺跡や札幌S153遺跡は、共に湧水や小川などがすぐ目の前に求められ、南西向きの台地に立地している。又、本遺跡と並行して札幌市教育委員会が調査を行った近隣する札幌S262, S263, S265, S269遺跡でも同種遺構が検出されており、共に南西向きの台地に営まれた遺跡であった。このように南西向きの地勢にある本遺跡を含めたこの地域一帯が、かつてはシカの居つき場所的な存在であったことは十分考えられることであり、季節的なサイクルによる移動を行わない動物を対象として猟を行うのであれば別として、季節によ

って離合集散を行う動物を対象とするならば、広い地域にわたって、散っている季節に一頭一頭追いかけるのではなく大きな群となって定着する時期をねらうのはオオカミなどの捕食者ばかりでなく狩猟者としても当然な方法であろう。

このような状況にあって、陥穴による狩猟法が非効率な方法としてみられる面もあるが、この種の土壌が冬期間に利用されていたとするならば合理的なものといえる。つまり、夏期に使用されるならば、常に巡回などして獲物の捕獲状況を調べ腐乱を防止するとともに素早く処理しなければならないが、冬期であるならばこのような心配はある程度さけることが出来る。毛皮の状態は、シカばかりではなくどのような動物においても冬期間が最も良く狩猟者にとっても喜ぶべき時期といえよう。又、土壌の構造において、上部に偽装を施したものなのか、むき出しのまま利用されていたのか、調査時には明確な結論が得られなかったのととも本論においても全く触れていない。しかし、これらの土壌が冬期間に利用されていたものであるのならば、降雪によって野山が雪に覆われた時、人間にもシカにも全く見分けることの出来ない最良の偽装がほどこされた状態となり、人為的な偽装を強制する必要がないとおもわれる。だが、降雪によって覆われている土壌が、常にシカの落ち込みうる条件にあるとは限らない。2月、3月の溶けかかった雪が凍りつき、いわゆる雪渡り(堅雪)の出来る時期になるとシカにとって一番苦しい季節であるとともに土壌の機能も停止した状態にあると考えられる。

したがって、これらの土壌を利用した陥穴による狩猟は、無差別に数多くの土壌を構築し、偶然通りかかった獣が落ち込むことを期待するといった怠慢、かつ消極的な狩猟法ではなく、シカの生態を熟知し日常サイクルの中で必然的に落ち込み易い場所を選んだうえで構築された合理的な狩猟形態とえよう。

以上、本遺跡で検出された60基の土壌が陥穴として構築されたものとしてすすめてきたわけであるが、多くは推測の上で成りたっており、今後、この種の土壌の性格決定に関しては、多様な角度から解析がはかられるべきであろう。

(内山真澄)

第3章 土器群について

第I群土器

縄文時代早期に属するもので、貝殻文・沈線文・列点文が特徴的な、平底円筒土器である。

本遺跡にては、第1次調査・第2次調査を通じ比較的多く得られた土器群である。

本群土器に類する資料は、近年の発掘件数の増加とあいまって、札幌周辺においてもその出土例が多く報告されるようになってきた。

本遺跡にて得られた資料は、その文様構成等非常にバラエティに富み、文様の組み合わせ等により6グループに細分された。

- a, 無文あるいは、軽い擦痕様の文様のみられるもの。
- b, 貝殻条痕文を地文に、貝殻腹縁文が2～3段めぐもの。
- c, 貝殻腹縁文が、数段から数10段施文されるもの。
- d, 貝殻腹縁文と沈線文が、横位に交互に施文される。
- e, dと細分されたものに、列点文が加わる。
- f, 波線文のみ、あるいはこれに列点文が加わる。

以上が、本群土器に於いての文様による分類である。貝殻腹縁文、沈線文、列点文の多様性が、本遺跡の特徴といえよう。

かつて筆者は、縄文時代早期の平底土器群に関して、その文様構成等による分類と地方差、文様等の変遷より各土器型式間の序列について考えたことがあった（羽賀 1976）。

縄文時代早期における平底土器群中、条痕文、貝殻文、沈線文のみられるグループは、6～7のグループに細分される。

(1) 半截竹管状工具の内面による条痕文が特徴となり、土器底面に貝殻背面圧痕を有している「暁式土器」(河野 1961)、貝殻背面圧痕はみられないが同様の器形・文様をもつ「テンネル式土器」(沢 1964)、のグループ。なお両者共に、絡縄体圧痕文が施文される例が若干含まれる。

(2) 下頃辺遺跡より得られた、幅広のへら描き沈線文が横位に数段施文される「下頃辺式土器」(山内編 1964)によって代表されるグループ。

(3) 貝殻条痕文が横位に施文され、貝殻腹縁文、沈線文、列点文等が特徴的に施文され、平縁、波状口縁もみられる「沼尻式土器」(沢・西 1973)によって代表されるグループ。

(4) 「沼尻式土器」に非常に近い器形・文様を有するが、さらに沈線文、貝殻腹縁文が特徴的となる「虎杖浜式土器」(大場他 1962)のグループ。

(5) 器面に粗雑な条痕文がみられ、底部に張り出しを有している。口縁部に微隆起線文がしばしばめぐものがみられる「大楽毛式土器」(沢 1964)によって代表されるグループ。

(6) 波状口縁のものが比較的多く、特徴的な貝殻腹縁文が口縁部付近にみられ、隆起帯文が口縁をめぐ「大潤式土器」(大場他 1955)によって代表されるグループ。

(7) 波状、平縁が半々ぐらいに存在し、沈線文、列点文がきわめて特徴的にみられ、口唇下に隆起帯をめぐらし、隆起帯上にへら状工具、貝殻腹縁等にてきざみ目を付ける。若干だが絡縄体圧痕文を有するものをも含んだ、「上坂・アルトリ式土器」(名取・峰山 1954)、(竹田 1956)のグループ。

以上の7グループに細分されると考えたが、本遺跡出土の第I群土器の場合、その文様構成に関しては、非常にバラエティに富んでおり、これらの中においても貝殻条痕文、貝殻腹縁文、沈線文、列点文が単独にあるいは複合して施文されるグループが特に多く特徴づけられる。これらの特徴が最もよく現わしているのは、(3)、(4)の「沼尻式土器」、「虎杖浜式土器」である。

「沼尻式土器」、「虎杖浜式土器」は、非常に類似した器形、文様構成を有しておりその差異はかならずしも明確にされていない。またそのC¹⁴年代の測定についても「沼尻式土器」が7130±

120B P (沢 1969), 「虎杖浜式土器」が7700±200B P (大場・C.S.チャード 1962) と両者共に非常に似た数置が示されている点が留意されよう。

しかし第Ⅰ群土器とした土器群中には、その文様構成が、従来いわれて来た「沼尻式土器」, 「虎杖浜式土器」の概要より大きく逸脱した土器が含まれている。

たとえば、cと分類されたものの中に貝殻腹縁文を縦位に波状に連続押圧したものがあり、これらは、かつて「住吉町下層式B類土器」(大場他 1955)と分類されて来たものである。また b, eと分類したものに比較的多くみられる口唇上にへら状工具, 貝殻腹縁を使用した連続したきざみ目, 貝殻腹縁文, 沈線文等が複合して山形, 三角形を呈する文様とする物等は、「住吉町・上層式A類土器」(大場他 1955)と分類されてきた土器群の特徴を強くうかがえる。

本遺跡に於いて、第Ⅰ群土器としたものをその文様構成, 組み合わせより6グループに細分したが、その全体的な概要, 文様施文に関してのモチーフ等より、数型式の土器が混在して得られたとは考えられず、「沼尻式土器」, 「虎杖浜式土器」を含んだ単一型式の地方差をもった土器群と考えられ、文様等の差異もその中のバリエーションとして考えたい。

文様のバリエーションの中に、「住吉町式土器」によって代表される「貝殻文尖底土器群」に特徴的な文様要素, 施文方法が含まれている点より、「沼尻式土器」, 「虎杖浜式土器」を含んだ「貝殻文平底土器群」との関連, 時間差等を考える上で重要な意味をもっているように思える。

「住吉町式土器」は、函館市住吉町遺跡にて得られた土器群であり、円錐形の深鉢形土器で大多数のものは底部尖端に顕著な乳頭様小突起がある。平縁, 波状口縁を含み、文様は無文, 貝殻腹縁文, 同条痕文, 刺痕文(列点文), 沈線文, 指圧による浮文等が単独にあるいは複合して施文された土器群である。口縁部形状より3類に細分され(児玉・大場 1953), その後「住吉町下層式A類」, 「住吉町下層式B類」と2分されている(大場 1955)。

同種の資料は、七飯町鳴川遺跡にても得られている。鳴川遺跡より得られた土器は、「住吉町下層式土器」と称されたものと同様に貝殻文尖底土器であり、「住吉町下層式土器」に比して器形, 文様の出現頻度に差異が認められ、A, Bと2類に分類されたものの内、A類土器を「鳴川式土器」と仮称している(高橋 1967)。

これら、「貝殻文尖底土器群」は、東北地方にて多くみられ、「吹切沢式土器」(江坂 1954), 「物貝台式土器」(江坂 1950)等の存在が知られている。

その序列については、種々の論議がなされているのであるが、「住吉町下層式土器」は、その器形, 文様構成より「物貝台式土器」に比定されようである。

さて、「物貝台式土器」, 「吹切沢式土器」の序列については、最近では、その器形, 文様構成の変遷より「吹切沢式土器」→「物貝台式土器」の序列が示されているようである(北林他 1975)。

「住吉町下層式土器」は、その文様構成, 器形をとっても比較的バラエティに富んでいる。その中において、若干の時間差を考える事も可能ではないかと思われる。「A類」, 「B類」に細分されているが、「B類」としたものの中には、貝殻腹縁文を縦位に連続して押圧する波状貝殻文等がみられ、「吹切沢式土器」にみられる文様要素と考えられるものが含まれている。

東北地方の貝殻文尖底土器群、さらに「住吉町下層式土器」等と、道東域に特にみられる貝殻文平底土器群との関連、比較については、林氏によってなされた事があるが、それ以後ほとんど行われてはいない。

林氏の見解によると、「住吉町式土器」は、その文様構成より「物貝台式土器」に類似し、「物貝台式土器」に対比される。「住吉町式土器」に匹敵する古さを示す他土器は、女満別飛行場出土の土器（沼尻式土器）がある。

道東の「沼尻式土器」の貝殻文による文様構成は、「住吉町式土器」のそれより粗雑であり、時間的には「沼尻式土器」は「住吉町式土器」より先行するものであろうとしている（林 1966）。

道東部における平底土器群は、「テンネル・暁式土器」→「下頃辺式土器」→「沼尻式土器」→「大楽毛式土器」の序列をとったと考えられ、貝殻文による文様施文が特に盛行するのは、「沼尻式土器」とこれにほぼ並行関係にある「虎杖浜式土器」の時期である。また「沼尻式土器」、「虎杖浜式土器」に類する平底の土器群は、全道域にその分布が広がっている点が留意される。

札幌T 210 遺跡（上野他 1976）にては、本遺跡にて第Ⅰ群土器としたものと同種の土器群が得られている。その中には、ごく微量だが尖底土器の底部破片も出土している。土器群の文様構成は、バラエティに富んでおり「沼尻式土器」、「虎杖浜式土器」を中心として多岐にわたっている。

これらより類推するならば、東北地方にて盛行した貝殻にて文様を施文する手法は、住吉町、鳴川等をへて道央部にて「虎杖浜式土器」、札幌周辺での本遺跡、T 210 遺跡等の土器群を発生させ、道東域の「テンネル・暁式土器」→「下頃辺式土器」の古来の土器群に影響を与え、「沼尻式土器」を発生させたという仮説も考えるのではなかろうか。

本遺跡に於いては、尖底のものは皆無である。器形的には、全て円筒形で波状口縁、平縁のものがみられるが、口縁が方形を呈すると考えられるものが、3、4点みられる。口縁が方形をなす土器は、道東域にて「沼尻式土器」に後属すると考えられる絡縄体圧痕文を特徴とした「浦幌式土器」（名取 1962）に多くみられる。

また、尖底土器群では「吹切沢式土器」に若干存在しており（井上他 1976）、平底土器群では、「虎杖浜式土器」に比較的多くみられ、「沼尻式土器」にも若干だが報告例がある（河野 1967）。

「沼尻式土器」より系統的にその変遷がたどられる「浦幌式土器」に至って、口縁が方形をなす土器が多く出現する点は、先にも若干記してきたが、貝殻文を有する土器群が、東北地方より道南、道央をへて道東域に地方的な差を生じつつ広がったと考える一要素となるであろう。

林氏の見解（林 1966）では、「沼尻式土器」はその文様構成が「住吉町式土器」より粗雑で簡単であり、1段階古いものと考えられているが、「沼尻式土器」、「虎杖浜式土器」に類する資料は、たとえば、日高地方においては、「田原A式土器」（藤本 1958）等がみられるように、若干の地方差を有しながら全道域に分布する点よりみて、むしろ「住吉町式土器」等の尖底土器群の文様である貝殻文が道南より道央をへて広がったと考えるのが妥当なのではなかろうか。

「沼尻式土器」にみられる文様が「住吉町式土器」にみられるより粗雑で簡単であるというが、「沼尻式土器」が一段階古いのではなく、貝殻文を施文する事が東北地方、道南から道央をへて全

道的に広がった結果として文様が簡略化されたとも考えうる。

この事実を裏付けるかのように、「沼尻式土器」とほぼ並行関係にあるとされている「虎杖浜式土器」は、その文様構成において「沼尻式土器」以上に貝殻文のバリエーションがあるように思える。

以上、本群土器についてのまとめを、尖底土器群との関連より若干記して来た。しかし本道における縄文時代早期の各土器群についても、当然考えられる地方差等を無視して型式名を設定する例がみられるなど、その編年の研究の指針が確立しているとはいえない状況にある。

札幌周辺の、ごく少量の資料では不確実な要素を多く含み、体系的な事実は導き出されないかもしれない。筆者の浅学なるゆえであるが、大方の御指導を賜れば幸いである。

(羽賀憲二)

第Ⅱ群土器

縄文時代中期末葉に位置するであろう、土器群である。

本遺跡にて得られた土器は、この類に属するものが最も多い。

口縁部にめぐる円形刺突文が特徴となるもの、半截竹管状工具による文様施文が特徴となるもの、口縁に折り返しによる肥厚部を有し、太い粘土帯が数段めぐるもの等、3グループ程度の土器が混在して得られている。

これらの土器群は、その文様等より **a**、**b**、**c** の3類に細分された。

a類としたものは、口縁部にめぐる円形刺突文が特徴としてあげられるもので、朝日トコロ貝塚出土第6類土器によって代表される土器群である。

札幌周辺にては、白石神社遺跡(加藤・上野・羽賀 1973)、T 77遺跡(羽賀 1974)、T 310遺跡(上野・羽賀 1974)、平岸坊主山遺跡(畑 1966)等にみられる。

b類としたものは、口縁に折り返しによる肥厚帯を有し、太い粘土帯が数段めぐるといった特徴を有するもので、余市町大谷地貝塚出土の余市式土器によって代表される土器群である。

c類としたものは、半截竹管状工具にて施文されるといった特徴がみられたもので、平岸天神山遺跡(菊地 1967)、嵐山遺跡(斉藤 1966)、名寄智東B遺跡(山崎 1966、山崎・長谷川 1968)下層出土の土器群に類似する資料である。

これら3グループの土器群は、編年的にもほぼ並行関係にあったと考えられており、札幌周辺の遺跡においては、これら3グループの土器が混在して得られる例が多いようである。

本遺跡にては、**a**類土器としたものが大部分であり、**b**、**c**類土器はごく微量にしか得られておらず、これら3グループの土器群の相互の関連に至った調査は行われなかった。

これら3グループの土器群を含む、縄文時代中期の研究は、吉崎(吉崎 1965)によって新境地が開かれ、さらに高橋によって集大成されたといつてよい論考が発表されている(高橋 1972)。

これらの論考による、縄文時代中期の大要は、現在多くの研究者に支持されている所であり、最近の発掘件数の増加と相いまって当該時期の資料も増加しているが、その大要は変化していないと

思われる。

しかし、c類と分類した土器群は本遺跡においてもごく微量にしか得られてはおらず、また類似する資料も、増えてはいない。

今後、c類と分類した土器群の良好な遺跡の調査より、その土器群の系統等様相は明らかになるであろう。さらに「トコロ6類土器」、「余市式土器」との関連についても明確な断が下されよう。
(羽賀憲二)

第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ群土器

第Ⅲ群土器としたものは、第1類(昭和50年度発掘出土土器)と第2類(昭和51年度発掘出土土器)に分類することができ、時間的には、前者が新しく、後者が古いと言えよう。

第Ⅲ群第2類土器は、幾何学的な沈線によって囲まれる縄文と磨消帯とを文様の主体とするもので、現在のところ北海道南部の渡島半島から主として発見されており、札幌地方からの出土は初めてである。

本類に最も近いものとしては、松前町原口遺跡(西連寺 1976)出土土器で同報告書第11, 12図に示されるものがある。この時期に近く位置する土器としては、松前町大津遺跡(齊藤・氏江 1974)、知内町涌元遺跡(千代 1972)などであろう。しかし、これらの遺跡出土の沈線文と縄文の組み合わせによる土器は、本遺跡出土第77図1, 2に見られるような文様及び稚拙な入組文を主体とするものが多く、本遺跡出土第77図3及び、原口遺跡第12図26に見られるような文様を有する土器は見られない。この種の土器が偶発的な所産によるものか、または、ある程度の時間的ないしは空間的な意味あいを有するものであるかについては、今後の資料増加を待ちたい。

第Ⅲ群土器第1類とした第51図1～5に示す土器は、横走または山形の沈線に縄文を主体とする土器であり、縄文時代後期中葉に位置づけられよう。この中で、2の沈線文と縄文に尾を引くような刺突文を配するものは、礼文島船泊遺跡(児玉・大場 1952)出土の船泊土層式土器に極めて近い文様を有する土器である。しかしながら、1, 3に見られる土器は、船泊土層式土器よりも後出と思われる札幌市手稲遺跡(大場・石川 1956)を標式土器とする手稲式土器にも普遍的に見られる文様であり、本遺跡出土の貧弱な資料では、このいづれとも決しかねる。

第Ⅳ群土器の位置する時期について、最も示唆に富む土器は、第73図5に掲げる台付鉢であろう。この台付鉢の文様構成に最も酷似する土器としては、尻岸内町日ノ浜遺跡(竹田 1969)出土のものがある。日ノ浜遺跡出土土器は、一般に東北地方の大洞C₂～A式土器に比定されている。

札幌近縁で、日ノ浜式土器に比定しうる遺跡としては、恵庭市柏木川遺跡(藤本・高橋 1971)、長沼町タンネトウ遺跡(野村 1962)、千歳市駒里遺跡(石川・金山 1970)などがあげられ、本遺跡から出土した土器の編年的位置も、このあたりに求められよう。

第Ⅴ群土器としたものは、続縄文時代の所産であり、いわゆる後北C₁式土器である。

(加藤邦雄)

結 語

本遺跡の発掘調査によって得られた事実については、発掘調査を担当した調査員によって、各章、各節に分って述べたとおりである。ここでもう一度、その概要について述べれば、次のとおりである。

出土遺物は、縄文時代早期、中期、晩期の土器、石器が主体であり、これに伴う遺構としては、縄文時代中期に構築されたと推察される。いわゆるTピットと呼ばれる陥し穴と考えられるピット60個、同じく中期の竪穴住居跡2軒、竪穴住居跡と同様な平面、及び断面形を持ちながら、炉、柱穴、その他の痕跡から、竪穴住居跡と断定するに至らなかった遺構1個、縄文時代晩期の墓と考えられるもの2個である。

いわゆるTピットと呼ばれる遺構については、近年、関東以北の地域に普遍的に見られるものであり、その性格については、今村啓爾氏による詳細な論考が見られる。札幌市域にあっても、近年の発見数はかなりの数を見ることができる。本報告のなかで、内山真澄は、札幌市中から発見されたピット類の集成を行なうとともに、動物生態学の立場からの助言を得て考察を行なっている。また竪穴住居跡については、羽賀憲二が、遺物の出土状態の詳細な観察の事実に基づき考察を実施している。

本遺跡の発掘によって得られた結果については、以上のような事実のほかにも、もう一つ大きな成果を得ることができた。

それは、遺跡の東側部分の遺物のほとんど検出されなかった地域からも、かなりの量のいわゆるTピットが発見されたことである。この報告のなかでも述べているように、この種のピットが、従来から言われているように日常の生活の場として使用されない、いわゆる狩猟場としての性格を有するものであれば、日常生活用具としての土器、石器類の発見が非常に少ない事実は、当然のこととして受けとめなければなるまい。さすれば、今後の発掘調査においては、地表面からの、あるいは試掘調査によって得られる遺物が極端に少なく、一部の心ない人によって言われている「遺跡として認定し得ない」か、またはその接点にある「遺跡」の取り扱いについては、十分留意しなければなるまい。

現在、本遺跡のように地表面からの観察、もしくは、試掘調査によって得られる遺物が、極端に少ないか皆無に等しい遺跡の取り扱いについては、かなりなおざりにされている傾向が見られる。いわゆる「調査にたえられない遺跡」「重要でない遺跡」等々に加えて、はなはだしくは「遺跡として認められない」との暴言に近いものさえ聞くことができる。私ごとき若輩に取っては、遺跡とは何であるかとの定義を述べる力はないが、人々の生活に使用した遺物と、生活の痕跡さえあれば、如何にそれがささやかなものであれ、「遺跡」として大事に取り扱って行きたいと思う。

また、遺跡の範囲確定にあたっては、現在我々の実施している発掘調査では、面積を広く取り過ぎるとの批判も聞く。しかし、現在実施している程度の試掘調査をもって、発掘調査を実施する範囲を正しく確定するとなれば、かなりためらいを感じないわけにいかない。例えば、本遺跡の例を取って見ても、試掘調査によって遺物を発見し、遺構の存在を確認し得たのは、縄文時代中期の竪穴住居跡を発見した一帯に限られている。この結果からのみ調査区域を確定した場合、本遺跡発見の、いわゆる Tピット群の半数近くは、永遠に日の目を見ることがなかったであろう。ちなみに、試掘調査は発掘調査を実施した地域はもちろん、その他の地域までに及んで実施し、その方法は、ほぼ20 mメッシュの交点に正しく2 m×2 mのグリッドを設定して発掘している。

現在、我々の実施している方法は、試掘調査によって確実に発掘調査を実施しなければならない範囲を確定するとともに、加えて遺跡としての広がり持つ可能性のある範囲をも含めて、発掘対象面積として捉えている。そして発掘調査に当たっては、試掘調査によって確定している遺構、遺物の発見される範囲の調査を集中的に行なうとともに、遺跡としての広がり可能性を持つ地域についても、試掘調査をより数段精密な調査を実施することにより、遺構の存否について確認を進めている。

この方法が、すべての地域に及んで実施できるか否かについては、その地域に密着して、如何に正確に過去のデータを積み上げているかということのみに、かかわってくるのではあるまいか。即ち、この方法を採用するためには、遺跡の調査範囲と密接なつながりを持つ、調査行程と予算の積算という設計書を確実に書き上げなければならないからである。

ともあれ、さまざまな試行錯誤を積みながら、4年有余にわたって札幌市中の埋蔵文化財保護（といっても発掘調査が主体であった）に従事してきた。今後とも大方の暖かいご指導のもとに、より一歩進めた文化財保護の推進に努力してゆきたい。

（加藤邦雄）

引用参考文献

- 麻生優 1969 「原位置論序説」『上代文化』38所収
- 石本省三・長谷部一弘・藤田登 1975 「函館空港第4地点遺跡—1974年度発掘調査の概要—」『北海道考古学』11所収
- 井上久他 1976 「小田野沢—下田代納屋B遺跡発掘調査報告書」『青森県立郷土館調査報告』1
- 上野秀一編 1975 「S 239 遺跡」『札幌市文化財調査報告書』IX所収
- 上野秀一編 1975 「S 256 遺跡」『札幌市文化財調査報告書』XI所収
- 上野秀一編 1976 「T 210 遺跡」『札幌市文化財調査報告書』VII
- 上野秀一・羽賀憲二 1974 「T 310 遺跡」『札幌市文化財調査報告書』VI
- 江坂輝弥 1950 「青森県下北郡東通村尻屋物見台遺跡調査報告」『考古学雑誌』36—4所収
- 江坂輝弥 1954 「青森県下北郡吹切沢遺跡」『日本考古学年報』2所収
- 大泰司紀之 1972 「シカ類の系統と進化I, シカ類の分類と分布」『週刊世界動物百科』53所収
- 大塚和義 1976 「北海道の縄文後期における穿孔技術とその展開」『考古学ジャーナル』No.120所収
- 大場利夫他 1955 「函館市梁川町遺跡」
- 大場利夫他 1955 「桧山南部の遺跡」
- 大場利夫・石川徹 1956 「手稲遺跡」
- 大場利夫・C.S.チャード 1962 「北海道先史時代の実年代について」『考古学雑誌』48—1所収
- 大場利夫他 1962 「白老郡虎杖浜遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』17所収
- 可児通宏 1969 「多摩ニュータウン遺跡調査報告書」VII
- 加藤邦雄編 1976 「S 153 遺跡」『札幌市文化財調査報告書』X
- 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二 1973 「白石神社遺跡」『札幌市文化財調査報告書』I
- 菊池俊彦 1967 「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3所収
- 北林八洲晴他 1975 「千歳遺跡」13 『青森県埋蔵文化財調査報告書』27
- 霧ヶ丘遺跡調査団 1973 「霧ヶ丘」
- 河野広道 1961 「帯広市暁台地遺跡調査報告」『アイヌ・モンリ』5 / 6所収
- 河野広道・藤本英夫 1953 「御殿山ケルーン群発掘調査報告書」を始め多数の文献がある。
- 河野広道・藤本英夫 1961 「御殿山墳墓群について—第3次発掘報告—」『考古学雑誌』46—4所収
- 河野本道 1967 「枝幸町の先史時代」『枝幸町史』所収
- 児玉作左衛門・大場利夫 1952 「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』7所収
- 児玉作左衛門・大場利夫 1953 「函館市住吉町遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』8所収
- 小林達夫他 1965 「米島遺跡」
- 小林達夫 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93
- 斉藤傑 1968 「嵐山遺跡」
- 斉藤傑・氏江敏文 1974 「松前町大津遺跡発掘報告書」
- 西連寺健 1976 「松前町原口遺跡発掘調査報告書」

- 沢四郎 1964 「北海道釧路村トンネル第1地点出土の土器について」『釧路の古代文化』6所収
- 沢四郎 1969 「道東における早期縄文土器の編年について」『釧路史学』創刊号所収
- 沢四郎・西幸隆 1973 「北海道釧路市沼尻遺跡出土の遺物について」『釧路市立郷土博物館紀要』2所収
- 高橋正勝 1967 「北海道七飯町鳴川遺跡の尖底貝殻土器について」『石器時代』8所収
- 高橋正勝 1972 「北海道における縄文時代中期の終末(1)(2)」『北海道青年人類科学研究会誌』9, 10所収
- 竹田輝雄 1956 「北海道虻田郡豊浦町アルトリ遺跡出土の遺物について」『上代文化』26所収
- 竹田輝雄 1969 「縄文晩期文化—北海道—」『新版考古学講座』3所収
- 千代肇 1972 『知内町涌元遺跡』
- 千代肇編 1974 『西桔梗』
- 東京大学文学部編 1965 『オホーツク沿岸, 知床半島の遺跡』上巻
- 直良信夫 1963 『古代人の生活』
- 直良信夫 1965 『古代人の生活と環境』
- 直良信夫 1968 『狩猟』
- 名取武光 1962 「浦幌式土器」『日本考古学辞典』所収
- 名取武光・峰山巖 1954 「伊達町北黄金遺跡発掘報告』
- 野村崇 1962 「長沼町の先史時代」『長沼町の歴史』下巻所収
- 羽賀憲二 1974 「T77遺跡」『札幌市文化財調査報告書』Ⅲ
- 羽賀憲二 1976 「道央部に於ける縄文時代早期, 一平底土器群の様相について—」『北海道考古学』12所収
- 畑宏明 1966 「札幌市附近の遺跡—資料編Ⅱ—札幌市平岸主山遺跡」『Aynu Moshiri』Ⅲ所収
- 林謙作 1966 「東北・北海道の貝殻土器群—東北・北海道の共同作業のころみとして—」『北海道青年人類科学研究会誌』6所収
- 藤本英夫 1958 「静内町田原遺跡について」『せいゆう』4所収
- 藤本英夫・高橋正勝 1971 『柏木川』
- 峰山巖・大島直行他 1975 『森越—縄文前・中期の竪穴住居遺跡—』
- 山内清男編 1964 『日本原始美術』Ⅰ
- 山崎博信 1966 『智東B地点図録編』
- 山崎博信・長谷川功 1968 『智東B地点本文編』
- 横浜市埋蔵文化財調査委員会編 1974 『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』Ⅳ
- 吉崎昌一 1965 「縄文文化の発展と地域性Ⅰ—北海道—」『日本の考古学』Ⅱ所収

第4表 S267, 268遺跡(第1次調査) Tピット一覧表

ピット番号	開墾部 平面形	開墾部 長径×短径(cm)	墾底部 平面形	墾底部 長径×短径(cm)	深さ(cm)	長軸方向
1	溝状	264 × 68	溝状	255 × 16	146	N-37°-W
2	〃	(364) × (82)	〃	400 × 14	147	N-34°-E
3	〃	352 × 72	〃	367 × 25	120	N-17°-E
4	長楕円	220 × 90	〃	200 × 38	128	N-18°-W
5	〃	(150) × (140)	隅丸長方形	87 × 33	132	N-18°-W
6	溝状	303 × 61	溝状	266 × 14	102	N-66°-W
7	〃	274 × 59	〃	312 × 21	136	N-89°-E
8	〃	330 × 81	〃	294 × 12	140	N-76°-W
9	〃	218 × 68	〃	158 × 14	114	N-20°-W
10	〃	366 × 89	〃	295 × 23	127	N-16°-W
11	〃	352 × 88	〃	376 × 29	105	N-14°-W
12	〃	230 × 63	〃	223 × 12	144	N-9°-E
13	〃	227 × 54	〃	216 × 10	133	N-33°-W
14	長楕円	189 × 105	不整 隅丸長方形	136 × 38	123	N-10°-W
15	溝状	414 × 135	溝状	422 × 31	139	N-64°-W
16	〃	396 × 75	〃	407 × 12	134	N-54°-W
17	〃	(355) × 84	〃	354 × 11	121	N-10°-E
18	長楕円	263 × 103	〃	238 × 35	120	N-32°-W
19	溝状	262 × 70	〃	228 × 18	117	N-12°-W
20	長楕円	164 × 100	隅丸長方形	94 × 41	120	N-18°-E
21	溝状	244 × 80	溝状	178 × 11	107	N-30°-W
22	長楕円	(180) × 127	〃	184 × 21	171	N-58°-W
23	長楕円	179 × 116	隅丸長方形	124 × 35	126	N-6°-W
24	〃	159 × 92	溝状	193 × 18	161	N-80°-W

形態	配列	小ピット	土器	石器	備考
A I			○	1 剥片13	
A I					
A II			○		
B	8	4			
C I	10	1			
A I	6		○	1 剥片4	
A I	6		○	1	
A I	7			1 剥片3	
A I	7				
A II			○	剥片2	皿状の小ピット2個を持つ。
A II	4		○	剥片6	
A I	3		○		
A I	3		○	剥片24	
C I	10	1		剥片1	
A II	5			剥片12	
A II	1				
A II	4		○	2 剥片22	
B	8				
A I	2		○	剥片1	
C I	14	1			
A I	2				
A III	1				
C I	10	2			
A III	1				

ピット番号	開墾部 平面形	開墾部 長径×短径(cm)	墾底部 平面形	墾底部 長径×短径(cm)	深さ(cm)	長軸方向
25	〃	171 × 96	〃	207 × 18	180	N-80°-W
26	〃	191 × 120	不整 隅丸長方形	142 × 50	135	N-25°-W
27	〃	(162) × 105	隅丸長方形	122 × 30	137	N-55°-E
28	溝 状	223 × 58	溝 状	275 × 20	115	N-82°-W
29	長楕円	(246) × (139)	〃	(198) × (46)	180	N-10°-E
30	〃	197 × 94	〃	190 × 42	155	N-81°-E
31	〃	209 × 87	〃	217 × 26	172	N-21°-W
32	〃	264 × 114	〃	256 × 36	176	N-5°-W
33	〃	225 × 170	〃	171 × 34	183	N-13°-W
34	〃	194 × 129	隅丸長方形	107 × 32	152	N-5°-E
35	〃	185 × 115	〃	126 × 33	149	N-25°-E
36	〃	144 × 95	不整 隅丸長方形	103 × 29	108	N-13°-W
37	楕 円	71 × 56	楕 円	28 × 15	99	N-50°-E
38	溝 状	254 × 97	溝 状	245 × 16	163	N-30°-E
39	〃	238 × (70)	〃	189 × 10	135	N-33°-W
40	〃	(238) × 70	〃	(210) × (11)	113	N-4°-W
41	隅丸長方形	136 × 56	隅丸長方形	110 × 30	110	N-65°-W
42	溝 状	288 × 77	溝 状	344 × 7	114	N-83°-W
43	長楕円	(150) × (130)	隅丸長方形	(78) × (52)	122	N-74°-E
44	溝 状	(320) × 56	溝 状	(351) × 11	153	E-W
45	長楕円	140 × 90	隅丸長方形	100 × 30	127	N-56°-E
46	溝 状	393 × 30	溝 状	408 × 17	143	N-56°-W
47	隅丸長方法	100 × 40	隅丸長方形	95 × 31	(100)	N-80°-E
48	溝 状	212 × 38	溝 状	186 × 9	47	N-33°-W

形態	配列	小ピット	土器	石器	備考
AⅢ	1				
CI	10	1			
CI	14	1			
AI					
B	9				
B	9				
B	9	1	剥片 2		
B	9				
CI	14		○		
CI	14	1			
CI	14				
CI		3			
D					
AI					
AI	3			剥片 1	
AI	3			剥片 3	
CⅡ	10	1			現代の攪乱と重複
AI				剥片 7	T 44号と重複
CI	14				T 44号と重複, T 44号が古い。
AI	5				T 42, 43号と重複
CI	14	1	○	剥片 2	第 5, 6号と重複, 第 5号が古い。
AI	6		○	剥片 4 ¹	風倒木痕 7 と重複
CⅡ	14	1			”
AI	3		○		

第5表 S267, 268遺跡(第2次調査) Tピット一覧表

ピット番号	開墾部 平面形	開墾部 長径×短径(cm)	墾底部 平面形	墾底部 長径×短径(cm)	深さ(cm)	長軸方向
101	溝状	242 × 85	溝状	214 × 15	133	N-57°-E
102	〃	253 × 84	〃	218 × 14	133	N-27°-W
103	〃	316 × 76	〃	282 × 15	83	N-13°-W
104	〃	275 × 106	〃	250 × 13	161	N-25°-W
105	楕円	196 × 147	不整 隅丸長方形	87 × 34	137	N-68°-E
106	〃	147 × 100	不整長楕円	127 × 46	118	N-20°-E
107	長楕円	206 × 111	隅丸長方形	119 × 30	169	N-55°-E
108	楕円	204 × 151	〃	105 × 33	153	N-70°-E
109	〃	130 × 92	〃	91 × 35	120	N-69°-E
110	長楕円	145 × 101	〃	101 × 33	113	N-79°-E
111	不整長楕円	156 × 103	不整 隅丸長方形	108 × 30	122	N-16°-E
112	楕円	187 × 126	隅丸長方形	78 × 25	121	N-81°-E

形態	配列	小ピット	土器	石器	備考
AI					
AI	13				
AI	13		○	1	
AI					
CI	12	1	○		
CI	10				
CI	14	1			
CI	11		○	剥片1	
CI	14	1		剥片2	
CI	11				
CI	10	3			
CI	12				

第6表 札幌S153遺跡 Tピット一覧表

153

ピット番号	開墾部 平面形	開墾部 長径×短径(cm)	墾底部 平面形	墾底部 長径×短径(cm)	深さ(cm)	長軸方向
1	溝状	222 × 47	溝状	220 × 10	101	N-7°-E
21	"	289 × 84	"	251 × 12	91	N-8°-E
22	長楕円	141 × 80	不整 隅丸長方形?	115 × 30	113	N-30°-E
27	"	172 × 125	不整 隅丸長方形	108 × 35	132	N-5°-W
96	溝状	207 × 48	溝状	203 × 10	83	N-12°-W
123	長楕円	147 × 93	不整 隅丸長方形	102 × 30	123	N-78°-W
129	溝状	227 × 63	溝状	207 × 20	100	N-6°-E
143	"	222 × 81	"	188 × 13	121	N-5°-E
348	長楕円	152 × 92	不整 隅丸長方形	114 × 28	111	N-50°-E
376	"	148 × 86	"	106 × 20	127	N-37°-E
401	"	158 × 107	"	127 × 40	118	N-73°-E
403	"	132 × 74	"	137 × 41	109	N-54°-E
408	溝状	233 × 34	溝状	176 × 6	98	N-8°-E
411	"	65	"	182 × 19	116	N-19°-E
506	長楕円	133 × 77	不整 隅丸長方形	103 × 25	108	N-48°-E
520	溝状	373 × 67	溝状	252 × 11	128	N-3°-E
531	"	292 × 57	"	256 × 12	108	N-50°-W
586	"	292 × 31	"	147 × 11	101	N-14°-E
646	"	201 × 53	"	190 × 9	116	N-32°-W
647	"	212 × 58	"	210 × 6	88	N-3°-E
648	"	196 × 56	"	167 × 13	128	N-35°-W
664	"	208 × 46	"	209 × 14	96	N-58°-W

形態	配列	小ピット	備考
AI	3		
AI	2		第17号と重複, 22号と接する。
CI	6		第21号と接する。
CI	6		
AI	3		第91号 (恵山式墓壙) と重複, 本号が古い。
CI	8		
AI	3		
AI	4		
CI	7	3	
CI	7		
CI	7	4	
CI	7	2	
AI	4		
AI	4		第410号 (晩期の墓壙) と重複, 本号が古い。
CI	7		第504, 505号と重複, 本号が最古。
AI	2		
AI	3		
AI	3		
AI	5		第645号と重複, 本号が古い。
AI	1		
AI	5		
AI	5		

ピット番号	開墾部 平面形	開墾部 長径×短径(cm)	墾底部 平面形	墾底部 長径×短径(cm)	深さ(cm)	長軸方向
696	溝状	252 × 48	溝状	207 × 18	99	N-58°-W
700	〃	228 × 72	〃	203 × 15	124	N-57°-W
701	〃	207 × 55	〃	185 × 14	98	N-57°-W
714	〃	191 × 61	〃	186 × 10	118	N-53°-W
719	〃	224 × 71	〃	203 × 7	103	N-27°-E
720	〃	231 × 63	〃	233 × 7	123	N-29°-W
725	長楕円	168 × 110	不整 隅丸長方形	122 × 34	125	N-75°-W
751	溝状	179 × 53	溝状	157 × 13	80	N-50°-W
755	〃	201 × 67	〃	187 × 15	110	N-83°-W

形態	配列	小ビット	備考
AI	5		
AI	5		
AI	5		
AI	5		
AI	1		
AI			
CI	8		
AI	5		
AI	5		

第7表 石器類計測表

挿図番号	出土地区	類別	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
8-1	第1号竪穴住居	石 鏃	(23.0)	13.0	3.0	0.65	Obs.	柄部欠損
2	〃	石 銛 先	51.0	23.5	7.0	4.7	Obs.	
3	〃	石 銛 先	41.0	31.0	5.0	4.2	Obs.	
4	〃	石 銛 先	(23.0)	(14.0)	5.5	1.2	Obs.	柄部破片
5	〃	石 銛 先	(21.0)	(14.5)	6.0	1.3	Obs.	柄部破片
5	〃	石 銛 先	(35.5)	(20.0)	5.5	3.1	Obs.	柄部破片
7	〃	ナイフ状石器	(23.5)	(28.0)	6.0	3.1	Obs.	
8	〃	ナイフ状石器	55.0	33.0	8.0	11.0	Obs.	
9	〃	ナイフ状石器	54.0	37.0	11.5	22.0	Obs.	
10	〃	ナイフ状石器	87.0	39.5	17.0	48.6	Obs.	
11	〃	搔 器	41.5	17.5	9.5	5.6	Obs.	
12	〃	搔 器	37.0	21.0	9.0	5.9	Obs.	
13	〃	搔 器	59.0	29.0	14.0	22.4	Obs.	
14	〃	搔 器	43.0	18.0	9.5	4.7	Obs.	
15	〃	削 器	30.5	33.0	5.5	4.1	Obs.	
16	〃	削 器	47.0	30.5	10.0	11.0	Obs.	
17	〃	削 器	(34.5)	24.5	6.0	5.8	Obs.	頭部欠損
18	〃	削 器	(34.0)	(23.5)	6.5	4.0	Obs.	頭部欠損
19	〃	削 器	(31.0)	(31.0)	11.5	9.7	Obs.	
20	〃	削 器	46.0	29.5	4.5	4.15	Obs.	
21	〃	削 器	(31.0)	15.0	3.5	1.5	Obs.	尖端部欠損
22	〃	削 器	66.0	14.0	9.5	6.75	Obs.	
23	〃	削 器	49.5	26.0	8.0	7.95	Obs.	
24	〃	削 器	39.5	24.0	6.5	5.1	Obs.	
25	〃	削 器	(25.0)	(21.0)	3.5	1.3	Obs.	頭部欠損
26	〃	削 器	38.0	37.0	15.5	11.8	Obs.	
27	〃	削 器	55.0	36.5	8.5	13.2	Obs.	
9-28	〃	削 器	44.0	15.0	4.0	1.9	Obs.	
29	〃	削 器	46.5	15.0	4.0	2.4	Obs.	
30	〃	削 器	44.0	24.0	8.0	8.3	Obs.	
31	〃	削 器	33.0	27.5	3.0	3.35	Obs.	
32	〃	削 器	23.0	23.5	5.0	2.95	Obs.	焼けている

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
33	第1号竪穴住居	削器	55.0	23.0	13.0	9.65	Obs.	
34	〃	削器	66.0	29.5	8.0	14.45	Obs.	
35	〃	砥石	(49.0)	34.5	19.5	39.35	Tu.	
36	〃	石斧	60.0	21.5	7.0	13.05	Bl.s.	
37	〃	石斧	142.0	58.5	19.0	200.0	Bl.s.	
10-1	第2号竪穴住居	石銛先	46.0	19.5	7.0	4.5	Obs.	
2	〃	石銛先	43.5	21.0	5.5	4.25	Obs.	
3	〃	石銛先	57.0	25.0	7.0	7.4	Obs.	
4	〃	石銛先	59.0	27.0	8.5	100.85	Obs.	
5	〃	石銛先	55.0	30.0	9.5	10.25	Obs.	
6	〃	石銛先	(73.0)	30.5	9.0	11.8	Obs.	先端部欠損
7	〃	石銛先	52.0	34.5	8.0	8.6	Obs.	
8	〃	石銛先	54.5	28.0	7.0	6.9	Obs.	
9	〃	石銛先	62.0	28.0	7.0	7.45	Obs.	
10	〃	石銛先	47.0	43.5	8.5	9.7	Obs.	
11	〃	石銛先	45.0	24.0	7.5	5.6	Obs.	焼けている?
12	〃	石銛先	(44.0)	25.0	9.5	8.6	Obs.	先端部欠損
13	〃	石銛先	49.0	28.0	8.0	8.45	Obs.	
14	〃	石銛先	(41.0)	(18.0)	8.5	4.9	Obs.	頭部欠損
15	〃	ナイフ状石器	(39.5)	(29.0)	9.5	12.4	Che.	
16	〃	ナイフ状石器	36.0	27.0	12.0	10.4	Obs.	
17	〃	ナイフ状石器	(39.0)	(28.0)	9.0	9.9	Obs.	
18	〃	ナイフ状石器	(17.5)	(22.0)	5.0	2.05	Obs.	頭部欠損
19	〃	ナイフ状石器	31.5	29.0	10.0	9.2	Obs.	
20	〃	搔器	36.0	35.0	10.0	12.1	Obs.	
21	〃	搔器	39.5	31.0	13.5	13.5	Obs.	
22	〃	搔器	38.0	26.0	10.0	10.1	Obs.	
23	〃	搔器	49.0	36.0	14.0	19.65	Obs.	
11-24	〃	搔器	55.5	57.0	18.0	49.45	Obs.	
25	〃	削器	69.5	31.0	9.0	14.65	Obs.	
26	〃	削器	42.0	31.0	9.0	11.1	Obs.	
27	〃	削器	73.0	23.0	15.0	16.7	Obs.	
28	〃	削器	(31.0)	(30.0)	7.5	4.75	Obs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
29	第2号竪穴住居	削器	34.5	29.5	4.5	3.3	Obs.	
30	〃	削器	54.5	36.0	7.5	9.7	Obs.	
31	〃	削器	(30.0)	(38.5)	12.5	13.0	Obs.	
32	〃	削器	(46.5)	26.0	13.0	10.65	Obs.	バルブ部分欠損
33	〃	削器	35.0	26.5	9.0	6.25	Obs.	
34	〃	削器	47.5	20.0	9.5	7.35	Obs.	
35	〃	削器	(49.0)	30.5	7.5	8.2	Obs.	先端部欠損
36	〃	削器	26.0	50.0	15.5	14.1	Obs.	
37	〃	削器	37.0	21.0	4.5	2.4	Obs.	
38	〃	削器	(41.0)	14.5	2.5	1.4	Obs.	先端部欠損
39	〃	削器	51.0	29.0	14.0	11.75	Obs.	
40	〃	削器	61.0	34.0	14.0	18.35	Obs.	
41	〃	削器	42.0	34.0	12.5	13.5	Obs.	
42	〃	削器	56.5	19.0	6.0	4.55	Obs.	
43	〃	削器	53.5	16.0	9.0	5.2	Obs.	
12-44	〃	錘玉	64.0	40.0	18.5	63.4	Bl.s.	
45	〃	石斧	100.0	40.0	16.0	100.0	Gres.	
46	〃	石斧	115.0	(60.5)	(26.0)	260.0	Gres.	刃部破片
47	〃	石斧	101.5	29.0	16.0	59.7	Bl.s.	
48	〃	石斧	158.0	45.0	24.0	260.0	Bl.s.	
49	〃	石斧	132.0	56.0	23.5	350.0	Gres.	
12-50	〃	敲石	45.0	49.0	49.0	160.0	Gres.	
51	〃	敲石	46.0	43.5	41.5	120.0	Gres.	
52	〃	砥石	79.0	27.0	31.0	76.9	Tu.	
53	〃	砥石	58.0	41.5	21.5	58.6	Sa.	
54	〃	砥石	157.5	82.0	57.5	84.0	Sa.	
55	〃	石斧	189.0	68.0	58.0	1,120.0	Gres.	接合資料
14-56	〃	石皿	170.0	19.8	75.0	3,490.0	An.	
15-1	第1号竪穴住居	石錐	23.5	11.5	4.0	1.2	Hs.	
2	〃	石錐	26.5	10.0	9.0	1.9	Ag.	
3	〃	石錐	24.5	8.0	6.0	0.85	Ag.	
4	〃	石錐	15.0	9.0	5.5	1.2	Ag.	
5	〃	石錐	17.5	9.5	5.5	0.65	Ag.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
6	第1号竪穴住居	石 錐	20.0	7.5	4.5	0.85	Ag.	
7	〃	石 錐	20.5	7.0	4.0	0.75	Hs.	
8	〃	石 錐	16.0	8.0	3.5	0.5	Ag.	
9	〃	石 錐	19.0	10.0	6.5	0.95	Hs.	
10	〃	石 錐	25.0	14.0	5.5	1.7	Hs.	
11	〃	石 錐	17.5	10.5	6.5	0.7	Ag.	
12	〃	石 錐	22.0	13.0	8.0	1.9	Hs.	
13	〃	石 錐	19.0	9.5	3.5	0.55	Ag.	
14	〃	石 錐	21.0	11.0	3.0	0.65	Ag.	
15	〃	石 錐	16.5	10.0	5.0	0.7	Ag.	
16	〃	石 錐	17.5	11.5	5.5	0.9	Hs.	
17	〃	石 錐	18.5	7.0	4.5	0.65	Hs.	
18	〃	石 錐	16.5	12.5	5.0	0.7	Hs.	
19	〃	石 錐	15.5	8.0	4.5	0.45	Ag.	
20	〃	石 錐	18.5	12.5	6.5	1.5	Ag.	
21	〃	石 錐	24.5	10.5	5.5	1.35	Ag.	
22	〃	石 錐	17.0	9.5	6.0	0.75	Ag.	
23	〃	石 錐	22.0	14.0	5.5	1.3	Hs.	
24	〃	石 錐	18.0	10.5	8.0	1.05	Ag.	
25	〃	石 錐	19.0	7.0	6.0	0.8	Ag.	
16-1	第2号竪穴住居	石 錐	19.0	9.0	5.0	0.75	Hs.	
2	〃	石 錐	23.5	12.5	6.0	1.0	Hs.	
3	〃	石 錐	26.0	7.0	6.0	1.1	Hs.	
4	〃	石 錐	18.0	10.0	5.0	0.8	Ag.	
5	〃	石 錐	16.0	10.0	4.0	0.65	Ag.	
6	〃	石 錐	14.0	6.5	5.0	0.4	Hs.	
7	〃	石 錐	15.5	10.0	4.0	0.5	Ag.	
8	〃	石 錐	19.5	10.5	4.5	0.85	Hs.	
9	〃	石 錐	21.0	13.0	6.0	1.2	Hs.	
10	〃	石 錐	16.5	11.0	5.0	0.8	Hs.	
11	〃	石 錐	25.0	13.0	5.0	1.4	Hs.	
12	〃	石 錐	22.5	10.0	6.0	9.5	Hs.	
13	〃	石 錐	23.0	11.5	6.5	1.35	Hs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
14	第2号竪穴住居址	石錐	21.0	12.0	9.0	1.75	Hs.	
17-1	第1号竪穴住居址	石錐石核	57.5	26.0	25.5	49.6	Ag.	
2	〃	石錐石核	23.5	20.5	20.5	8.65	Ag.	
3	〃	石錐石核	16.5	23.5	19.0	8.3	Ag.	
4	〃	石錐石核	18.0	26.0	29.0	14.15	Ag.	
18-1	〃	剝片	36.0	13.0	6.5	2.0	Obs.	
2	〃	剝片	48.5	17.0	7.0	3.6	Obs.	
3	〃	剝片	43.0	18.0	6.5	4.1	Obs.	
4	〃	剝片	24.0	10.0	3.5	0.75	Obs.	
5	〃	剝片	31.5	7.5	3.5	0.6	Obs.	
6	〃	剝片	29.5	17.5	8.5	2.25	Obs.	
7	〃	剝片	43.0	15.0	5.0	2.1	Obs.	
8	〃	剝片	48.0	12.5	4.5	2.6	Obs.	
9	〃	剝片	(26.0)	10.5	2.5	0.6	Obs.	尖端部欠損
10	〃	剝片	42.0	13.0	4.0	1.7	Obs.	
11	〃	剝片	32.0	11.5	2.0	0.75	Obs.	
12	〃	剝片	(30.5)	10.5	2.5	0.7	Obs.	尖端部欠損
13	〃	剝片	39.5	12.5	4.0	1.3	Obs.	
14	〃	剝片	(28.5)	12.5	4.0	0.85	Obs.	
15	〃	剝片	27.0	12.0	6.0	1.35	Obs.	
18-1	第2号竪穴住居址	剝片	34.0	17.0	7.0	2.75	Obs.	
2	〃	剝片	45.5	16.0	5.0	2.95	Obs.	
3	〃	剝片	48.0	14.0	6.0	2.5	Obs.	
4	〃	剝片	40.0	16.0	8.5	4.45	Obs.	
5	〃	剝片	49.5	20.0	6.0	4.05	Obs.	
6	〃	剝片	35.5	17.0	4.0	4.0	Obs.	
7	〃	剝片	38.5	13.0	2.5	1.2	Obs.	
8	〃	剝片	48.0	17.0	8.5	4.55	Obs.	
9	〃	剝片	34.5	19.0	6.5	3.0	Obs.	
10	〃	剝片	37.0	16.0	3.5	1.6	Obs.	
11	〃	剝片	32.0	12.5	4.0	1.45	Obs.	
12	〃	剝片	25.5	13.0	3.0	0.8	Obs.	
13	〃	剝片	37.0	14.5	6.0	2.1	Obs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
14	第2号竪穴住居	剥片	37.5	11.5	3.0	1.1	Obs.	
15	〃	剥片	46.5	16.5	5.0	2.2	Obs.	
16	〃	剥片	37.0	15.5	3.5	2.1	Obs.	
17	〃	剥片	31.0	12.0	3.0	0.8	Obs.	
18	〃	剥片	(32.5)	12.0	4.0	1.3	Obs.	尖端部欠損
19	〃	剥片	(26.0)	11.0	3.5	0.85	Obs.	頭部欠損
20	〃	剥片	(25.0)	10.0	2.5	0.6	Obs.	尖端部欠損
21-1	第1号竪穴住居址状遺構	石 銛	33.0	20.0	4.5	2.0	Obs.	
2	〃	石 銛	52.0	25.5	7.0	5.35	Obs.	
3	〃	石 銛	34.0	29.5	8.0	4.8	Obs.	焼けている
4	〃	石 銛	(18.0)	(18.0)	3.0	0.7	Obs.	頭部破片
5	〃	石 核	37.0	43.0	15.5	22.25	Obs.	
6	〃	搔器	34.0	30.0	10.5	9.35	Obs.	
7	〃	削器	49.0	33.0	10.5	14.0	Obs.	
8	〃	石 錘	62.0	58.0	15.5	89.2	Twopy.-and.	
9	〃	石斧未成品	187.0	59.5	37.5	530.0	Gres.	接合資料
10	〃	砥石	39.5)	(41.5)	13.0	33.0	Sa.	
11	〃	砥石	100.5	51.5	50.0	225.0	Sa.	
12	〃	砥石	113.0	48.0	31.0	300.0	Sa.	
42-1	第1号Tピット	削器	53.0	15.0	6.5	3.95	Obs.	
2	第27号Tピット	削器	55.0	24.5	8.0	9.1	Obs.	
3	第26号Tピット	削器	65.0	22.5	14.0	16.4	Obs.	
4	第23号Tピット	削器	40.0	20.0	7.5	5.65	Obs.	
5	第49号Tピット	削器	21.0	35.0	6.0	4.4	Obs.	
6	〃	削器	(61.0)	(24.5)	6.0	4.6	Obs.	
7	第69号Tピット	削器	34.0	17.5	4.5	2.1	Obs.	
43-8	第24号Tピット	石 皿	225.0	278.0	18.0	8,880.0	An.	
52-1		石 鏃	15.0	11.5	2.5	0.5	Obs.	
2	XXI-C	石 鏃	23.0	9.5	2.5	0.55	Obs.	
3	XI-H	石 鏃	30.5	9.0	3.0	0.8	Obs.	
4	VII-G	石 鏃	27.0	12.0	4.5	1.35	Obs.	
5		石 鏃	24.0	10.0	3.5	0.75	Obs.	
6		石 鏃	22.0	17.5	4.0	0.65	Obs.	

挿図番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
7	IX-H	石 鏃	33.0	19.5	4.0	1.05	Obs.	
8	IV-B	石 鏃	35.0	12.5	6.5	2.35	Obs.	
9	VII-C	石 鏃	48.5	14.0	5.0	2.55	Obs.	
10	XI-I	石 鏃	(44.0)	14.0	5.0	2.45	Obs.	尖端部欠損
11	X-H	石 鏃 先	38.5	17.0	5.5	3.0	Obs.	
12	XII-G	石 鏃 先	42.5	29.0	6.0	3.5	Obs.	
13	XI-I	石 鏃 先	44.0	24.0	7.0	5.9	Obs.	
14	XI-H	石 鏃 先	46.0	24.0	7.5	5.4	Obs.	
15	XIV-G	石 鏃 先	34.0	24.5	6.0	3.4	Obs.	
16	X-I	石 鏃 先	39.0	25.5	6.0	4.1	Obs.	
17	X-I	石 鏃 先	49.0	25.5	7.5	7.1	Obs.	
18	X-I	石 鏃 先	56.5	23.0	12.0	10.6	Obs.	
19	IX-H	石 鏃 先	(65.0)	28.0	9.5	12.1	Obs.	尖端部欠損
20		石 鏃 先	(55.0)	29.0	6.0	7.25	Obs.	
21	XI-H	石 鏃 先	55.0	27.5	7.5	7.5	Obs.	
22		石 鏃 先	52.0	29.0	11.5	11.9	Obs.	
23	XII-G	石 鏃 先	66.0	24.5	8.0	10.35	Obs.	
24	XV-F	石 鏃 先	44.0	22.0	8.0	5.4	Obs.	
25	XX-H	石 鏃 先	(35.0)	27.5	5.5	4.0	Obs.	柄部欠損
26	IV-D	石 鏃 先	47.5	23.0	6.5	5.95	Obs.	
27	XIV-D	石 鏃 先	43.0	12.5	12.0	9.05	Obs.	
28	VIII-H	石 鏃 先	(34.5)	18.0	5.0	3.35	Obs.	柄部破片
29	XX-C	石 鏃 先	(38.0)	16.0	8.0	4.85	Obs.	柄部破片
30	VII-H	石 鏃 先	(24.0)	(26.0)	6.0	1.95	Obs.	柄部破片
31	VII-I	石 鏃 先	(39.0)	(31.0)	8.0	5.7	Obs.	柄部破片
32	VII-F	ナイフ状石器	53.5	32.0	9.0	12.1	Obs.	
33	IX-H	ナイフ状石器	80.5	29.0	8.5	26.7	Obs.	
53-34	IV-I	ナイフ状石器	46.5	27.0	10.5	12.0	Obs.	
35	X-I	ナイフ状石器	54.0	27.0	12.5	14.2	Obs.	
36		ナイフ状石器	49.0	37.0	11.0	11.0	Obs.	
37		ナイフ状石器	47.0	43.0	14.5	15.5	Obs.	
38	VIII-H	ナイフ状石器	71.0	38.5	18.0	49.4	Horn.	
39	XXXI-F	ナイフ状石器	66.5	31.5	13.5	32.1	Obs.	

挿図番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
40	IX-G	ナイフ状石器	61.5	34.5	14.5	24.35	Obs.	
41	XI-I	ナイフ状石器	(41.0)	32.0	9.0	10.2	Obs.	
42	IX-A	ナイフ状石器	46.0	28.5	13.5	13.6	Obs.	
43	X I	ナイフ状石器	59.0	23.5	11.0	13.0	Obs.	
44	XI-D	ナイフ状石器	71.0	32.5	8.0	12.95	Obs.	
45	VII-G	ナイフ状石器	62.0	39.5	20.5	44.2	Che.	
46		ナイフ状石器	(32.0)	29.0	7.5	6.8	Obs.	
47	XIV-E	ナイフ状石器	(38.0)	33.5	14.5	18.25	Obs.	
48	XII-H	ナイフ状石器	42.0	24.5	12.0	11.1	Obs.	
49	XI-I	ナイフ状石器	69.0	22.0	12.5	15.3	Obs.	
50		ナイフ状石器	46.0	31.0	11.5	14.5	Obs.	
51	XI-I	ナイフ状石器	50.5	23.0	8.0	8.45	Obs.	
52	XVIII-B	ナイフ状石器	30.0	36.0	9.5	9.5	Obs.	
54-53		石 核	28.5	17.5	19.5	12.3	Obs.	
54	XI-I	石 錐	37.0	30.5	7.5	4.85	Obs.	
55	XI-F	搔 器	56.5	34.5	9.0	15.9	Obs.	
56	IX-H	搔 器	43.5	23.0	9.0	8.1	Obs.	
57	VII-F	搔 器	76.5	28.0	9.5	17.85	Obs.	
58	X-I	搔 器	56.0	16.0	9.0	8.55	Obs.	
59	IX-I	石 匙	94.0	32.0	10.0	30.0	Hs.	
60	XI-H	石 匙	(39.0)	31.5	6.5	6.6	Obs.	
61	IX-G	石 匙	58.5	18.5	6.5	7.4	Hs.	
62		削 器	46.0	14.0	6.0	3.8	Obs.	
63	IX-H	削 器	47.5	24.0	8.5	6.35	Obs.	
64		削 器	37.0	22.0	8.0	35.15	Obs.	
65	X XI-B	削 器	57.0	36.0	15.0	4.25	Obs.	
66	XII-H	削 器	39.0	26.0	9.0	9.35	Obs.	
67	XII-F	削 器	33.5	24.0	7.0	15.5	Obs.	
68	XII-G	削 器	52.0	26.0	14.0	24.7	Obs.	
69	VI-F	削 器	(48.0)	41.5	10.0	14.3	Obs.	
70	XIV-F	削 器	41.5	28.5	10.5	21.7	Obs.	
71	XI-I	削 器	38.0	55.0	11.0	22.45	Obs.	
72	XII-C	削 器	50.5	43.5	9.0	22.0	Obs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
73	XI-D	削器	53.0	37.0	10.0	13.6	Obs.	
74		削器	(30.0)	45.0	11.5	16.15	Obs.	
55-75	X-H	削器	(33.5)	(24.0)	6.5	3.4	Obs.	
76	XI-C	削器	(27.5)	(28.0)	5.5	3.75	Obs.	
77	VIII-H	削器	58.0	48.5	17.0	26.85	Obs.	
78		削器	37.0	28.0	15.0	13.95	Obs.	
79	XII-H	削器	26.5	19.5	4.0	1.5	Obs.	
80	VII-F	削器	30.0	17.5	3.5	1.7	Obs.	
81	XI-I	削器	(22.5)	30.0	5.5	3.35	Obs.	刃部欠損
82	XIX-C	削器	(30.0)	27.5	6.0	4.6	Obs.	刃部欠損
83	IV-I	削器	53.5	31.5	7.0	9.3	Obs.	
84	VII-H	削器	47.0	35.0	12.0	16.75	Obs.	
85	XI-I	削器	46.0	32.5	11.5	14.6	Obs.	
86		削器	62.0	33.5	19.5	31.2	Obs.	
87		削器	44.5	18.0	9.5	7.35	Obs.	
88		削器	40.5	25.0	6.5	5.95	Obs.	
89	X-I	削器	(40.5)	(27.0)	4.5	4.85	Obs.	
90	VII-F	削器	44.5	17.0	8.0	5.4	Obs.	
91	XX-C	削器	(25.5)	(20.5)	4.0	1.7	Obs.	
92	XII-F	削器	37.5	22.0	6.0	4.3	Obs.	
93	XIII-H	削器	58.5	40.5	9.0	17.8	Obs.	
94		削器	(39.0)	(42.5)	11.0	16.45	Obs.	
95	XII-H	削器	43.0	26.0	11.5	13.7	Obs.	
96	XII-H	削器	38.5	13.5	9.0	3.7	Obs.	
97		削器	46.0	27.5	6.5	6.9	Obs.	
98	IV-B	削器	57.5	34.0	13.0	20.1	Obs.	
99		削器	64.5	35.0	11.0	17.55	Hs.	
100	XI-G	削器	48.5	22.5	6.5	6.2	Obs.	
56-101	XI-I	削器	88.5	55.0	11.0	63.3	Gres.	
102		石剣	143.5	39.5	7.0	51.6	Bl.s.	磨製ナイフ?
103	XII-E	錘玉	(64.0)	(61.0)	34.0	150.0	Bl.s.	
104	VII-E	石斧	(41.0)	(29.0)	(9.0)	18.05	Bl.s.	刃部破片
105		石斧	(48.0)	32.0	9.0	22.45	Gres.	刃部破片

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (g)	石質	備考
106	XII-C	石斧	68.0	27.5	10.5	27.5	Gres.	
107	XI-D	石斧	84.5	35.0	12.0	48.05	Bls.	
108	XII-C	石斧	100.5	38.5	18.0	89.4	Gres.	
109		石斧	(82.0)	(38.0)	18.0	85.1	Gres.	
110	XII-H	石斧	(84.0)	34.5	9.0	43.0	Bls.	
57-111	VII-D	石斧	(89.0)	45.0	20.5	125.0	Bls.	
112	IX-G	石斧	94.0	40.0	30.0	180.0	Bls.	
113	XVIII-D	石斧	108.0	44.0	13.5	95.5	Bls.	
114	XX-A	石斧	125.5	51.0	17.5	150.0	Bls.	
115	XXIII-F	石斧	92.0	24.0	6.5	42.0	Bls.	
116	XIII-G	石斧	144.0	44.0	23.0	150.0	Gres.	
117	IX-I	石斧	118.5	49.5	19.5	180.0	Gres.	
118	XI-F	石斧	136.5	66.5	52.0	580.0	Gres.	
58-119	IX-H	石錘	58.5	36.0	7.0	18.0	Tu.	
120	IV-D	石錘	51.5	47.0	12.0	40.55	Gres.	
121	X-I	石錘	47.0	46.0	13.5	36.3	Mu.	
122	V-E	石錘	59.0	52.0	18.5	80.7	Twopy.-and.	
123	IX-D	石錘	59.0	43.5	19.5	60.75	Twopy.-and.	
124	V-E	石錘	55.5	49.0	12.5	38.55	Twopy.-and.	
125	XII-G	石錘	55.0	43.5	10.5	30.15	Twopy.-and.	
126	IV-C	石錘	60.0	52.0	13.0	60.2	Twopy.-and.	
127	VIII-H	石錘	68.5	58.0	18.0	95.9	Twopy.-and.	
128	VI-F	石錘	68.0	64.0	16.0	95.65	Twopy.-and.	
129	IX-F	石錘	68.0	49.5	11.0	45.8	Tu.	
130	IV-A	石錘	74.5	64.0	15.5	71.4	Sa.	
131	IV-C	石錘	70.5	71.0	18.5	110.0	Tu.	
132	VI-E	石錘	80.0	75.5	21.0	170.0	Twopy.-and.	
133	VIII-G	石錘	84.0	67.0	25.0	180.0	Twopy.-and.	
134	IV-D	石錘	71.0	73.0	23.0	170.0	Twopy.-and.	
59-135	X-I	石錘	57.0	47.0	14.0	53.5	Twopy.-and.	
136	IV-B	石錘	59.0	61.0	12.5	58.2	Twopy.-and.	
137		石錘	74.0	67.0	19.0	120.0	Sa.	
138	IX-B	石錘	60.5	58.5	14.0	66.55	Twopy.-and.	

挿図番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
139	Ⅳ-D	石 錘	51.5	71.5	18.0	97.2	Sa.	
140	Ⅳ-C	石 錘	61.5	51.0	14.5	61.4	Twopy.-and.	
141	Ⅴ-G	石 錘	65.0	55.0	15.5	75.6	Sa.	
142		石 錘	84.0	54.5	17.5	110.0	Sa.	
143	Ⅶ-E	石 錘	71.0	(41.0)	11.0	45.1	Sa.	
144	Ⅸ-H	石 錘	(51.5)	51.0	19.5	79.05	Twopy.-and.	
145	Ⅷ-H	石 錘	(33.0)	(53.0)	14.5	27.85	Sa.	
146	Ⅷ-H	石 錘	(42.0)	(32.0)	17.0	30.8	Sa.	
147	Ⅶ-D	石 錘	(78.0)	48.5	13.5	49.8	Sa.	
148	ⅩⅢ-E	石 錘	84.0	74.0	14.5	100.0	Twopy.-and.	
60-149	Ⅳ-E	砥 石	78.0	48.5	33.0	105.0	Sa.	
150		砥 石	104.5	54.5	43.5	310.0	Sa.	
151	Ⅷ-H	砥 石	55.0	65.0	23.5	88.45	Tu.	
152	Ⅸ-E	砥 石	58.0	48.0	16.0	44.75	Sa.	
153	Ⅷ-G	砥 石	77.5	81.0	42.0	260.0	Tu.	
154	Ⅶ-G	砥 石	(87.5)	(85.0)	14.5	120.0	Sa.	
155	Ⅴ-C	砥 石	73.0	45.5	35.5	125.0	Sa.	
156	ⅩⅡ-F	砥 石	134.5	79.5	62.5	980.0	Sa.	
61-157	Ⅸ-H	擦 石	65.5	140.0	50.5	660.0	Twopy.-and.	
158	Ⅳ-D	擦 石	74.5	143.0	57.5	830.0	Twopy.-and.	
159	Ⅸ-I	擦 石	79.5	136.5	56.0	850.0	Twopy.-and.	
160	Ⅳ-B	擦 石	59.0	143.0	56.0	550.0	Sa.	
161	Ⅶ-G	擦 石	87.0	(133.5)	54.0	890.0	Sa.	
162	Ⅴ-E	擦 石	68.0	(116.5)	58.0	680.0	Twopy.-and.	
163	Ⅴ-E	擦 石	(81.5)	(90.0)	58.0	380.0	Twopy.-and.	
164	Ⅵ-F	擦 石	77.5	157.0	76.0	1050.0	Twopy.-and.	
62-165	Ⅸ-H	擦 石	(68.5)	(107.5)	71.0	380.0	Twopy.-and.	
166	ⅩⅡ-H	擦 石	54.0	(66.0)	62.0	280.0	Sa.	
167	Ⅳ-A	擦 石	(52.5)	(36.0)	(49.0)	105.0	Sa.	
168		擦 石	86.0	176.5	59.0	1275.0	Twopy.-and.	
169		くぼみ石	146.0	65.0	47.5	340.0	Tuff breccia	
170	Ⅸ-H	砥 石	(103.5)	(56.5)	27.0	175.0	Tu.	
171	Ⅶ-H	砥 石	143.5	95.5	21.5	375.0	Tu.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
172	IV-C	砥石	61.5	51.0	38.5	160.0	Da.	
173		敲石	70.0	50.0	25.0	105.0	軽石	
174	VI-F	敲石	118.0	110.0	55.5	1004.0	Sa.	
63-1		石錐	24.0	19.0	9.0	2.1	Hs.	
2		石錐	23.0	12.0	5.5	1.55	Ag.	
3		石錐	23.5	15.0	5.0	1.65	Hs.	
4		石錐	27.0	16.0	9.5	2.55	Hs.	
5		石錐	19.5	12.0	5.0	1.15	Ag.	
6		石錐	21.0	8.5	5.0	0.8	Ag.	
7		石錐	23.0	9.5	9.5	1.9	Hs.	
8		石錐	18.0	9.5	4.5	0.65	Hs.	
9		石錐	16.0	12.0	3.5	0.8	Hs.	
10		石錐	19.5	10.5	3.5	0.95	Che.	
11		石錐	22.5	12.0	5.5	1.1	Hs.	
63-1	T77	石錐	27.0	12.0	7.0	18.0	Ag.	
2		石錐	19.5	10.5	5.0	0.9	Hs.	
3		石錐	28.0	10.0	8.5	1.75	Hs.	
4		石錐	36.5	14.0	9.0	2.15	Hs.	
64-1	XIII-F	剥片	70.0	19.0	10.0	11.15	Obs.	
2	XII-H	剥片	54.0	13.0	7.0	3.5	Obs.	
3		剥片	36.5	16.5	6.5	2.3	Obs.	
4	VIII-H	剥片	28.0	9.5	3.0	0.7	Obs.	
5		剥片	51.0	16.5	8.0	5.45	Obs.	
6	VII-G	剥片	39.5	17.0	8.5	4.9	Obs.	
7	VIII-H	剥片	38.0	15.0	6.0	2.8	Obs.	
8	XIII-G	剥片	56.0	16.5	8.5	5.95	Obs.	
9	XII-H	剥片	41.5	17.5	7.5	4.2	Obs.	
10	VIII	剥片	49.5	23.0	6.0	5.65	Obs.	
1	VII-H	剥片	49.0	23.5	4.5	4.25	Obs.	
12	XIII-G	剥片	37.0	13.5	4.0	2.0	Obs.	
13		剥片	38.0	11.5	3.0	1.3	Obs.	
14	XI-I	剥片	34.0	12.0	6.0	2.1	Obs.	
15	XIII-H	剥片	36.5	15.0	.0	1.65	Obs.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
16	XIII-G	剥片	34.0	11.5	4.0	1.1	Obs.	
17		剥片	41.5	23.0	6.0	3.7	Obs.	
18		剥片	24.5	9.0	2.0	0.4	Obs.	
19	VIII-H	剥片	23.0	8.0	4.5	0.6	Obs.	
10	XII-G	剥片	32.5	12.0	2.5	0.7	Obs.	
79-1	第104号Tピット	石 鋸	20.0	9.0	9.0	5.8	Obs.	
2	VII-I	ナイフ状石器	34.0	29.0	9.0	9.2	Obs.	
3	II-1	石 鏃	34.0	11.0	3.0	1.5	Obs.	
4		ナイフ状石器	72.0	37.0	9.5	23.0	Obs.	
5		ナイフ状石器	65.0	26.0	9.0	16.2	Ba.	
6	IV-H	ナイフ状石器	31.0	30.0	8.0	7.7	Obs.	
7	VII-I	ナイフ状石器	40.0	28.0	7.5	9.3	Obs.	
8		削 器	40.0	28.0	8.0	16.9	Obs.	
9	第105号Tピット	ナイフ状石器	39.0	21.0	6.0	4.8	Obs.	
10		削 器	59.0	27.5	11.0	13.6	Obs.	
11	III-I	削 器	55.0	16.0	8.0	6.6	Obs.	
12	II-H	削 器	41.0	17.5	5.0	3.5	Obs.	
13	II-H	削 器	40.0	49.0	7.5	16.2	Obs.	
14	VII-H	削 器	36.0	30.5	4.0	4.6	Obs.	
15	II-I	搔 器	31.0	35.0	12.0	12.5	Obs.	
16	I-G	搔 器	54.5	34.0	13.0	25.7	Obs.	
80-17	VIII-I	石 斧	69.5	36.0	10.0	46.8	Gres.	
18	II-G	石 斧	(44.0)	(50.0)	(11.0)	32.7	Bls.	
19	III-I	石 斧	(42.0)	(39.0)	(12.0)	20.4	Ser.	
20	VII-H	石 斧	76.0	32.0	9.0	33.5	Gres.	
21	VIII-I	石 斧	100.8	48.5	14.5	100.0	Gres.	
22	II-I	石 斧	(84.0)	(53.0)	(31.0)	200.0	Gres.	
23	II-I	石 斧	91.5	49.0	14.5	150.0	Bls.	
24	I-I	石 斧	(92.0)	(63.5)	39.0	340.0	Phy.	
25	III-G	石 斧	(43.0)	(53.5)	33.0	140.0	Sa.	
81-26	VII-H	石 斧 素 材	62.0	28.0	10.0	24.2	Ser.	
27	II-H	石 斧 素 材	(61.0)	(29.5)	15.5	39.8	Ser.	
28		石製装身具	74.0	38.0	24.5	61.0	Sa.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
29	IV-I	砥石	53.0	36.0	29.5	59.2	Sa.	
30	V-H	砥石	48.0	30.5	32.0	50.6	Sa.	
31	VI-I	砥石	57.5	45.0	22.0	75.4	Sa.	
32	VI-I	砥石	48.0	49.0	21.5	56.4	Sa.	
33	III-I	砥石	50.0	48.0	36.0	119.8	Sa.	
34	IV-H	砥石	51.0	68.5	38.5	169.6	Sa.	
35	IV-F	砥石	52.5	62.0	34.0	100.8	Sa.	
36	VII-H	砥石	70.0	51.5	23.0	103.1	Sa.	
37	VII-H	砥石	26.0	62.0	60.5	113.0	Sa.	
38	IV-H	砥石	66.0	60.0	28.0	112.3	Sa.	
39	III-F	砥石	58.0	43.0	20.5	128.9	Sa.	
40	III-G	砥石	58.0	47.0	19.5	107.8	Sa.	
82-41	III-I	石錘	48.0	48.0	17.0	55.8	Twopy.-and.	
42	VII-I	石錘	47.0	46.5	13.0	35.6	Da.	
43	IV-F	石錘	45.0	49.0	15.0	46.4	Coa.-Sa.	
44	VIII-I	石錘	56.0	44.5	15.0	43.0	Sa.	
45	III-I	石錘	58.0	49.5	20.5	77.0	Twopy.-and.	
46	IV-I	石錘	60.0	49.0	20.0	80.4	Twopy.-and.	
47	IV-F	石錘	67.0	39.0	14.0	51.4	Coa.-Sa.	
48	IV-I	石錘	64.0	42.0	16.5	72.	Sa.	
49	VIII-I	石錘	64.0	63.0	13.0	71.3	Rhy.	
50	VII-H	石錘	63.0	50.0	16.0	66.5	Coa.-Sa.	
51	IV-I	石錘	66.5	48.0	16.5	58.7	Twopy.-and.	
52	IV-I	石錘	65.0	50.0	15.0	59.0	Twopy.-and.	
53	V-H	石錘	73.0	46.0	14.5	58.6	Da.	
54	IV-F	石錘	70.0	60.0	16.0	109.8	Da.	
55	V-H	石錘	68.0	56.5	11.0	64.8	Twopy.-and.	
56	VIII-I	石錘	75.0	60.0	26.0	137.8	Twopy.-and.	
57	IV-I	石錘	83.0	45.0	17.0	92.2	Sa.	
58	VIII-I	石錘	75.0	43.5	13.0	58.1	Coa.-Sa.	
59	VIII-I	石錘	66.0	50.5	17.0	59.2	Coa.-Sa.	
60	III-I	石錘	68.0	53.0	16.0	77.8	Sa.	
83-61	VII-H	石錘	54.5	57.0	15.0	64.9	Twopy.-and.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
62	III-I	石 錘	63.0	60.0	14.0	61.5	Sa.	
63	II-H	石 錘	71.0	62.0	13.0	79.2	Sa.	
64	IV-F	石 錘	78.0	71.5	16.0	128.9	Da.	
65	III-I	石 錘	83.5	69.5	15.0	108.9	Sa.	
66	IV-I	石 錘	65.0	53.0	14.5	89.9	Sa.	
67	IV-H	石 錘	63.5	66.0	14.5	95.9	Twopy.-and.	
68	II-H	石 錘	73.0	60.5	16.0	103.1	Sa.	
69	II-F	石 錘	64.0	63.5	16.5	103.9	Twopy.-and.	
70	V-I	石 錘	74.0	65.0	16.0	91.2	Twopy.-and.	
71	IV-H	石 錘	76.0	66.0	12.5	93.7	Tu.-bre.	
72	V-I	石 錘	71.0	55.0	13.0	107.8	Tu.-bre.	
73	IV-F	石 錘	72.0	57.5	24.0	115.4	Da.	
74	I-G	石 錘	75.0	68.0	22.0	129.0	Twopy.-and.	
75	VIII-I	石 錘	68.0	58.0	16.0	83.8	Twopy.-and.	
76	V-F	石 錘	64.5	67.0	18.0	95.6	Rhy.	
77	E-II	擦 石	178.0	77.0	58.0	1460.0	Har.-and.	
78	IV-I	擦 石	130.0	61.0	48.0	550.0	Gr.-Sa.	
79	II-I	擦 石	(84.0)	(65.0)	42.0	460.0	Da.	
80	IV-F	擦 石	(71.0)	(46.0)	37.5	310.0	Twopy.-and.	
84-81	III-E	擦 石	90.5	54.0	48.0	540.0	Sa.	
82	III-E	擦 石	141.0	69.0	67.0	1100.0	Sa.	
83	III-I	擦 石	146.0	65.0	56.0	900.0	Propy.	
84	II-I	擦 石	104.0	59.0	42.5	550.0	Sa.	
85	VII-H	擦 石	172.5	82.0	72.0	1550.0	Sa.	
85-86	IV-H	擦 石	(119.0)	(63.0)	59.5	710.0	Gr.-Sa.	
87	V-G	擦 石	143.0	61.0	51.0	750.0	Sa.	
88	III-G	擦 石	(78.5)	(74.0)	61.0	700.0	Twopy.-and.	
89	IV-I	擦 石	(78.0)	(76.0)	50.5	600.0	Sa.	
90	VIII-I	擦 石	(64.0)	(56.0)	34.5	190.0	Twopy.-and.	
91	V-G	擦 石	85.0	43.0	35.0	200.0	Sa.	
92	VII-I	擦 石	(100.0)	(78.0)	62.0	500.0	Twopy.-and.	
93	IV-F	擦 石	(73.0)	(42.0)	27.0	100.0	Sa.	
94	II-H	石 皿	80.0	60.0	42.0	250.0	Twopy.-and.	

挿図番号	出土地区	名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
95	I-G	敲石	134.0	53.0	38.0	410.0	Twopy.-and.	
96	V-G	敲石	115.0	86.0	37.0	450.0	Twopy.-and.	
97	II-H	石皿	(125.0)	(104.0)	76.0	600.0	軽石	

《石質略号》

Ag.	(Agate) ; メノー	Mu.	(Mudstone) ; 泥岩
An.	(Ande Site) ; 安山岩	Obs.	(Obsidian) ; 黒耀石
Ba.	(Basalt) ; 玄武岩	Phy.	(Phyllite) ; 千枚岩
Bls.	(Black Schist) ; 黒色片岩	Propy.	(Propyrite) ; 菱朽安山岩
Che.	(Chert) ; 硅岩	Rhy.	(Rhyolite) ; 流紋岩
Coa-Sa.	(Coarse-Sand stone) ; 粗粒砂岩	Sa.	(Sand stone) ; 砂岩
Da.	(Dacite) ; 石英安山岩	Ser.	(Serpentine) ; 蛇紋岩
Dol.	(Doler) ; 輝綠岩	Slh.	(Siliceous Shal) ; 硅質頁岩
Gres.	(Green Schist) ; 緑色片岩	Tu.	(Tuff) ; 凝灰岩
Gr.-Sa.	(Green Sand stone) ; 緑色砂岩	Tu-bre.	(Tuff-breccia) ; 凝灰角礫岩
Horn.	(Hornfels) ; ホルンフェルス	Twopy.-and.	(Twopyroxene andesite) ; 複輝石安山岩
Hs.	(Hard Shal) ; 硬質頁岩		

図 版

土 器 縮尺 $\frac{1}{3}$

石器・石製品 縮尺 $\frac{1}{2}$

図版28, 29A, 34A B, 縮尺 $\frac{1}{1}$

図版29 B, 39, 54, 縮尺 $\frac{1}{3}$

図版34 C (× 6.3)

図版35 (×12.6)



遺跡付近の空中写真（1：12,500、昭48）



A 遺跡遠景 (北より)



B 遺跡全景 (南東より)



A 発掘状況



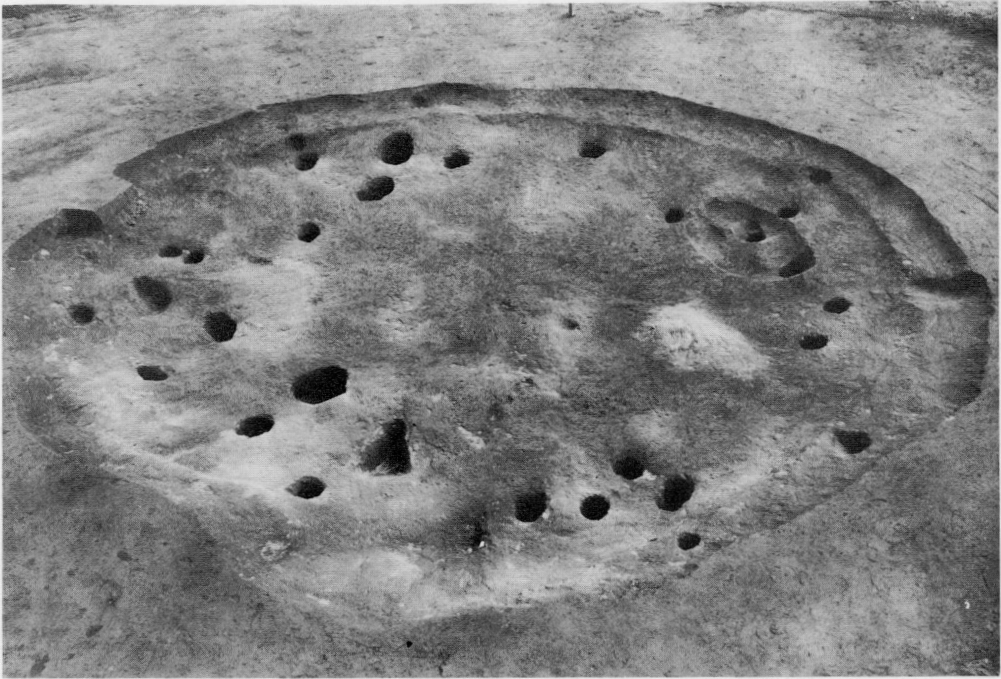
B 竪穴住居址発掘状況



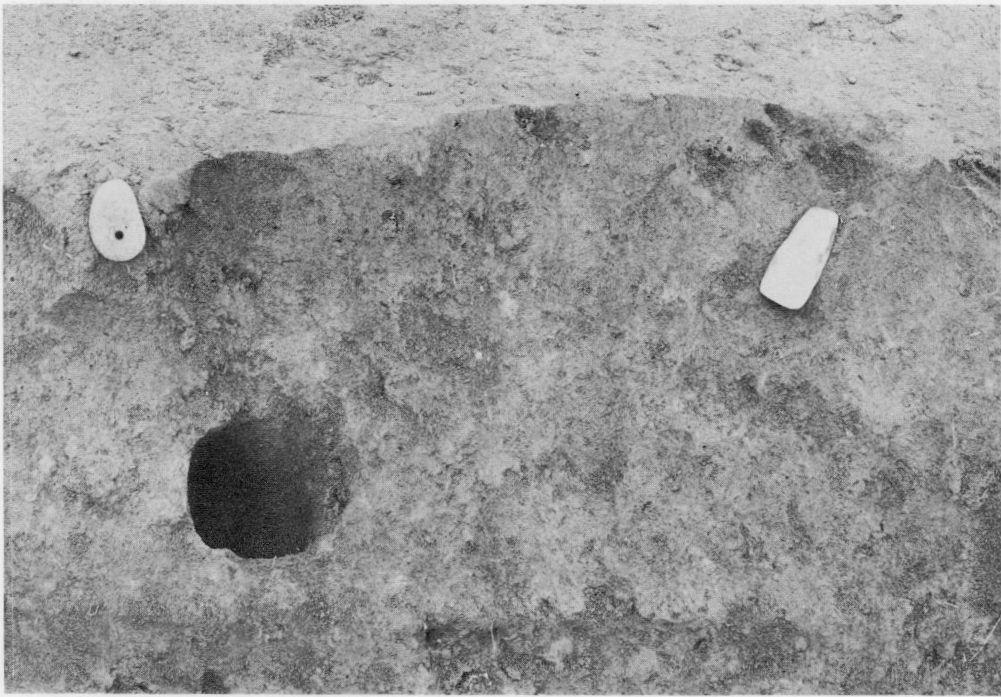
A 第1号竖穴住居址（西より）



B 第1号竖穴住居址，焼土，ピット2断面



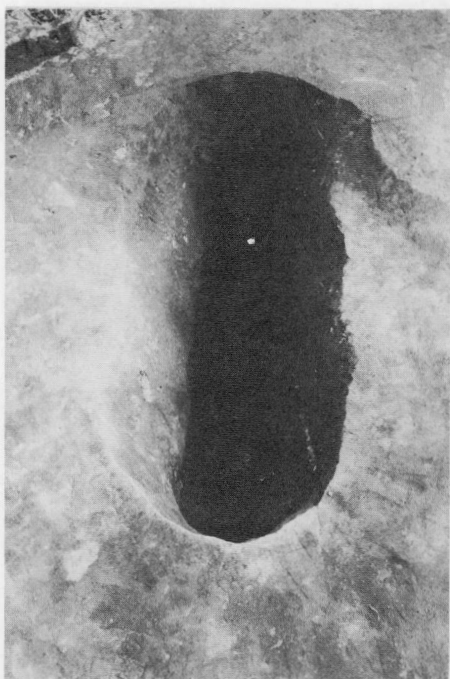
A 第2号竖穴住居址（東より）



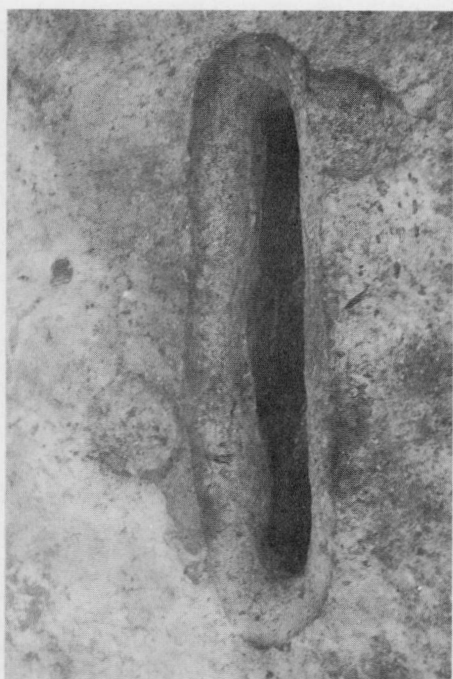
B 第2号竖穴住居址，錘玉，石斧出土状況（北側壁）



A 第34号Tピット



B 第4号Tピット



C 第10号Tピット



A 第11号Tピット



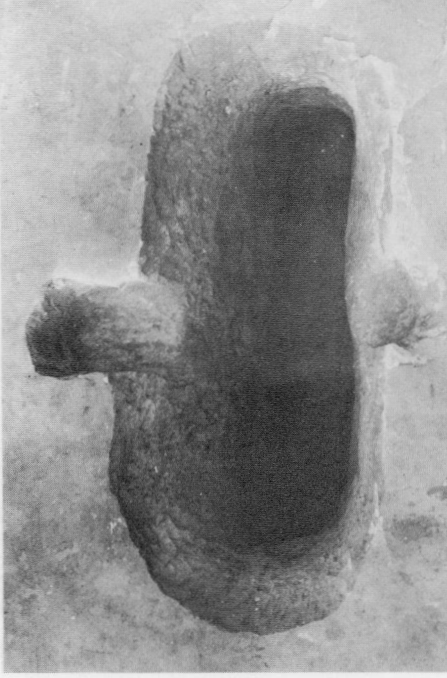
B 第13号Tピット



C 第14号Tピット



D 第17号Tピット



A 第18号Tピット



B 第19号Tピット



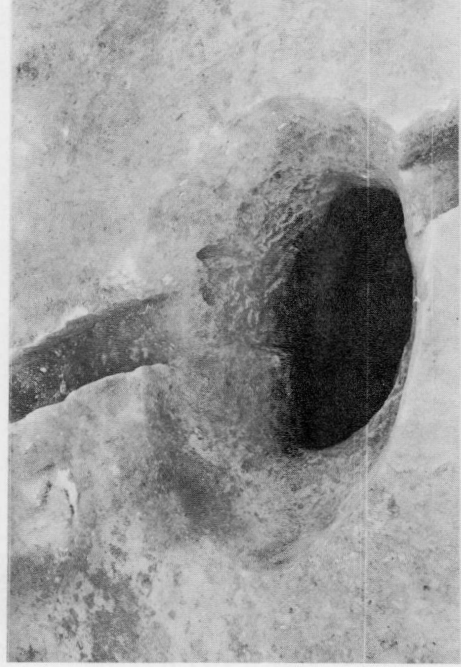
C 第20号Tピット



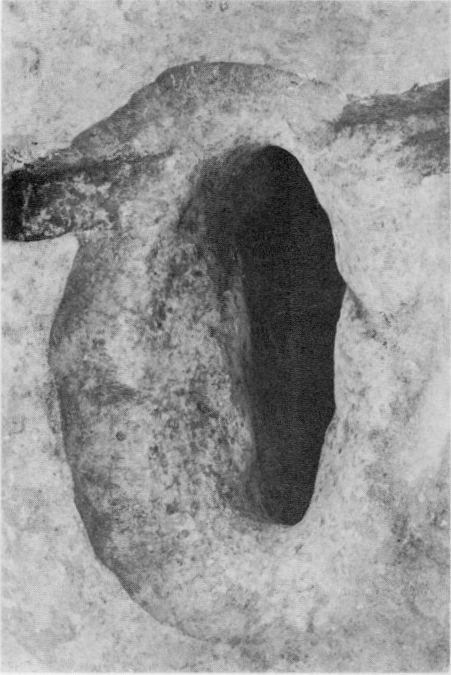
D 第21号Tピット



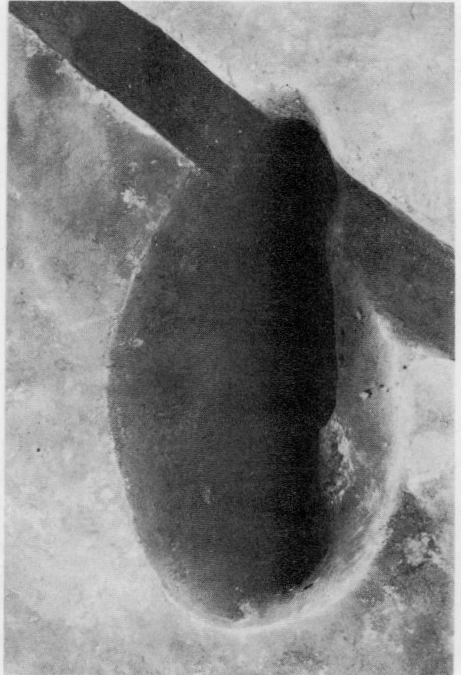
A 第22号Tピット



B 第23号Tピット



C 第24号Tピット



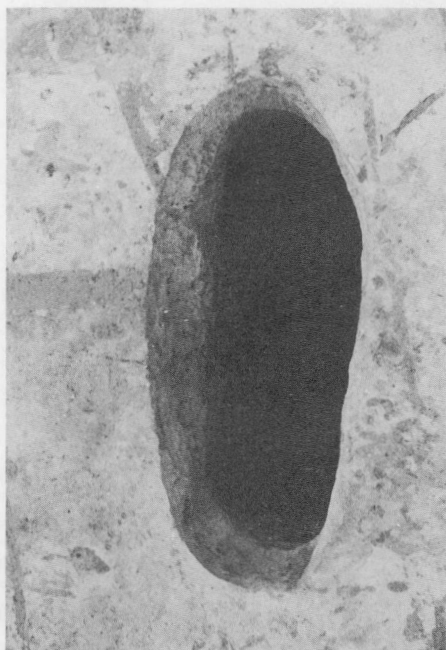
D 第25号Tピット



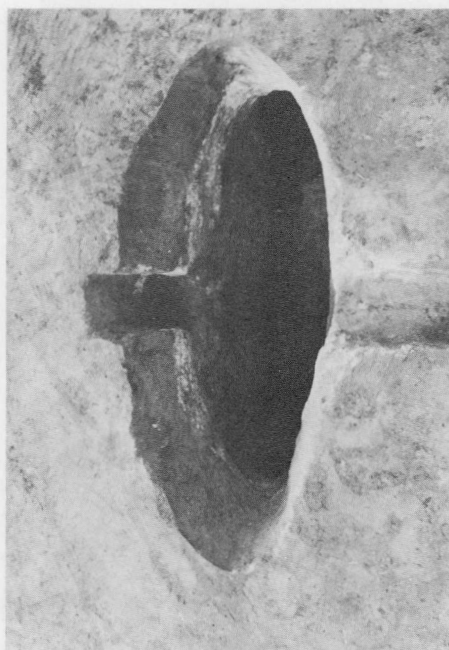
A 第26号Tピット



B 第29号Tピット



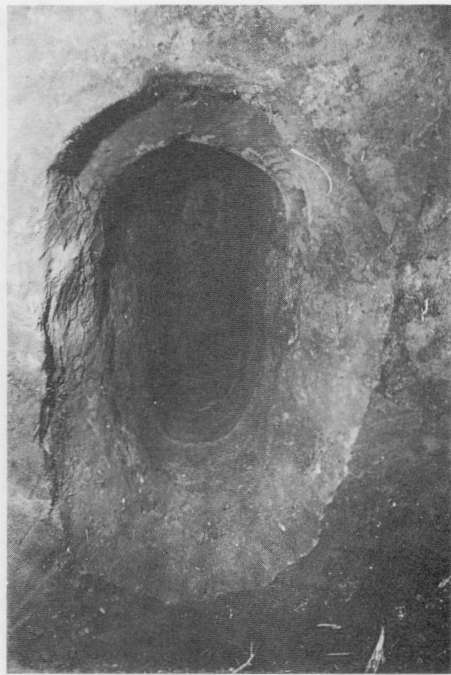
C 第31号Tピット



D 第32号Tピット



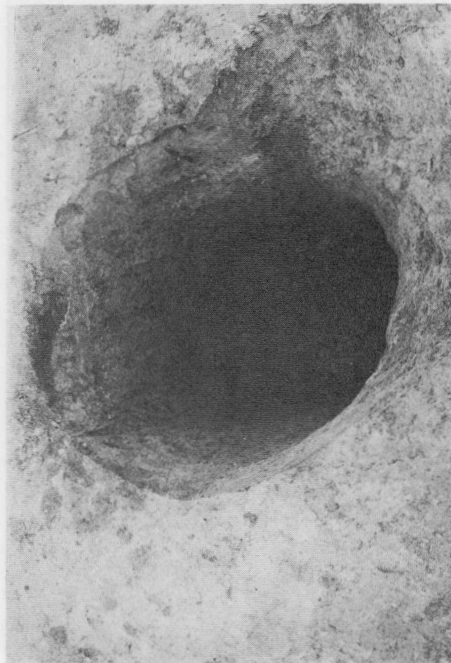
A 第33号Tビット



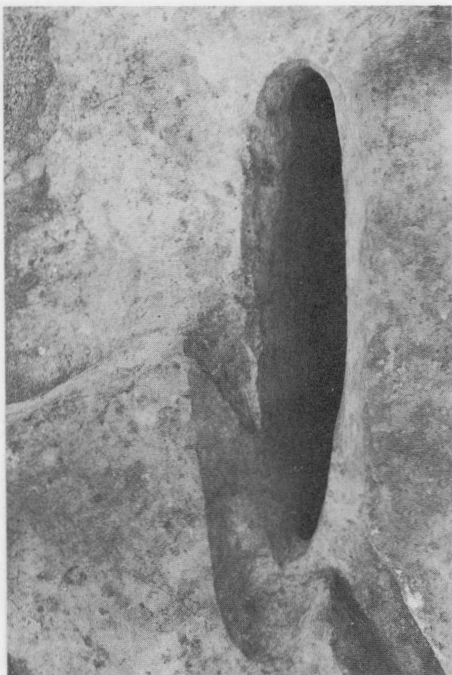
B 第35号Tビット



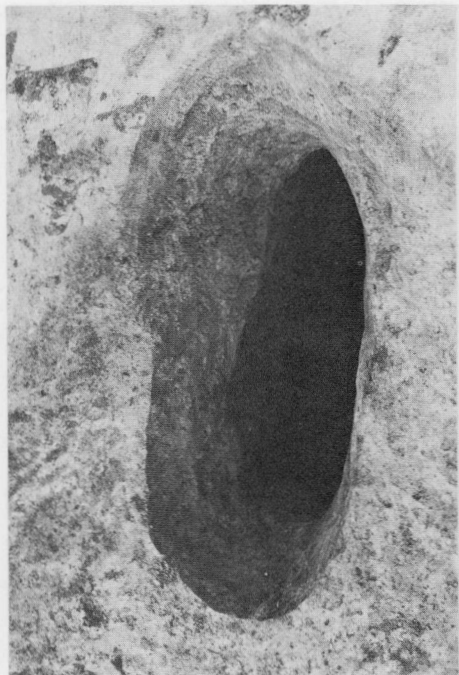
C 第36号Tビット



D 第37号Tビット



A 第40号Tビット



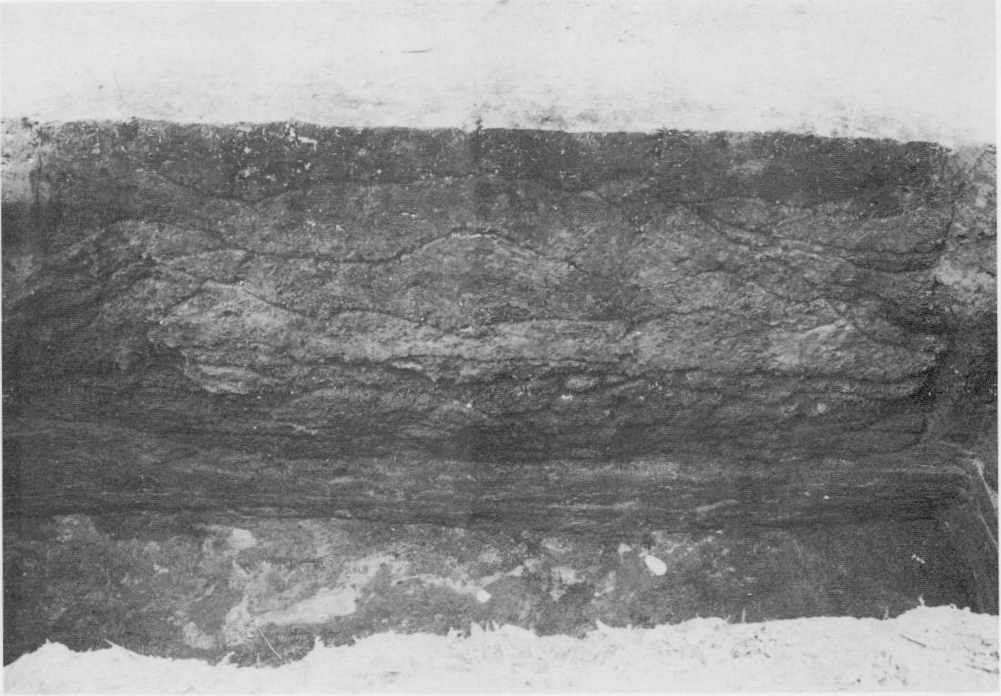
B 第41号Tビット



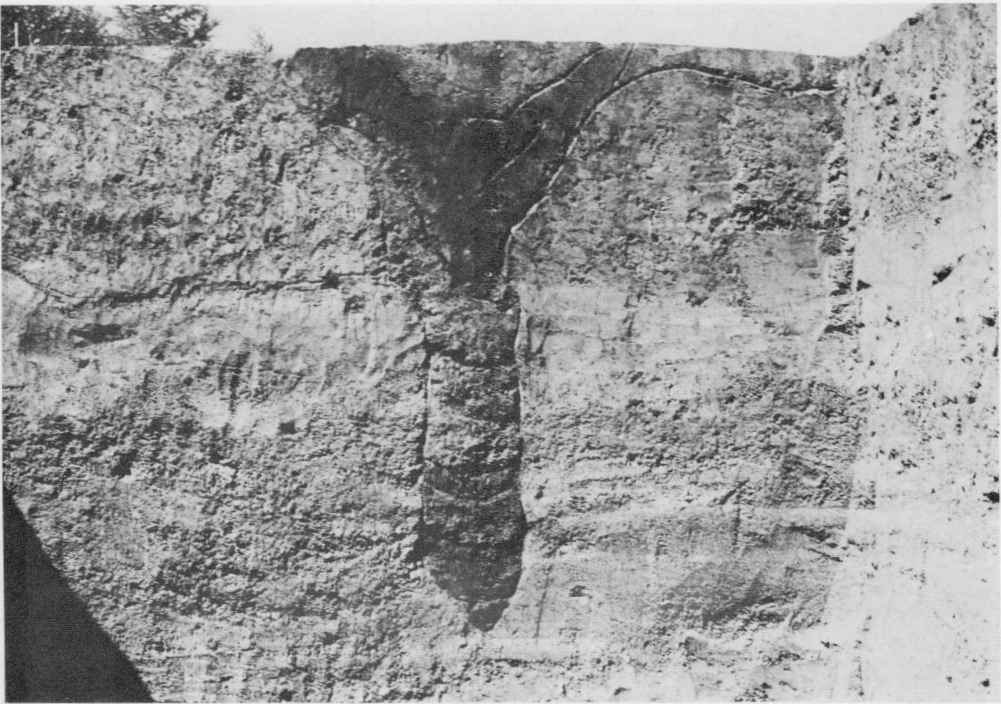
C 第45号Tビット



D 第48号Tビット



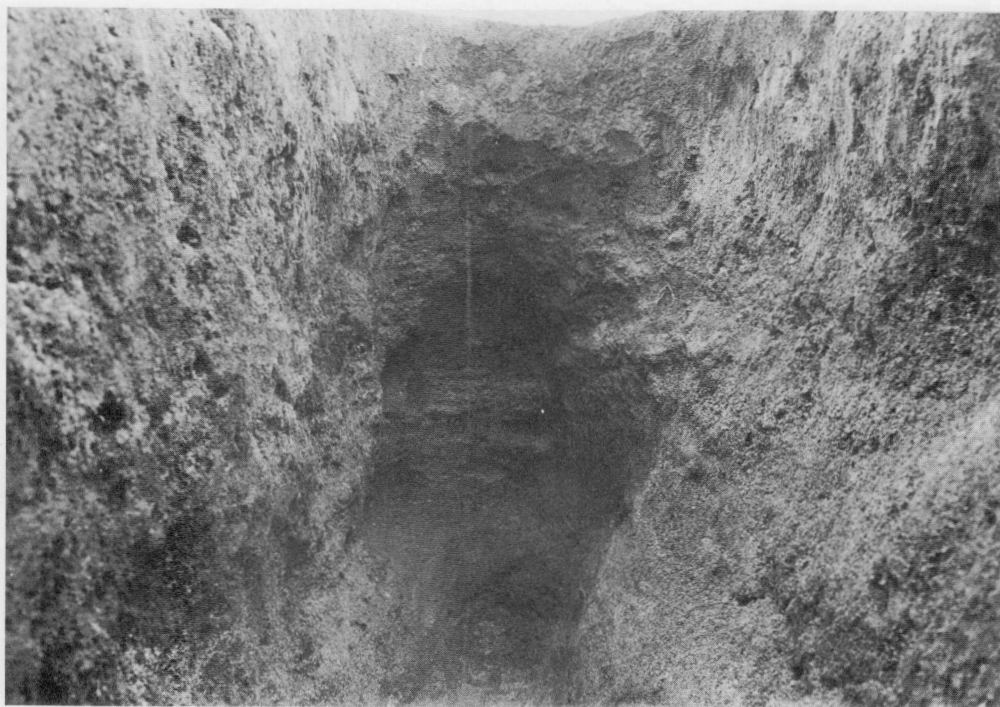
A 第7号Tピット長軸断面



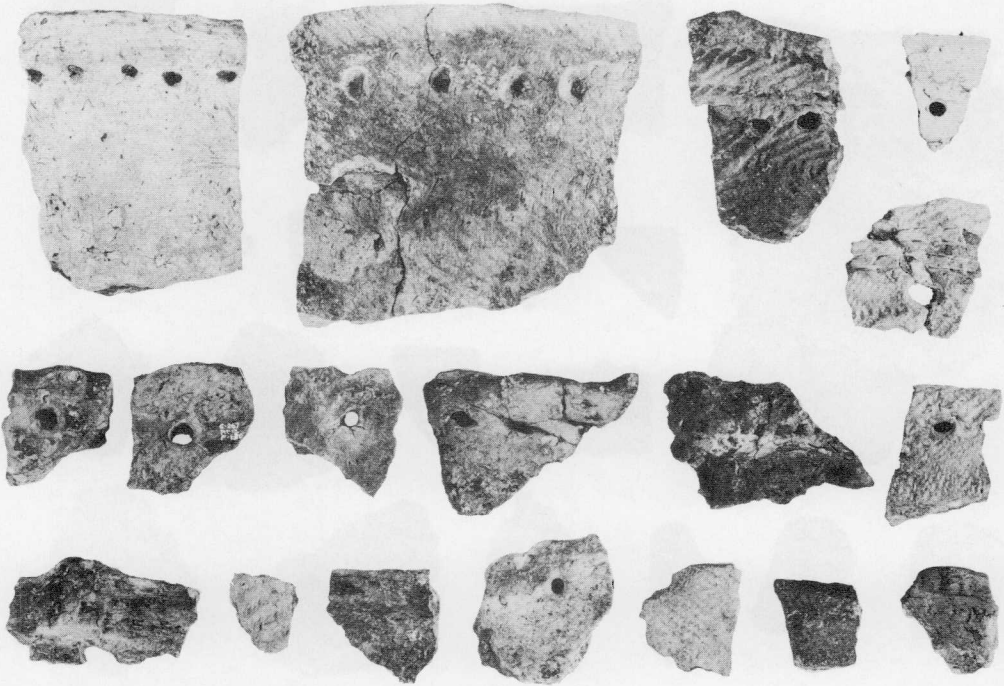
B 第46号Tピット短軸断面



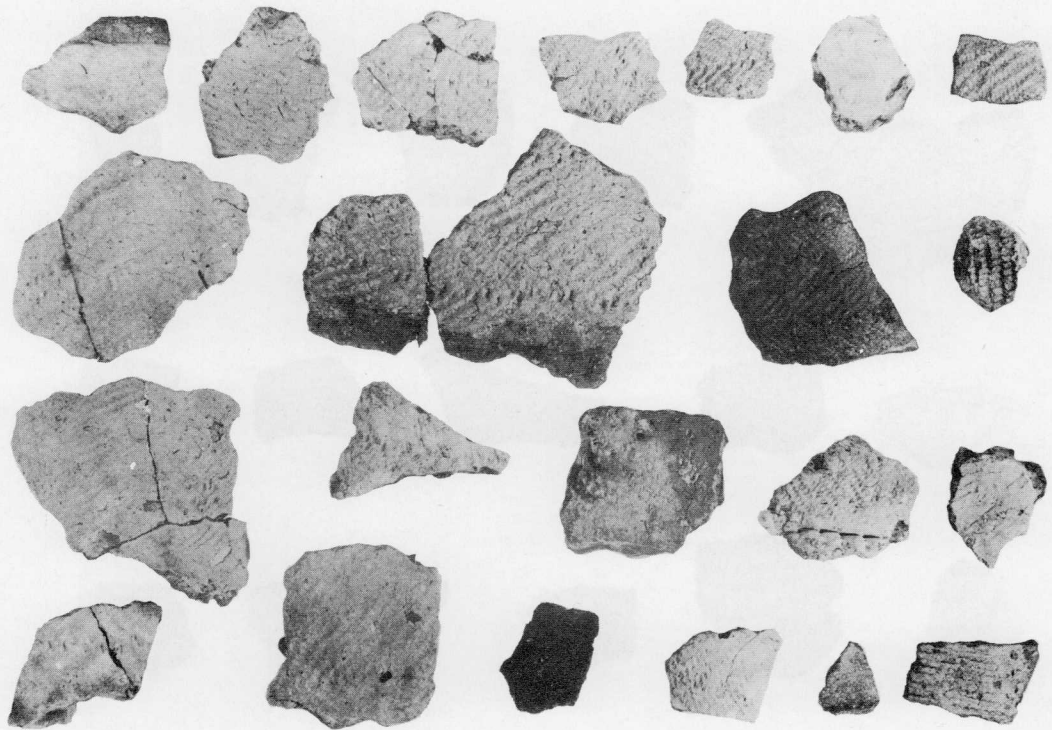
A 第13号Tピット埋没状態（再調査直前）



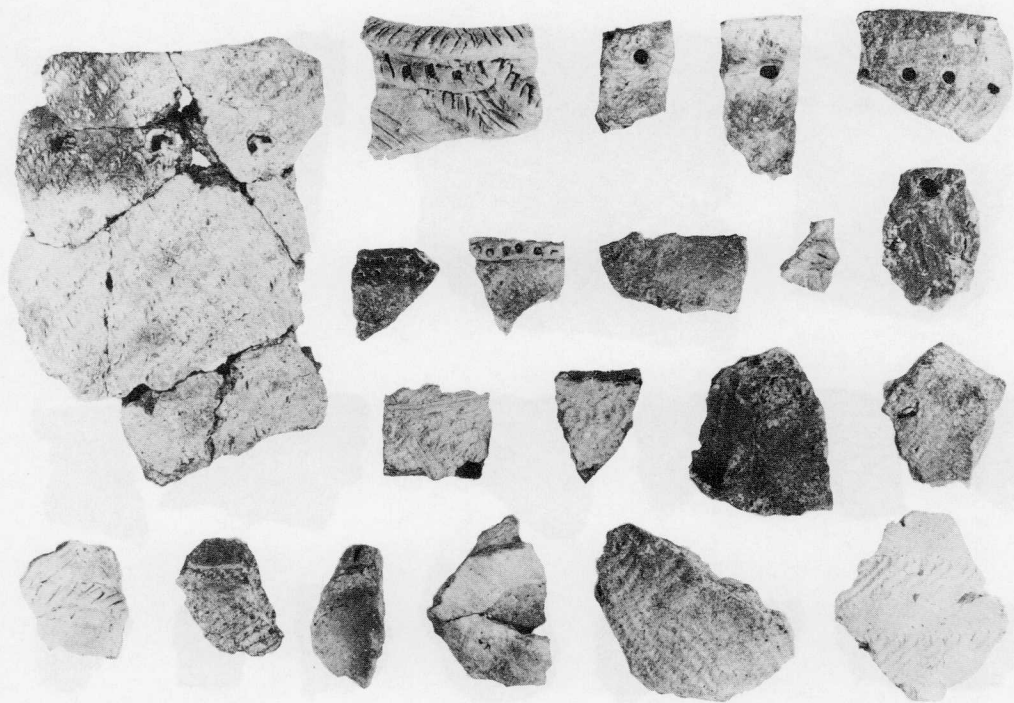
B S 269 遺跡，第2号Tピット・オーバーハング部分



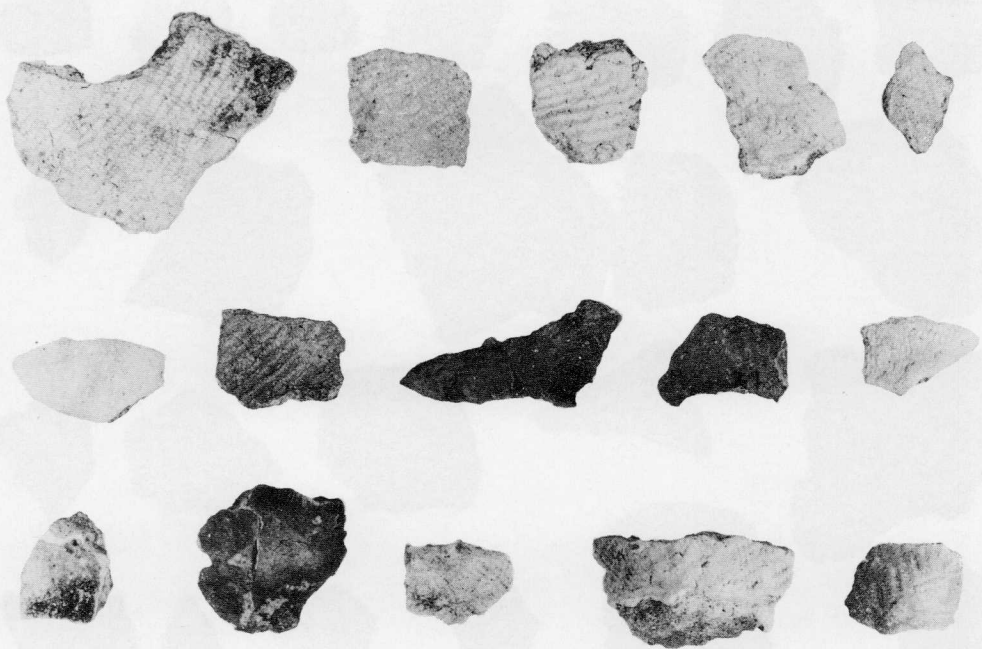
A 第1号豎穴住居址出土土器



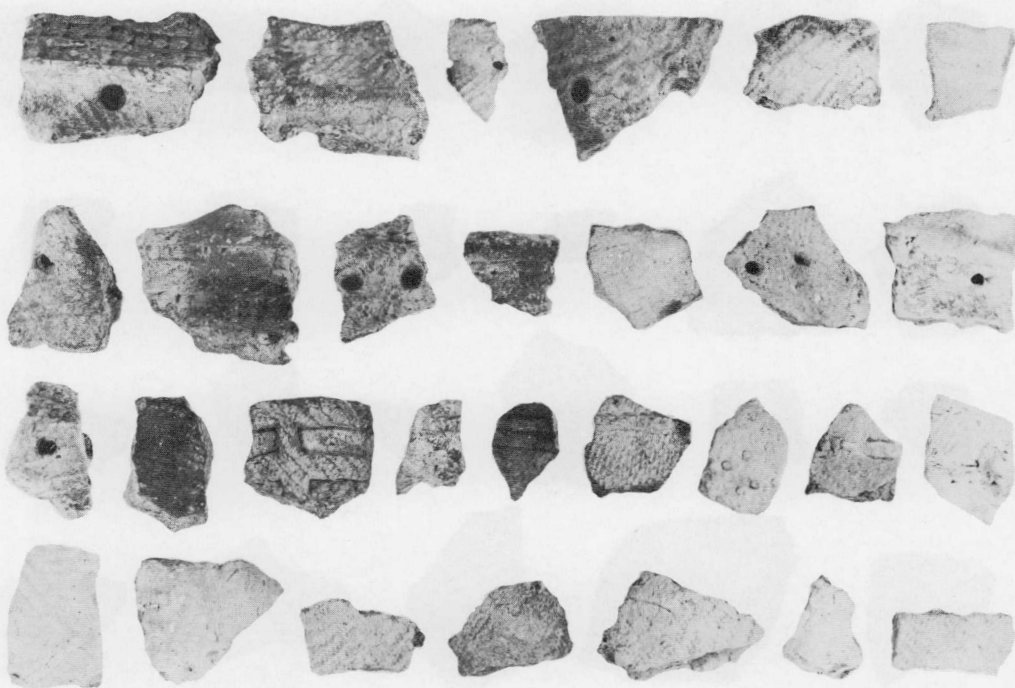
B 第1号豎穴住居址出土土器



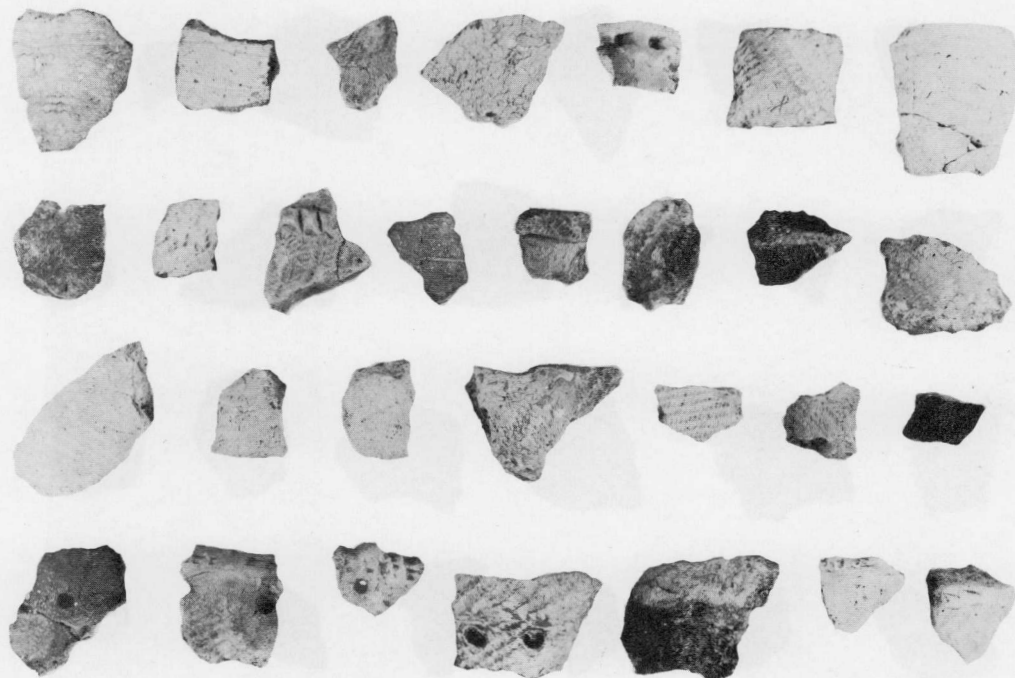
A 第2号竖穴住居址出土土器



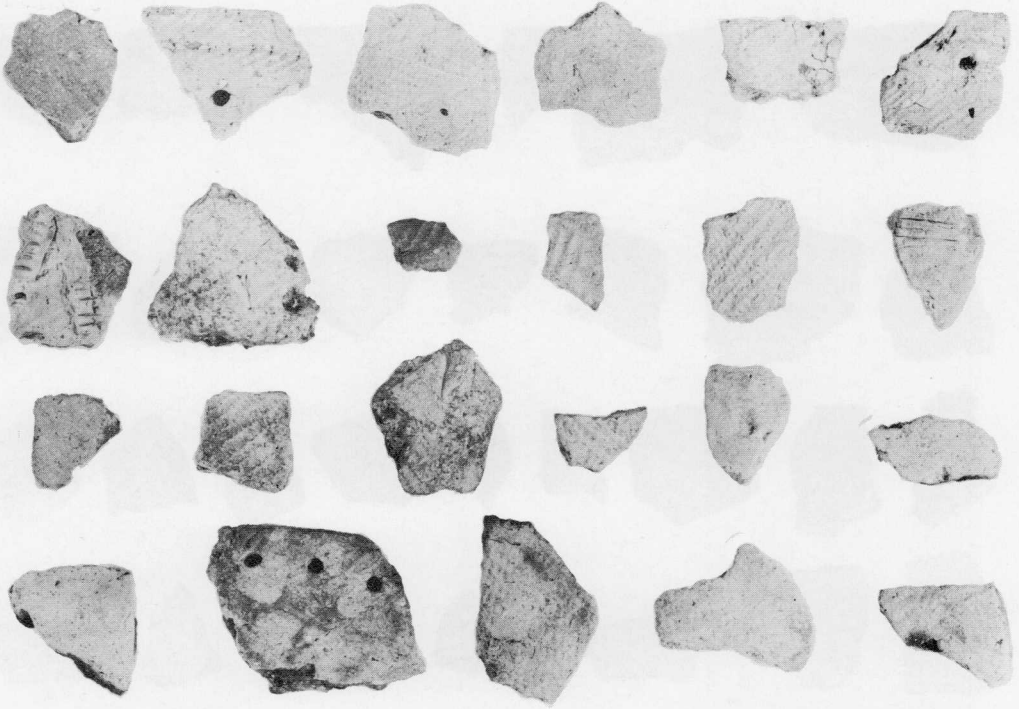
B 第2号竖穴住居址出土土器



A 第1号竖穴住居址状遺構出土土器



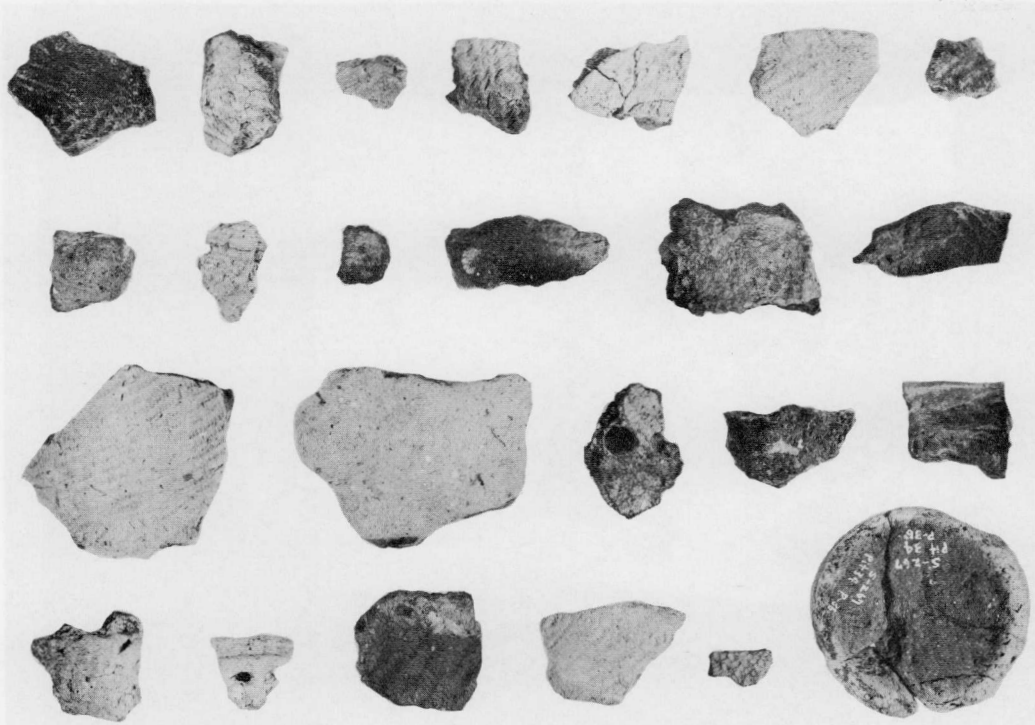
B Tピット内出土土器(1)



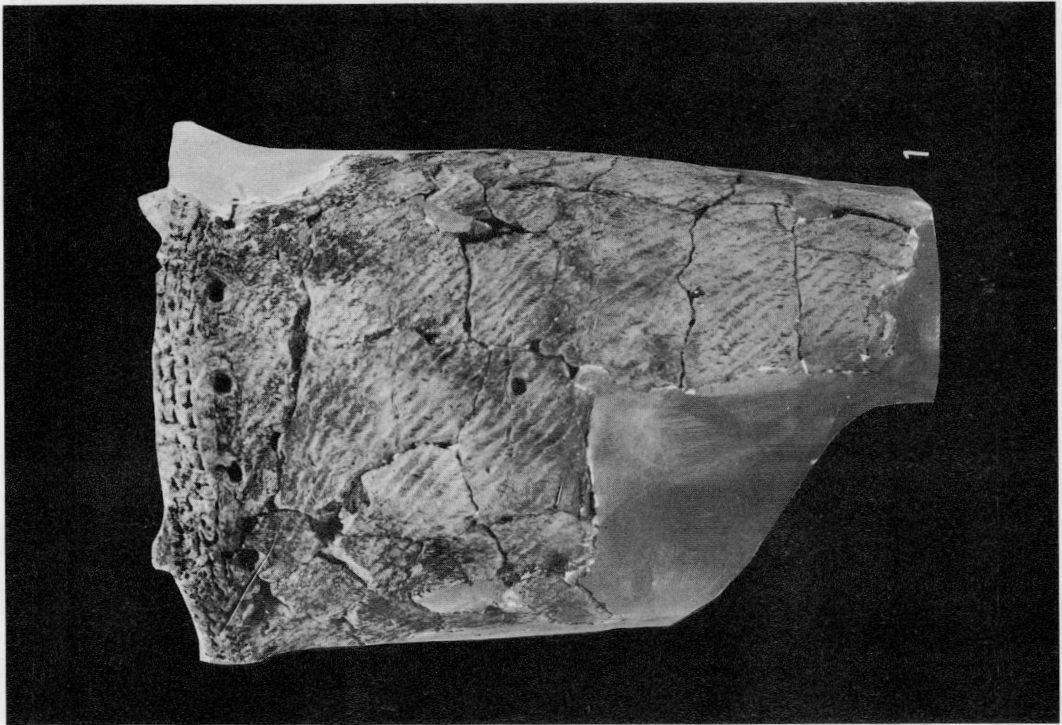
A Tピット内出土土器(2)



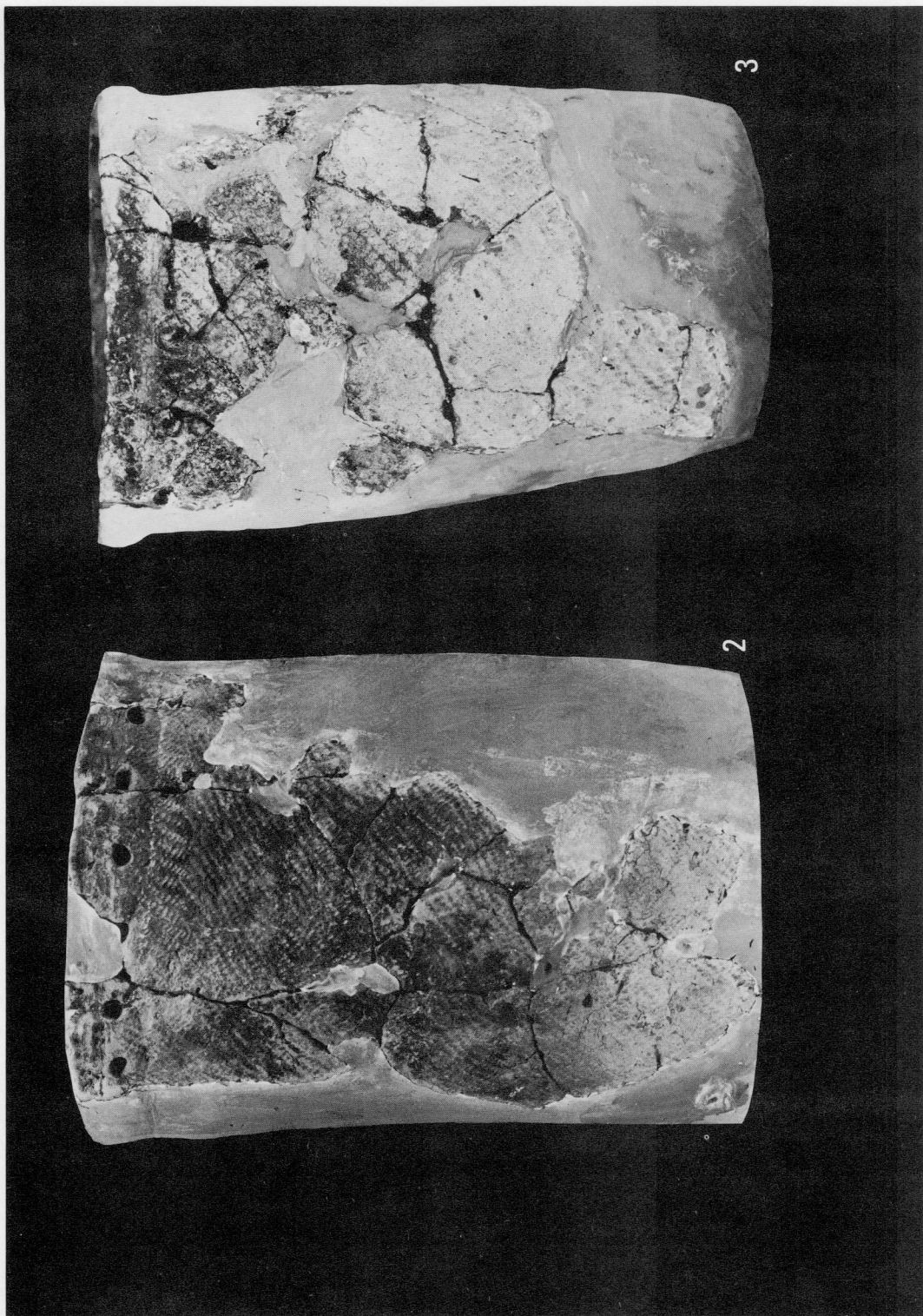
B Tピット内出土土器(3)



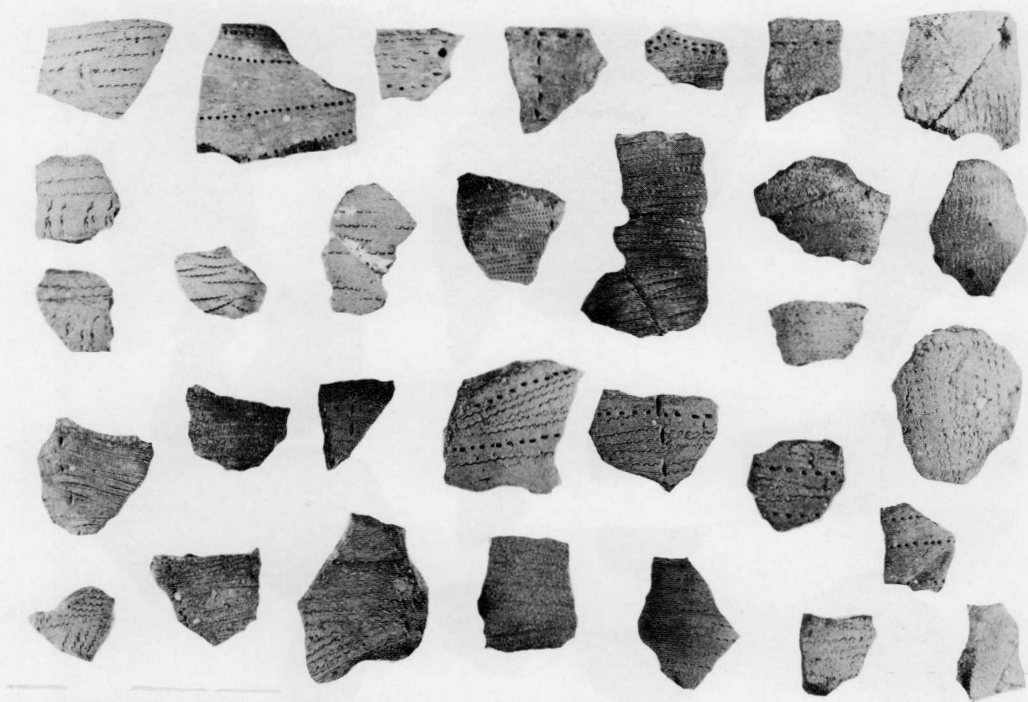
A Tピット内出土土器(4)



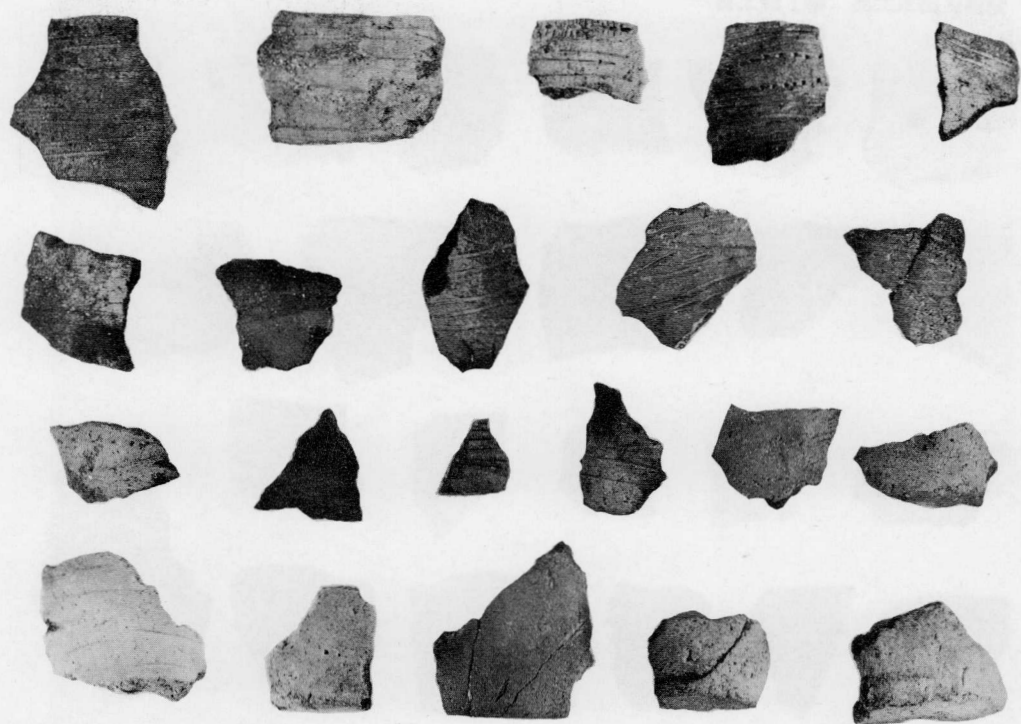
B 発掘区出土復元土器



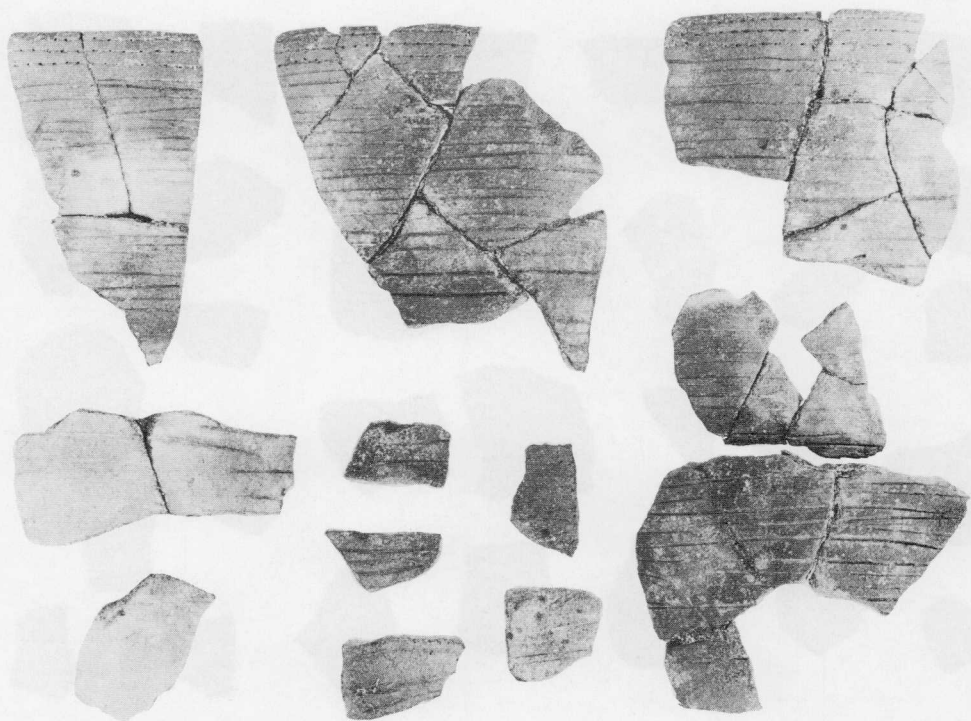
尧掘区出土復元土器



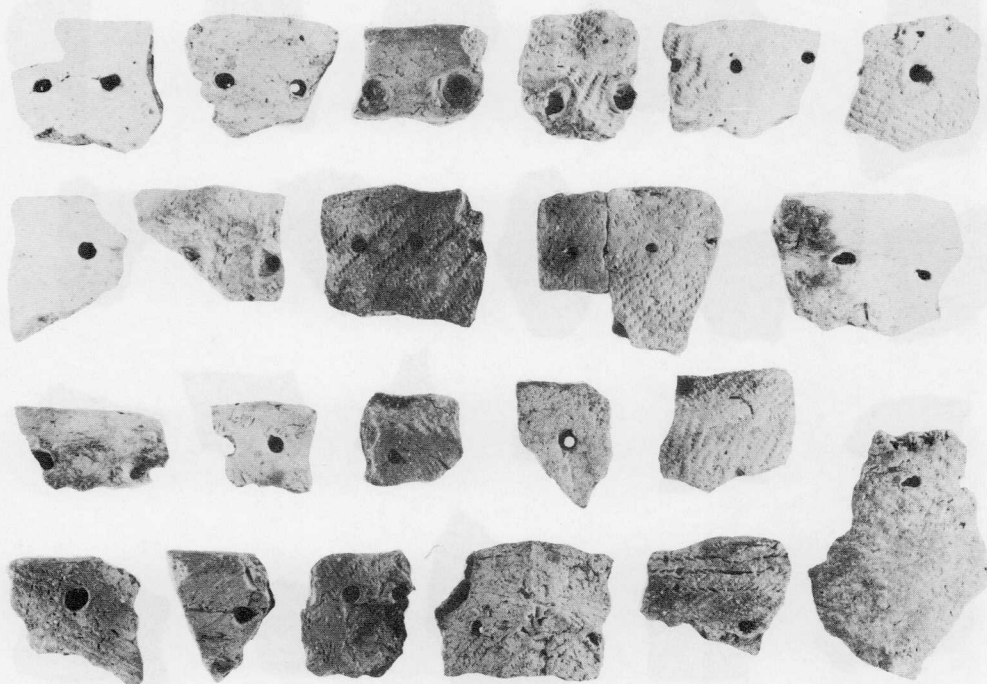
A 発掘区出土土器 (第I群土器)



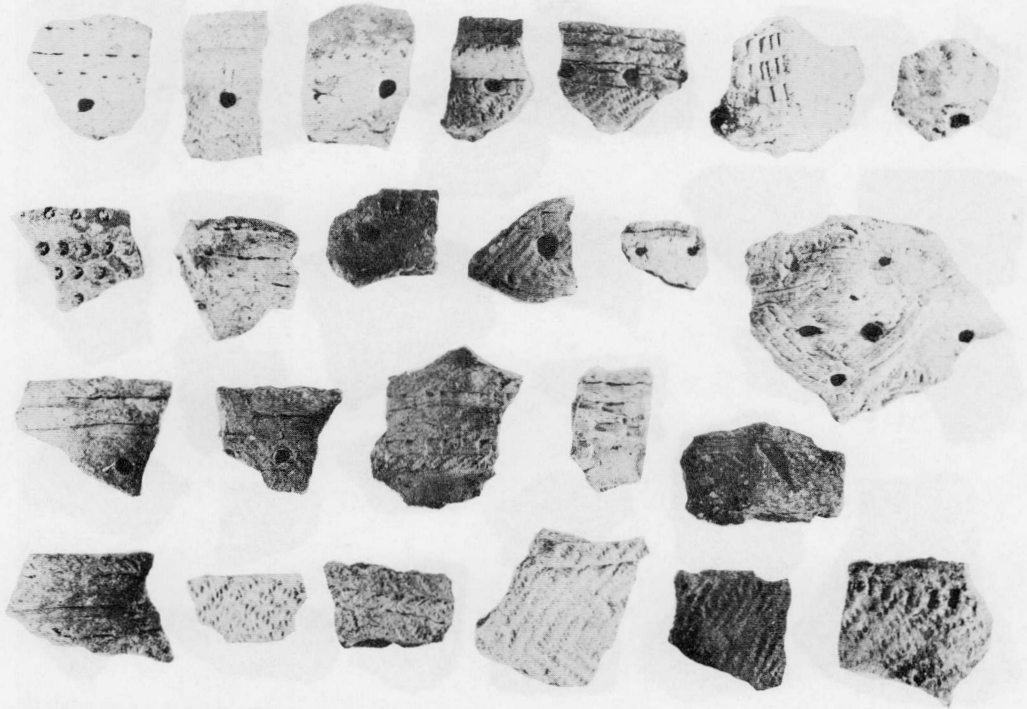
B 発掘区出土土器 (第I群土器)



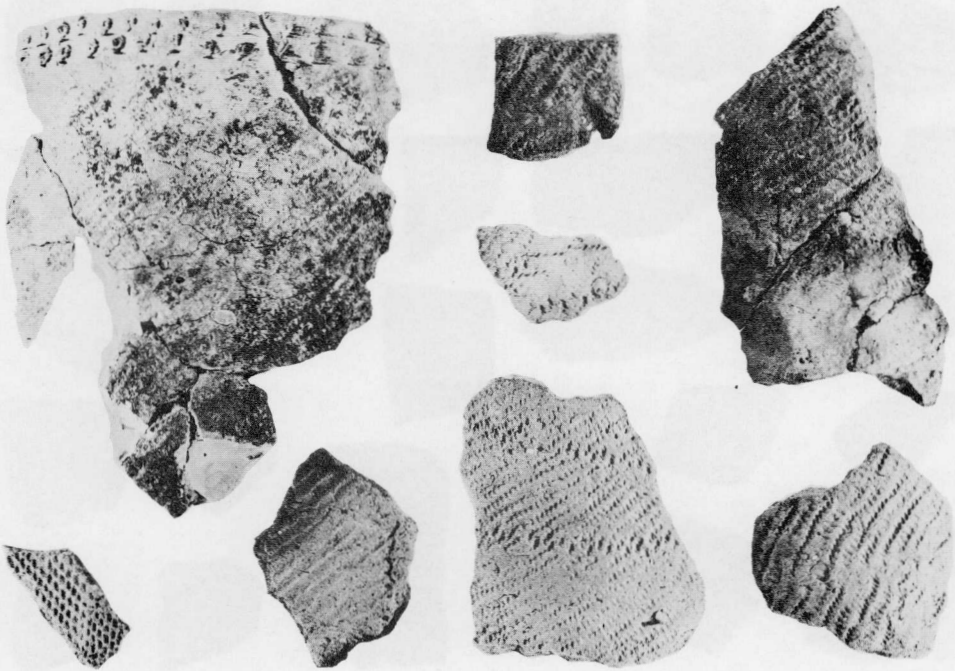
A 発掘区出土土器 (第I群土器)



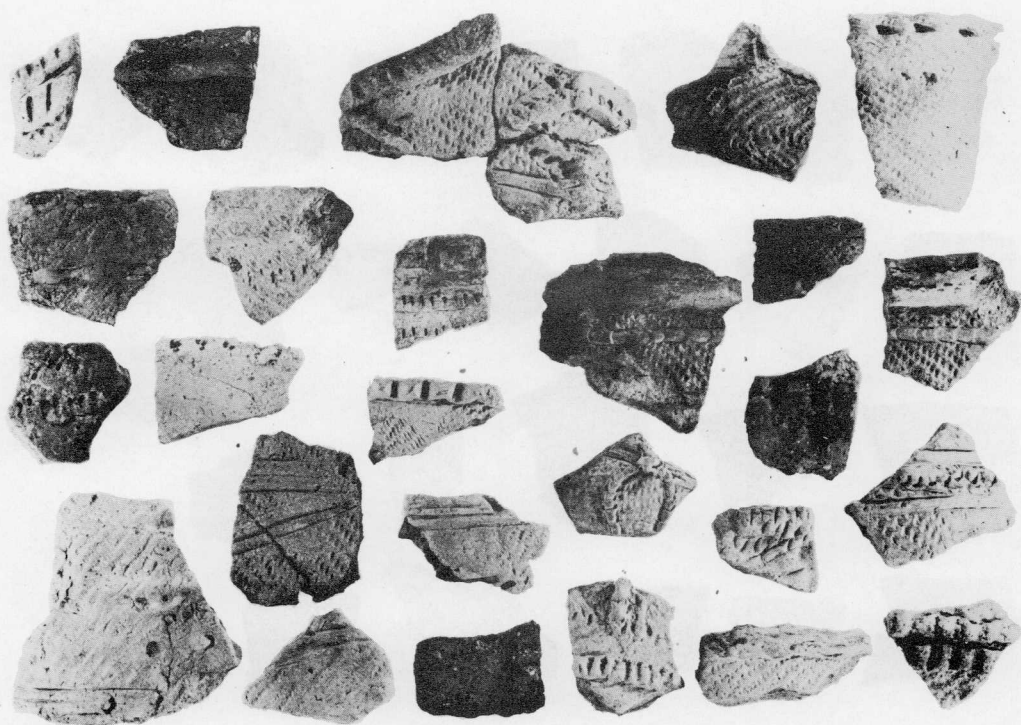
B 発掘区出土土器 (第II群土器)



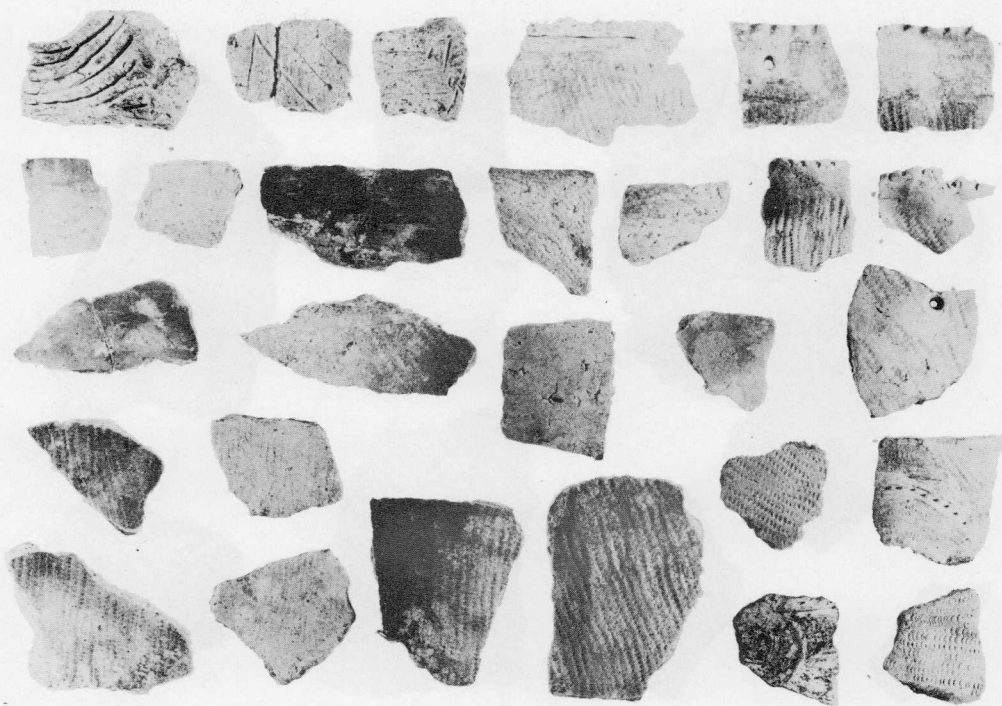
A 発掘区出土土器 (第Ⅱ群土器)



B 発掘区出土土器 (第Ⅱ群土器)



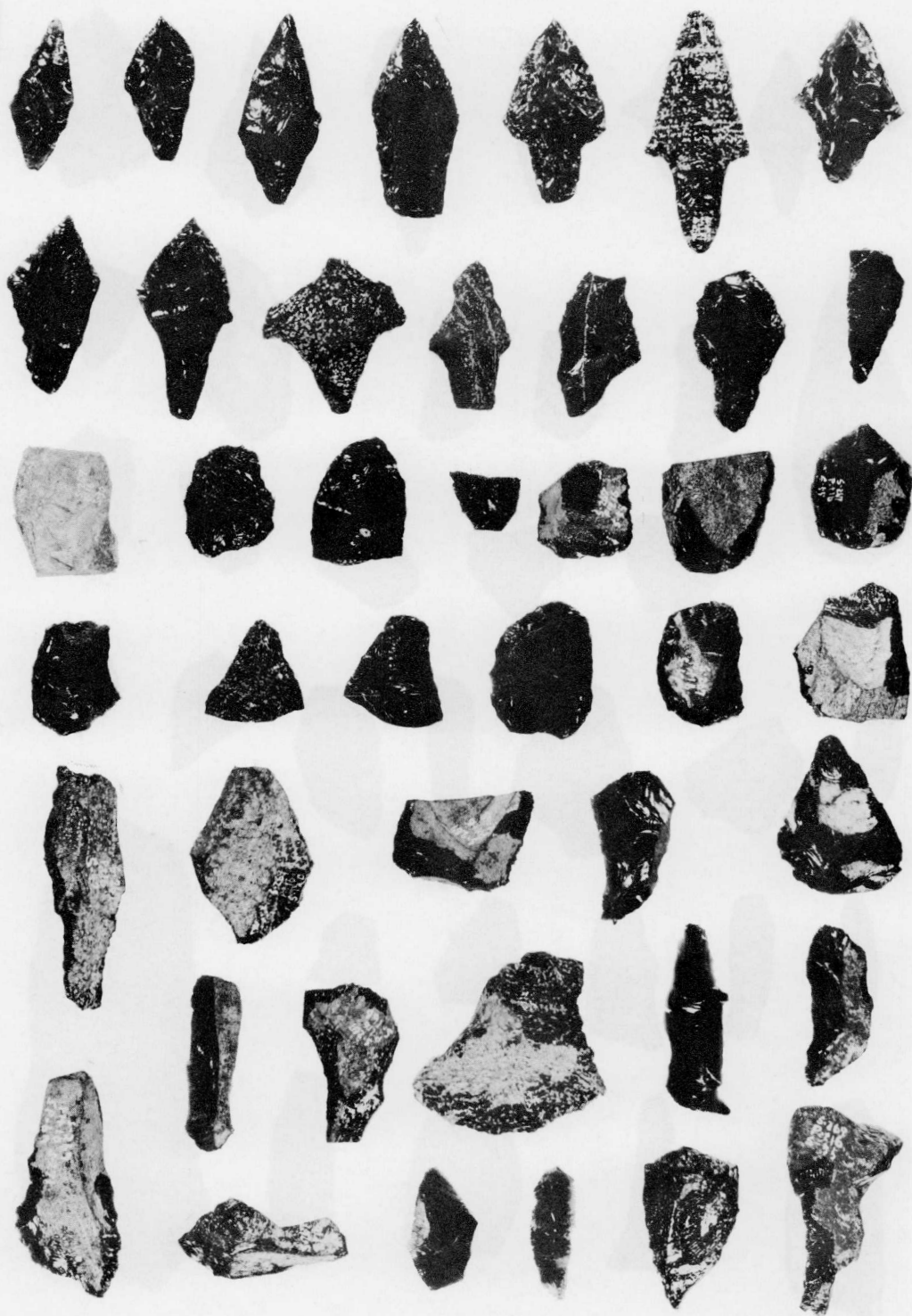
A 发掘区出土土器 (第II群土器)



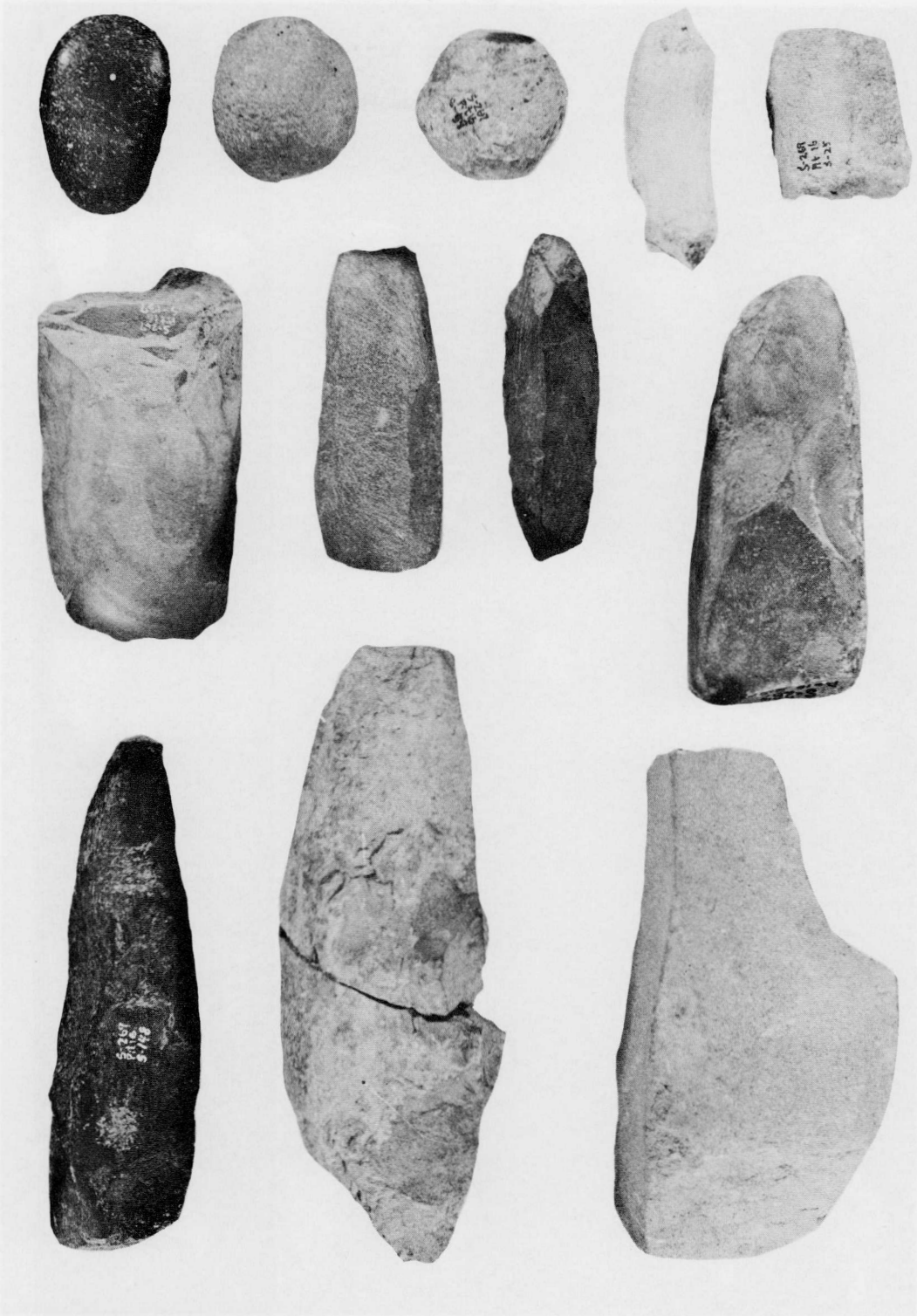
B 发掘区出土土器 (第III, IV, V群土器)



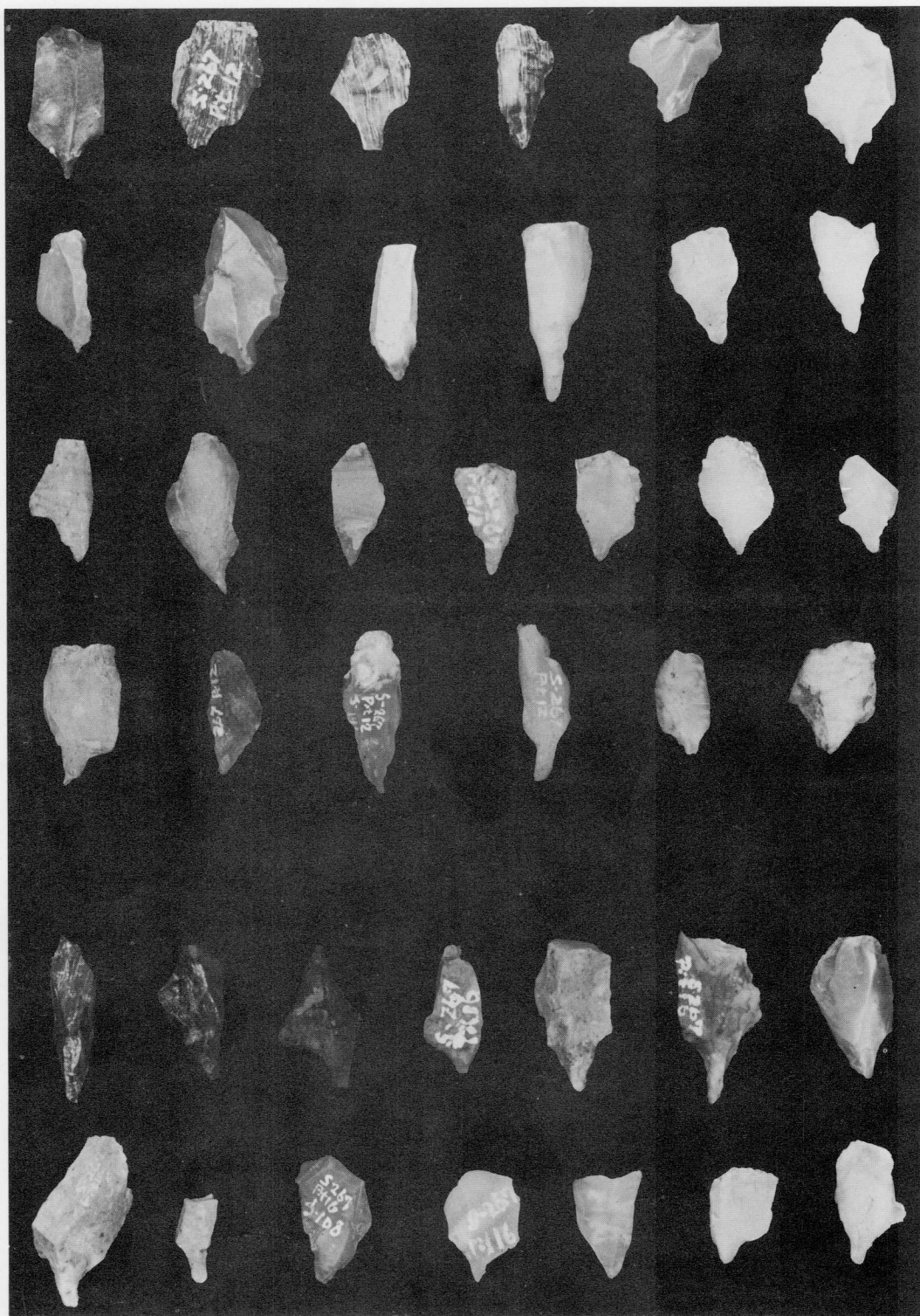
第1号竖穴住居址出土石器



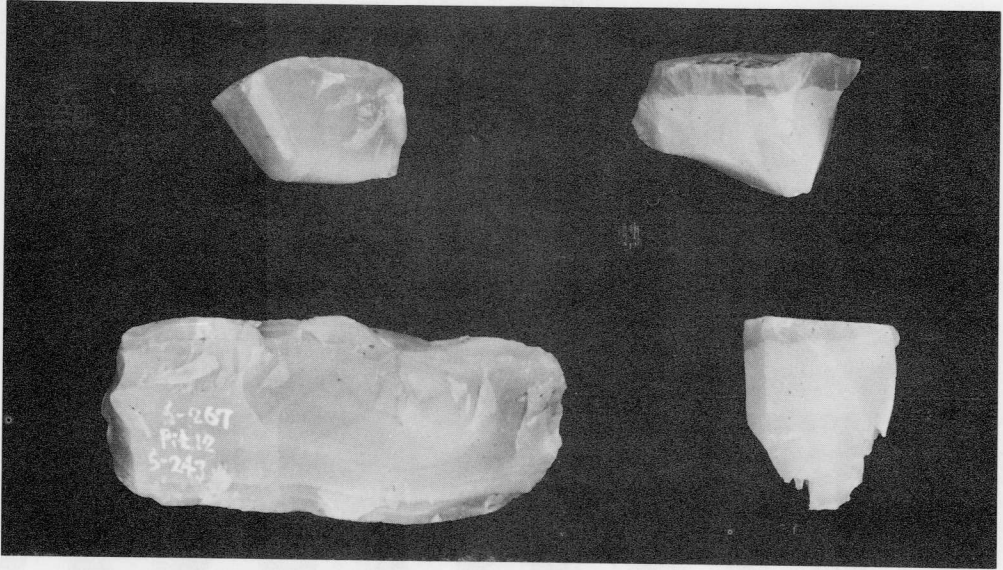
第2号竖穴住居址出土石器(1)



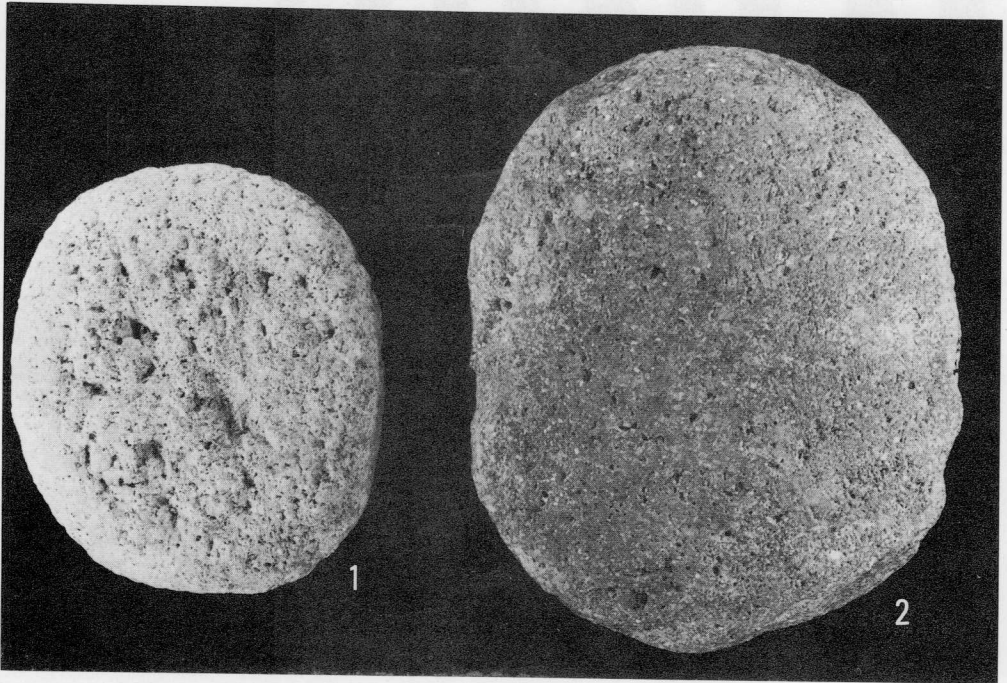
第2号竖穴住居址出土石器(2)



第1号竖穴住居址(上段), 第2号竖穴住居址(下段), 出土石錐



A 第1号竖穴住居址出土，石錐関連石核



B 石皿 (1. 第2号竖穴住居址, 2. 第19号Tピット)



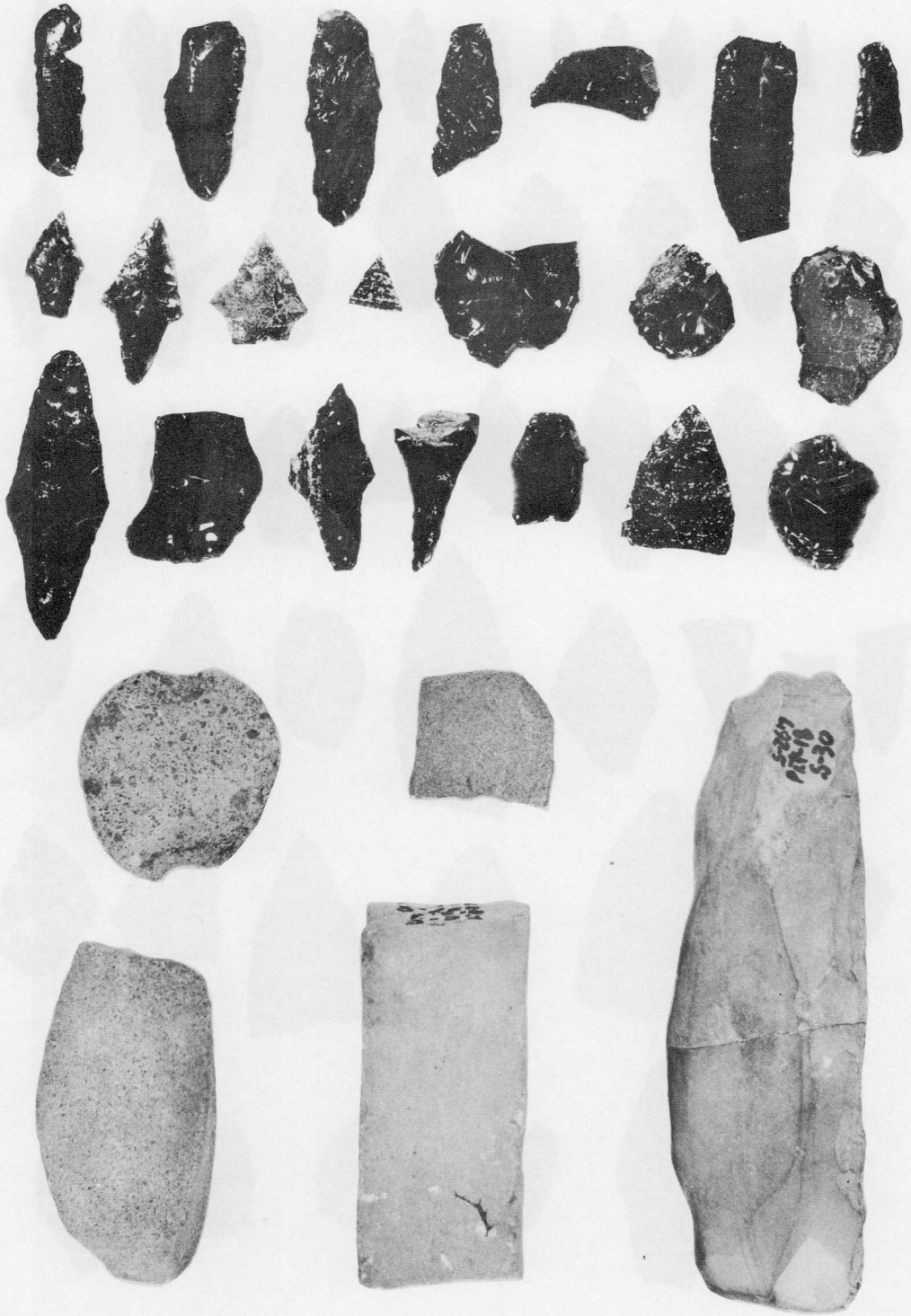
A 第1号竖穴住居址出土剥片



B 第2号竖穴住居址出土剥片



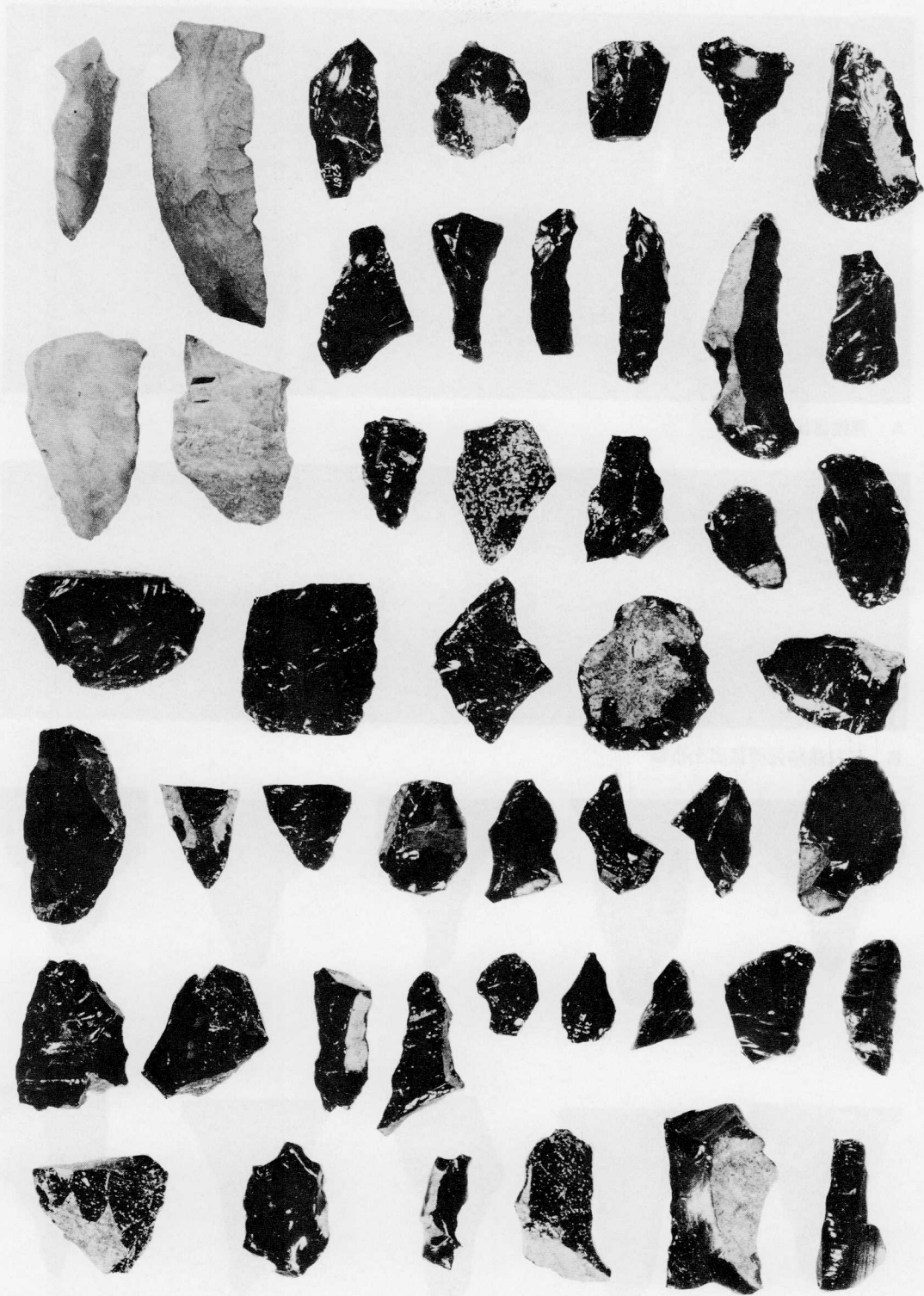
C 发掘区出土剥片



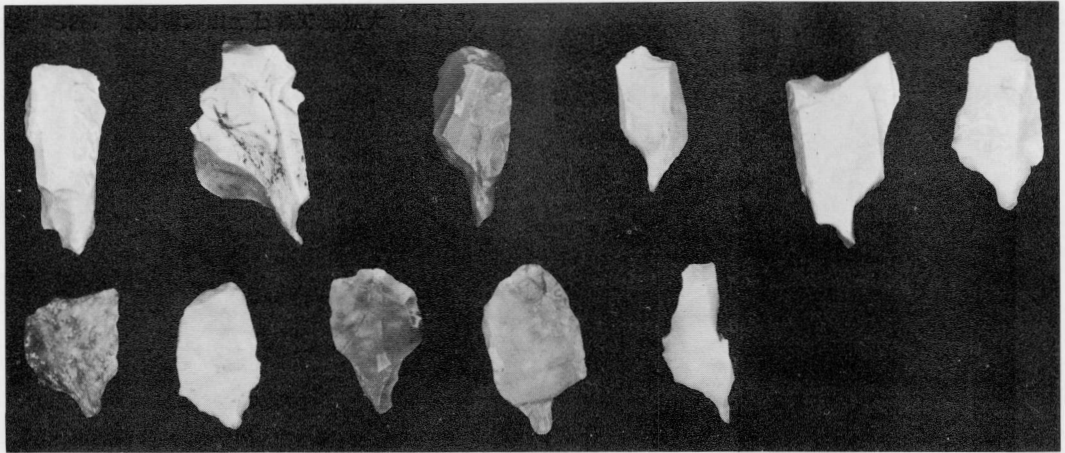
Tピット，第1号竪穴住居址状遺構出土石器



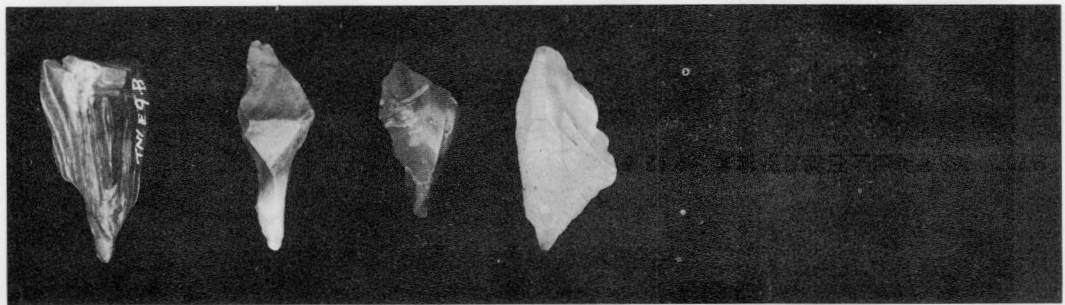
発掘区出土石器



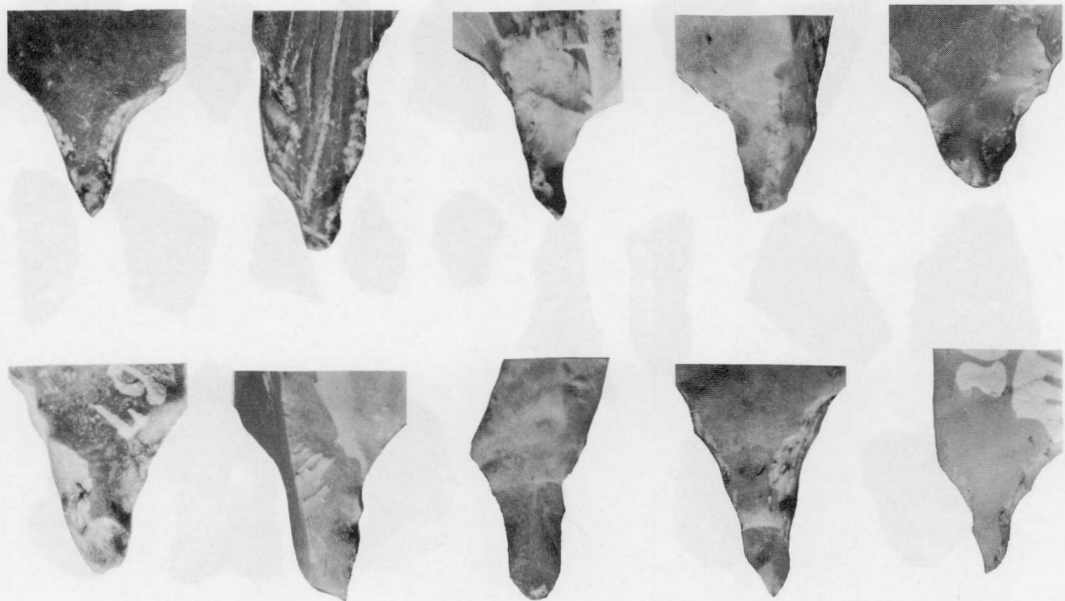
发掘区出土石器



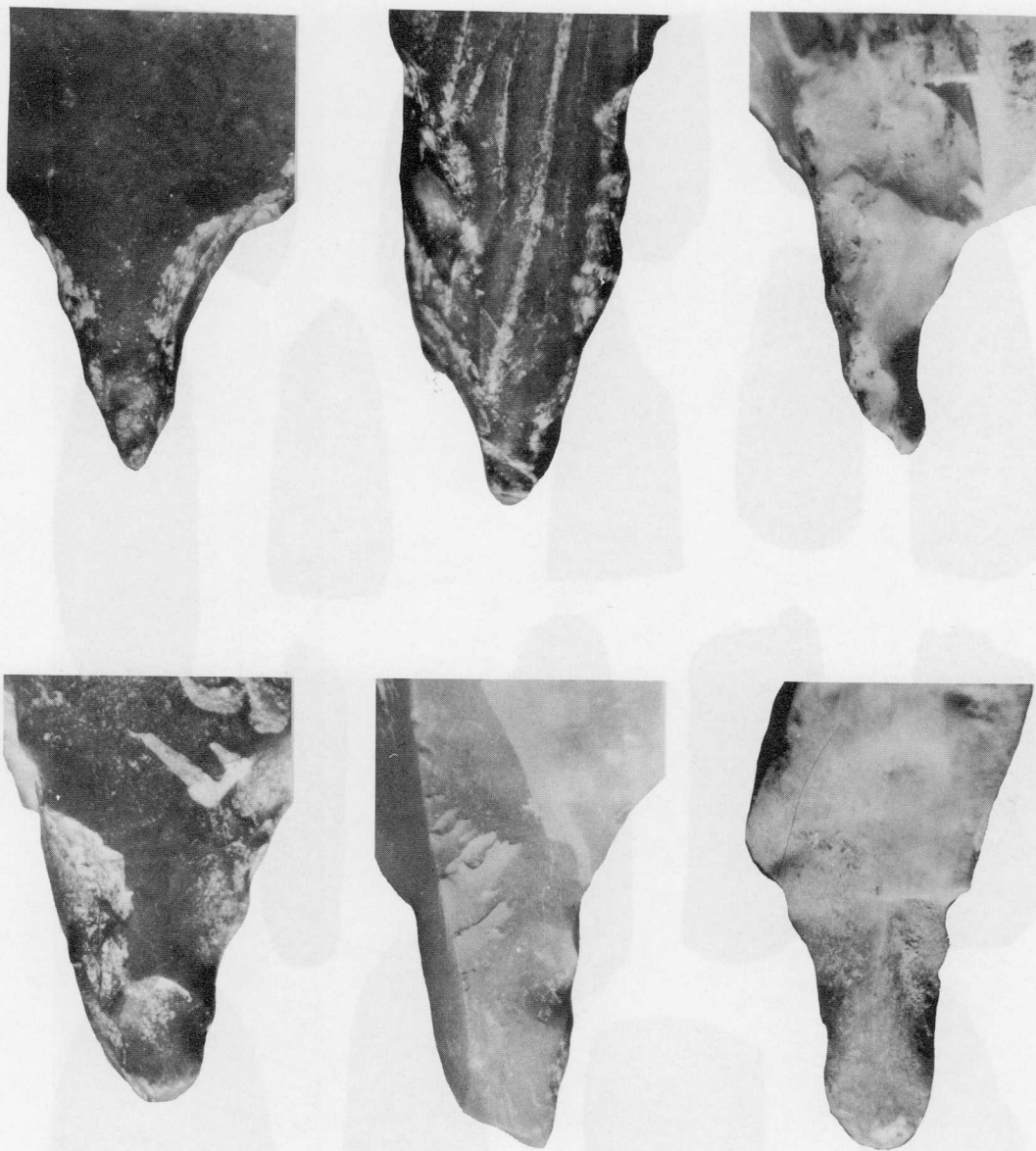
A 発掘区出土石錐



B T77遺跡発掘区出土石錐



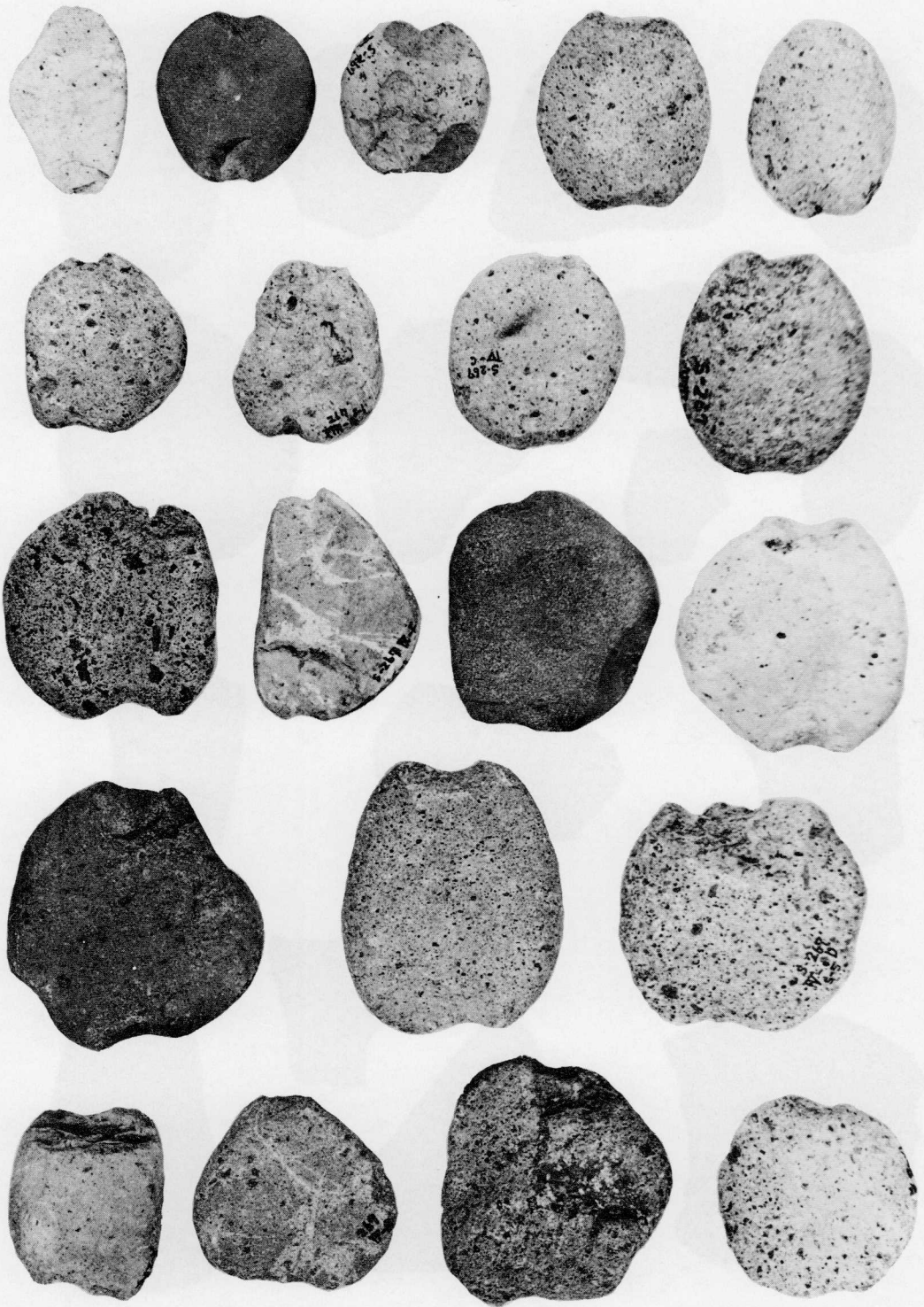
C S267. 268遺跡出土石錐刃部拡大 (×6.3)



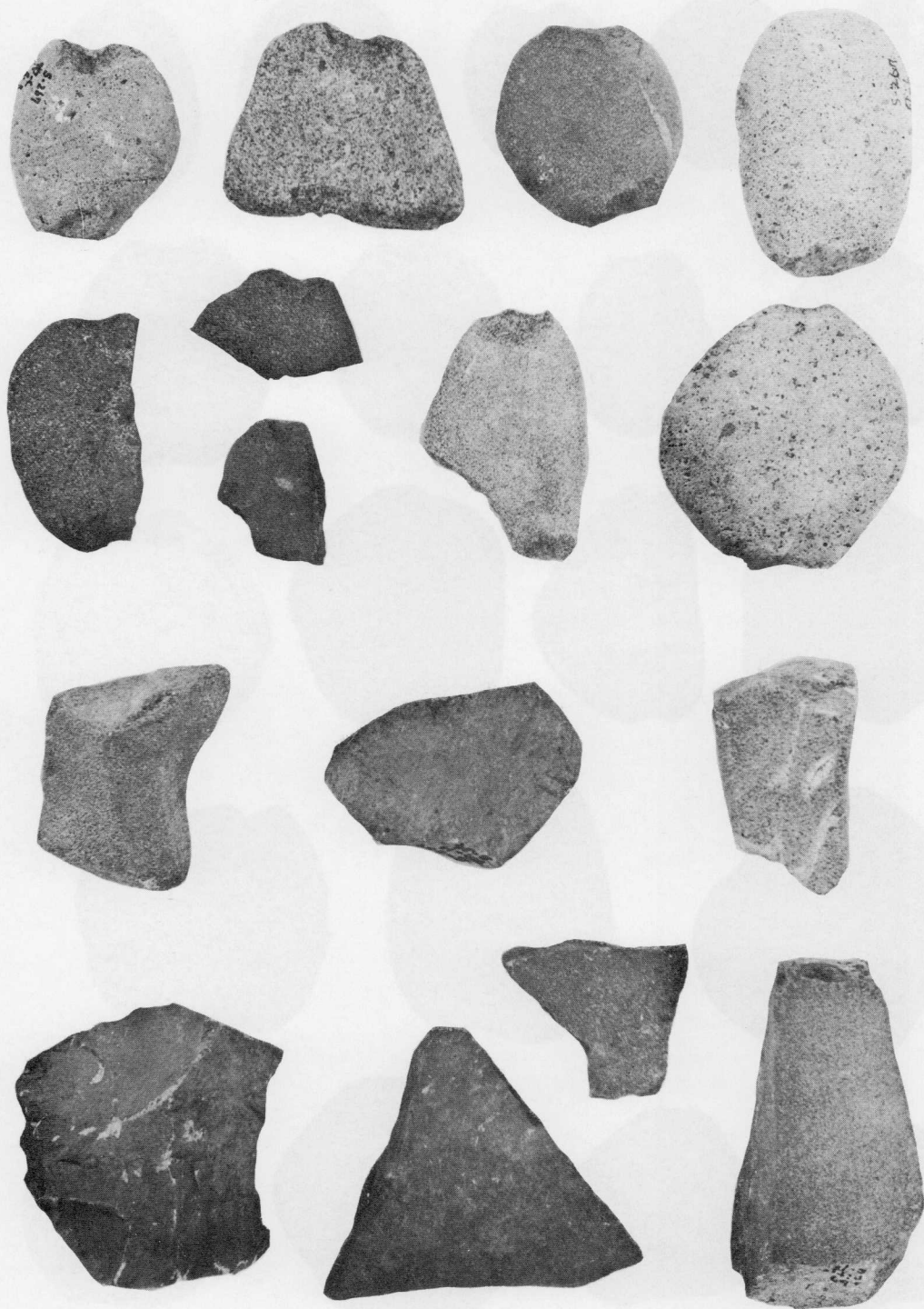
S267. 268遺跡出土石錐刃部拡大 (×12.6)



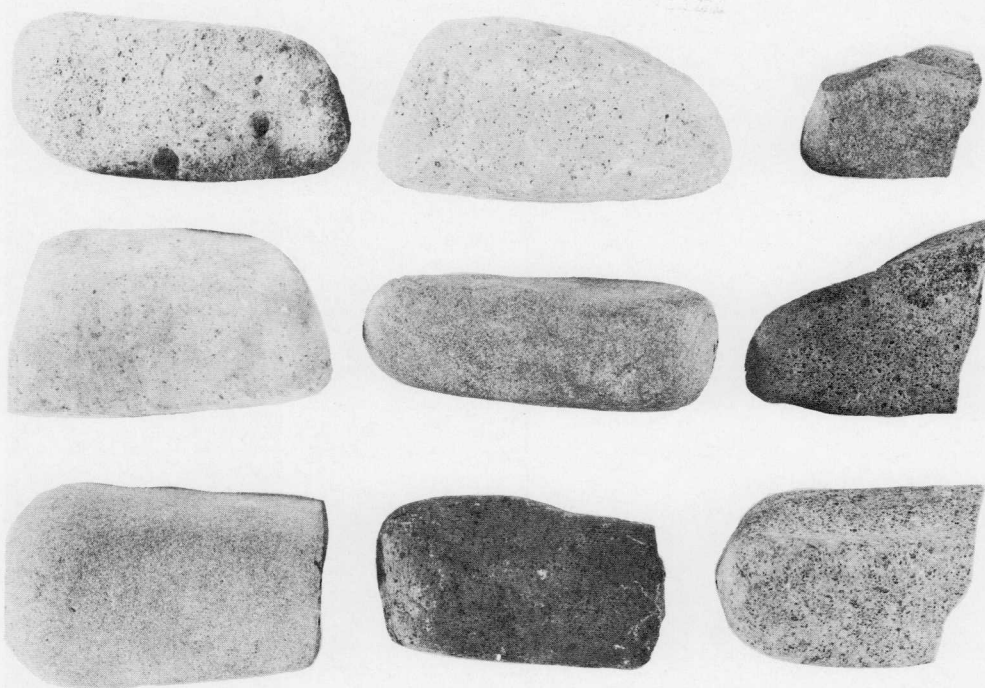
発掘区出土石器



発掘区出土石器



発掘区出土石器



A 発掘区出土石器

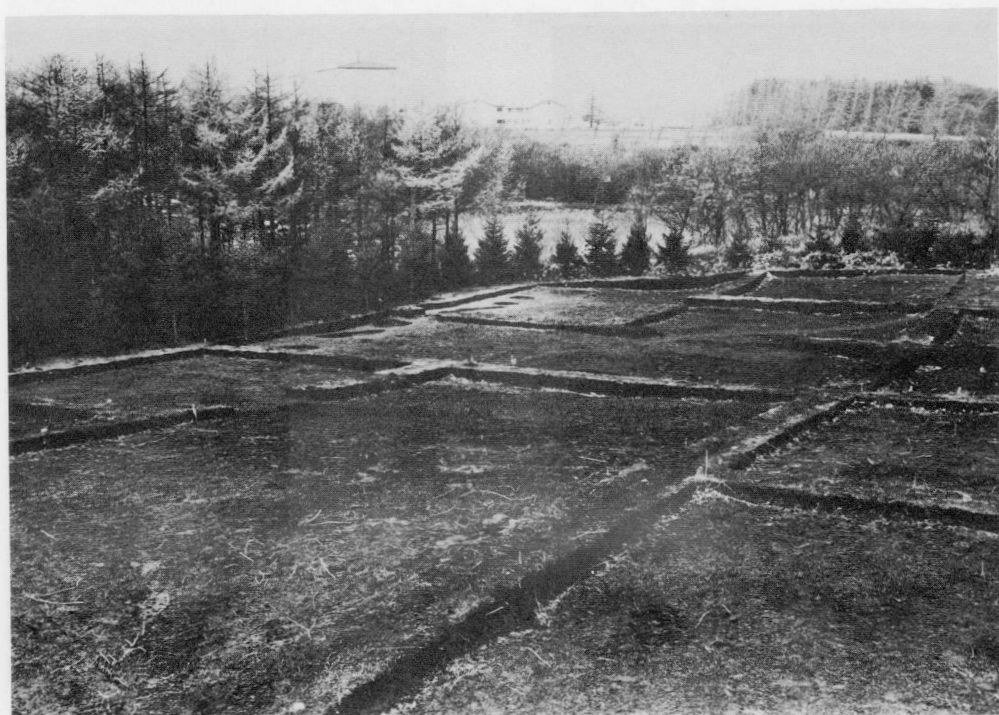


B 発掘区出土石器

第 2 次発掘調査



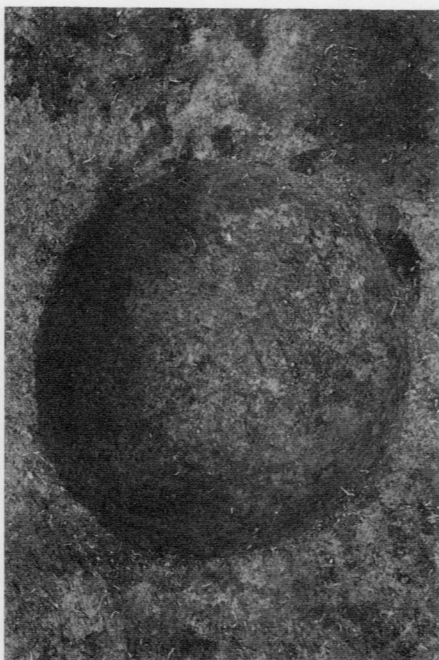
A 遺跡遠景（北西より）



B 遺跡全景（東より）



A 遺跡全景 (南東より)



B 第1号ピット



C 第2号ピット



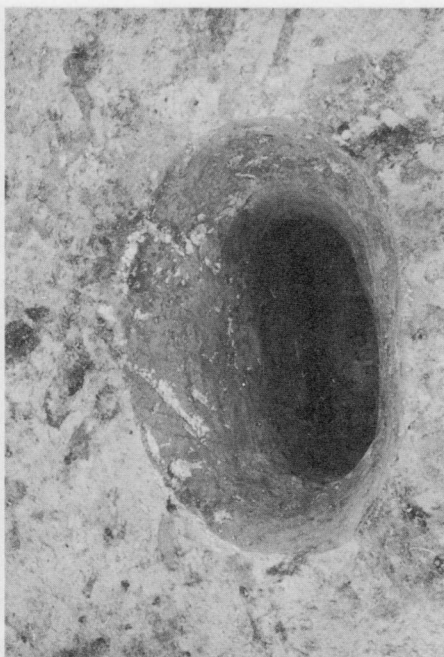
A 第101号Tピット



B 第105号Tピット



A 第106号Tビット



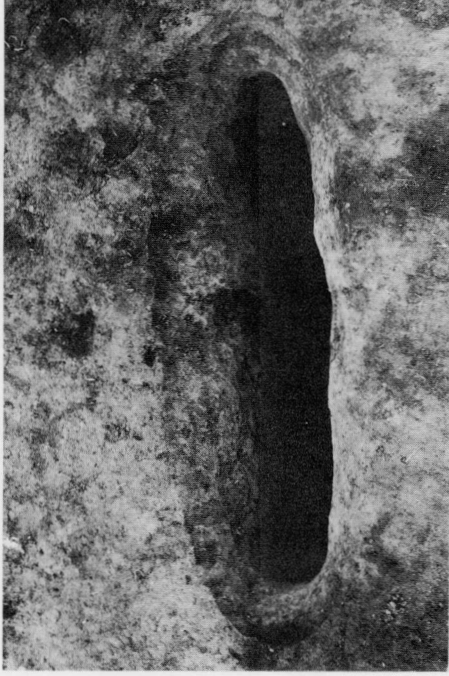
B 第109号Tビット



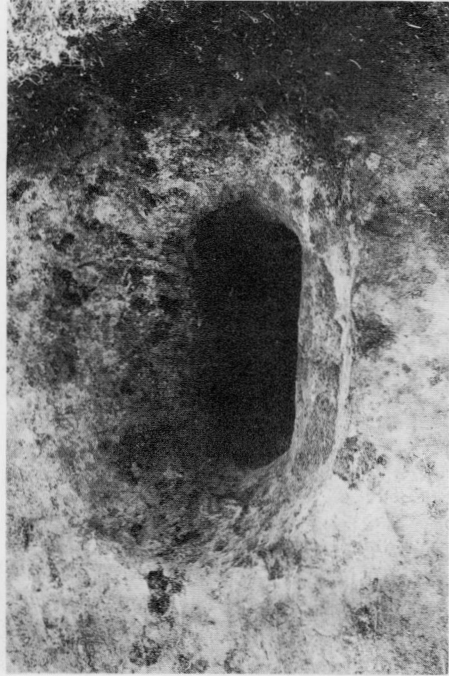
C 第108号Tビット



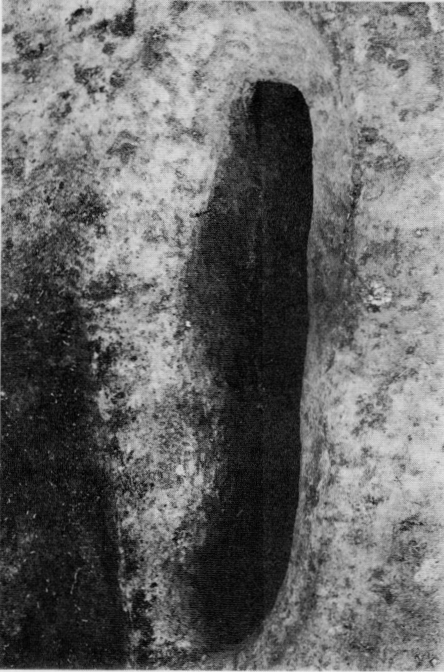
D 第103号Tビット



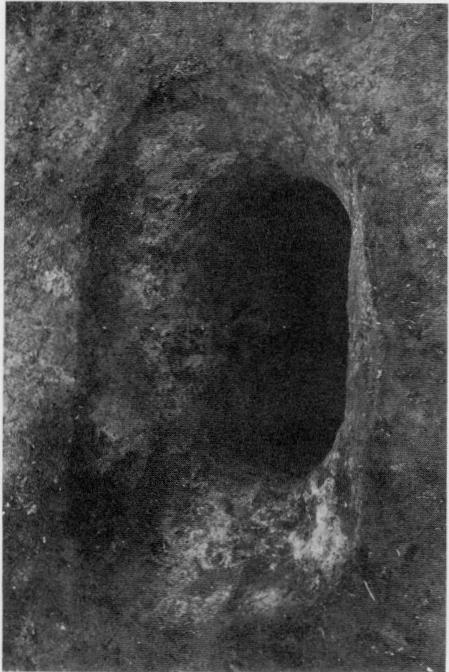
A 第102号Tピット



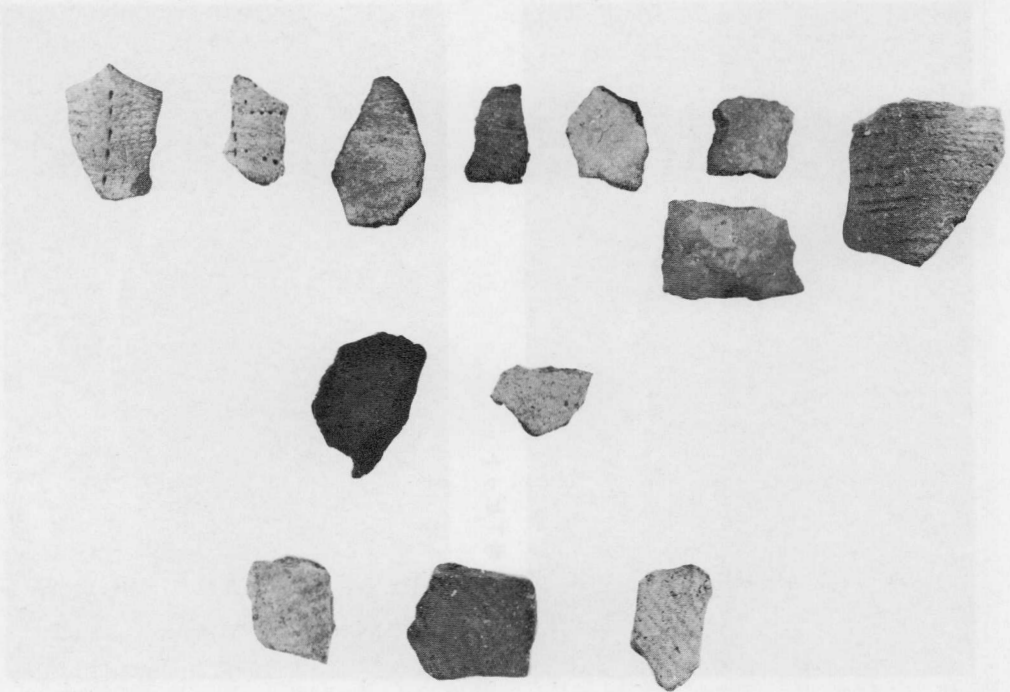
B 第112号Tピット



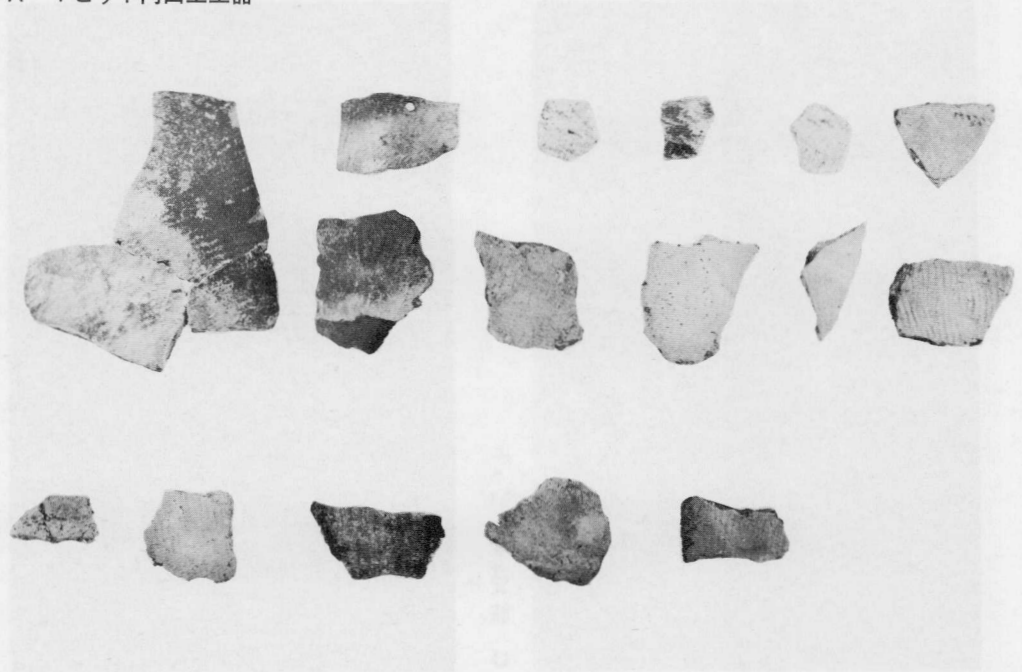
C 第104号Tピット



D 第111号Tピット



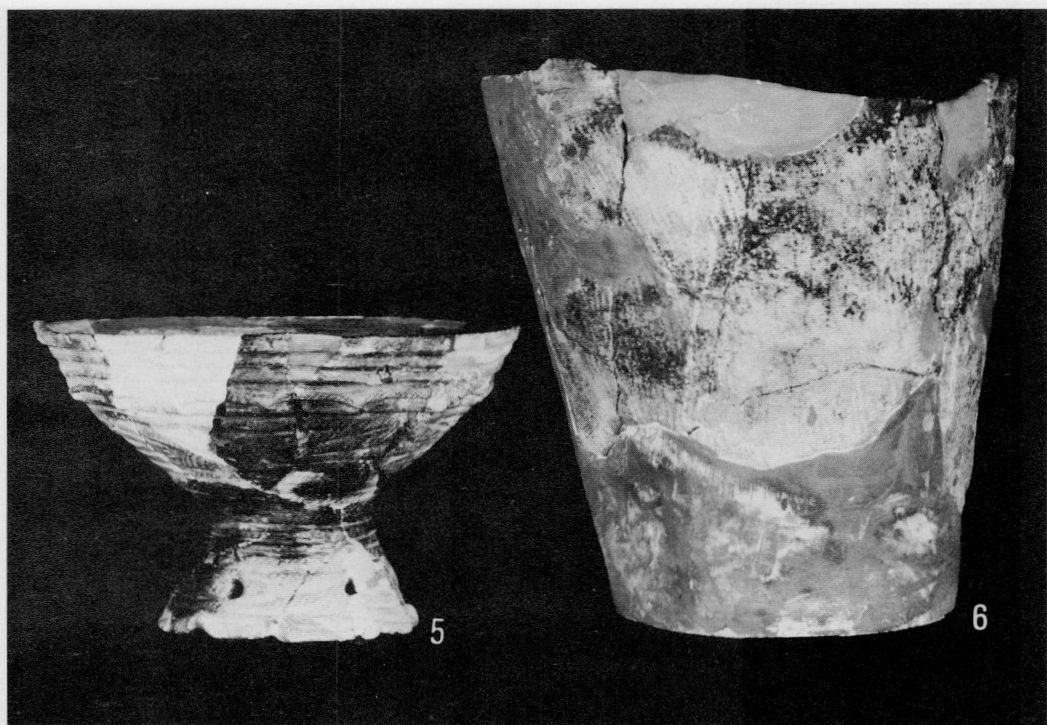
A Tピット内出土土器



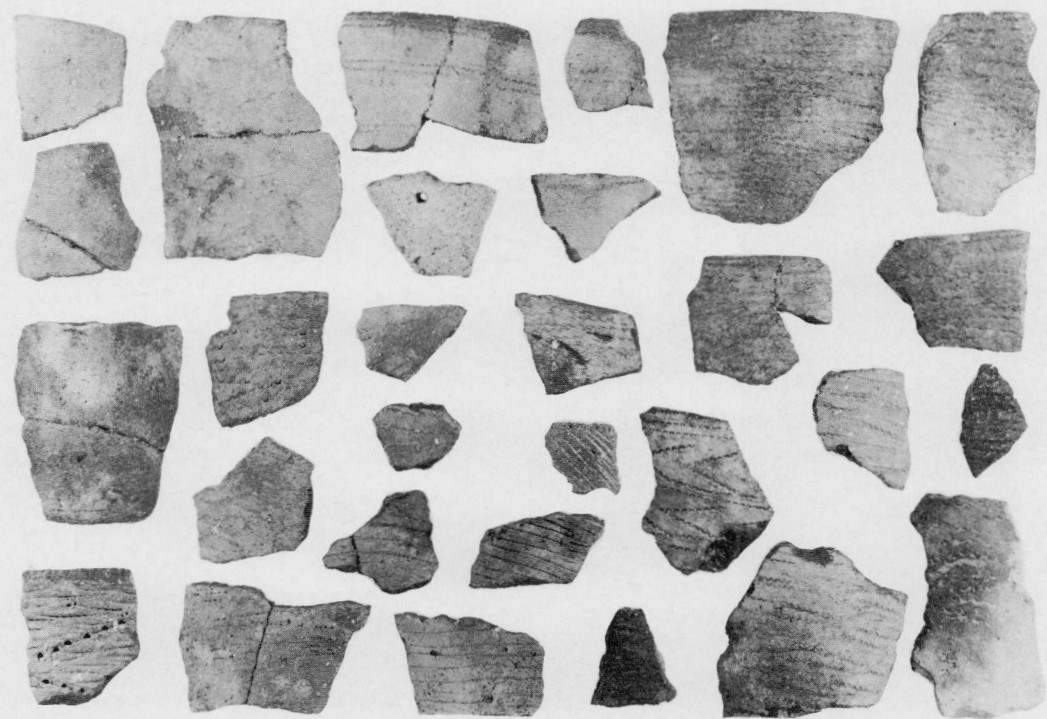
B ピット内出土土器 (上段, 1号, 下段, 2号)



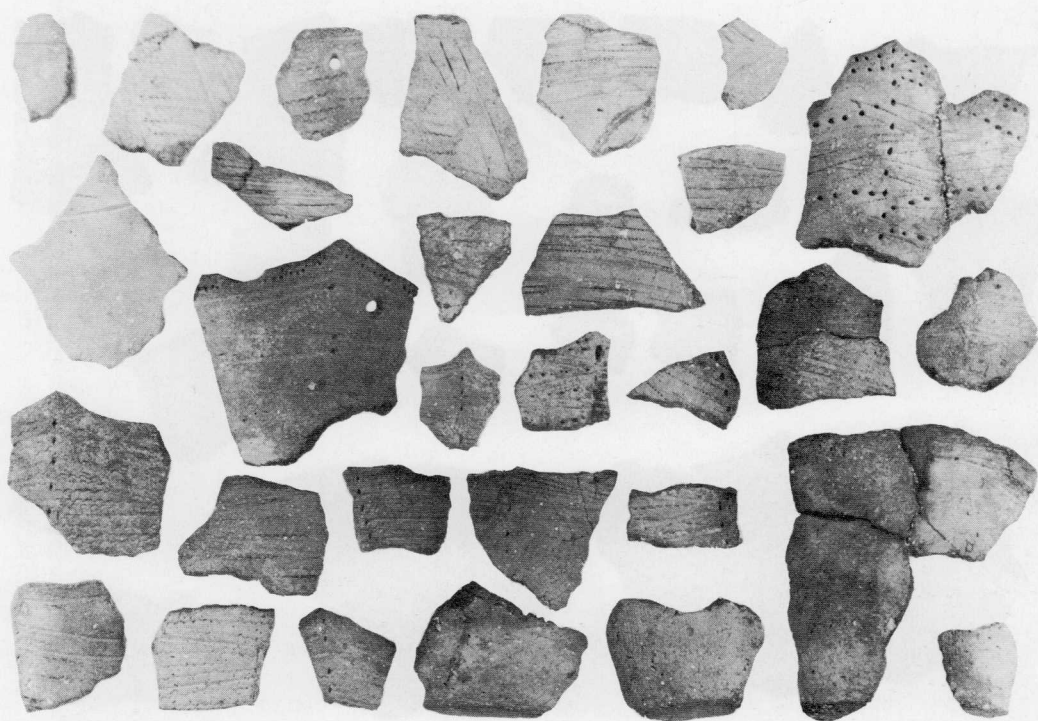
発掘区出土復元土器



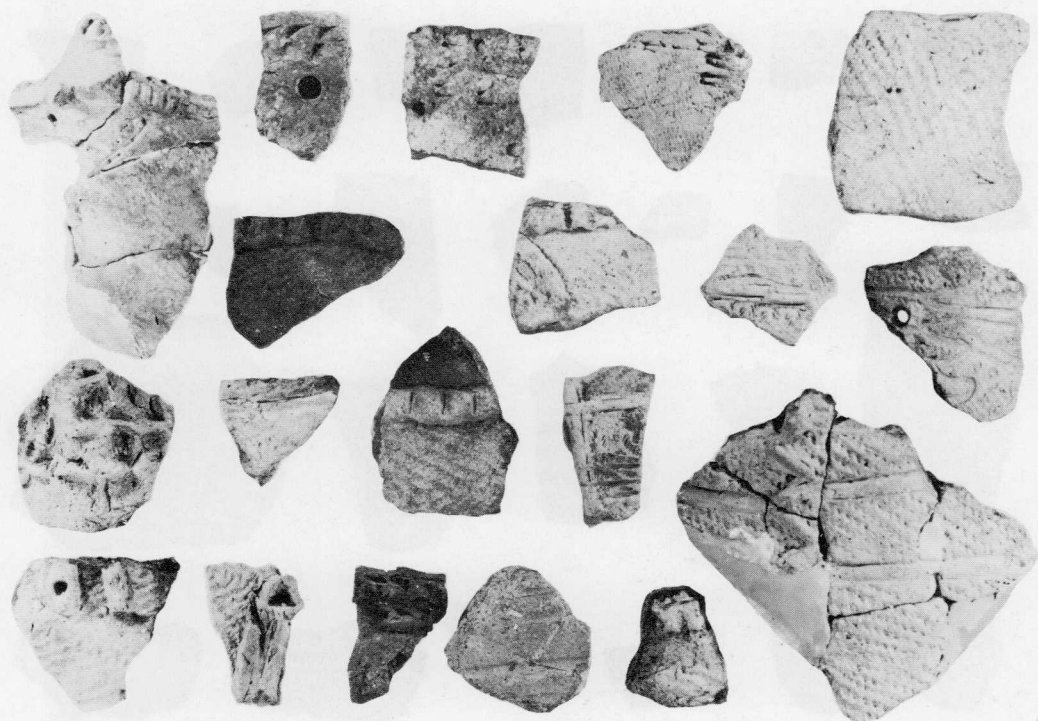
A 発掘区出土復元土器



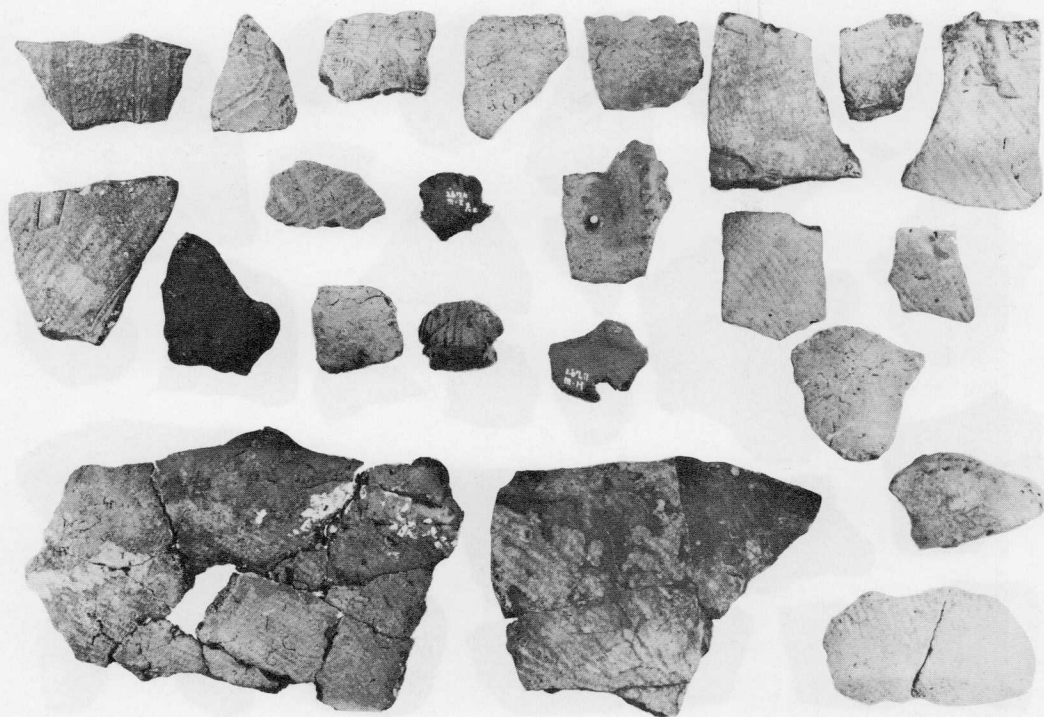
B 発掘区出土土器 (第1群土器)



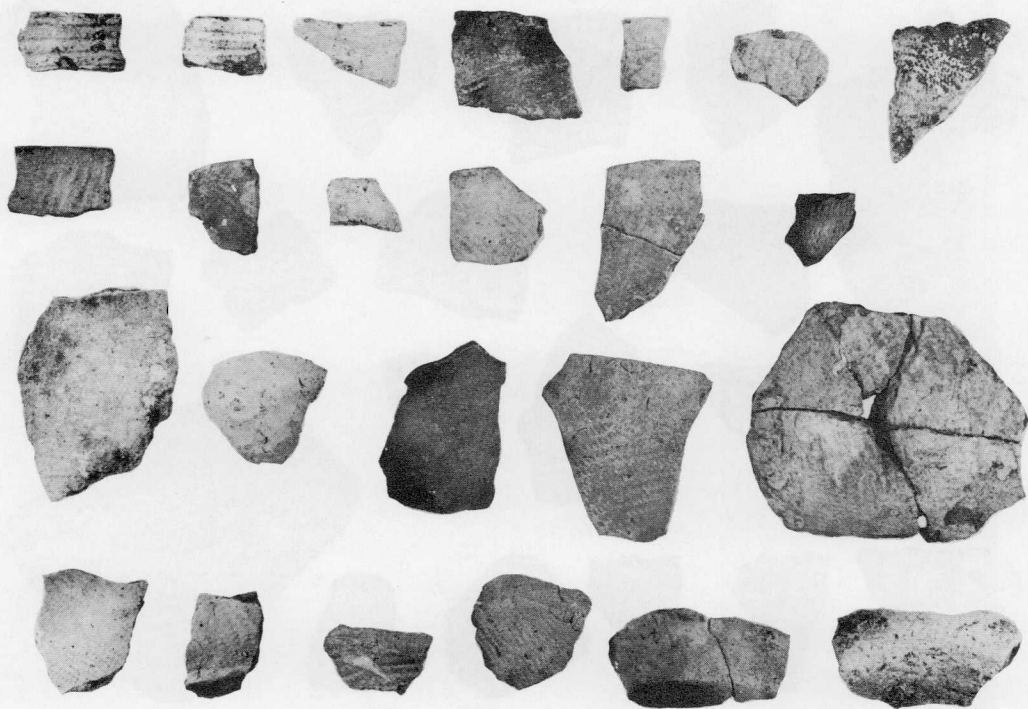
A 発掘区出土土器 (第I群土器)



B 発掘区出土土器 (第II群土器)



A 発掘区出土土器 (第Ⅲ, Ⅳ群土器)



B 発掘区出土土器 (第Ⅳ, Ⅴ群土器)



遺構及び発掘区出土石器



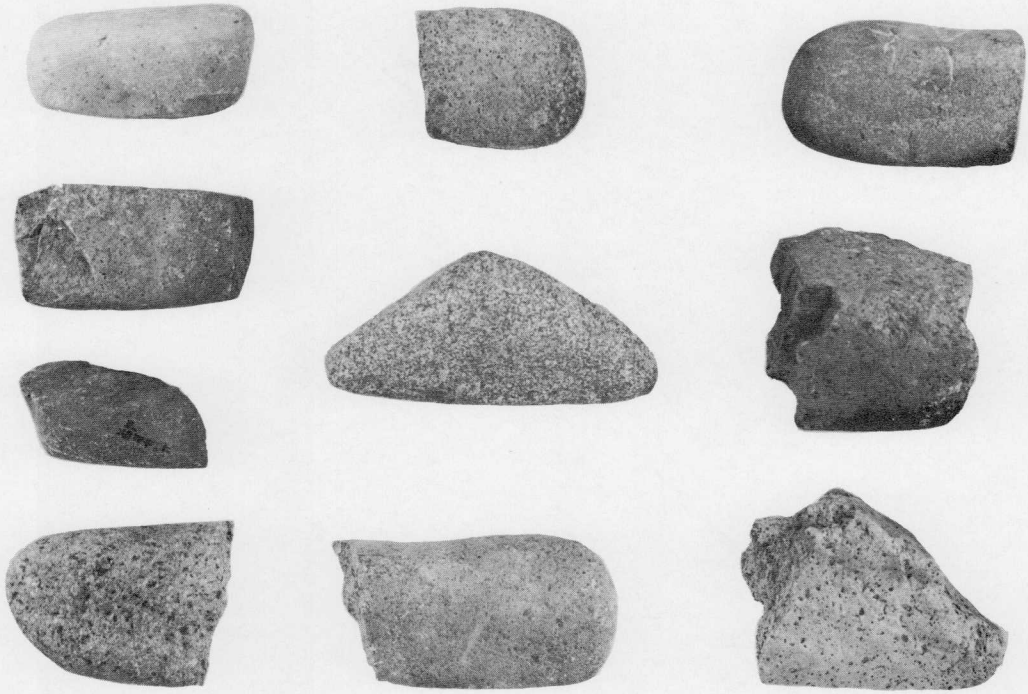
发掘区出土石器



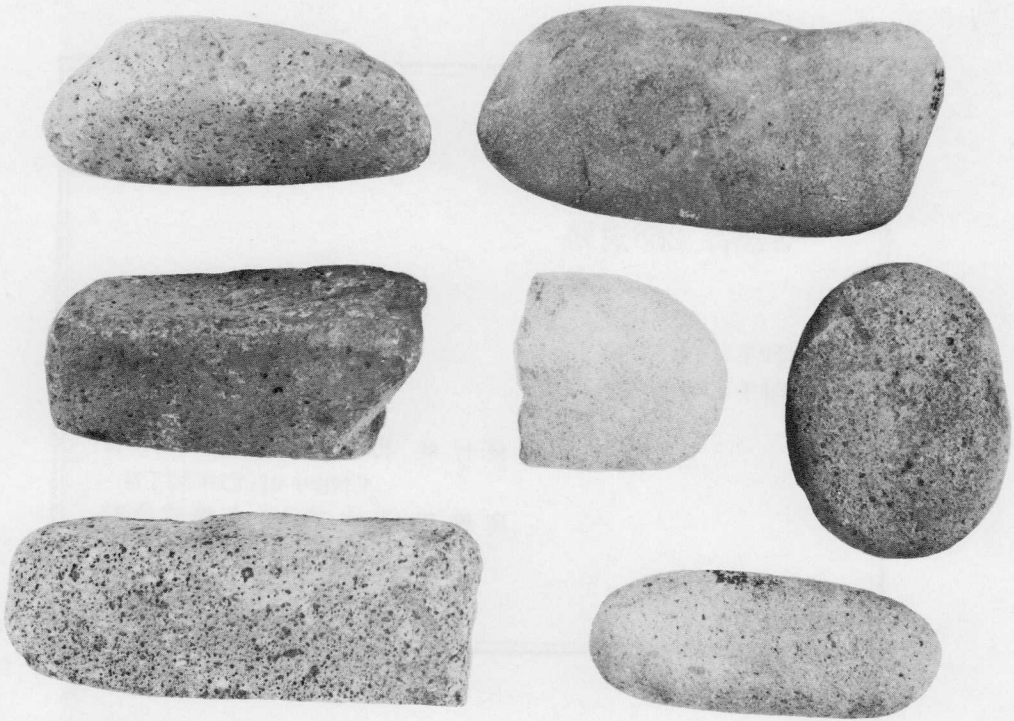
尧掘区出土石器



発掘区出土石器



A 発掘区出土石器



B 発掘区出土石器

札幌市文化財調査報告書 XIV

S267, 268遺跡

昭和52年3月28日印刷

昭和52年3月31日発行

発行者 札幌市教育委員会

札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所 富士プリント株式会社

札幌市中央区南16条西9丁目

TEL 521-3226